

博士論文

プローター・ウーシアー

アリストテレスにおける「第一の実有」について

伊藤 克巳

博士論文

プロテー・ウーシアー *πρώτη οὐσία*

アリストテレスにおける「第一の実有」について

伊藤 克巳

令和2年
(2020年)

プロテー・ウーシアー *πρώτη οὐσία*

アリストテレースにおける「第一の実有」について

伊藤 克巳

目次

序章	アリストテレースにおける「第一の実有」の問題	1
第1章	『形而上学』Λ巻における「第一の実有」	5
1-序.	第1章の趣旨	5
1-1.	第一の哲学の探究対象としての「第一の実有」	6
1-2.	「離されうる,動かされえない」「第一の実有」	9
1-3.	「第一の実有」の諸实例の相互関連	14
1-結.	「動かされえない始源」としての「第一の実有」の意義	18
第2章	『形而上学』Ζ巻における「第一の実有」	19
2-序.	第2章の趣旨	19
2-1.	エイダスという用語の諸解釈	19
2-2.	『形而上学』Ζ巻, Η巻におけるエイダスの用例	22
2-3.	アリストテレースの主張するエイダスの諸特徴	32
2-4.	「第一の実有」としてのエイダスの言及箇所	35
2-5.	エイダスにかかわる諸問題	41
2-結.	エイダスとしての「第一の実有」の意義	46
第3章	『カテゴリーアイ』における「第一の実有」	51
3-序.	第3章の趣旨	51
3-1.	『カテゴリーアイ』のテキストの性格と列举されたカテゴリー	53
3-2.	「存在の類」と「あるもの」についての分類	68
3-3.	「第一の実有」,「第二の実有」の区別と「実有」の分類	75
3-4.	『カテゴリーアイ』における「第一の実有」の特徴	86
3-5.	「個性性」をめぐる諸問題	96
3-結.	「個体」としての「第一の実有」の意義	104

結論	アリストテレースにおける「第一の実有」の意義	107
付論 i	「実有」以外の「個体」について	111
i 一序		111
i 一 1		112
i 一 2		115
i 一 3		120
i 一 4		123
i 一結		125
付論 ii	「第一の素材」について	127
ii 一序		127
ii 一 1		128
ii 一 2		130
ii 一 3		133
ii 一結		136
<アリストテレース参照著作略号>		139
<参考文献>		139
<初出一覧>		147
<主要用語・原語-日本語翻訳語 対照表>		149
<テキスト引用箇所一覧表>		151

プロテー・ウーシアー *πρώτη οὐσία*

アリストテレスにおける「第一の実有」について

伊藤 克巳

序章

アリストテレスにおける「第一の実有」の問題

「実有」¹ *οὐσία* が、「そして実にまた昔から、そして今も、常に探求され、常に難問とされてきた、「あるもの」 *ὄν* とは何か、それは「実有」 *οὐσία* とは何か、である…それゆえに

小論中で使用した角括弧〔 〕は引用原文の意味内容補足のために筆者が任意に付加したものである。

¹ 従来、岩崎[1942]訳、出([1959-1961],[1968])訳以来、場面に応じて主に「実体」、ときとして「本質」などと訳し分けられたり、また「主有」(水地.[2002],[2004])、「本質存在」(中畑.[2013])などの訳語もある *οὐσία* を、本稿では一貫して「実有」と訳すこととする。キーワードになる用語は、原語が「同名」の場合、訳し分けて訳語に「ぶれ」が生ずるよりも、同じ訳語で通した方が著者の語る原文のニュアンスを示せてよい、という判断と、「ある」 *εἶμι* という動詞の分詞形との関連を持つということを翻訳にも活かした方がよい、という判断が合わさった結果の訳語である。哲学には親しいが、ギリシア語が専門なわけではないので、必ずしも原文で細かいニュアンスまで確認することはできかねる、という読者に対して、日本語をベースにして哲学する際の一助として、原文のニュアンスをできる限り妥当だと思われる日本語で表現することを目指した結果でもある。このように同じ訳語で通した場合、その箇所でのさらに細かいニュアンスが表現しにくい、と判断した場合には訳語のあとに〔 〕を補って、その箇所での意味を際立たせる、という方針を本稿では貫くこととした。そして *οὐσία* に限って言うならば、例えばプラトーンが使用する場合の *οὐσία* は「実体」とは訳しにくく、「真実在」や「存在」と訳した方がよい場合も多い。さらにプロティノスの場合にも、アリストテレスの説を批判する場合には *οὐσία* を「実体」と訳すことも可能だが、自説を展開する際の *οὐσία* は「有」や「存在」と訳した方がよい場合も多い。以上の状況を踏まえて、*οὐσία* を「実有」と訳すなら、キーワードは同じ訳語で通す、という原則を仮にプラトーンやプロティノスの場合に適用したとしても、*οὐσία* の訳語として許容範囲には入るのではないかとも思われる。さらには、ギリシア哲学全般のことを考慮に入れた場合でも、もしもキーワードを同じ訳語で示す、という原則を当てはめた場合、哲学用語としての *οὐσία* については、一貫して「実有」と訳しても基本的にはよいのではないかとすら思われる。なお「実有」は「じつゆう」と読むこととする。仏教用語で同じ漢字を使い、呉音で「じつう」と読み、仮有(けう)と対比させたりする用法と区別するためである。また本注の最初に掲げた出訳については、1959-1961年初版の岩波文庫版の『形而上学(上)、(下)』では、一般に「同名」のギリシア語を様々に訳し分けてある訳語の横に随所にルビが振ってあり、原語のギリシア語の何に相当するのかが日本語訳を読むだけである程度判断できるが、1968年初版の岩波全集版にはルビが無いので、注がない箇所などでは訳し分けたもとの原語が何なのかが、原文と対照しないと日本語訳だけではわからない形にしばしばなっている。注4参照。

われわれもまたそのようにあるものについて、何であるかを、最も主として第一に、いわばひたすらに θεωρητέον² だ」³ (*Met.Z1.1028b2 -7*)とする中心課題として、アリストテレス⁴ において極めて重要な位置を占めることは疑う余地のないところであろう。そして「実有」のうちでも取り分けて「第一の」と限定される「第一の実有」 πρώτη οὐσία がその核心にあることは間違いない。

ところが分量的に最も頻繁に「第一の実有」という用語を使用している、『カテゴリーアイ』の用例 (*Cat.5.2a11sq.*)は、すべての用例を代表するものとはなっていない。内容的にはむしろ他の箇所述べていることとは観点の異なる、独特な叙述となっている点が否定できない。にもかかわらず、主に歴史的な経緯から、このいわゆる「個体」を示す用例が、アリストテレスの「第一の実有」についての代表的見解とされてきた(「いわゆるアリストテレスの第一実体」)。この点に関して最も重要だと思われる論点は、『カテゴリーアイ』での記述が、『形而上学』A巻、『形而上学』Z巻における、明白に「第一の哲学」についての記述と考えられる論述とは直接のかかわりがないことである。ではそもそも「第一の哲学」での文脈に即した、本来の「第一の実有」とは一体何なのであろうか。そして、この歴史的に最も有名になってきた『カテゴリーアイ』での「第一の実有」の立ち位置をどのように理解すればよいのであろうか。

『形而上学』A巻も『形而上学』Z巻も『カテゴリーアイ』も、歴史的にそれぞれに大変に難解な議論として有名な著作である。しかし本稿が課題にしている「第一の実有」の理解に関しては、例えば、いわゆる「質料・形相論」の論点から錯綜した議論がなされてきた『形而上学』Z巻の解釈の問題、さらには『カテゴリーアイ』については、著作の真作偽作すらも問題になってきたという論点、などさまざまな観点から考えて、『形而上学』A巻、『形而上学』Z巻、『カテゴリーアイ』の順に、解釈の難易度が増していく、という構造になっていると思われる。そこで以上の問いに答えるための方法として、まず最初に、本来の「第一の実有」とは一体何なのかを、『形而上学』A巻、Z巻についての考察を通

² θεωρητέον を「観究めるべき」と訳し、この点に関連して、通常、「観想」、「観照」などと訳されてきた θεωρία を、「本質を見極めること」と理解し、本稿では「観究め」(読みは「みきわめ」)と訳す。注15、注19も参照。

³ καὶ δὴ καὶ τὸ πάλαι τε καὶ νῦν καὶ ἀεὶ ζητούμενον καὶ ἀεὶ ἀπορούμενον, τί τὸ ὄν, τοῦτο ἐστὶ τίς ἡ οὐσία
… διὸ καὶ ἡμῖν καὶ μάλιστα καὶ πρῶτον καὶ μόνον ὡς εἰπεῖν περὶ τοῦ οὕτως ὄντος θεωρητέον τί ἐστίν.

(*Met.Z1.1028b2-7*)

⁴ 古代ギリシア語の固有名詞や普通名詞の長音は、本稿では省略せずに、例えば「アリストテレス」ではなく、「アリストテレース」と記すこととする。古代ギリシア語の固有名詞を日本語に訳す時には、特に哲学の分野では長音と短音の区別をしない慣習がある。しかし、日本語とともに古代ギリシア語も、紀元前4世紀アッティカ方言では母音の長短を区別するタイプの比較的少数派の言語であり、「同名性」という問題を考える際に、「同音性」という要素も非常に重要になると考えられる。日本語で母音の長短が異なるという点で「同音」ではないもの、例えば苗字のおの野とおーの野の二つの姓を、「同名」と呼ぶことには、相当な違和感があるのではないだろうか。以上の点を踏まえて、「音」の長短の区別が詩の理解に際して問題になる文学の場合に限らず、哲学の分野でも「音」は可能な限り長短も含めて当時の原音に近いと思われる形で表記した方が、古代ギリシア語を日本語で翻訳し、古代ギリシアの往時について日本語で考えるのに相応しい、と考えた。ただし、この音の長短の区別は紀元後3世紀までには消失したと考えられるので、例えばそれ以後の人物である「プロティノス」や「ポルフュリオス」を表記する場合には(子音の発音の相違点も含めて)、可能な限りその時代に即していると考えられる音で表記することを心掛けた。

して探求する（第1章, 第2章）。そしてその探求の成果を踏まえた上で, 古来, 問題となり続けている『カテゴリーアイ』での「第一の実有」の真相がどこにあるかを究明することとする（第3章）。それぞれの議論を文献学的な成果も踏まえて丹念に検討し, 考察を加えていった結果, 本稿で想定される事柄の難易度に応じて, 扱う分量も増していく, という構成になっている。

最初に, 「第一の哲学」の全体像を明らかにする形で, 「第一の哲学」について全領域的に, 総合的に論じている『形而上学』**A**巻の議論を, 検討する(第1章)。

次に, しばしば『形而上学』の中心巻とされることが多いけれども, 本稿の立場からは, 「第一の哲学」の中でも特に「感覚的「実有」の根拠」の問題について論じている, と見なされる『形而上学』**Z**巻における議論について考究をする(第2章)。

アリストテレスの『形而上学』**A**巻も, 『形而上学』**Z**巻も, 古代哲学を研究する者にとって, 古来, 難解で知れわたった著作である。本稿においては, 「第一の実有」についての考察をきっかけとして, この両著作が一定の見通しをもって読めること, 両者の関係についても一定の理解ができること, を示す。

最後に, 以上の『形而上学』における「第一の哲学」にかかわる本来の「第一の実有」についての諸議論を踏まえた上で, 古来, 論じ続けられてきた『カテゴリーアイ』における「第一の実有」についての真相に挑む考察を行う, というふうに探求をすすめることとする。

本稿では, これらの探求の順序が, 「執筆の順序を逆転させた構成」とは必ずしも考えてはいない。本稿本文や注でもいろいろと考察するが, 『形而上学』**A**巻はその主要部分が, 最初期ではないにしても一定程度早い時期、『形而上学』**Z**巻は, **A**巻より遅い円熟期, そして『カテゴリーアイ』は, 内容的な諸点も含めて様々に考察すると, 一般に言われているほど初期の作品ではなく、むしろ**Z**巻の時期とそれほど違わないか, あるいはむしろ少し後の執筆である可能性もあるのではないかと考えられる。この問題点は『カテゴリーアイ』が初期の作品で, 後の作品の『形而上学』とは時期が違うので, その思想に変化があった, とする通説のように単純には言えない, ということを示している。ここからは, むしろ扱っているテーマの違いの方が, 重要な視点となることが示唆される。

以上のような問題意識を踏まえて, 本稿では, アリストテレスにおける「第一の実有」を問題とする際に, 特に重要な役割を果たしてきた主要テキストである, 『形而上学』**A**巻, 『形而上学』**Z**巻, そして『カテゴリーアイ』において, 「第一の実有」について言及した主要テキストの当該箇所を総合的に検討して考察する。そしてこのような考察を通して, アリストテレスが「プロター・ウーシアー」に込めた真意を, 可能な限り探求することを目指すこととする。

第1章

『形而上学』Λ巻における「第一の実有」

1 一序. 第1章の趣旨

アリストテレス著作集において「第一の実有」 *πρώτη οὐσία* という表現が、各著作、各巻によって、場面に応じて実際に多用に、柔軟に使用されているという点は明記しなければならない⁵。しかし、全領域的な意味での「第一の哲学」⁶ *πρώτη φιλοσοφία* の探究対象としての「第一の実有」を問題とした場合には、その中心的意義は『形而上学』Λ巻等で語

⁵ 「第一の実有」で示される様々な用例には、「その或る人」(*Cat.*5.2a13,etc.),「可能性なしの実働態」(*De Int.*13.23a23),「至上の天」(*De Caero.*13.270b11),「全体に関してのもの」(*Met.*Γ3.1005a35),エイドス(*Met.*Z7.1032b1)「たましい」(*Met.*Z11.1037a5,28)等,がある。

⁶ 「哲学」 *φιλοσοφία* という古代ギリシア語の訳語の原義は、「知恵への愛」ということになり、この原義を生かして日本語で訳す場合、「やまとことば」系の訳語なら、例えば「賢さ恋い」などという訳も考えられる。歴史的にはほとんどの言語で、例えば英語の *philosophy* のように、語尾を変える程度のギリシア語の *φιλοσοφία* の「音訳」が採用されてきていたこのことばを、日本語の場合、西周があえて「意味」で訳し、その漢学的で朱子学的な素養から、*philosophy* を「希求賢哲」と訳したことは、ひとつの英断であったと言っても過言ではないと思われる（「音訳」の可能性も追求し、「ヒロソヒ」にする案も考慮したようではあるが）。そしてそれがやがて「希哲学」と省略され、さらには「哲学」という日本語の誕生につながった、とする実際の歴史が展開するわけである。しかし、皮肉にも「哲」という漢字の訓読み（つまり「意味」）が、漢和辞典で調べたりしなければ、「さとい」とは分からないレベルの文字だったため、「哲学」が何をする学問なのか、あるいは内容的にそもそも学問なのかどうか、などということが、逆に文字だけからは大変分かりにくいものとなってしまう、そのことが現在まで尾を引いていることも事実である。この点は、すぐに「いきもののまなび」と訓読みでも読める（つまり「意味」が分かる）「生物学」などとは大きく異なっている。それゆえ、仮に「意味」で訳すにしても、もしも古代ギリシア語のニュアンスにも精通し、かつ「賢さ恋い」などという「やまとことば」系の訳語を採用することにも抵抗がないような状況が当初からあったとしたら、近代日本の哲学の受容の歴史は、一体どういうことになっていたのかは、かなり興味深い論点であると思われる（この点は、むしろ今後の「伸びしろ」として前向きに考えた方がよいだろう）。しかし、古代ギリシアの歴史上でも、アリストテレスの時点では、ソクラテースにおける画期的な用例から、プラトーンの独特な意味づけの時代を経て、原義のもともとの「知恵への愛」という意味合いから徐々に離脱し、上述の現代の日本語訳に定着している「哲学」ということばにまでつながる、連綿と長きにわたる哲学の歴史に至る基調的な意味が確立されつつあったことも踏まえて、ここでの *πρώτη φιλοσοφία* も、本稿では「第一の哲学」と訳すこととした。

られる「動かされえない」⁷ ἀκίνητον 始源⁸ ἀρχή」と密接に関連している。この点を論証し明確にするのが本第1章の趣旨である。

その際、第1節（1－1）では、第一の哲学の探究対象としての「第一の実有」という側面をテキストに即して確認し、『形而上学』Λ巻を中心とした「離されうる」⁹動かされえない実有」にかかわる一群の実例を検討することとする。

1－1. 第一の哲学の探究対象としての「第一の実有」

従来、アリストテレス著作集 *Corpus Aristotelicum* を解釈する際には「第一の実有」 πρώτη οὐσία という表現が、『カテゴリーアイ』第5章においては「個体」¹⁰を示し、『形而上学』Ζ巻を中心とした文脈においてはエイドス¹¹ εἶδοςを示しているという問題点を中心となって議論が展開されてきた。しかし「第一の哲学」の対象を全領域的に把握した場合には、むしろ『形而上学』Λ巻を中心とした「離されうる動かされえない実

⁷ 例えば通常、「不動の動者」と訳されている、κινῶν ἀκίνητον を能動、受動に注意して訳すと、κινῶν は「動者」といっても、能動の「動かすもの」を意味しているし、また ἀκίνητον は「不動の」といっても受動の「動かされえない」、または、語尾の -τον の部分に配慮して、受動的可能性と理解して「動かされえない」という意味である。以上の事情を踏まえてこの語を「漢語」系のことばで正確に訳そうとすると、「不被动の起動者」、または「不可被动の起動者」ということにもなるわけである。もしもこれらを「不動の動者」という訳語と比較して生硬な表現だと感ずるようなら、細かいニュアンスを犠牲にして「不動の動者」という従来からの訳語を採用するか、あるいは「やまとことば」を基礎にして、能動、受動、可能などのニュアンスも忠実に表現して、「動かされずに動かすもの」、または「動かされえずに動かすもの」といった訳語を採用する余地がある。これらの点を考慮した結果、ここでの ἀκίνητον は「動かされえない」と訳すこととした。古代ギリシア語を日本語に翻訳する場合、「やまとことば」系の訳語が、意外に古代ギリシア語のニュアンスとの親和性があることの一例でもある。

⁸ 日常のギリシア語としては「起源」「支配」などと訳される ἀρχή は、アリストテレスの訳語としては、通常「原理」が用いられることが多いが、本稿では日常の用語法や、ことばの原義の「はじめ」という意味合いも響かせて「始源」と訳すこととした。

⁹ 「離存する」、「離在する」などと訳されてきた χωριστόν を「離されうる」と訳した。原語にはない「存」とか「在」とかの「ある」ἐνίにかかわる語を日本語でも入れない方がよい、と考えた。また χωριστόν の語尾の -τόν の部分が、受動的可能性を示す場合があることも考慮した。「ある」ἐνίにかかわる語を入れない方がよい、という点については注83も参照。『「たましい」について』（DAⅢ 2.413b1-414a3）では、δύναται χωρίζεσθαι(413b5-6)が χωριστόν(413b14)と、また ἐνδέχεται χωρίζεσθαι(413b26-27)が χωριστά(413b28)と関連して表記されている点も、-τόν の部分と可能性や許容性という様相とのかかわりを示していると思われる。特に「たましい」について「離されうる」のかどうかの問題については、伊藤[2019]参照。

¹⁰ 『カテゴリーアイ』第5章における「個体」としての「第一の実有」の問題については本稿第3章（3－序～3－結）pp.51-107.を参照。

¹¹ εἶδος についてもまた、例えば「種」や形相や「姿」や「ありさま」などと訳し分けるのではなく、原文で「同名」のものには一貫して同じ訳語を使い、特に必要があれば、各文脈での限定された意味を〔 〕の中に併記する、または注に注記する、という立場を貫いた結果、この用語についてはすべての意味を一語で表せる適当な「やまとことば」や「漢語」が見当たらない、と判断して（あえて言えば「見られたありさま」や「ありさまかたち」とでもすべきかもしれないが）、一般に外来語を表記する際に使用する「カタカナ語」で原文の音を写して、一貫してエイドスと表記することとする。こうしておくとの注47で触れるイデアという「カタカナ語」との間の意味や音の関連性も示せることとなる。注1、注3参照。なお「第一の実有」としてのエイドスの解釈については本稿第2章での考察（pp.19-50）および注50-注152、を参照。

有」にかかわる一群の実例の重要性を強調する必要がある。

その論拠としては以下のいくつかの文脈が挙げられる。

「だがさらに自然学者¹² φυσικός より上位の或る者がいるので（なぜなら自然¹³ φύσις は「あるもの」 ὄν の一つの或る「類」であるから）、「全体に関してのもの¹⁴ καθόλου, また「第一の実有」について「観究める者¹⁵ θεωρητικός が、これら〔公理〕についても探求すべきであろう。自然学もまた或る知恵ではあろう。しかし第一の〔知恵〕ではない」¹⁶ (Met.Γ3.1005a33-b2)

「さてもし「自然的諸実有」が「あるもの」どものなかで「第一の諸実有」であるなら自然学が諸学のうちの第一の〔学〕であろう。しかしもし他の自然, すなわち「離されうるかつ動かされえない実有」 οὐσία χωριστὴ καὶ ἀκίνητος があるなら, 必然的にこれについての学は他の学であり, 自然学より先の学であり, より先であることによって「全体に関しての学」 καθόλου である。」¹⁷ (Met.K7.1064b9-14) .

以上の文脈は、『形而上学』E巻第1章において「全体に関しての学」である第一の哲学の対象として「或る動かされえない実有」 τις οὐσία ἀκίνητος (Met.Ε1.1026a29) が掲げられている箇所とも問題意識を共有している。

問題は上述の諸文脈において語られている, καθόλου の具体的内容をどう把握するか, という点にある。というのは『形而上学』Z巻第13章の議論 (Met.Z13.1038b1-1039a23) では多くのものに共通する「普遍」という意味での καθόλου は「実有」ではない, と読

¹² 「自然学者」であって「自然哲学者」とはなっていない点に注意を喚起しておいた方がよい。例えば17世紀のニュートンの主著『自然哲学の数学的諸原理』Philosophiae Naturalis Principia Mathematica (1687)という題名からは、ニュートンは自らが（「自然科学」ではなく）「自然哲学」を行っていると自覚していたことが判明する。またこの箇所の φυσικός (自然学者)という表現は、通常アリストテレス以前の伝統的な自然探求者を示すと考えられる φυσιολόγος (自然論者)という表現とは区別されて、アリストテレス自身の学問分類における自然学にたずさわるものを意味していると考えられる。

¹³ φύσις は一般に「自然」と訳すことにするが、文脈によっては、「本性」や「自然本性」や「生まれつき」や「自然物」を示すこともあるので、その際には「自然〔本性〕」や「自然〔生まれつき〕」や「自然〔自然物〕」などと〔 〕付きで表記することとする。

¹⁴ καθόλου は、通常「普遍」と訳されているが、ことばの原義である καθ' ὅλου まで戻って「全体に関してのもの」と一貫して訳した。注21も参照。

¹⁵ θεωρητικός を「観究める（みきわめる）者」と訳し、通常「理論学」などと訳されている θεωρητική を「観究める学」と訳す。注2, 注19も参照。

¹⁶ ἔπει δ' ἔστιν ἔτι τοῦ φυσικοῦ τις ἀνωτέρω (ἐν γάρ τι γένος τοῦ ὄντος ἡ φύσις), τοῦ <περὶ τὸ> καθόλου καὶ τοῦ περὶ τὴν πρώτην οὐσίαν θεωρητικοῦ καὶ ἡ περὶ τούτων ἂν εἴη σκέψις· ἔστι δὲ σοφία τις καὶ ἡ φυσική, ἀλλ' οὐ πρώτη. (Met.Γ3.1005a33-b2)

¹⁷ εἰ μὲν οὖν αἱ φυσικαὶ οὐσὶαι πρῶται τῶν ὄντων εἰσὶ, καὶ ἡ φυσικὴ πρώτη τῶν ἐπιστημῶν εἴη εἰ δ' ἔστιν ἑτέρα φύσις καὶ οὐσία χωριστὴ καὶ ἀκίνητος, ἑτέραν ἀναγκη καὶ τὴν ἐπιστήμην αὐτῆς εἶναι καὶ πρῶτην τῆς φυσικῆς καὶ καθόλου τῷ προτέραν. (Met.K7.1064b9-14) .

み取れるからである¹⁸。

この点については、**Γ**巻 (*Met.Γ3.1005b5-8*) において「知恵を愛し求める者」…が「すべての「実有」についてありのままに「観究める者」¹⁹ θεωροῦντος」と言い換えられ、また**K**巻²⁰ (*Met.K3.1060b31-33*) においては、「知恵を愛し求める者」の学が「部分に沿ってではなく、全体に関しての「あるもの」としての「あるもの」の学」であるとされている叙述をもとにすれば、καθόλου を, καθ' ὅλου「全体に関して」²¹の原義にまで戻り、領域設定の非部分性という意味での全体性と解釈し、「全体に関してのもの」と訳し、基本的に「部分的な学」に対する「全体的な学」、「全領域的な学」を示しているとするのが妥当であると考えられる²²。

第一の哲学 πρώτη φιλοσοφία を理解する際の枠組みをめぐって伝統的に行われてきたのは、いわゆる「普遍存在学」といわゆる「神学」との間の論争である。この点については Owens の総合的な研究²³ 等があるが、上述した探究の全領域性という観点から考えると、「普遍存在学」が例えば『形而上学』**Z, H, Θ**等の諸巻で行われている探究を指しているとするならば、基本的に「「感覚されうる実有」の始源」を探究し、「離されうる動かされえない実有」については直接の探究対象としていないこれらの諸巻は、「全領域的な学」と呼ぶには相応しくない。他方、「神学」もまたそれだけで独立して扱った場合には「特定の領域」を対象とする学ともなりかねず、「全領域的な学」と呼ぶのに相応しくなくなりかねない。上述の「第一の実有」にかかわる諸文脈を合わせて考察した場合に読み

¹⁸ καθόλου については、本稿第2章第2節(2-2)pp.28-29, および注98, 第2章第4節(2-4)p.36, および注14, 21, 24, 71参照。

¹⁹ θεωροῦντος を「観究める者」と訳し、通常、「観想」, 「観照」などと訳されてきた θεωρία を, 「本質を見極めること」と理解し、本稿では「観究め」(読みは「みきわめ」)と訳す。注2, 注15も参照。

²⁰ しばしば真偽が話題となる『形而上学』**K**巻は、同書**B, Γ, E**巻や、『自然学』**III, V**巻との内容的な関連を強く示しており、文体的にもアリストテレスの真作である可能性が強いと考えられる (Cf. Kenny[1983], pp.356-363, p.365)。

²¹ 本稿では、アリストテレスの著作中に多用される κατά の訳語について、様々に訳し分けることはせずに、一貫して「κατά+属格」を「に関して」と訳し、「κατά+対格」を「に沿って」と訳して、原典の原文の「前置詞+格」の関係が、日本語での理解としても明確に分かるように示すことを試みた。καθ' ὅλου を「全体に関して」、καθόλου を「全体に関してのもの」、後述する τὸ καθ' ἕκαστον を「それぞれに沿ってのもの」と訳したのも、この基本姿勢に基づいてのことである。

²² 松本[1954]pp.69-71参照。cf. Kirwan[1971]pp.188-189. なお、*Met.Γ3.1005b6* の, περὶ πάσης τῆς οὐσίας θεωροῦντος という表現はプラトーンの『国家』(*Resp.IV.486a8-9*)で、「知恵を愛する者[哲学者]」の「たましい」が、全時間と「全「実有」[全存在]」の観究めをする、とされる際の θεωρία…πάσης δὲ οὐσίας の表現と酷似している点にも着目すべきである。

²³ Owens[1957]. 特にpp.35-68. 参照。

取れるのは「全体に関しての学」「全領域的な学」「すべての実有にかかわる学」が、第一の知恵、第一の学、第一の哲学であり、この学の中心的探究対象となるのが「第一の実有」であるという点である²⁴。そしてこの意味での「第一の実有」とは前述した「個体」やエイドスではなく、「離されうるかつ動かされえない実有」、「或る動かされえない実有」なのである。

1-2. 「離されうる、動かされえない「第一の実有」

前第Ⅰ節末尾で「第一の実有」の具体例として示唆された「離されうる、動かされえない実有」の内実について最も明確に叙述している文脈としては『形而上学』Ⅳ巻の第6章と第7章を挙げなければならない。第6章は「それ〔動かされえない実有〕について或る永遠的で動かされえない実有が「あること」が必然なことを言わなければならない」²⁵

(*Met.*Ⅳ.1071b4-5.) という書き出しで始まる。このⅣ巻6章7章を中心とする「離されうる動かされえない実有」としての「第一の実有」諸例の内容は以下のようにまとめられる。

(Ⅰa.) 実有が双欄表の肯定欄(「あるもの」、「一つのもの」等が含まれる)のうちの第一のものであり、「実有」のうちでは「端的でそして実働態²⁶ *ἐνέργεια* に即した実有」が

²⁴ この観点からすると、通常「普遍存在論」を扱っているとされる、「あるものとしてのあるもの」 *τὸ ὄν ᾗ ὄν*

(*Met.*Ⅰ.1003a21) の学も、特定の「あるもの」 *ὄν* を扱っているわけではなく、「全体に関して」すなわち、「全領域的に」「あるもの」を扱うものである、と理解することができる。そして、その「あるもの」の核心が「実有」 *οὐσία* であることを考慮すると、本稿での解釈のように、いわゆる「第一の哲学」が「全領域的に」「実有」を扱う学であるとする 것과整合性がとれることとなるであろう。そしてもしこの「第一の哲学」が「神学」とも言い換えられているとすれば、以上考察したような「全領域性」を介して、古来行われてきた「普遍存在論」と「神学」との間の調停の可能性も示唆されることとなるだろう。そしてこの「全領域性」からすると、本稿第3章で取り扱う『カテゴリーイ』における「第一の実有」は、「動かされえない実有」をも含めて、「全領域的に」「実有」を扱う学としては考えにくい、ということにもなるだろう。

²⁵ *περὶ ταύτης λεκτέον ὅτι ἀνάγκη εἶναι αἰδιόν τινα οὐσίαν ἀκίνητον.* (*Met.*Ⅳ.1071b4-5.)

²⁶ 従来、しばしば「現実態」または「活動」と訳し分けられ、また「純粹「現実態」」、「現実活動態」、さらに「実現態」(桑子[1993]pp.100-102)とされることもあった *ἐνέργεια* を本稿では訳し分けずに、「働き」のうちにあること」ということばの原義を響かせて、一貫して実働態と訳す。従来の日本語訳では、「働き」 *ἔργον* という要素が活かされていなかった。また従来の訳の問題点の一つは、名詞形 *ἐνέργεια* は「現実態」と訳すにもかかわらず、動詞形の *ἐνεργεῖν* の訳になると、「現実する」というわけにはいかないので「活動する」と訳し分けざるを得なかった点にある。その点名詞形を「実現態」とする場合には、動詞形を「実現している」と言える(桑子[1993] p.100) 点では改善されているようにも思えるが、ギリシア語の場合は文法的に現在形と現在進行形の区別がないので、「…する」と「…している」との間に意味の違いがあまり著しくないことが望まれる。そしてこの観点からすると、日本語の「実現する」がまだ「実現」していない場合(例えば「これから実現する」などの用例のように)も示せるのに対して、「実現している」は明らかにもう「実現」してしまっていることを示している、意味がず

第一のもの、つまり「第一の実有」であり (*Met.*17.1072a30-32), またこの場合の「端的でそして実働態に即した実有」の指示対象は「動かされえずに動かすもの」としての「第一の動かされえずに動かすもの」である。この文脈の前後で展開されている考察では、永続的な円環運動を行なう「第一の天」を動かす、自らは「動かされえない、離されうる」「実有」が示されている。この文脈での *ἐνέργεια* においては可能力²⁷ *δύναμις* と相補的にかかわる実働態という側面よりも、むしろ目的としての完成を目指して動いている「動き」²⁸ *κίνησις* と対比される、目指される完成そのものとしての実働態という側面が強調されている点に注目する必要がある。永続的な円環の「動き」と対比してその根拠として繰り返し語られている「動かされえない」始源とは、自らはまさに「動き」の影すらない実働態〔純粹現実態/現実活動態/実現態〕を示す表現であった。その意味で、『形而上学』Θ巻 (*Met.*9.1048b18-35)での叙述や、『ニコマコス倫理学』第10巻 (*ENX* 3.1173a31-b4, *ENX* 4.1174a14-b14) 等で言及されている「学ぶとともに学んでしまっ

れてしまう。実働態の場合には「実働する」と「実働している」ととの間にそれほどの意味のずれは生じないと思われる。アリストテレスは「動き」*κίνησις* (注28参照) との関係で、「動き」の意味での実働態と「動き」と対比された意味での実働態との二種類の実働態について語っていると解釈できるが、「動き」と対比された意味での実働態には「実現態」も当てはまるが、「動き」の意味で *ἐνέργεια* を用いる場合には、「実現」に向かっているが、まだ「実現」はしていない局面も示していたことも思い起こすべきだろう。なお、『「たましい」について』での「たましい」の定義との関連では、アリストテレスが「第一の完成態 *ἐντελέχεια*」(*DA* II.1.412a27) という言い方はしているが、「第一の実働態 *ἐνέργεια*」という言い方はしていない点にも着目してもよいだろう(伊藤[2019]pp.51-52参照)。さらに「エネルギー」というカタカナ語も、25万語程度の語彙数を含んだ国語辞典(『広辞苑』、『大辞林』、『大辞泉』など)には出ているので、いわゆる意味では訳しにくい外来語の一つとしてこの語を使う、というのも選択肢の一つではある。しかしこの選択肢と比較しても、「現実態」,「実現態」,「活動」などのすべての意味合いをも示せ、かつ日常語ではなくアリストテレスの造語である、というニュアンスも示すことができ、さらには原語の語源的な意味内容を日本語でも示せる、という意味で「実働態」の方がよい、と判断した。

²⁷ 通常、「可能態」と訳されてきた *δύναμις* であるが、そのように訳すと用例的に「能力」と「可能態」を訳し分けざるをえなくなること、またこのことばの原義である「力」という意味合いが含まれないことになってしまうこと、などの諸点を考え合わせるとこの「可能態」という訳はことばの一部しか示していないこととなる。すなわちアリストテレスが言及している、「力」、「力量」、「権力」、「能力」、「能」、「有能」、「才能」、「性能」、「可能」などの *δύναμις* の種々の意味に配慮して訳す必要があると思われるので、本稿の翻訳法の原則に従ってこれらの多様な意味を一語で表現することを考慮し、本稿では一貫して「可能力」と訳すこととした。そもそもこの *δύναμις* という用語は、実働態 *ἐνέργεια* (注26参照) や「完成態」*ἐντελέχεια*(注49参照)などのようなアリストテレスによる造語ではなく、日常語にもある、意味の広いことばである。従来のように、もしも *δύναμις* を「可能態」、*ἐνέργεια* を「現実態」と訳し、両者を対になっているようにして理解するならば、広い意味を持つ *δύναμις* にかかわることがらの、一部分しかとらえていないことともなる。cf. *Met.*12.1019a15-1020a5, *Met.*9.1045b27-1010.1052a11.

²⁸ 一般に「運動」と訳されることの多い *κίνησις* を、そのギリシア語における意味の多様さに鑑みて、この場合には広い意味を持つ日本語との親和性がある、と判断して「動き」訳することとした。

ている」とは語れない「動き」と対比された、「覚知する²⁹と同時に覚知してしまっている」実働態という側面がこの I a の立場では極めて明瞭に示されていることが分かる³⁰。この読み筋から考えるなら、『命題論』で「第一の諸実有」として示されている「可能なしの諸実働態」(*De Int.*13.23a23)³¹という表現が全体として上述の完成そのものとしての実働態を指し示しており、この I a の文脈と視点を共有し、また「動かされえない諸実有」の複数性という点に関して、「素材³² ὕλη なしの諸実有」に言及している『形而上学』Λ 卷第 6 章の叙述 (*Met.*Λ6.1071b17-22) と強く関連している点を指摘できる。

次に「動かされえない諸実有」の複数性について具体的に探究している、『形而上学』Λ 卷第 8 章における「第一の実有」の諸例については、以下のようにまとめられる。

(I b.) 「第一の動かされえずに動かすもの³³」が、「第一のそして動かされえない実有」τὴν πρώτην οὐσίαν καὶ ἀκίνητον (*Met.*Λ8. 1073a30) という表現で示され、またそれぞれの惑星の運行の順位に応じて「実有」にも「第一の」「第二の」という順序があるとされて「動かされえずに動かすものどものうちの第一のもの」(*Met.*Λ8.1073b1-3)、すなわち「惑星天球の一番外側を動かすもの」が示されている³⁴。この Λ 卷第 8 章の文脈では、「第一の動かされえずに動かすもの」とともに、複数の「動かされえない諸「実有」そして諸始源」(*Met.*Λ8.1074a15) が具体的に詳細に語られており、エウドクソスやカリッポスの同心天球説を検討しつつ自ら 55 の天球が考えられるという説を表明している。また神話とのかかわりで、「第一の諸実有」が「神々」を示す文脈 (*Met.*Λ8.1074b9)³⁵ を

²⁹ 「思惟する」、「知性認識する」、「直知する」などと訳されてきた νοεῖν をできるだけ多様な意味を兼ねることを考慮して、特にアリストテレスの場合には、推論知と直接知または無分別知の両者を含むことを踏まえて、「覚知する」と訳すこととした。名詞形の νοῦς についての注 46 も参照。

³⁰ 藤沢(令)[1980]pp.231-326, 牛田,[1991]pp.35-72 による、『形而上学』Θ 卷を中心とした κίνησις と ἐνέργεια の関連をめぐる諸問題について、参照。

³¹ Cf. Dumoulin[1983], p.66. なお『命題論』における当該箇所は、一般に後の時期の挿入と考えられている (Cf. Ackrill[1963], p.153) が、この解釈はおそらく妥当であろう。

³² ὕλη は多くの場合に「質料」と訳されているが、本稿では、専門用語としての役割と日常語の両義を持っている、という側面と、「森」「材木」「材料」といったこのことばの持つ原義を活かした場合に漢語の「材」という要素を訳語にも含めたほうがよい、という側面、および「質量」という、自然科学用語の同音異義語が存在すること(両者とも耳で聞いただけでは、音は「同音」で「しつりょう」であり、場合によっては区別が容易でない)、などから判断して、一貫して「素材」と訳すことにする。「ヒューレー」というカタカナ語も検討してみる余地はあると考えたが、意味内容が示せるという観点から、「素材」という訳語を採用した。

³³ 通常、「不動の動者」と訳されている、κινεῖν ἀκίνητον を「動かされえずに動かすもの」と訳した点については、注 7 での考察を参照。

³⁴ Cf. Brinkmann[1979]pp.173-174.

³⁵ Cf. Ross[1924]p.395, Dumoulin[1983]p.66, G.E.R.Lloyd[2000]p.270.

「動かされえない諸実有」としての諸「惑星の始源」と解釈した場合には、この I b の立場の中で扱うことができる。

以上の I a, I b における「動かされえない実有」の単数と複数の関係については、両者の相違を強調し、I a と I b の間には思考上の断絶があると考える Elders³⁶ のような立場もある。確かにカリッポスへの言及等の叙述はこの I b の著作年代が比較的晩年に近いことを示唆してはいる。しかし例えば I a の立場においても、動かされえない始源の複数性には言及しており (*Met.*A6.1071b21, *De Int.*13. 23a23, Cf. *Phys.*VIII.6.258b10-260a19), 問題はむしろ天体に関する理論的研究の成果を生かして、複数の始源を詳細に検討するかないかの違いにある。その点で I b の立場は I a の立場とむしろ基本的な姿勢を共有している。この単数と複数の問題については、以下の『生成と消滅について』の叙述が理解の助けとなる。

「もし円環的運動が数多くあるなら、〔それらの原因は〕数多くあるが、しかしそれらすべては、何らかの方法で、「一つの始源」 *μίαν ἀρχήν* に支配されていなければならない。」

³⁷ (*G.C.*II.10.337a20-22)

なお、『形而上学』Λ巻第8章 (*Met.*A8.1073b3-8)では、「運行の数の多さ」は「感覚されうるが永続的な実有」について観究めている「数学的諸学のうちの哲学に最も親近な学、すなわち星学³⁸ *ἀστρολογία*」の研究によって決定されなければならないとされ、同じく第8章 (*Met.*A8.1074a14-17)で天体観測からの動かされえない諸動者の数の多さの考察結果は、「理にかなったこと」 *εὐλογον* ではあるが「必然的」 *ἀναγκάϊον* ではないともされ、断言されてはおらず、開かれた体系を目指す探究の途上性が表明されている点にも着目すべきである。

ところで上述の「動かされえない始源」に明確に言及せずに天体の運行を表現する「第一の実有」についての興味深い実例が『天について』第1巻第3章 (*De Caelo* I 3.270b1-25)にある。この文脈をまとめると以下ようになる。

(II.)「第一のソーマ〔物体〕」,すなわち古人がアイテールと名付けたものがソーマ〔物体〕のうちの「第一の実有」(*De Caelo* I 3.270b11)とされ³⁹,この「第一のソーマ

³⁶ Elders[1972] pp.57-68.

³⁷ *εἰ πλείους αἱ ἐν κύκλῳ κινήσεις, πλείους μὲν, πάσας δέ πως εἶναι ταύτας ἀνάγκη ὑπὸ μίαν ἀρχήν.*
(*G.C.*II.10.337a20-22)

³⁸ 後代の英語では、通常、astronomy が「天文学」と訳され、astrology は「占星術」と訳される。そして「天文学」の意味での astrology は廃止的な意味とされる(『小学館 ランダムハウス英和辞典 第2版』,1987,参照)。しかし、この箇所「星学」と訳したギリシア語の *ἀστρολογία* は「天文学」と「占星術」がまだ完全には分化していないような用例であり、内容的にはむしろ「天文学」寄りの理解を示していると思われる。

³⁹ 「アイテール」を「第一のソーマ〔物体〕」と呼ぶ表現は『天について』(*De Caelo* I 3.270b22, II 12.291b32)

「物体」は、「永遠的」で、不生・不滅、不増・不減、不「性質変化」ではあるが、場所的に移動しない「動かされえない」という側面が、用語的にも内容的にも明確には叙述されていない。また第1巻第9章(*De Caelo* I 9.278a30-b3)では「天」の「ソーマ[物体]」が自然にしたがって自分自身で円運動をし、外から「天」を動かすものは何もないという立場も表明されている。なおこの『天について』第1巻第3章(*De Caelo* I 3.270b1-25)で天界の存在に関連して「神々」(*De Caelo* I 3.270b6,8)という表現が使用されている点から考えれば、I b の立場を説明するときに言及した『形而上学』A巻第8章(*Met.*A8.1074b9)の「神々」を、諸「惑星」そのものとして解釈し、IIの立場との親近性を読み取ることもできることとなる。

このIIの立場では、天体の運行に関する「動かされえない始源」が明確には示されていないこのことの理由としては、I b の立場の解釈の際にも触れたように「感覚されうる永続的な実有」についての「星学」は、親近な学ではあっても直接に第一の哲学と同一視することはできないので、動かされえない始源には特に言及しなかった、という可能性も考えられる⁴⁰。しかし上述した『自然学』第8巻第6章等での取扱いを考えると、自分自身で円運動をし「動かされえない始源」を必要としないこの『天について』第1巻第3章、第9章での叙述は、むしろ「動かされえない始源」を明確には自覚していない、と考える方が自然である。

ではこのIIの立場とI a, I b の立場の相違についてはどのように理解すればよいのであろうか。このI a, I b, IIの主題が、天体の運行の究極的原因についての叙述という点に限ればほぼ同一で、また著者も同一と見なしてよいとするならば⁴¹、この立場の相違の主な

に、「第一の要素」と呼ぶ表現は『気象学』第1巻(*Meteor.* I 3. 339b17,340b11)にある。なお伝アリストテレース『哲学について』断片では、「第五のソーマ[物体]」(*Fr.*21 Ross), 「第五の類」(*Fr.*27 Ross)という表現が使用されている。「第五の[物]体」はすでに伝プラトーン『エピノミス』に出現しており(*Epinomis* 981B-C), プラトーン晩年のアカデメイアでの天文知識の充実に関連する用語とも考えられる。対話篇系のアリストテレース文献中にこの表現が実際になされ流布していた可能性は、プロティノスの証言(*Enneades* II 1.2.13, II 5.3.18.)からも、否定できない。後世の「第五元素」という呼び名はこの系列の表現が継承されたためとも考えられる。この点で、本第1章で扱った『天について』第1章よりさらに古い初期の思考の存在も想定できる。

⁴⁰ Cf. Bodéus, R. [1990] pp. 245-257 .

⁴¹ Elders[1972] pp. 57-68 は内容的な断絶性と用語法的な問題点をもとにしてA巻第8章が偽作である可能性を示唆している。しかし「動かされえない始源」の単数性と複数性の問題点はA巻第8章と、A巻のその他の部分の内容的な断絶性を示しているとまでは言えない。また用語法上の論拠は晩年のアリストテレース本人が著者である、とする説にも援用できると考えられる。なお神学的な見地から見たアリストテレースの見解の発展全般については、Gauthrie[1933] pp. 162-171, 今道[2004], pp. 364-393 参照。

理由としては著作年代の相違が反映されている可能性を検討する余地がある。その場合それぞれの立場の著作年代としては、 $\text{II} \Rightarrow \text{I a} \Rightarrow \text{I b}$ と進展したとするのが最も自然であると考えられる。すなわち『天について』第1章の時点のIIの立場ではまだはっきりとは自覚されていなかった「動かされえずに動かすもの」の理論が、『形而上学』A巻第6章、第7章を代表とするI aの立場では明確に自覚され、さらにA巻第8章のI bの立場において具体的な天体観測の成果や同時代の数学的理論からの刺激を受け、特に「動かされえない諸始源」の数多さの問題が詳細に展開されていったと把握できる。

そして以上の考察が正しいとすれば、IIの立場とI aの立場の間のどこかで、「究極の天」の問題に関して、永続する円環運動として時間の内にある「時間的永続性」とは区別された、時間の内にはない「超時間的永遠性」を示す「動かされえない始源」を考案し、明確に自覚し、表現した時点が存在したということになる。この「動かされえない始源」の自覚は「動き」に対比された意味での実働態としての *ἐνέργεια* の理論と表裏一体をなしており、その意味でアリストテレスの思索の根幹にかかわる問題意識の芽生えをこの時点に見て取ることができることとなる。

さらにまた、前述したようにI aとI bが基本的に立場を共有し、またI bの立場の著作年代が比較的晩年に近い時期であるとするならば、I aの立場で自覚された「動かされえない始源」についての基本的姿勢は『形而上学』の他の諸巻を執筆した時期も含めて晩年まで維持されていた、と考えることができる。

以上のI a, I b, IIの観点の比較検討から考えれば、第1節で考察した『形而上学』Γ巻とK巻の第一の哲学にかかわる「離されうる動かされえない実有」としての「第一の実有」の実例 (*Met.*Γ3.1005a33-b2, *K*7.1064b9-14)は、特にI aの観点と最も近い位置にあることが理解できる。またこのI aに近い立場に立って、「神的なものを対象とする学」の重要性を強調する視点が『形而上学』A巻 (*Met.*A2.982b31-983a10) 等でも明確に示されている点も思い起こす必要がある。さらにまた、或る「離されうる動かされえない実有」が「ある」〔存在する〕という点について、各所で繰り返し言明されていることにも着目しなければならない。(*Met.*Γ5.1009a36-38, 1010a33-35, *Γ*8.1012b30-31, *Z*17.1041a7-9, *H*61045a30-31, 1045b21-23, *A*6.1071b3-5, *A*7.1073a3-5. Cf. *Met.*Δ5.1015b14-15)。

上述した『自然学』第8巻第6章 (*Phys.*VIII6.258b10-16, 259a7-13, 259b32-260a19) や、『生成と消滅について』第1巻第3章、第8章 (*GC*I 3.318a3-8, I 8.324a26-32) 等の「第一の動かされえずに動かすもの」に関する叙述も、基本的にはこのI aの観点と共通する考え方を表明している。

これらの点から、「動かされえない始源」についての中心的思考は特にI aの観点が代表しており、またA巻の基本的見解は『形而上学』の他の諸巻の中にも十分に見出すことができる、ということが明らかとなる。

1-3. 「第一の実有」の諸実例の相互関連

では以上検討してきた「離されうる動かされえない実有」と、冒頭で掲げた「個体」やエイドス等「第一の実有」の諸例はどのようにかかわるのであろうか。

「第一の実有」という表現はアリストテレースの著作集において必ずしも固定的には使用されておらず、探究領域や主題に応じて、柔軟に使用されている。

ところで『形而上学』**A**巻では実有を「感覚されうる αίσθητή 実有」(*Met.A1.1069a30*)と「動かされえない ἀκίνητος 実有」(*Met.A1.1069a33*)の二つに大きく分類し、そのうちの「感覚されうる実有」をさらに「消滅的な φθαρτή 実有」(*Met.A1.1069a31*)、「永続的な αἰδιος 実有」(*Met.A1.1069a31*)、の二つに下位分類している(Cf.*Phys. II* 7.198a29-31)。またこの「感覚されうる αίσθητή 実有」(*Met.A1.1069a30*)は、「自然的な φυσικάί 実有」(*Met.A6.1071b3*)とも言われている。そこでこの**A**巻の叙述を手掛かりにして分類 α1 ~ β2 を作成し、「第一の実有」の諸例を指示対象別に配分して示すと以下の〔表1〕のようになる(なお分類中の「*」の記号は二つ以上の分類にまたがって解釈できるもの、また「[]#」の記号はテキスト上異読のある箇所を示す)。

〔表1〕:「第一の実有」の諸例の分類

<α1> 動かされえない「実有」(自然的で永続的な「実有」の始源)

- ・「第一の動かされえずに動かすもの」: *Met.Γ3.1005a35, K7.1064b10, A7.1072a31-32, A8.1073a30.*
- ・「動かされえずに動かすもの」ども: *De Int.23a24, Met.A8.1073b1-2.*
- ・ 神々*: *Met.A8.1074b9*(諸惑星の始源の場合)。

<α2> 自然的で消滅的な「実有」の始源

- ・「たましい」: *Met.Z11.1037a5, 28.*…「内にあるエイドス」 τὸ εἶδος τὸ ἐνόν(*Met.Z11.1037a29*)の実例となっている⁴²。

<α3> 「非・自然的実有」の始源

- ・「[技]によって生ずるもののエイドス」／「あるとは何であったのか」: *Met.Z7.1032b2.*
- ・ 数学的諸対象の〔エイドス〕: *Met.I3.1054b1.*
- ・ [曲がり]#: *Met.Z11.1037b1-2.*

<β1> 自然的で永続的な「実有」

- ・ 第一の〔物〕体: *De Caelo 270b11.*
- ・ 神々*: *Met.A8.1074b9* (諸惑星の場合)。

⁴² 「内にあるエイドス」としての「たましい」については、本稿第2章第4節(pp.35-41)、および注127,参照。

<β2> 自然的で消滅的な「実有」

・人、動物、植物の「個体」: *Cat.5.2a11-b4-,15-,37-,3a36.*

この<α1> ~<β2> を参照すると、Λ巻における「実有」の分類にほぼ応じた探究主題について最も中心となる「実有」がそれぞれ「第一の実有」と呼ばれ、また分類上想定できる「非・自然的実有」には該当する実例がない点を指摘できる。

そして、上述の<α2> のテキストの文脈からは、『形而上学』Z巻における自然的で消滅的な「実有」の始源としての「第一の実有」は、『カテゴリーアイ』において「第二の実有」とされている人や動物ではなく、「たましい」⁴³ ψυχή (*Met.Z11.1037a5,28*)であり⁴⁴、『カテゴリーアイ』において対応者を求めるならばむしろ第2章等で示されている「基に置かれたもの」⁴⁵ ὑποκείμενον としての「たましい」(*Cat.2.1a26,b2*)に相当するこ

⁴³ 「靈魂」, 「心」, 「魂」, 「生魂」(今道[2004])などと訳されてきた ψυχή を「やまとことば」の「ひらがな」で「たましい」と訳した。日本語の古語の「たま」と ψυχή の意味領域が重なることも意識しての訳語である。また漢語の「魂魄」の「魄」も訓読みでは「たましい」と読み、遊離魂を示す場合もある「魂」よりもむしろ身体に密接にかかわる身体魂を示す意味合いも強い。この点に配慮した場合、『「たましい」について』の中のかんりの議論にはむしろこの「魄」の字をあててルビを「たましい」と付けたりすることなども考えられる。しかし、「魂」の字と比較して「魄」の字は一般に馴染みも薄く、またアリストテレスの文脈の中でも、ヌースとのかかわりも含めて「魂」の字の方がふさわしい局面も確かにあるので、その意味でも「魂」と「魄」の両方の意味合いをも同時に示せる「やまとことば」の「ひらがな」を使い、「たましい」という訳語を採用することとした。

⁴⁴ 『形而上学』Z巻で、とりわけ「たましい」が「第一の実有」とされている点については、本稿第2章の結論(2-1結(pp.46-50))を参照。

⁴⁵ 古来、「基体」(substratum / substrate), 「主語」(subjectum / subject)と訳し分けられ、また「先言措定」(井上[1974]特にpp.292-295, [1980]特にpp.146-164参照), との訳語もある ὑποκείμενον を、本稿ではことばの原義に戻って ὑποθιέναι (基に措く) の受動形としての原意を考慮して、「基に置かれたもの」と訳す。「先言措定」については、哲学の歩みに新たな途を拓いた点は大いに評価できるし、また「同名」のキーワードになる語は「基体」や「主語」と訳し分けられないほうがよい、という点では本稿の立場からも鋭い指摘と評価できる。さらには「先言」の「先」の部分はὑπο-の訳語として、これも十分に理解できるが、はたして「言」の部分を読み込めるか、といった点が最大の問題点であると思われる。さらに言えば上述参照箇所の主張が、もしも「述べ」に先立って措定されている、ということを強調したいのであれば、むしろ「先述措定」とした方が、意味合いが明確になるのではないか、という点も指摘できるだろう。そしてまた言語のレベルの問題から ὑποκείμενον を「先言措定」と訳す場合、『生成と消滅について』等、『カテゴリーアイ』以外の多くの文脈では、必ずしも妥当でない場合も生じてくると思われる。さらに訳語の「措定」という部分についても、確かに、ὑποτίθημι (「基に置く」, 「基礎に措定する」) の受動分詞が ὑποκείμενον である、という観点からは評価できる面がある。しかしこのような「漢語」を中心とした訳語は、受動分詞の「受動」の意味が表現しにくいので、「措定」だけだと「措定したもの」なのか「措定されたもの」なのかははっきりと表現できないこととなる。例えばこの点を考慮して「基礎被措定」などと訳すとあまりに生硬になってしまうし、意味もよくわからなくなる恐れがある。以上の諸点を考慮して考察を重ねた結果、本稿では「やまとことば」を基礎にして、上述の「受動」の意味を忠実に表現することも含めて、「基に置かれたもの」と訳すこととした。そしてこのように訳しておけば、『自然学』などにおける生成論の文脈と、『カテゴリーアイ』などにおける「述べ定め」[述語付け]の文脈の両者に妥当し、また『分析論後書』*An.po. I 2.72a20-24.* 等における ὑπόθεσις (「基に置くもの」[基礎定立/後代の hypothesis (仮説)の語源])との関連も示し得ることになると思われる。

とを明確に押さえておく必要がある。その点では『カテゴリーアイ』と『形而上学』Z巻では「第一の実有」をめぐる立場が逆転しているとする見解は支持できない。『カテゴリーアイ』における人等の生物の「個体」における「たましい」の側面が、始源としてのエイドスとして把握された視点がはっきりと示されているのがZ巻の当該文脈であり、その点では両者の立場は矛盾するものというよりはむしろ主題に応じて相補うものであると考えられる。さらに、「たましい」を持つ生物の「個体」こそが「実有」である、とされている例は『動物の発生について』の叙述(*GAIV*3.767b32-768a2)等にも見て取ることができるので、この点でも『カテゴリーアイ』の立場が、他の著作から孤立しているとは言えない。さらにまた< α 1>の「動かされえない実有」が Λ 巻第7章や第9章でヌース⁴⁶ *νοῦς* (*Met.*A7.1072b20,23,A9.1074b15,21,1075a4)とされている点に着目すれば、上述の「たましい」の文脈とのつながりをはっきりと読み取ることができる⁴⁷。

また『自然学』の文脈(*Phys.*II 7.198a35-b4)で「全く動かされえずそしてすべての第一のもの(=「第一の動かされえずに動かすもの」)」と、「何であるか」 *τὸ τί ἐστιν* すなわち「かたち」⁴⁸ *μορφή* とが、「終わり」*τέλος* [目的]であるという理由で、「なにかを動かすが、動かされないもの」の例として並列されて叙述されており、また『形而上学』 Λ 巻第8章の文脈(*Met.*A8.1074a35-38)では、「第一の動かされえずに動かすもの」が「完成態」⁴⁹ *ἐντελέχεια* であるがゆえに、「第一の「あるとは何であったのか」」 *τὸ τί ἦν εἶναι τὸ πρῶτον* である、と語られている点は重要である。すなわち< α 2>,< α 3>のエイドスと関連させて理解できる*Phys.*II 7.198a35-b4.の「何であるか」や「かたち」は、「動かされえないもの」と表現されており、しかも「終わり[目的]」であることが明記されているので、第1章第2節のI bで示した「動き」に対比された実働態の観点から把握することができ、また逆に*Met.*A8.1074a35-38.の文脈では「第一の動かされえずに動かすもの」も、エイドスとかかわる「あるとは何であったか」の視点から把握することができる。以上の諸文脈は「第一の実有」の諸例相互間に、相補的関連性を読み取り得る方向性を示している。

しかし他方では、上述のエイドスや「個体」を示す例(< β 2>,< α 2>,< α 3>)が、少なくとも Λ 巻においては表現の上からも内容的にも「第一の実有」とは取り扱われていない点にも着目する必要がある。特に< β 2>の「個体」を示す実例については、本稿全体の主題に

⁴⁶ 本稿では、「理性」,「知性」,「叡智」,「叡知」「英知」,「直知」と訳されてきた *νοῦς* をカタカナ語でヌースと訳した。すべての意味合いを一語で表現できる適切な訳語がない、と判断したためである。

⁴⁷ ヌースとのかかわりは、「たましい」が「離されうる」かどうかを射程に入れた場合に、明瞭化する(Cf.

*Met.*A.3.1070a24-26, *DA*II.2.413b24-29, *DA*III.5.430a22-25)。伊藤(2019)参照。

⁴⁸ 「形態」,「形式」などとも訳される *μορφή* を、日常語の幅広い意味も背景にした上での用語と解釈し、本稿では一貫して「かたち」と訳す。

⁴⁹ 近年では、「終局態」(桑子[1999]pp.12-13) ,「完成現実態」(千葉[2002]p.336) ,「終局実現状態」(中畑[2014]p.66)とも訳される *ἐντελέχεια* を「*τέλος* (終わり/目的/完成)のうちにあること」「目的を達成して完成していること」と理解して、本稿では「完成態」と訳すこととする。

かかわる論点なので、本稿第3章(pp.51-106)で詳細に検討することとする。**A**巻がその前半の第5章までで「感覚されうる実有」を対象とし、後半の第6章からは「動かされえない実有」を対象として広範囲な実有を全領域的に視野に入れていることは特筆すべき点であると言えるが、この**A**巻において「第一の実有」と呼ばれているのは「離されうる動かされえない実有」を示す「第一の動かされえずに動かすもの」「動かされえない諸始源」($\langle \alpha 1 \rangle$)と「神々」($\langle \alpha 1 \rangle$ または $\langle \beta 1 \rangle$)なのである。この点を例えば**Z**巻第11章で行われている、或る別の「実有」の探究のためにまず感覚的な「実有」について探究している、といった叙述(*Met.***Z**11.1037a10-17)に表れている考察途上の性格付けの発言⁵⁰とあわせて読むと、**A**巻での全領域的考察は、簡潔な形ではあるが、「全体に関しての学」としての第一の哲学の基本的な姿を示しており、そしてこの基本的姿勢は他の諸巻を貫いて維持されているとするのが妥当であると考えられる。

1 ー 結. 「動かされえない始源」としての「第一の実有」の意義

以上の諸考察から、『形而上学』**A**巻は、単に最初期の孤立した思考を示すのではなく或る意味では『形而上学』全体の精髓を示しているという点が示唆されることとなる。そしてこのように考えた場合、それぞれの主題に応じて「第一の実有」という表現が、いわばテーマに応じて互いに相補い、役割分担をしながら柔軟に叙述されていることが十分に認められるとともに、「第一の哲学」を見据えて、全領域的に「実有」を問題とした際の「第一の実有」が、ヌースとしての実働態である「動かされえない始源」と密接に関している、という点を明確に指摘できることとなる。

⁵⁰ 『形而上学』**Z**巻における考察途上の性格の発言については、本稿第2章(2 ー 結(pp.48-49))および注

151(p.49)参照。

第2章

『形而上学』Z巻における「第一の実有」

2-序. 第2章の趣旨

アリストテレース⁵¹が『形而上学』Z巻, H巻等で行っている「感覚されうる実有⁵²」の始源⁵³, 原因⁵⁴をめぐる探究に際して, エイドス⁵⁵ εἶδος が「第一の実有」 πρώτη οὐσία とされている点は周知の事実である。しかしこの「第一の実有」としてのエイドスをどのように解釈すべきなのかをめぐることは, 「種」, 形相, 「個別的形相」など, 多様な見解が対立してきた。このようなエイドスに関する諸説の錯綜した議論では, しばしば, エイドスという用語の使用法に十分に配慮していなかったり, また使用されている様々な箇所を資料の取り扱いにあまり注意せずに混乱した形で扱ったり, さらにまたエイドスという用語が実際に使用されていない箇所にもこの用語を過度に読み込むということが行われてきたりしているように思われる。

そこで本第2章ではまず第1節(2-1)でエイドスに関するこれらの諸解釈を含めて, エイドスという, 「種」にも形相にもおさまりきらない豊かな内容を持つ用語がどのような幅で解釈しうるのか, ということを検討してみることとする。その上で, 続く第2節(2-2)で『形而上学』Z巻, H巻の構造の分析をおこない, 挿入箇所と考えられる部分とそうでない部分を区別した上で, そこで使用されているエイドスの用例について検討する。その際に重要な論点の一つは, Z巻, H巻で挿入箇所と考えられる部分を除いて解釈した場合に, 議論がどのように展開されているのかを探る, という点になる。続く第3節(2-3)では, エイドスの特徴を抽出して考察の基準を確保し, 次の第4節(2-4)では「第一の実有」としてのエイドスの言及箇所についてテキストに当たって検討する。そして続く第5節(2-5)では, 第4節までの考察を経た上で, 挿入箇所や参照箇所も含めて, エイドスをめぐる諸問題について考える, という手順を踏んで, 『形而上学』Z巻で「第一の実有」とされるエイドスの内実と意義とを解明していく, ということが本第2章の趣旨となる。

2-1. エイドスという用語の諸解釈

⁵¹ ギリシア語の固有名詞などを長音とする点については, 本稿注4参照。

⁵² 「実有」という訳語については本稿注1参照。

⁵³ 「始源」という訳語については本稿注8参照。

⁵⁴ 原因論のうち, 特に自然にかかわる目的因については, 伊藤[2000]参照。

⁵⁵ エイドスという訳語については本稿注11参照。

エイドスという言葉は『カテゴリーアイ』をはじめとする『オルガノン』における諸著作においては、古代ギリシア語の日常的な意味での「見られたかたち」「かたち」「すがた」「さま」という原義や、先行するプラトーンらのイデア⁵⁶ *ἰδέα*を示す場合を除いては、一般にプラトーンの諸著作でも多用されていた「種類」という意味をさらに限定した、「類」、「種」、「個」という系列のうちの「種」を示している。この『カテゴリーアイ』のみならず、そもそも素材⁵⁷ *ὕλη*という用語が皆無の『オルガノン』諸著作においては、『形而上学』Z卷H卷等で展開される、素材と組になって語られるエイドスは明示されてはいない。しかも『カテゴリーアイ』第5章においてはその「種」は、「類」とともに「第二の実有」(Cat.5.2a14f.)とされ、上述の系列のうちの「個」、「個体」に当たるものが「第一の実有」(Cat.5.2a11f.)とされている。そこでまず『形而上学』Z卷で「第一の実有」であると主張されている同じ表現のエイドスの内実もまた、この『カテゴリーアイ』と同様な意味での「種」と理解できる、または少なくともエイドスをなんらかの意味での「種」的なもの、「種」的形相と理解するといったRoss, Woodsらの解釈がある⁵⁸ (〈〈解釈Ⅰ〉〉:「エイドスは「種」、「種」的形相である」)。その場合、エイドスがZ卷等では「第一の実有」と呼ばれていることから、『カテゴリーアイ』で「種」が「第二の実有」とされている立場とは立場が異なることになり、その点についての何らかの説明が必要となる。これに対して『形而上学』Z卷におけるエイドスは、『オルガノン』諸著作における「種」とははっきりと区別された形相であるとするDriscoll, Balmeらの議論がある⁵⁹ (〈〈解釈Ⅱ〉〉:エイドスは「種」とは区別された形相である)。

他方で、Sellars, Albrittonの問題提起以来、Frede, Patzig, Irwin等を中心にZ卷等の「感覚されうる実有」のエイドスを「個別的」なもの、すなわち「個別的形相」と解釈すべきである、という見解も提出されてきた⁶⁰ (〈〈解釈Ⅲ〉〉:エイドスは「個別的形相」である)。しかしこれらの議論に対して形相が「個別的」であるかどうかは重要な問題ではない、とし

⁵⁶ 慣用で「イデア」と「カタカナ語」で表記されている *ἰδέα* という用語についても、長音を省略せず「イデア一」と表記することとする。アリストテレースが批判する *ἰδέα* という用語は、もともと「姿」「形」といった意味合いの古代ギリシア語の日常語であるし、哲学専門用語として分かり切ったことばなどではない、という自戒を含めた緊張感を日本語でも示す意図も籠めてのことである。注1, 注4, 注9参照。

⁵⁷ 慣用として「質料」と訳されてきた *ὕλη* を「素材」と訳すことについては、注32参照。

⁵⁸ Ross[1924], Woods[1967], Owen[1965], 角田[1998]などを参照。この〈〈解釈Ⅰ〉〉の中には大きな幅を持った様々な見解を含めることができる。本稿の観点からは、「エイドス」の内実をなんらかの意味で人と把握する立場はすべてこの解釈の範囲内に入る。例えば、井上[1980]の、独特な意味合いを持つ「「掴み」の<「種」>」についても、もしも< >の中に入るのが<人>であるのなら、この〈〈解釈Ⅰ〉〉の範囲内に含まれる、と思われる。

⁵⁹ Driscoll[1981], Balme[1987],などを参照。

⁶⁰ Sellars[1957], Albritton[1957], Frede, M.[1985], Frede, M., and Patzig[1988], Irwin[1988],などを参照。この〈〈解釈Ⅲ〉〉に分類した「個別的形相」の主張についてもいくつかの見解があるが、その中にはIrwin[1988]のようにこの「個別的形相」を実質的に形相と素材の結合体としての「個体」と同一視する説もある。

て形相と「個別的形相」との間の区別や限定をせずに把握する立場もある⁶¹（〈〈解釈Ⅳ〉〉：エイドスは個別的かどうか限定されないものである）。

けれどもアリストテレスのエイドスという用語の使用法には、以上のような諸解釈者たちの議論の範囲にはおさまりきらない、はるかに豊かな内容を見て取ることができる。冒頭に掲げた古代ギリシア語の日常的な意味での「見られた形」「かたち」「姿」「さま」「ありさま」という原義や、先行するプラトーンらのイデアーを示す場合、また一般にプラトーンの諸著作でも多用されていた「種類」という意味のそれぞれも、様々なテキストを理解する際の助けになる場合がある。『形而上学』Z巻の記述（*Met.*Z6.1031b11-15）の中にも、「諸エイドス⁶²でなくても、むしろおそらくたとえ諸エイドスであっても、十分である」として、このイデアーの意味でのエイドスを一部評価している、と読める記述がある⁶³。また「種類」と理解できるエイドスも、『形而上学』I巻第10章（*Met.*I10.1058b26-59a14）などでの用例などから読み取れる。そこでこれらのエイドスの用例も、本稿ではそれぞれ、〈〈解釈Ⅴ〉〉：エイドスはその原義の「見られたかたち」「かたち」「すがた」「さ

⁶¹ Sykes[1975]，渡辺[1989]pp.152-156，桑子[1993]pp.142-147.などを参照。この〈〈解釈Ⅳ〉〉についても、「個別的かどうか限定されないものである」ということの内実について、個別的でも普遍的でもある、とする立場、個別的でも普遍的でもない、とする立場、またSykes[1975]のように、個別的であるということと普遍的であるということが矛盾してしまっていて解かれないままになっている、とする解釈など様々なものがある。

⁶² イデアーの意味での「エイドス」は通常、複数形の *εἶδη* という形で表現されることが多いので、原文で複数形になっている箇所では「諸エイドス」と訳しておく。自説を複数形で表現するところには、イデアーに対する何らかの意識を反映しているとも考えられる。

⁶³ エイドスを一部評価できる点については、本稿第2章第2節（2-2）p.28，第2章第3節（2-3）pp.32-35（特徴B（Z6））参照。『形而上学』の中でもA巻ではこのイデアーの意味での「エイドス」の説が、一人称複数で「われわれ」の説として語られ、そのほぼ同じ内容の説がM巻では三人称複数で「彼ら」の説として語られていることは、Jaeger[1923]がアリストテレスの思考の発展的考察をした際に、プラトーンの影響からの脱却という点にからめて、執筆の前後関係の指標の一つと考えた点でもあった。無論、この一人称複数形のいわゆる *Wir-Stil* の問題に限って言えば、「われわれは」を「われわれプラトーン学徒は」と理解するのではなく、「仮にその方法を採用すればわれわれは」と解釈することも十分に可能である（今道[2004]pp.301-304，参照）。しかし少なくとも、プラトーンらの使用した「エイドス」を、アリストテレスが単純に否定したりしているわけではなく、むしろいわば是々非々の態度で考察に臨んでいる姿勢は読み取れるだろう。また、プラトーンの『メノーン』（*Men.*72C7）で、「なにか同じエイドスとされている際の「エイドス」は、イデアー（本稿〈〈解釈Ⅵ〉〉）の意味では（まだ）なく、むしろ「あり方」（本稿〈〈解釈Ⅷ〉〉）と把握できる点なども、プラトーン自らのイデアーとのかかわりを考える上で興味深い。なおアリストテレスの「エイドス」についての論及がプラトーンの「エイドス」との親近性を持つことの指摘については、Hamlin[1987]p.65，などを参照。注91も参照。

ま」である, <<解釈VI>>: エイドスはイデアである, <<解釈VII>>: エイドスは一般に「種類」である, として解釈の幅の内に入れて検討の対象として残しておくことにする。

さらにはこのエイドスの意味の問題を考える際に、『自然学』第1巻第7章で最初に素材が導入される場面で「素材においては一つだが, エイドスにおいては二つ」, という表現があり, ここでは「反対対立」の一方の側である, 「教養的」に対立する「無教養的」などという「欠如」もまたエイドスの例として挙げられていると解釈できる箇所 (*Phys. I* 7.190b23-191a3) についても注目しておく必要があると思われる。素材に対するエイドスに広狭の二義があるとも解釈できるわけである⁶⁴。これは前述した<<解釈V>>の「さま」という原義や<<解釈VII>>の「種類」にも関連する, 「ありさま」, 「あり方」といった意味のエイドスであるとも考えられる (<<解釈VIII>>: エイドスは「ありさま」, 「あり方」である)。この用法は, 場合によっては難解とされている箇所のエイドスの理解に役立つことも考えられる。

またエイドスには主に『「たましい」について』第3巻第8章 (*DA. III* 8.431b27-432a6) などで見出せるパトス〔様態〕 *πάθος*⁶⁵ や「状態」 *εἶς* の意味での用法もある (<<解釈IX>>: エイドスはパトス〔様態〕「状態」である)。『形而上学』ではA巻8章でのアナクサゴラスの説に関連して登場するエイドスがこの用法と考えられる

(*Met. A* 8.989a30-b21)。さらにまた『形而上学』Z巻H巻ではエイドスが「差異」 *διαφορά* の意味で用いられることもある (*Met. Z* 12.1038a25-28, *Met. H* 2.1043a19-21)。これは主に素材としての「類」とエイドスとしての「差異〔種差〕」から「定義」を考察する視点が登場する箇所での用法である (<<解釈X>>: エイドスは「差異」である)⁶⁶。

以上のように様々な理解できるエイドスの用法を射程に入れて比較検討することを通して, 「第一の実有」としてのエイドスの解釈についての考察をすすめていくこととする。

2-2. 『形而上学』Z巻, H巻におけるエイドスの用例

次にZ巻, H巻の諸章の構造を探り, その論及の道筋の中でエイドスが用語としてどのように問題にされてきているかを探ってみることとする⁶⁷。

⁶⁴ 『自然学』における素材の導入の際には, 「反対対立」である「エイドス」と「欠如」に対する第三のものとして素材が要請される, という素材, 「エイドス」, 「欠如」という一種の三原因説が語られ, 素材以外のふたつ (つまり「エイドス」と「欠如」) がまとめて「エイドス」と呼ばれている, とも受け取ることができる箇所である。興味深いことに『形而上学』のZ, H巻ではこの意味での三原因説はそのままの形では登場しておらず, これは『自然学』以外では『形而上学』A巻 (*Met. A* 2.1069b32-34) などでは表明されている見解である。

⁶⁵ 「受動状態」「受容状態」「受けのさま」が原義である *πάθος* は, 「受動」「様態」「情念」「受難」「苦難」などの広範な意味を表現できることばである。よって本稿の翻訳上の基本方針に従うと, 意味を一語で表現するのが極めて難しいことばの一つとなるので, カタカナ語で「パトス」と表現し, この当該箇所のように「パトス〔様態〕」などとして, その都度の意味合いを補うこととした。

⁶⁶ エイドスは「差異」である, ということの一側面については, 本稿第2章第5節pp.44-46, 参照。

⁶⁷ アリストテレースの現存する著作については, 一種の講義草稿として残っていたものを, 編集者がテーマごとに集めた結果の集積だと推定される, という文献上の特殊性に鑑みて, 一連の思考のまとまりを把握する際に, 書物全体

まず、**Z**巻の全17章のうち、第7～第9章の「生成論」について述べた部分については、**Z**巻11章 (*Met.Z11.1037a21-b7*) に記されている**Z**巻4章から11章までの議論のまとめの箇所や、続く**H**巻の冒頭 (*Met.H1.1042a3-24*) に記されているそれまでの**Z**巻全体の議論をまとめる箇所にその部分についての言及がないことから後からの挿入と考えられる⁶⁸。それから第12章の「定義の一性」について述べた部分についても、**Z**巻11章での後の探究の予告 (*Met.Z11.1037a18-20*) に対して部分的にしか答えてはおらず、この予告に対応するのはむしろ同じく「定義の一性」を扱っている**H**巻第6章である、また『分析論』が参照書物として明示されている、などという点で前後との文脈的な繋がりが途切れていること、などから、最初の形の**Z**巻に含まれていたのではなく、後からの挿入であると考えられる⁶⁹。すると、**Z**巻はもともと第1章～第6章、第10章～第11章、第13章～第17章の三つの部分を繋げた形になっていたものと考えられる。

そこでこのもともとの状態と考えられる**Z**巻をさらに内容的に分類すると、第1章～第2章は「「あるもの」 *ὄν* とは何か」を探究することとはつまり「実有 *οὐσία* とは何か」を探究することなのであり (*Met.Z1.1028b4*)、そしてこの「実有」についてはこれまでに様々な見解がある、という「問題の提示」が語られている。

続く第3章の冒頭部分は四つの候補、すなわち、「あるとは何であったのか」 *τὸ τί ᾗν εἶναι*⁷⁰ (*Met.Z3.1028b34*)、「全体に関してのもの」 *καθόλου*⁷¹ (*Met.Z3.1028b34*)、「類」

ばかりではなく、各巻、各章ごとに、場合によっては各段落、各文、各語ごとにその内容をそれぞれ吟味していかなければならない場面にも遭遇する。『形而上学』の**Z**巻については、特に複雑な成立の事情が伺えるので、内容的な考察をおこなう際にも、この**Z**巻の構造についてのテキスト資料の取り扱いについての方法的な検討を施しておくことが、とりわけて重要なことであると思われる。Burnyeat[2001]、Wedin[2000]などの考察を特に参照。また統計的解析についてはKenny[1983]を参照。テキスト相互間の内容的相違についてはLewis[1991]pp.308-348などを参照。

⁶⁸ この7章から9章までの挿入が編集者によってなされたのか、アリストテレス自身によってなされたのかについては、本稿の第2章第5節での内容的な考察からも、編集者の手による可能性が高いと思われる。この点に関連して例えば、Bostock(1994)pp.119-120 は、**Z**巻15章の段階では7～9章の挿入がなされていたとしているが、そう考えると**H**巻冒頭の記述との矛盾をさらに説明する必要が生じると思われる。

cf. Burnyeat, M. et al. (1979) p.54, Loux (1991) p.110.

⁶⁹ Frede, M., and Patzig (1988) p.24. Bostock (1994) p.176は、**Z**巻12章の扱いは**Z**巻11章に対する応答としては部分的であるとしている。

⁷⁰ *τὸ τί ᾗν εἶναι* のような原文でもごつごつして生硬な造語表現は、例えば通常よくなされるように「本質」などとすんなりと訳してしまうのではなく、翻訳でもその雰囲気を出した方が望ましいと考えて、「あるとは何であったのか」と訳した。解釈としては、この用語を「「ある」(*εἶναι*) とは「何であったのか」(*τί ᾗν*)」と分析し、把握することとなる。このことばの持つ意味についての言語的分析については、千葉(2002)pp.183-187参照。また、未完過去 *ᾗν* の持つ意味については、見過ごされていたものを認める、とするGoodwin (1929) p.13, § 39(1435/18318-1436/18318, kindle) ‘The imperfect ... may express a fact which is just recognised as such by the speaker or writer, having previously been denied, overlooked, or not understood.’ などの文法的解説を参照。

⁷¹ *καθόλου* は、通常「普遍」と訳されているが、注21でも考察したように、ことばの原義である *καθ’ ὅλου* まで戻ってここでも「全体に関してのもの」と訳した。

γένος (*Met.*Z3.1028b35), 「基に置かれたもの」 ὑποκείμενον⁷² (*Met.*Z3.1028b35) の四つが「実有」かどうかを検討しなければならない, という, 第3章から第16章までの議論の「探究の方向設定」が語られている, と読み取ることができる。

そしてこの「探究の方向設定」に呼応して, 第3章の冒頭を除いた残りの部分は「基に置かれたもの」についての探究, 第4章～第6章, および第10章～第11章は「あるとは何であったのか」についての探究, 第13章～第16章は「全体に関してのもの」および「類」についての探究, というふうに論が展開している, と理解することができる。

するとZ巻の最後の第17章は「なにゆえに」 τὸ διὰ τί (*Met.*Z17.1041a10)ということを経験とする, 「原因」の探究という「新たな探究の方向設定」をおこない, 次のH巻への連携の提示をも同時におこなっている, とまとめることができるだろう。

ではこのように理解できるZ巻の諸巻の最初の筋立てと考えられる状態を確保した場合, 用語法としてのエイドスは, このまとまりの中で実際にはどのように扱われているだろうか。

まず, 「問題の提示」に当たるZ巻第1～2章までの箇所では, エイドスという用語は, プラトーンの主張した諸エイドス (*Met.*Z2.1028b20) や, 名は明示されてはいないがクセノクラテースと推定される人物の主張した諸エイドス (*Met.*Z2.1028b25) の意味 (第I節での<<解釈VI>>のアイデアと理解できるエイドス⁷³) でしか言及されてはいない⁷⁴。

次に「探究の方向設定」を行う第3章の冒頭直後の部分 (*Met.*Z3.1028b33-1029a7) では「実有」と考えられているもののうち「基に置かれたもの」(1028b35)の例として, まず素材⁷⁵ ὕλη (1029a2), 「かたち」⁷⁶ μορφή (1029a3), 「それら〔素材と「かたち」〕からなるもの」 τὸ ἐκ τούτων (1029a3)の三つが掲げられ, そのうちの「かたち」(1029a4)が「アイデア〔姿形〕」⁷⁷の型 σχῆμα τῆς ιδέαςと説明され, それらの三つのものはさらに素

⁷² 本稿で ὑποκείμενον を「基に置かれたもの」と訳した点については, 注45参照。

⁷³ ただしこの箇所ではアイデアという用語そのものは使用されてはいない。プラトーンらの説を取り上げる際に, アリストテレスはアイデアという用語とエイドスという用語を区別して使用しているように思われる。A巻ではアイデア (*Met.*A6.987b8)を導入したのはプラトーンだとされているが, ピュータゴラス派と並べてプラトーンについての言及がある場合には両者の考えをともに「エイドス」(*Met.*A6.987b14)と呼んだりしているし, Z巻15章ではアイデアのみが使用されている。本稿第2章第2節pp.27-28, および注96, 参照。

⁷⁴ この箇所で自分自身の主張するエイドスに言及していないということは, エイドスという用語が, 議論を交わしていた人々の間の通念 ἐνδοξα としてどのように理解されていたかを知る上で注意すべき点であると思われる。自らも「同名」のエイドスという用語を使用し, そこに新たな意味を籠めたい, という意図が, この通念に対する配慮とも重なっていると思われる。注63, 参照。

⁷⁵ ὕλη を「素材」と訳すことについては, 注32, 参照。

⁷⁶ 「形態」, 「形式」などとも訳される μορφή を, 日常語の幅広い意味も背景にした上での用語と解釈し, 本稿では一貫して「かたち」と訳す。

⁷⁷ ここでの ιδέα はプラトーンらのアイデアという意味ではなく, その原義である「見られたもの」, 「姿形」という意味である。アリストテレスが ιδέα という用語についても意味を限定せずに柔軟に使用していることがわ

材, エイドス (*Met.*Z3.1029a5-6), 「両者からなるもの」 τοῦ ἐξ ἀμφοῖν (*Met.*Z3.1029a6) と言い換えられることによって, はじめてアリストテレス自らが自説として主張するエイドスという表現が登場している⁷⁸。そしてこの第3章の「基に置かれたもの」についての探究の帰結部分で, 素材が「離されうる」⁷⁹ χωριστόν こともなく「なにかこれ」⁸⁰ τόδε τι

かる箇所である。注63, 注73, 参照。

⁷⁸ なぜ「エイドス」という用語を用いて, 「かたち」 μορφή という用語のままにしておかなかったのか, といった点に注目した場合, Z巻に続くH巻では素材や結合体と組になるものが「エイドス」という用語ではなく, 「かたち」という用語になっている, という興味深い展開を見て取ることができる。本稿第2章第2節(2-2)pp.30-32, 第2章「結」(2-結)pp.46-49, および注92, 注106, 参照。

⁷⁹ 「離されうる」については, 注9, 参照。

⁸⁰ 「このもの」, 「或るこれ」, 「この何か」などと訳されてきた τόδε τι を本稿では「なにかこれ」と訳した。この用語についてはもしも τόδε を名詞的に, τι を形容詞的に(英語の場合の不定冠詞のように)把握するなら, 「或るこれ」という訳語が, また, τι を名詞的に, τόδε を形容詞的に把握するなら, 「この何か」という訳語が妥当することになると思われる。しかし片方だけを名詞的に, 残りの一方を形容詞的に, と把握するのではなく, Smith[1921]p.19の指摘するように τόδε も τι も両者とも名詞と把握して並位的に考え, あえて訳せば「これ・なにか」と理解することも言語的な分析からは可能であるし, この選択肢を追求する余地もあるように思われる。内容的な観点からは, 仮に両者とも名詞とした場合, τι (「なにか」)が「実有」に所属するものも, 「実有」以外のカテゴリーに所属するものも, 両方とも示せるのに対して, τόδε (「これ」)は通常「実有」を示すし, また τόδε τι の形ではなく τόδε だけでもカテゴリーとしての「実有」を示せる場合がある(cf.*Met.*Z7.1032a15)ので, その意味で τι が省略される場合もある(つまり τόδε(τι) と理解できる), というのがアリストテレスに特徴的な用語法である。そこで言語的分析の観点から並位的に把握したとしても, 重点は, すべてのカテゴリーに当てはまる τι の方ではなく, 「実有」に当てはまる τόδε の方にあると思われる。以上の言語的な分析や内容的な検討を踏まえて総合的に考察した結果, τι の部分に重点を置く「この何か」でもなく, また τόδε の部分に重点は置くものの, 内容的には「これ」のうちの或る不特定のものを示していると理解できる「或るこれ」でもなく, 言語的分析としては並位的に把握し, 内容的には τι の方が省略されることもある, という側面を重視して, 上述した「なにかこれ」(または「(なにか) これ」)という訳語を採用することとした。また, 「なにかこれ」の「これ」はそのままでカテゴリーとしての「実有」を示すこともある点からは, τόδε の内実は, 「実有」の「指示性」や「個性性」のみを示しているというよりは, むしろもっと広く「実有」の「規定性」を示していると理解すべきであろう。なおこの「規定性」を示すという観点は, τόδε(τι) が「(なにか) これ」、すなわち「実有」を示すのに対して, τοιόνδε(τι) が「(なにか) このよう」、すなわち性質を, また τοσόνδε(τι) が「(なにか) これほど」、すなわち「量」を示す, という用語法があることも密接に関連しており, 本稿第2章第5節(2-5)p.43, で言及する τὸ

でもないとして「実有」としては不十分だとされた後で、「実有」の候補者としてはエイドス (*Met.Z.3.1029a29*) と「両者からなるもの」が残る、とされている箇所でも、エイドスは「かたち」(1029a31) と言い換えられており、この残った二つのうち、より後のもので明らかなものである「両者からなるもの」よりも、「最も難問」*ἀπορωτάτη* なこのエイドスや「かたち」についてこそ探究しなければならない、という言明がなされている⁸¹。

続く「あるとは何であったのか」についての探究の前半部分に当たる Z 巻第 4 章～第 6 章では、第 3 章で素材や「両者からなるもの」と組になって用いられていた三つのものの一つとしてのエイドスについての言及はなく⁸²、プラトーンらの使用した諸エイドスなどが批判的に検討される過程で以下の<T1>のような記述がある。

<T1> 「したがって、「あるとは何であったのか」がそなわる⁸³ *ὑπάρχον* ことは、「類」の諸エイドスではない諸エイドス *τῶν μὴ γένους εἰδῶν* には一つもあらぬだろう、ただこれら〔「類」の諸エイドス〕にのみ〔にそなわることがあるだろう〕。(なぜならこれら〔「類」の諸エイドス〕与ること *μετοχή* に沿っては言われず、パトス〔様態〕*πάθος* とも言われず、付帯性 *συμβεβηκός* としても言われない、と思われるから)」⁸⁴ (*Met.Z4.1030a11-14*)

この「類」の諸エイドス *γένους εἶδη* (*Met.Z4.1030a12*) をめぐっては、「類」との関連が語られているので、これは「種」を意味する、と指摘する説 (<<解釈 I>>) ⁸⁵ がある一方で、そうではなくこの箇所を形相と理解できるとする説 (<<解釈 II>>) ⁸⁶ もある。しかしこの箇所を「種」かそれとも形相かの二者択一で理解しようとするといくつかの困難に

τοιόνδε εἶδος (*Met.Z8.1034a6*)、すなわち「このようなエイドスの解釈に際しても踏まえておくべき観点であると思われる。さらに、*τόδε* と *τι* のかわりについては、本稿第 3 章第 2 節 (3-2) pp.81-85、も参照。注123, 注134, 参照。

⁸¹ この「エイドス」や「かたち」についての探求は、続く Z 巻 4 章以降ではなく、むしろ H 巻で行われていることにも注目する必要がある。

⁸² Z 巻第 3 章で「エイドス」について探求しなければならない、とされているのに、第 4 章以降でこの「エイドス」についてではなく、「あるとは何であったのか」についての探求がなされているのは、第 3 章の冒頭における問題設定に忠実に議論が展開されているためだと考えることができる。すなわち、ここでは「基に置かれたもの」から「あるとは何であったのか」へとテーマが移行している、と理解できる。しかも Z 巻第 4 章の前半 (*Met.Z4.1029b13-1030a27*) は *λόγικῶς* 「説明規定上で」(*Met.Z4.1029b13*) の問題にまず取り組んでいる。

⁸³ 従来、多くの場合に「属する」と訳され、また「にある」と訳されることもあった *ὑπάρχειν* を本稿では「そなわる」と訳した。「属性」として「属する」わけではない多くの場合があるからであり、また原語にはない「ある」*εἶμι* にかかわる訳語にしないほうがよい、と判断した結果である。注9, 参照。

⁸⁴ οὐκ ἔσται ἄρα οὐδενὶ τῶν μὴ γένους εἰδῶν ὑπάρχον τὸ τί ἦν εἶναι, ἀλλὰ τοῦτοις μόνον (ταῦτα γὰρ δοκεῖ οὐ κατὰ μετοχὴν λέγεσθαι καὶ πάθος οὐδ' ὥς συμβεβηκός). (*Met.Z4.1030a11-14*)

⁸⁵ Bostock[1994]p.91.などを参照。

⁸⁶ Balme[1987]p.306.などを参照。

直面する。例えば、一方で**Z**巻4章の文脈上「あるとは何であったのか」にかかわる「それぞれのもの」⁸⁷ ἕκαστον は、**Z**巻4章の冒頭で「君」で「あるとは何であったのか」

(*Met.***Z4.1029a14-16**)という例が掲げられていた点からも、「個体」をも示していたので、<<解釈Ⅰ>>のように「種」のみに「あるとは何であったのか」がそなわるとするのは不十分、ということともなる。他方、<<解釈Ⅱ>>のように「種」と明確に区別された意味での形相がすでにここで語られているとすれば、**Z**巻4～6章、および10～11章の「あるとは何であったのか」についての探求の過程の中では、まだ素材や結合体とのかかわりが導入されていないこの箇所では、前後の脈絡とかかわりなく形相が単独で登場する、というやや唐突な叙述となることをうまく説明できないこととなる⁸⁸。

この「類」の諸エイドスの主張については、この引用箇所の後半の部分

(*Met.***Z4.1030a13-14**)で、「与る」ことに沿っては言われない、或るパトス〔様態〕とも言われない、付帯性としても言われない、と思われる、という三点を理由としておこなわれている点に着目すべきだろう。この文脈では「類」の諸エイドスと「類」の諸エイドスではない諸エイドスが対比され、区別された上で「類」の諸エイドスではない諸エイドスが批判されており、その際批判の対象となっているのはイデアー (<<解釈Ⅵ>>)の「与る」という側面や、パトス〔様態〕(<<解釈Ⅸ>>)などのことであると考えられる。そして、「類」の諸エイドスも、<<解釈Ⅵ>>や<<解釈Ⅸ>>を含むような「類」の諸エイドスではない諸エイドスも「諸エイドス」であることに変わりはないので、ここでのエイドスという用語そのものはこれらのすべてを包括的に示しているとも考えられる。このように考えられるとすると第Ⅰ節の<<解釈Ⅶ>>で掲げた「種類」や、特に<<解釈Ⅷ>>で掲げた「あり方」という解釈を検討する余地が生ずると思われる。つまりここでの「類」の諸エイドスのエイドスが同じ意味だと解釈して、その意味内容をもっと広く受け取るということである。そしてもしエイドスが「種」ではなくもっと包括的に「あり方」を示しているとすれば、「実有」という「類」のもろもろの「あり方」の中に「個体」も「種」も含めることはできるし、また形相という解釈への含みを持たせることもできる。そしてさらに「実有」という「類」のもろもろの「あり方」ではないイデアーやパトス〔様態〕や付帯性などのもろもろの「あり方」をも包括的なエイドスに含めることができることともなるだろう⁸⁹。

⁸⁷ 「各々のもの」 ἕκαστον と「各々に沿ってのもの」 καθ' ἕκαστον が同じでないことにも着目する必要がある。

⁸⁸ この箇所について「属性が度外視された個体実体」という解釈があるが(岩田(圭)[2003]pp.160-164)、この解釈は「白い人」のような「付帯的複合体」の有する付帯性についての論点には答えられるが、イデアーとしてのエイドスなどの通念に対する反論という側面に対する配慮に欠けている点、仮に属性を度外視しても、第4章のここまでの箇所では素材は明示されていないというものの、後に言及される、個体を構成する素材まで度外視できるのか、と言った疑問点が残ること、また用語法的に個体がそのまま直接エイドスと呼ばれることはない点、などいくつかの点で無理があると思われる。

⁸⁹ 「類の」ということの強調の理由の一つに、「実有」という「類」と、「付帯性」として把握されたその他のカテゴリーアーとの区別、という視点も読み取るべきであると思われる。なお、「時のエイドス」としてプラトーンの『ティマイオス』(*Tim.*37e4,38a7-8)に記述されているエイドスは、本稿の立場からは「あり方」(<<解釈Ⅷ>>)と理解できるものの一つであるが、この箇所を引用して論を展開しているプロティノスは、『エンネアデス』

そして以上のことを踏まえた上で、この「類」の諸エイダスが、Z巻の第4～6章が孤立したまとまりではなく、第10～11章における後半部分の論及につながる前半部分としての探求途上の性格を持っていると考えた場合、構造的な筋立ての中では、「類」の諸「エイダス」ではない諸エイダスとは異なる、という最低限の条件を提示した暫定的帰結として、後半部分への橋渡しをする諸「エイダス」であると理解することもできると思われる⁹⁰。

この第4章～第6章の探究の前半部分については、第6章で、イデアーの意味でのエイダスを一部評価して、例えば「善」と「善であること」、「美」と「美であること」が「一つ」という例を引き合いに出して、「自らに沿ってそして第一のもの」ならば諸エイダスでなくても、むしろおそらくたとえ諸エイダスであっても、十分である」

(Met.Z6.1031b11-15)とする記述があることに着目しておく必要があるだろう。この「それぞれのもの自ら」と「あるとは何であったのか」とが付帶的にではなく「一つ」で「同じ」とされる(Met.Z6.1031b19-20)条件は、Z巻の「実有」の理解に重要な論点となるが、エイダスとの関係ではイデアーの意味でのエイダスもこの条件に合致する場合がある、と読める箇所である⁹¹。

続く「あるとは何であったのか」についての探究の後半部分の第10～11章の文脈では、「第一の実有」と明示されているエイダスが登場し、エイダスの具体的な内実についての議論がこの部分で集中的になされている。この箇所は素材とエイダスと結合体の三者の観点から、定義 *ὁρισμός* の部分は素材としての部分なのかそれともエイダスとしての部分なのか、という問いかけに応ずる考察の末に、それはエイダスとしての部分なのである、と結論を下すことをはじめとして、想定されるZ巻全体の最初のまとまりのなかでも、構造的な側面から考えてエイダスについて核心的なことを述べている箇所である。用語法上もこの第10～第11章の箇所では、一貫してエイダスという用語が使用されており、他の箇所のようにエイダスが「かたち」 *μορφή* その他の用語に言い換えられたりしてはいない⁹²。この第10～11章におけるエイダスについては、その構造上、内容上の重要度に鑑み、以下の第3節(2-3)で具体的な諸特徴の抽出をおこない、また第4節(2-4)ではテキストの解釈をおこなうことを通して、さらに考察を深めることとする⁹³。

続く第13章～16章の「全体に関してのもの」 *καθόλου* および「類」についての探究の部

(*Enneades* VI.1.13)の中でこの「時のエイダス」のエイダスを「種」(本稿<<解釈II>>)と把握しているように読める点も、アリストテレスを経由しての理解の展開とも考えられ、興味深い。

⁹⁰ この論及の筋立ての観点からは「あるとは何であったのか」についての探究の後半部分の、第10～11章におけるさらに議論を練り上げた上での探究の結論の部分の「エイダス」についての言及の方を内容的にはより重視する必要があるとも言えるだろう。

⁹¹ アリストテレスが自説を主張する際に「エイダス」という用語を採用する理由の一つが、このような通念としての「エイダス」にも一部評価できる点があることを指摘することができると思われる。本稿第2章第1節(2-1) p.21, 注63参照。

⁹² このことは、「かたち」と言い換えられる「エイダス」とこの箇所での「エイダス」の内容的な違いを示唆することともなっている。本稿第2章「結」(2-結) pp.46-49参照、および注78, 注106参照。

⁹³ 本稿第3節(2-3) pp.32-35, 第4節(2-4) pp.35-41, における考察、参照。

分では、「多くのものに共通なもの」を示す「全体に関してのもの」や「類」は、「それぞれのものに特有なもの」(*Met.Z13.1038b10*)である「それぞれのものの実有」ではない、という議論が展開される。エイドスという用語は再びイデアーを説く人々の諸「エイドス」という意味で用いられる。特に「全体に関してのもの」は「実有」ではないとされる「全体に関してのもの」の解釈を巡って多くの議論があるZ巻第13章ではエイドスという用語自体が一度も登場していない⁹⁴。アリストテレースは「実有の根拠」についても「実有」という表現を使用している。そこでこの意味での「実有」を本稿では「実有の実有」と呼ぶこととする。この箇所での「実有」ではないは、「実有の実有」ではない、と解釈できる。次の第14章ではイデアーを説く人々のエイドスが取り上げられ、批判されている。その次の第15章では冒頭で、「実有」が結合体とロゴス⁹⁵ *λόγος* の二種に区別される、として結合体と組になって掲げられているのがエイドスではなくロゴスとされている。そしてこの章でもイデアーが批判されているが、「類」や「差異」と組になって使用される「種」の意味のエイドス(*Met.Z15.1040a20*)以外の、エイドスは登場していない⁹⁶。続く16章では、諸エイドスを言う人々が、エイドスを「彼らが離すこと」*χωρίζοντες* (*Met.Z16.1040b28*) については、もしもエイドスが「実有」である限り正しく言っている、しかしエイドスを「多くのものの上に立つ一つのもの」とした点では正しく言っていない、としてイデアーの意味のエイドスを言う人々の見解が部分的に評価される箇所(*Met.Z16.1040b27-30*)でエイドスという表現が登場している。そしてこの評価される点はアリストテレース自らのエイドスの考え方にも、「離されうる」*χωριστόν* こと(*Met.Z3.1029a27-28*)との関連で、当てはまる点であるということが重要だと思われる⁹⁷。そして諸エイドス(<<解釈VI>>)を言う人々は、「感覚されうるもの」の名に「そのもの」を付け加えることによって「人そのもの」とか「馬そのもの」とかの、「消滅的なもの」とエイドスにおいて同じものを作り出した、として批判する箇所で「種」(<<解釈I>>)または「種類」(<<解釈VII>>)と理解できるエイドスが登場している⁹⁸。

⁹⁴ したがってZ巻13章についての議論をどのように展開するにしても、「エイドス」に言及する際には、テキストに「エイドス」を読み込む、という作業をすることとなる点を意識しておいた方がよい。「種」も「類」と共に「全体に関してのもの」の中に含まれるのかどうか、という議論をする際に「エイドス」という用語が第13章でテキスト上に現れているわけではないことに注意すべきだろう。しかし、この歴史は古く、(pseudo) Alexander [1891] p.523が、Z巻13章冒頭部分の *Met.Z13.1038b6* の「完成態」*έντελεχεία* に「エイドス」を読んでいる。なお写本によっては、*Met.Z13.1038b23* に*εἶδει* を読むものも、あるが、本稿では採用しない。

⁹⁵ 言説、説明方式(出[1968])、説明言表(千葉[2002])、理論、理性、理由、割合、概念(岩崎[1942])、概念規定、本質規定(牛田[1994])説明規定(中畑[2013])など、多様な意味合いとともに、様々に訳されてきた *λόγος* は、例えば「やまとことば」の「ことわり」ということばではやや漠然とした意味しか表せない、と判断して、原音に基づいてカタカナ語でロゴスと表現することとした。

⁹⁶ Burnyeat [2001] p.53 はZ巻15章のロゴスに「エイドス」を読み込もうとしているが、そのような読み込みには注意が必要である。そもそもこのZ巻15章では、自身の説ではないイデアーの説が「エイドス」とは言い換えられずにイデアーという用語を一貫して使用して批判される、という高度の方法性が示されており、自身の説が展開される場合も「エイドス」ではなくロゴスを使用している点にむしろこの高度の方法性を読み取るべきだろう。

⁹⁷ 「離されうる」という訳語については注9参照。

⁹⁸ 総じてこのZ巻第13章から第16章までの、「全体に関してのもの」*καθόλου* や「類」が「実有」であるかどうか

続く第17章は「なにゆえに」という「新たな探究の方向設定とH巻への連携の提示」ではテキスト上の異読もある一箇所のエイドス (*Met.Z17.1041b8*) を除いてエイドスという用語は使用されていない⁹⁹。

続くH巻1章でZ巻全体を振り返ってまとめる部分では、エイドス (*Met.H1.1042a11-12*) という用語が再びイデアーの意味 (<<解釈VI>>) で使用されており、「あるとは何であったのか」と「基に置かれたもの」が「実有」である、という議論があった、とされているだけで、また「感覚されうる実有」を問題にして素材も「実有」である、と論じる部分¹⁰⁰でも、素材や結合体と三つで一組になるものの名はロゴスまたは「かたち」とされており、エイドスという用語は使用されていない。続くH巻2章でも素材や「両者からなる実有〔結合体〕」と組になるものとしては実働態¹⁰¹ *ἐνέργεια* やロゴスや「かたち」という用語が用いられており、「差異」によるロゴスがエイドス (*Met.H2.1043a20*) または実働態を説くものと〔一応〕認められる¹⁰²、という箇所にもみエイドスという用語が使用されている (<<解釈X>>) の「差異」としてのエイドス)。第3章でも「名」が示すのはどちらなのか、として「複合的実有」 (*Met.H3.1043a30*) と対比されているのは、実働態または「かたち」とされており、その箇所でもエイドスという用語は使用されていない。第3章に至って「あるとは何であったのか」が実働態やエイドス (*Met.H3.1043b1*) にそなわる *ὑπάρχει* とされている箇所ではじめてエイドスという用語が登場する¹⁰³。

そして興味深いことにその後続く、H巻第3章の、章の中での挿入箇所と考えられる、内容的には生成と消滅を扱った段落 (*Met.H3.1043b14-23*) で、「それらからなるもの〔結合体〕」と組になるものとしてのエイドス (*Met.H3.1043b17*) という表現が使用されており、その挿入箇所が終わると、「複合体」 *σύνθετον* や素材と共に用いられるのは再び「か

かを探究する箇所では、素材や結合体と組になった「エイドス」は、用語としては登場しておらず、イデアーの意味を除くと「種」もしくは「種類」という意味で使用されている、という点を指摘できる。

⁹⁹ この箇所にエイドスを記したテキストを採用した場合には内容的には「素材が「なにか」であること」との「原因」がエイドスであって、これが「実有」である、と読める重要な箇所である。しかし、ただ「実有」である、という表明だけでも十分とも受け取れるので、ここでエイドスという用語が明示されているとするテキストを採用することには疑問も残る。むしろこの第17章を締めくくる最後の部分で内容的に「かたち」の意味でのエイドスが使用されていてもおかしくない箇所 (*Met.Z17.1041b28-31*) で自然 *φύσις* という用語が使用されている点にも着目すべきだろう。『形而上学』A巻の中でも、エイドスではなく、自然 *φύσις* (*Met.A3.1070a11*) という用語が、素材や「それらからなるもの」と組になって使用されている箇所がある (*Met.A3.1070a9-13*)。また、『自然学』の中では素材もエイドスとともに自然とされ、そして特にエイドスの意味での自然がより重要だ、とする記述もなされている (*Phys. II 1.193a9-b18*)。

¹⁰⁰ Z巻3章の文脈で「基に置かれたもの」としての「実有」としては不十分とされた素材が、このH巻1章では、再び別の観点から一般の人々の考える「感覚されうる実有」の通念の代表例として取り上げられていることを見ても、アリストテレスの問題に対する切り込み方が、単純ではないことを示している。

¹⁰¹ 実働態という訳語については、注26参照。

¹⁰² Z巻、H巻の最初のまとまりの中での「差異」の扱いは、基本的に「差異」をそのまま「エイドス」とは見なさない、というスタンスを取っている点に注意すべきであると思われる。その点が本稿で挿入部分とされたZ巻12章での「差異」の扱いと内容的に異なる点でもある。本稿第5節(2-5)pp. 44-46参照。

¹⁰³ この用例は、素材や結合体と組になって登場していたZ巻3章での「エイドス」というよりは、むしろ先に検討したZ巻第4章で「あるとは何であったのか」が「類の諸エイドス」にそなわる、とされていた部分や、Z巻第11章で「あるとは何であったのか」と言い換えられていた部分と関連している。

たち」という用語に戻っている¹⁰⁴。

次の第4章では「原因」を語る際にエイドス(*Met.H4.1044a36*)としての「原因」は「あるとは何であったのか」だ,とする箇所ではエイドスという用語が使用されており,先に掲げたH巻3章(*Met.H3.1043b1*)と類似した内容を示している。続く第5章では,「全般的に諸エイドス」*ὅλως τὰ εἶδη*(*Met.H5.1044b22*)として,白のようなパトス〔様態〕と考えられるものが,挙げられている。これは<<解釈IX>>のパトス〔様態〕,「状態」としてのエイドスを示している。さらに「ソーマ〔身体〕」は「健康」に対して,「水」は「酒」に対して,「状態」*εἶς*に沿って,またはエイドス(*Met.H5.1044b33*)に沿って,素材なのではないか,とされている箇所のエイドスもまさに,「状態」(<<解釈IX>>)を示している。素材とかかわるエイドスの用例の中に,明確に<<解釈IX>>のパトス〔様態〕や「状態」の意味のエイドスが示されている例として注目に値する¹⁰⁵。H巻の最後の章である第6章では「定義」の一性が論じられ,ここでもまた素材と組になっているのは用語上,「かたち」(*Met.H6.1045a23,29,b1*)や実働態(*Met.H6.1045a35*)であってエイドスではない

¹⁰⁶。

以上の第I節でのエイドスについての諸説の考察と,第II節でのZ巻,H巻の論及の筋立ての構造の検討およびエイドスの用例についての考察を踏まえると,Z巻3章の「基に置かれたもの」の探求の際のエイドスは「かたち」*μορφή*も言い換えることができるし,むしろこの「かたち」という用語の方が続くH巻では素材と組になって使用されていることを指摘できる。また「全体に関してのもの」や「類」を探求するZ巻13章~16章において

¹⁰⁴ この挿入箇所と考えられる段落は,本稿で先に挿入箇所とされたZ巻第7~第9章の「生成論」を扱っている箇所と参照関係を通して内容的な関連がある。本稿第2章第5節(2-5)p.43,参照。

¹⁰⁵ すなわち素材-「エイドス」論にも様々な局面があり,一筋縄ではいかない,ということの証拠の一つにもなる,ということである。本稿第2章「結」(2-結)p.48,参照。

¹⁰⁶ 以上,総じてH巻では,Z巻の議論を受けて論を展開しているにもかかわらず,素材や結合体と組になるものとして基本的に使用されている用語はロゴスや「かたち」*μορφή*であって,「エイドス」という用語はほとんど登場していない。そして第3章の中の挿入箇所と考えられる段落を除くと,素材や結合体と組になって用いられる「エイドス」は使用されずに,「かたち」という用語が使用されていることが際立っている。H巻ではアイデアの意味の場合を除いた「エイドス」の使用例は,「エイドス」が「差異」と見なされる場合(<<解釈X>>),「エイドス」が実働態と言い換えられている場合,「エイドス」に「あるとは何であったのか」がそなわるとされる場合,それから「エイドス」がパトス〔様態〕や「状態」と理解できる場合(<<解釈IX>>)ということになって,素材や結合体と組になって使用されているのは「エイドス」ではなく「かたち」*μορφή*である,という特色を指摘することができる。Z巻3章での議論で「かたち」と並べて語られていた「エイドス」は,H巻では用語法的には「かたち」のみに収束しているように思える。「感覚されうる」という側面に焦点を絞った,素材も「実有」のうちに含めた視点からの探求では,「エイドス」ではなく「かたち」の方をむしろ使用する,という用法を見て取ることができる。本稿第2章「結」(2-結)pp.46-49,および注78,注92,注137,参照。

はエイドスがイデアーの意味の場合でも「離すこと」について部分的に評価されていたこと、「種」または「種類」としての意味で使用されていたことを除くと、アリストテレースが自説として主張するエイドスという用語は登場してはいない。さらには**Z**巻17章での「何ゆえに」についての探求でのエイドスはテキストの読みとして疑問が残ること、**H**巻で「かたち」と言い換えられてはおらずまたパトス〔様態〕とも区別されたエイドスの用例は、「あるとは何であったのか」に関していたこと、などの諸点を考え合わせると、この「あるとは何であったのか」についての探求の前半部分の**Z**巻4章～6章の箇所と、この前半部分を受けての後半部分の、用語法的にもエイドスが集中的に頻出して使用されており他の用語に言い換えられてもいない**Z**巻10～11章でのエイドスについての言及が、まさにエイドスの内実を把握する際の核心部分である、ということがあらためて明らかとなる。

2－3．アリストテレースの主張するエイドスの諸特徴

以上、第Ⅱ節での用例の検討を踏まえて、次にアリストテレースの主張するエイドスの諸特徴を、核心箇所とされた『形而上学』**Z**巻第4章～第6章、第10章～第11章での「あるとは何であったのか」の探求から、論述の構造にも配慮して巻と章も付記しながら以下に抽出して列挙し、以後の考察の基準を確保しておくこととする。

- ・ 「特徴A (**Z**4)」：
 - 「あるとは何であったのか」がそなわっている¹⁰⁷ (*Met.***Z**4.1030a11-13)
 - * 「「類」の諸エイドス」の場合
- ・ 「特徴A付属1 (**Z**4)」：
 - 「与る」ことに沿っては言われない (*Met.***Z**4.1030a13)
- ・ 「特徴A付属2 (**Z**4)」：
 - パトス〔様態〕とは言われない (*Met.***Z**4.1030a13-14)
- ・ 「特徴A付属3 (**Z**4)」：
 - 「付帯性」としては言われない (*Met.***Z**4.1030a14)
- ・ 「特徴B (**Z**6)」：
 - 「自らに沿ってそして第一のもの」である¹⁰⁸ (*Met.***Z**6.1031b11-15)
 - * 「それぞれのもの自ら」と「あるとは何であったのか」とが付帯的にでなく「一つ」で「同じ」である (*Met.***Z**6.1031b19-20)
- ・ 「特徴C (**Z**10)」：

¹⁰⁷ **H**巻第4章では、「エイドス(*Met.***H**4.1044a36)としての原因」が「あるとは何であったのか」とされており、この「特徴A (**Z**4)」の「あるとは何であったのか」がそなわっていることと関連していると考えられる。本稿第2章第2節(2－2) pp.31, 参照。

¹⁰⁸ 「自らに沿ってそして第一のもの」である、については、本稿第2章第1節(2－1)p.21, 第2章第2節(2－2)p.28, および注63参照。**Z**巻6章の同一性の主張については高橋[1991], 天野[1994]などを参照。

「それぞれのもの」 *ἐκαστον* と言われるべきである (*Met.Z10.1035a7-9*)

*素材ではなくエイドスおよび「エイドスを持つ限りのもの」の場合¹⁰⁹

- ・ 「特徴D (Z10)」:
「消滅しない」 (*Met.Z10.1035a25-31*)
*エイドスのみにかかわるロゴスの場合
- ・ 「特徴E (Z11)」:
「全体に関してのもの」 *καθόλου* と併記されている (*Met.Z11.1036a28-29*)
- ・ 「特徴F (Z11)」:
「多くのもの」 どもで「異なる」と見うけられる¹¹⁰ (*Met.Z11.1036b17-20*)

次に「基に置かれたもの」を探求するZ巻3章からは以下の三つのエイドスの特徴を抽出できる。

- ・ 「特徴G (Z3)」:
「離されうる」¹¹¹ *χωριστόν* (*Met.Z3.1029a27-28*)
- ・ 「特徴H (Z3)」:
「なにかこれ」 *τόδε τι* である¹¹² (*Met.Z3.1029a28*)
- ・ 「特徴I (Z3/H3)」¹¹³ :
「かたち」 *μορφή* と言い換えられている (*Met.Z3.1029a2-7, 29-32, H3.1043a29-36*)

¹⁰⁹ 「エイドス」および「「エイドス」を持つもの」が「各々のもの〔結合体〕」と言われるべきであるが、「素材的なもの〔素材的な部分〕」 *ὕλικόν* は、それ自らは決して言われるべきでない、とされている (*Met.Z10.1035a7-9*)

¹¹⁰ Z巻16章 (*Met.Z16.1040b27-30*) では、「エイドス」が「多くのものの上に立つ一つのもの」という点では正しくない、とされているが、これは「多くのものどもにおいて「異なる」というこの「特徴F (Z11)」と表裏一体の表現になっており、「エイドス」をイデアーと把握することに対する反論を形成していると考えられる。

¹¹¹ Z巻16章では、諸エイドスを言う人々が、エイドスを「彼らが離すこと」を言う点では正しい、とされている部分 (*Met.Z16.1040b27-30*) があるが、この「特徴G (Z3)」の「離されうること」と関連していると解釈できる。

¹¹² ここで注意すべきは「特徴F (Z3)」の「離されうる」ことと「特徴G (Z3)」の「なにかこれ」であることの二つの特徴がエイドスばかりでなく、「両者からなるもの」にも当てはまる、ということである。エイドスと「両者からなるもの」の両者に当てはまるということは、解釈者たちの間にはかなりの混乱を招く原因の一つになっているように思われる。この「両者からなるもの」を「個体」と理解して、その「個体」とエイドスが共に「実有」の候補として残ると考えることによって、エイドスを単に「個別的なもの」とするばかりではなく、「個体」そのものと混同する、という解釈も見受けられる。けれども用語法の観点からすると、エイドスが直接に「個体」そのものを示すような用例は見出しがたいので、ここには過度の読み込みがあることを指摘することができる。注60, 注88, 参照。

¹¹³ Z巻3章ばかりでなく、H巻3章でも同様の特徴が読み取れるので、「特徴I (Z3/H3)」としておく。

また**H**巻でのエイダスの用例からも、**H**巻第3章の以下の特徴を抽出できる。

- ・ 「特徴 J (**H3**)」:
実働態 *ἐνέργεια* と併記されている (*Met.H3.1043a32-33,b1-2*)

なお、**Z**巻17章での言及の扱いは「参考特徴 Q (**Met.Z17**)」として、他の特徴とは区別しておくこととする。

- ・ 「参考特徴 Q (**Z17**)」:
素材が「なにか」であることについての原因であること (*Met.Z17.1041b6-8*)
*異読のある箇所を採用した場合¹¹⁴

以上、列挙してきた諸特徴についてまず重要だと考えられることは、特徴 A～F の一群、G～I の一群、特徴 J がそれぞれテーマの異なる別の文脈に属しており、それぞれの文脈を混同すべきではない、ということである。

このうち特徴 G～I については、**Z**巻に続く**H**巻で発展的に継承したと考えられる記述がある。すなわち、**H**巻第1章 (*Met.H1.1042a26-31*) では素材や「両者からなるもの」と組になるものとして、エイダスではなくロゴスや「かたち」が登場しており、「特徴 I (**Z3/H3**)」のように言い換えられただけではなく、むしろエイダスという用語は使用されずに、「かたち」という用語に使用例が収束している。そしてこの「かたち」が「特徴 H (**Z3**)」に関連して「なにかこれ」であるもの (*Met.H1.1042a29*) で、また「特徴 G (**Z3**)」に関連して「ロゴスにおいて離されうる」 (*Met.H1.1042a29*) ものであることが述べられている¹¹⁵。

また「特徴 J (**H3**)」は、実働態 *ἐνέργεια* と「可能性¹¹⁶」 *δύναμις* の導入によって **Z**巻の考察に加えて新たな観点の導入がなされている、と理解することができる。

さらに、エイダスと言い換えられるものを挙げた「特徴 I (**Z3**)」(「かたち」)、エイダスと併記されるものを挙げた「特徴 E (**Z10**)」(「全体に関してのもの」)、「特徴 J (**H3**)」(実働態)については、エイダスという用語が使用されずにそれぞれの用語が使用されている箇所で、エイダスを読み込む、ということがしばしば起こることの原因ともなっている特徴と思われる。

また「特徴 C (**Z10**)」における「それぞれのもの」というのが必ずしも「個体」のみを示すのではない、という点、またあくまでも素材との対比でエイダスやエイダスを持つものについての言及がなされている点、さらに「特徴 E (**Z11**)」における「全体に関してのもの」が、**Z**巻第13章で「実有」ではないとされている「全体に関してのもの」と単純

¹¹⁴ 「実有」についての記述についての一箇所の「エイダス」をもし読むなら、「エイダス」は「素材が「なにか」であることについての原因」、としてきわめて重要な特徴をもつことになる。しかしこの箇所はテキスト的に安定していないので、「実有」の特徴としては間違いなく挙げられるが、「エイダス」の特徴としては問題がある。

¹¹⁵ ただ「離されうる」のではなく、「ロゴスにおいて離されうる」という点が重要である。

¹¹⁶ *δύναμις* を「可能性」と訳す点については、注27、参照。

に同一視できるようなものではない点, などにも注意を要する。「全体に関してのもの」にもいくつかの異なった意味が読み取れるので, 例えばともに「全体に関してのもの」と言い換えることができても, 「全体に関しての結合体」と「全体に関してのエイドス」では意味が異なる。

「特徴D (Z10)」については, 主に, 挿入箇所であるとされたZ巻7章～9章やH巻第3章の一部の「生成論」(Met.H3.1043b14-23)でとりわけ問題とされる論点について, このZ巻10章でも言及されている, という点に着目すべきだろう。また「特徴F (Z11)」はアイデアが「多くのものどもの上に立つ一つのもの」であることに對比しての反論を形成するものとなっている。

ここまでの考察から明らかになったように, アリストテレス自らが主張するエイドスについては諸特徴A～Fが核心部分を構成する主な特徴ということになる。そこでこれらの諸特徴を考察の基準として, 次に第2章第4節(2-4)での, 「第一の実有」としてのエイドスについての直接の言及箇所の検討に進むこととする。

2-4. 「第一の実有」としてのエイドスの言及箇所

以上, 第I節から第III節までの考察で, 議論の構造上, エイドスについての考察の中核箇所であると指摘することのできたZ巻第10～11章の中で, エイドスが「第一の実有」である, と明示的に言及されている直接の箇所は, 以下のZ巻第11章(Met.Z11.1037a27-30)における<T2>のテキストに掲げた箇所である。この箇所は議論の展開の中では, Z巻第4章からはじまったここまでの「あるとは何であったのか」についての探究のまとめが語られる中で, 素材としての「部分」は「実有」の「部分」ではなく結合体の「部分」である, という議論がなされた後で, その理由が語られている箇所に相当している。

<T2> 「なぜなら一方で〔ロゴスは〕素材と共にあらぬが(なぜなら〔素材は〕無規定 ἀόριστον だから), 他方で「第一の実有」(1037a28)に沿ってはあるから, 例えば人(1037a28)の〔場合の〕「たましい」ψυχή(1037a28)のロゴス λόγος が〔ある〕。なぜなら「実有」(1037a29)は「内にあるエイドス」τὸ εἶδος τὸ ἐνόν (1037a29)であり, それ〔「内にあるエイドス」〕と素材から「結合的な実有」ἡ σύνολος οὐσία (1037a30)と言われるから。」¹¹⁷(Met.Z11.1037a27-30)

この<T2>のテキストでは, まず「実有」の二つの意味が区別されている点に注目すべきだろう(1037a29-30)。すなわち, 「結合的な実有」(1037a30)に対して, この「結合的な実有」の始源, 「実有の原因」としての実有(1037a29)が区別され, この「実有」は「内に

¹¹⁷ μετὰ μὲν γὰρ τῆς ὕλης οὐκ ἔστιν (ἀόριστον γὰρ), κατὰ τὴν πρώτην δ' οὐσίαν ἔστιν, οἷον ἀνθρώπου ὁ τῆς ψυχῆς λόγος· ἡ γὰρ οὐσία ἐστὶ τὸ εἶδος τὸ ἐνόν, ἐξ οὗ καὶ τῆς ὕλης ἡ σύνολος λέγεται οὐσία, (Met.Z11.1037a27-30)

あるエイドス」(1037a29)とされている。そしてこの後者の意味での始源としての実有が、問題となっている「第一の実有」(1037a28)ということとなる。またその際、ここでの「第一の実有」の具体例は「たましい」(1037a28)であり、人(1037a28)は「結合的な実有」の方に該当すると考えられる。すなわちこの箇所でのエイドスとしての「第一の実有」は「たましい」であり、少なくとも「種」、「種」的形相(<<解釈Ⅰ>>)としての人ではない。この点で『カテゴリーアイ』の「種」、すなわち「第二の実有」が『形而上学』Z巻のこの当該箇所では「第一の実有」と呼ばれているわけではないことを確認しておく必要がある。また<<解釈Ⅴ>>から<<解釈Ⅹ>>をこの箇所に適用すると、いずれもエイドスの解釈としては妥当しないということが明らかとなる。

<T2>のテキストではエイドスも素材も結合体も「全体に関して」のものとも「それぞれに沿って」のものとも特に限定されてはいない。もし「ここでの人」が「全体に関して」の結合体を示す、ということにもなるのなら、その場合はエイドスは「全体に関して」の結合体を形成する形相である、という<<解釈Ⅱ>>を受け入れる余地があるだろう。しかし<T2>の箇所の直後でカリアースが実例として挙げられていることを評価するなら、その場合は<<解釈Ⅲ>>のエイドスは「個別的形相」である、ということを受け入れる余地も、あることになるだろう。あるいはむしろ、上述の両方の考察を合わせて、この<T2>の箇所における「たましい」という表現は<<解釈Ⅳ>>の、「個別的かどうか限定されないもの」だとすることもできるだろう。

これらの点をさらに検討するために、「第一の実有」という表現が登場するZ巻第10～11章における<T3>と<T4>のもう二箇所のテキストを見てみることにする。

<T3>「だがまた一方で「たましい」(1037a5)が「第一の実有」(1037a5)であり、他方ソーマ〔身体〕が素材であり、そして人または動物は、「全体に関してのもの」としての「両者からなるもの」(1037a6-7)だということは明白である。ソークラテースやコリスコスは、もし一方で「たましい」(1037a7)がソークラテースでもあるとすれば、二義的だ(というのは、彼らは一方では「たましい」(1037a8)として、他方では結合体として〔あるの〕だから)、しかし他方でもし端的に「この「たましい」」ή ψυχή ἥδε(1037a9)と「このソーマ〔身体〕」であれば、「全体に関してのもの」のように「それぞれに沿ってのもの」もまた〔そうである〕」¹¹⁸

(Met.Z11.1037a5-10)

<T4>「ちょうど「第一の実有」(1037b1-2)の場合のように、或るものどもの場合には、「あるとは何であったのか」と「それぞれのもの」とが「同じ」だ」

¹¹⁸ δηλον δὲ καὶ ὅτι ἡ μὲν ψυχή οὐσία ἡ πρώτη, τὸ δὲ σῶμα ὕλη, ὃ δ' ἄνθρωπος ἡ τὸ ζῶον τὸ ἐξ ἀμφοῖν ὡς καθόλου· Σωκράτης δὲ καὶ Κορίσκος, εἰ μὲν καὶ ἡ ψυχή Σωκράτης, διττόν (οἱ μὲν γὰρ ὡς ψυχὴν οἱ δ' ὡς σύνολον), εἰ δ' ἀπλῶς ἡ ψυχή ἥδε καὶ <τὸ> σῶμα τότε, ὥσπερ τὸ καθόλου | τεῖ καὶ τὸ καθ' ἕκαστον. (Met.Z11.1037a5-10)

まず、<T3>の箇所では人や動物が「全体に関してのもの」としての両者からのものとされており、いわば「全体に関して」の結合体」として理解されていることが言い定められている。そしてここで「第一の実有」(1073a5)とされている「たましい」(1037a5)は、素材と共に「全体に関して」のもので、人や動物などの「全体に関してのもの」としての両者からのもの(1037a6-7)としての「全体に関して」の結合体を形成するものとなっている、と読める。「種」である人と「類」である動物が共に「全体に関して」の結合体として同列に扱われている点に注意が必要である。少なくともこの箇所では「種」のみを「類」とは別格に扱うことは読み取れない。するとここでの「たましい」(1037a5)は「全体に関して」のエイドスに相当するものである、と、解釈できることになる¹²⁰。またこの点は第Ⅲ節の「特徴E (Z11)」として掲げられていた「全体に関してのもの」と併記されている、という点と対応する。もしここまでで記述が終わっているなら、<<解釈Ⅱ>>の形相がまずは該当するように思える。しかし続く箇所の明らかに「個体」を示しているソークラテースの例では、条件的な想定ではあるが、もしソークラテースが「たましい」(1037a7)であるとしたら、ソークラテースは一方で「たましい」(1037a8)であり、他方で結合体である、というふうに二義的に解釈されることとなる、とされている。そしてこの場合の「たましい」を一般に「生命原理」とも理解できるが、他方で「たましい」が「それぞれに沿って」の「たましい」で、実質的に「ソークラテース〔個人〕の「たましい」」を示すと考えることもできるだろう。素材である「ソークラテースのソーマ〔身体〕」がソークラテースであることは選択肢からは外れており、問題とされていない点は、エイドスと結合体が「実有」の候補者として残って、素材は残らない、とされていたZ巻第3章での記述 (*Met.Z3.1029 a 26-33*) などとも矛盾しない選択肢になっている、ということで注目に値するが、この場合、「たましい」(1037a7,8)は必ずしも「全体に関して」のエイドス」を示しているとは言えず、「個別的形相」(<<解釈Ⅲ>>)を示している可能性も生じる。あるいはむしろこの場合の「たましい」は、第Ⅰ節で挙げた<<解釈Ⅳ>>の、エイドスは「個別的かどうか限定されないもの」であって、少なくとも「個別的」であってもよい、とも考えられる。そしてこれに加えて、今の想定とはもう一つ別の場合の選択肢として掲げられている、もしソークラテースが端的に「この「たましい」」(1037a9)と「このソーマ〔身体〕」であるのなら、「それぞれに沿ってのもの」の「場合」も「全体に関してのもの」と同様〔に結合体〕である、という際の「この「たましい」」については、これは第Ⅰ節の<<解釈Ⅲ>>の「個別的形相」を明示しているものと解釈することができるだろう¹²¹。

¹¹⁹ καὶ ὅτι τὸ τί ἦν εἶναι καὶ ἕκαστον ἐπὶ τινῶν μὲν ταῦτό, ὥσπερ ἐπὶ τῶν πρώτων οὐσιῶν

(*Met.Z11.1037a33-b2*)

¹²⁰ 「全体に関しての」が素材とエイドスの両方にかかっている、と読む。cf. Bostock1994]pp.166-167.

¹²¹ 岩田(靖) [1985]pp.179-184, では1037a5-10について、「ソークラテースやコリスコスの魂が魂一般ではなくて

また<T4>の箇所は第Ⅲ節の「特徴B(Z6)」の「自らに沿ってそして第一のもの」であるものが、「それぞれのもの自ら」と「あるとは何であったのか」とが付帶的にではなく「一つ」で「同じ」である、とされていた点と対応している。「あるとは何であったのか」の探求の前半部分(Z巻4～6章)と後半部分(Z巻10～11章)が呼応していることを示す事例でもある。

以上、『形而上学』Z巻11章の範囲内で行ってきた「第一の実有」の言及箇所をめぐった解釈をさらに検討するために、Z巻11章に関連したいくつかの文脈を参照してみることとする。まず、これまでに検討してきたZ巻11章における、Z巻4～6章、10章で論じてきた一連の「あるとは何であったのか」の探究のまとめの部分にいたる過程にあたる、Z巻10章での以下の<T5>の箇所が挙げられる。

<T5>「だが人や馬やこのように「それぞれに沿ってのもの」の上に、だが「全体に関して」〔適用される〕というものどもは、「実有」ではあらずに、「全体に関してのもの」としての「このロゴス」と「この素材」からなるなにか結合体〔である〕。だが「それぞれに沿ってのもの」は「究極の素材」ἐσκάτη ὕλη からすでにソークラテースになっている。そして他のものどもについても同様だ。」¹²²
(Met. Z10.1035b27-31)

この<T5>の箇所でもまた素材と組になっているのはエイドスではなく、ロゴスと表現されているが、この箇所での人や馬は、「全体に関してのもの」としての「このロゴス」と「この素材」からなるなにか結合体とされており、これは「全体に関して」の結合体を表示する別の形の表現に相当する、と理解できる。そしてこれらは「実有ではあらぬ」とされており、ここにZ巻13章の、「全体に関してのもの」は「実有」ではない、ということとの関連を読むこともできるだろう。その場合はZ巻13章の「全体に関してのもの」は「全体に関して」の結合体と理解できることともなる¹²³。また先の<T3>の箇所と比較した

個的な魂であることが、はっきり語られている。」(p.182)とされている。

¹²² ὁ δ' ἄνθρωπος καὶ ὁ ἵππος καὶ τὰ οὕτως ἐπὶ τῶν καθ' ἕκαστα, καθόλου δέ, οὐκ ἔστιν οὐσία ἀλλὰ σύνολόν τι ἐκ τουδὶ τοῦ λόγου καὶ τησδὶ τῆς ὕλης ὡς καθόλου· καθ' ἕκαστον δ' ἐκ τῆς ἐσκάτης ὕλης ὁ Σωράτης ἤδη ἐστίν, καὶ ἐπὶ τῶν ἄλλων ὁμοίως. (Met. Z10.1035b27-31)

¹²³ このように解釈すると、Z巻13章の記述が孤立した特殊なものではなくなる。またこの見解は『オルガノン』の中の『ソフィスト的論駁論』22章の末尾(SE 22,178b36-179a10)で、「第三の人」τρίτος ἄνθρωποςの問題にからめて、「共通なもの」τὸ κοινόν(言い換えれば「全体に関してのもの」)は、「なにかこれ」τόδε τιではなく(すなわち「実有」ではなく)、むしろ「なにかこのよう」τοιόνδε τι,その他である(すなわち性質,その他である),とする指摘とも整合的な見方ということにもなる。この点については τόδε τι という用語についての本稿注80も参照。Z巻13章の末尾(Met. Z13.1039a14-23)で提出されている難問,すなわち「全体に関してのもの」が「実有」でないとする、「定義」ὀρισμός というものがなくなってしまうのではないか、という疑問に対して、或る仕方で答えようとしているのが『カテゴリーアイ』での叙述である、と理解することすらできるように思われる。このように理解した上で、もしも『カテゴリーアイ』と他著作の間でテーマの共通性が見いだせるとしたら、そしてもしも「問い」の方が「答え」よりも先に提出されるものだとするのなら、さらにすべてが同じ著者によって執筆されたとするのなら、その場合には『ソフィスト的論駁論』22章や『形而上学』Z巻10章、13章よりも、『カテゴリーアイ』

場合、この箇所では「全体に関して」のエイドスと把握できるものが「全体に関してのもの」としての「このロゴス」と表現されていることになる。ここでは人や馬は結合体

「全体に関して」の結合体とされているのであるから、その人がそのままロゴス「全体に関して」のエイドスとされているとは考えにくいので、その意味ではここでの「全体に関してのもの」としてのこのロゴスは少なくとも人ではないということも確認できる。ソークラテースの場合の「究極の素材〔最も近い素材〕」は<T3>の箇所との関連からは内容的には「ソークラテースのソーマ〔身体〕」を示すと解釈できるだろう。するともしこれが<T3>の箇所で「このソーマ〔身体〕」と呼ばれていたものに相当するのなら、ここでは直接には言及されていないソークラテースの場合のロゴスは、「このソーマ〔身体〕」に対応した「このたましい」になるのだろうか。あるいはそのような対応などは必ずしもつける必要はなく、ロゴスは「この「たましい」」ではなく単に「たましい」なのだろうか。いずれにしても<T5>の箇所については、文脈的にロゴスはエイドスとしての「たましい」または「この「たましい」」であるとは解釈できるが、結合体としての人と解釈することは困難であると思われる。

次に「たましい」と動物や生物の密接なかかわりを述べる、Z巻10章の以下の<T6>の箇所を参照してみよう。

<T6>「もし実に「たましい」がまた動物あるいは「生きもの（「たましい」を持つもの/有魂なもの）」*ἐμψυχον* であるならば、「それぞれのものの〔「たましい」〕」が「それぞれのもの」ならば、そして「円であること」が「円」であり、「直角であること」すなわち「直角の実有」が「直角」なら、また「なにか〔全体〕」¹²⁴は、「なにか〔部分〕」例えば〔直角の〕ロゴスのうちのものどもおよび或る直角の〔部分〕、よりも後であると言わねばならない。」¹²⁵ (*Met.Z10.1036a16-20*)

この<T6>の箇所ではまず、動物や「生きもの（「たましい」を持つもの/有魂なもの）」が「たましい」である場合が検討されている。そして、またこの「それぞれのもの」の場合の「それぞれのもののたましい」は、文脈上「直角」の場合の「直角の実有」に相当し、この「直角の実有」は「直角であること」と言い換えられており、さらには「直角のロゴス」という表現も登場している。これは問題としてはZ巻第6章で考察されていた

の方が執筆年代が後であるかもしれない、という可能性も十分に検討の余地があるかもしれない。もちろんこれらの条件がすべて満たされることは容易なことではない、とも考えられるけれども。いずれにせよ『カテゴリーイ』という書物が、アリストテレスの最初期の著作ではない可能性もあり、むしろ、比較的成熟した思想の、覚え書き的なまとめである可能性も示唆されているように思われる（本稿第3章（3-1）での議論参照）。

¹²⁴ この場合の「なにか〔全体〕」は、「全体に関しての」結合体を示していると考えられる。

¹²⁵ *εἰ μὲν γὰρ ἐστὶ καὶ ἡ ψυχὴ ζῶον ἢ ἐμψυχον, ἢ ἕκαστον ἢ ἐκάστων, καὶ <ὁ> κύκλος τὸ κύκλῳ εἶναι, καὶ ἡ ὀρθὴ τὸ ὀρθῇ εἶναι καὶ ἡ οὐσία ἡ τῆς ὀρθῆς, τὸ μὲν καὶ τινὸς φατέον ὕστερον, οἷον τῶν ἐν τῷ λόγῳ καὶ τινὸς ὀρθῆς* (*Met.Z10.1036a16-20*)

「それぞれのもの」と「それぞれのものであること」との一致という問題である。エイドスに関連しては「特徴B (Z6)」とかかわる。そしてこの箇所から示唆されるように、「それぞれのものであること」がもし「それぞれのものの実有」でもあるなら、その「実有」(例えば「たましい」)は「それぞれのもの」(例えば動物や「生きもの(「たましい」を持つもの/有魂なもの)」)とは(関係はするが)文字通りの「同名」のものではなくなるだろう。

そしてこの点に関してはZ巻の議論を受けて展開しているH巻での以下の<T7>の箇所がさらに参照できる。

<T7> 「そしてまた動物というのは果たして「ソーマ〔身体〕」のうちの「たましい」なのか、あるいは「たましい」なのだろうか。なぜならそれ〔「たましい」〕は或るソーマ〔身体〕の「実有」すなわち実働態であるから。・・・なぜなら「あるとは何であつたのか」はエイドスや実働態にそなわるから。なぜなら「たましい」*ψυχή* と「「たましい」であること」*ψυχὴ εἶναι* とは「同じ」であるが、「人で〔あること〕」と「人」とは「同じ」ではないからである。」¹²⁶ (*Met.H3.1043a34-36,1043b1-3*)

ここでは「たましい」がソーマ〔身体〕の「実有」とも実働態ともされており、また実働態は文脈上エイドスと併記されて語られており、さらには「たましい」と「「たましい」であること」が「同じ」であるとされている。これは<T6>で検討した「それぞれのもの」と「それぞれのものであること」の一致のいわば「たましい」版であり、またさらにこの「「たましい」であること」が「あるとは何であつたのか」と密接に関係していることが読み取れる。すなわち、「あるとは何であつたのか」はエイドス、実働態にそなわるとされ、また実働態は「実有」と言い換えられている。これは第Ⅲ節の「特徴A (Z4)」の「あるとは何であつたのか」がそなわっている、ということと正確に対応している点である。そしてこれは「「それぞれのもの」であること」と「「それぞれのもの」の「実有」と「「それぞれのもの」のロゴス」を言い換えることができる、という視点と、それらが「それぞれのもの」と「同じ」であるかどうかを問える、という視点を示している、と把握できる事態である。この最後の点はZ巻11章の<T4>の箇所と言及されていた、「第一の諸実有」の場合には「あるとは何であつたのか」と「それぞれのもの」が「同じ」である、とされていた論点と正確に重なる論点である。先の「特徴B (Z6)」とも重なる論点ともなる。この意味で「たましい」と「たましいであること」は同じである、とされるこのH巻3章での「たましい」はまさしくZ巻11章での「第一の実有」に相当する、ということともなるが、「人であること」と「人」とは「同じ」でない、と明言されているのであるか

¹²⁶ καὶ ζῶον πότερον ψυχὴ ἐν σώματι ἢ ψυχὴ· αὕτη γὰρ οὐσία καὶ ἐνέργεια σώματος τινος. ... τὸ γὰρ τί ἦν εἶναι τῷ εἶδει καὶ τῇ ἐνέργειᾳ ὑπάρχει. ψυχὴ μὲν γὰρ καὶ ψυχὴ εἶναι ταὐτόν, ἀνθρώπῳ δὲ καὶ ἄνθρωπος οὐ ταὐτόν, (*Met.H3.1043a34-36,1043b1-3*)

ら、ここでも「人」は**Z**巻11章での「第一の実有」にはふさわしくない、ということになる¹²⁷。

以上の考察から、『第一の実有』としてのエイダスについて、第Ⅰ節で掲げた解釈の中から選択するなら、〈〈解釈Ⅳ〉〉の、「個別的かどうか限定されないもの」が最も妥当だということになるだろう。ただし、「動物、人、ソークラテース」のそれぞれに「たましい」を考える、といった本第Ⅳ節での考察を総合すると、むしろ「個別的であることも排除はしないもの」と表現した方がテキストの解釈としてはより正確であると思われる。

2-5. エイダスにかかわる諸問題

以上の第2章第1節～第5節(2-1～2-5)までの、「第一の実有」としてのエイダスに関する考察を踏まえた上で、先に挿入箇所とされて一連のまとまりから外されていた「生成論」を扱った**Z**巻第7章～第9章、および「定義の一性」を扱った第12章、さらには**H**巻第3章の中の挿入と考えられる「生成と消滅」を扱った段落(*Met.H3.1043b14-23*)、におけるエイダスの用例についても指摘し、さらに本稿の観点からすると、エイダスをめぐる様々な諸問題についてどのようなことが言えるのか、という点についても考察を加えておくこととしよう。

¹²⁷ 本第Ⅲ節で抽出した「特徴A」から「特徴F」までの、「エイダス」についての中核的な諸「特徴」のうち、ここまでの論述で言及されなかった「特徴C」「特徴D」「特徴F」についても言及しておくことにする。まず「特徴C (**Z**10)」の「各々のもの」と言われるべきである、という素材ではなく「エイダス」および「「エイダス」を持つ限りのもの」の場合の特徴は、本節の考察を背景にすると「たましい」と「「たましい」を持つ限りのもの」にあてはまることになる。特に「「たましい」を持つ限りのもの」としてはソークラテース、人、動物(<**T3**>)などが例に掲げられていたが、これは「「エイダス」をもつ限りのもの」としての「各々のもの」によって示すことのできるものが「たましい」を持つ限りのもの」としては、個体に限らず、「種」や「類」も含まれる、ということを示している。するとそれに対応した「エイダス」としての「たましい」も個体や「種」や「類」に対応してものとして理解されることとなるだろう。また、「特徴D (**Z**10)」の「エイダス」のみにかかわるロゴスの場合にあってはまる「消滅しない」という特徴は、<**T2**>から<**T6**>までのテキストの範囲では論点としては明示されてはいなかったが、これは基本的にこの箇所が生成や消滅などの「生成論」を扱っているのではないからであると思われる。しかし、別の視点から考えると、「たましい」が「離されうること」とのかかわりで「消滅しない」かどうかは、それ自身が興味深い問いかけ、ということにはなるだろう(伊藤[2019]p54, pp.57-58, 参照。cf. *Met.A3.1070a24-26*)。そして、「多くのもの」どもで「異なる」と見うけられる「特徴F (**Z**11)」は、一連のイデアー批判の中で、エイダスは「多くのものどもの上に立つ一つのもの」ではない、とされているわけであるから、この特徴はここでの「たましい」にも当てはまることになるだろう。

まず、**Z**巻第7章～第9章におけるエイドスの用例についてであるが、この箇所は資料の性格として、例えば『自然学』第1巻第9章の議論などと直結すると読める「生成論」の文脈とも言えるだろう¹²⁸。この箇所では「生成」 *γένεσις* を問題にしたエイドスと素材についての議論が展開されているが、その内容は基本的に「実有」のみの探求ではなく、人工品すなわち「技術的製作物」や「実有」以外のカテゴリーも範囲に入れた考察となっており、また**Z**巻でこの前後に配置されている第4章～6章と第10章～11章のように「あるとは何であったのか」の探求を直接に行っているわけでもない。その意味では第II節の冒頭で掲げたような、後のまとめの部分で語られてはいない、といった状況証拠ばかりではなく、内容的にも明らかに挿入された部分であり、この箇所はこの箇所ですべての議論が必要になるが、本稿の範囲内でも、この箇所でのエイドスの用例にはいくつかの重要な記述が見出せる。

まず最初に指摘できるのは、現存する**Z**巻における「第一の実有」のもう一つの言及箇所である、以下の<T8>の記述である。

<T8> 「エイドスと私が言うのは「それぞれのものの「あるとは何であったのか」でありそして「第一の実有」のことである」¹²⁹ (*Met.* **Z7.1032b1-2**)

ここでは具体的には、「技」によって生じるものどもは、[「技」を持つ者の]「たましい」のうちにそれらのエイドスがある限りのものだ、として人工品の始源、「原因」としてのエイドスが語られた直後でそのエイドスについての説明がなされている箇所です。「実有」や「原因」の意味でのエイドスと比較すると、派生的な意味合いでのエイドスについての説明が語られているとも受け取れるが、この箇所での記述は先の第IV節で探求した「第一の実有」についての議論と基本的に整合性のあるものとなっている¹³⁰。

¹²⁸ 特に、エイドスとしての始源 *ἀρχή* について、その数が一つであるか多くあるか、またそれが、あるいはそれらが、何であるか、これらのことを正確に規定するのは「第一の哲学」の行うべきことであるが、自然的・消滅的なエイドスについては今後の解説のうちで述べよう (*Phys.* **I 9.191a34-b2**)、といった箇所を参照することができる。一般には「今後の解説」というのは、『自然学』第2巻、『天について』、『生成と消滅について』、『「たましい」について』などでの考察のことと理解されているが、この『形而上学』**Z**巻第7章～第9章の実質的内容はむしろ、この『自然学』で言われている「第一の哲学」で扱われる事柄というよりは、むしろ「自然的・消滅的なエイドスの探究をおこなっている、とも受け取れるので、この箇所を挿入として他の箇所のまとまりを重視してきた本稿の観点からは、他の箇所のまとまりで扱われていた内容と比較して、この「生成論」を扱った箇所は、むしろ本来は「自然学」、つまり「第二の哲学」と重なる領域の探究課題を遂行している、とも読める。本稿第2章結論部分(「2-結」)pp.46-49,参照。

¹²⁹ *εἶδος δὲ λέγω τὸ τί ἦν εἶναι ἐκάστου καὶ τὴν πρώτην οὐσίαν* (*Met.* **Z7.1032b1-2**)

¹³⁰ 「第一の実有」の用語的な種々相については、本稿第1章(1-3) pp.14-18,参照。

また、用語法としてのエイダスについて、何と呼ぶにせよ、「「感覚されうるもの」のうちの「かたち」 *μορφή*」のことだが (*Met.***Z7.1033b5-8**)、とされている点については、エイダスが「かたち」と言い換えられていたことについて、「感覚されうるもの」との関係が深い場合に「かたち」という用語が使用される、とも理解できる「特徴I (*Met.***Z3/H3**)」の参照箇所ともなっている。なお、本第V節の冒頭に掲げた**H**巻第3章の中の挿入と考えられる「生成と消滅」を扱った段落 (*Met.***H3.1043b14-23**)には、参照箇所への言及があり、そこで指示されている「他の諸箇所のうちで」 *ἐν ἄλλοις* (1043b16) というのは **Z**巻第8章のことであると考えられるので¹³¹、挿入箇所が別の挿入箇所を参照していることともなり、この**H**巻第3章の中の「生成と消滅」を扱った段落が**Z**巻7～9章の「生成論」を扱った箇所と文献的にも内容的にも密接なかかわりを持っていることが理解できる¹³²。

ところで、第IV節までの**Z**巻10～11章における「あるとは何であったのか」についての議論における「第一の実有」とされているエイダスとしての用語法を中心とした考察によれば、特に<<解釈I>>の「種」、**「種」**的形相をエイダスと考える説はかなり成立しがたいものとなっていた。このような説が主張され続けてきたのは、今検討しているこの**Z**巻7～9章の中での以下の<**T9**>のような箇所を典拠として、エイダスを理解してきたことに関している、という点を指摘することができる。

<**T9**> 「そして、すでに全一なものが、「これらの肉や骨」のうちの「このようなエイダス」 *τὸ τοιόνδε εἶδος* (1034a6) がカリアースやソークラテースだ。そして一方で素材のゆえに異なり（なぜなら異なるものどもだから）、他方でエイダスにおいては同じだ（なぜならエイダスは「不可分なもの」 *ἄτομον* だから）。」¹³³
(*Met.***Z8.1034a5-8**)

この<**T9**>の箇所の「このようなエイダス」 (1034a6) とされているものが「種」または「種」的形相を典型的に示していると考えられる。エイダスにおいて「同じ」の意味は、カリアースとソークラテースが同じ「人」である、と理解できるし、異なるのは素材のゆえに、である。そして前第IV節までに検討してきた**Z**巻**H**巻のエイダスは、「なにかこれ」 *τόδε τι* (「特徴H (*Met.***Z3**)」) であって「このよう」 *τοιόνδε* とは言われていなかった¹³⁴。「このようなエイダス」という表現は表現自体が、**Z**巻**H**巻の他の部分とは相容れない、問題をはらんだ表現であると言える。

他方で、この<**T9**>の箇所を、もし<<解釈III>>の「個別的形相」で解釈しようとする

¹³¹ Ross.1924, Vol. II. p.232 参照。

¹³² 本稿(2-2) pp.30-31, および注104, 参照。なお、池田. 2000, pp.99-102が指摘する**Z**巻内にある記述の相互間の内容的矛盾と考えられる点は、**Z**巻の構造や資料の性格の違いの観点も踏まえて説明すべきであると思われる。

¹³³ *τὸ δ' ἅπαν ἤδη, τὸ τοιόνδε εἶδος ἐν ταῖςδε ταῖς σαρκὶ καὶ ὀστοῖς, Καλλίας καὶ Σωκράτης· καὶ ἕτερον μὲν διὰ τὴν ὕλην (ἑτέρα γάρ), ταῦτό δὲ τῷ εἶδει (ἄτομον γὰρ τὸ εἶδος).* (*Met.***Z8.1034a5-8**)

¹³⁴ 「このよう」がついたエイダスはこの<**T9**>の箇所との関連がないか、常に注意すべきであると思われる。注80, 注123, 参照。

極めて困難なことにもなるだろう。この点に関連して、以下の<T10>のような『形而上学』A卷第5章の記述を、<<解釈Ⅲ>>の「個別的形相」を典型的に支持する箇所として対比して指摘できる。

<T10> 「そして同じエイダス(1071a27)のうちのものどもの〔原因〕も異なり、〔しかも〕エイダス(1071a27)において異なるのではなしに「それぞれに沿ってのものども」の〔原因〕が違ふが、〔つまり〕君の素材やエイダス(1071a28)や「動かすもの」が私のとは〔違ふが〕、だが「全体に関して」のロゴスにおいては同じである」¹³⁵ (*Met.*A5.1071a27-29)

この『形而上学』A卷第5章の1071a27の2カ所の「同じ」とされているエイダスについては、「種」と解釈するのが妥当なところだろう。すると、文脈上、1071a28の「違ふ」とされているエイダスはこの「種」とは区別されたものと解釈でき、しかもこの場合は「君のエイダス」が「私のエイダス」と違ふ、ということが読み取れることにもなる。つまり、「種」としてのエイダスは同じなのにもかかわらず、「君のエイダス」は「私のエイダス」とは違ふ、ということになるのである。この箇所だけを読むかぎり、1071a28のエイダスを「種」とは別のものと理解すべきなのは避けることができないように思われる。すなわちこの場合の「君のエイダス」は「個別的形相」と理解できる。『形而上学』A卷第5章では、「特有なエイダス」τὸ ἴδιον εἶδος (*Met.*A5.1071a14)という表現も、この<T10>の直前の箇所であるし、このような箇所では逆に「個別的形相」を認めない解釈の方が困難に直面することになるだろう¹³⁶。この『形而上学』A卷第5章の<T10>の文脈は、先のZ卷8章の<T9>とはまたさらに別の観点を提供していることを十分に自覚する必要があるだろう。

最後に、「定義の一性」を扱ったZ卷第12章について見ておくこととしよう。

この箇所は資料の性格として、『分析論後書』第2卷第6章(*An.po.*II 6.92a29-30)で「定義の一性」については難問があるとされていた箇所に直接に応答する議論がなされている、と解釈できる箇所である¹³⁷。H卷第6章の方は同じく「定義の一性」を扱っていて

¹³⁵ καὶ τῶν ἐν ταύτῳ εἶδει ἕτερα, οὐκ εἶδει ἄλλ' ὅτι τῶν καθ' ἑκαστον ἄλλο, ἢ τε σὴ ὕλη καὶ τὸ εἶδος καὶ τὸ κινῆσαν καὶ ἡ ἐμῇ, τῷ καθόλου δὲ λόγῳ ταυτά. (*Met.*A5.1071a27-29)

¹³⁶ それゆえにこの『形而上学』A卷第5章の箇所(*Met.*A5.1071a27-29)は「個別的形相」論者たちの重要な拠り所となっている(Albritton.1957,p.700,Frede,M.1985,p.77, Frede,M.and Patzig.1988,p.52,Irwin.1988,p.253,などを参照)。そしてもしもこの箇所を「個別的形相」と読まない、とすると、「君の」が素材にしかかかっていない、など確かに相当無理な読みをテキストに施すことともなる(cf.Modrak.1979,pp.376-377)。しかしこの箇所に「個別的形相」が読める、とすることがあらゆる箇所に「個別的形相」が読めることに直結するわけではない。

¹³⁷ Z卷12章の冒頭箇所では『分析論』では扱わなかった問題を論じよう、と参照書名まで明示されている。『形而上学』Z卷H卷はこれに続くΘ卷とまとまりをなした論考という文献的な性格を持っており、それは『形而上学』B卷で掲げられていた諸「難問」に対して、比較的直接的に回答しようとしているとも読み取れる『形而上学』F卷やE卷、それからM卷やN卷、さらにはI卷などとは違って、『形而上学』の他の諸巻や、他の著作からの参照などの少ない、或る程度独立したひとまとまりの論考をなしていると考えられる。Z卷H卷Θ卷の論述では、B卷の諸「難問」との応答関係もむしろ間接的になされている、と理解できる。Z卷H卷Θ卷内での内部参照の箇所の方がはるかに目立

も、こちらの方は一連の論考の中におさまる**Z**巻11章(*Met.Z11.1037a10-17*)や**H**巻3章(*Met.H3.1043b32-1044a11*)との直接の応答関係が読み取れる。そしてこれまでの議論の多くは、この**Z**巻第12章と**H**巻第6章の「定義」の一性についての議論とのかかわりを問題として、特に人を「二本足の動物」とすることについての両章の解釈が異なっている、という点で**H**巻第6章では**Z**巻第12章からの流れを受けて、議論に修正がなされたのかどうか、といった点が問題とされてきた。しかし、**Z**巻第12章を挿入と考える本稿の見地からは、**Z**巻**H**巻の一連の議論の繋がりの中での「定義の一性」を問題にしているのはむしろ**H**巻第6章の方で、この**Z**巻第12章は同じような課題は扱ってはいるが、**Z**巻**H**巻の本来の議論とはやや観点の異なる側面からの議論をしている論考、とむしろ理解すべきではないかと考えられる。

すると内容的には以下のような興味深い点が浮かび上がる。すなわち、**Z**巻第12章では、人は「類」である動物と「差異」〔「種差」〕である「二本足」からなる「二本足の動物」と「定義」される。その場合、「類」である動物は素材（「類」としての素材）であって、「差異」である「二本足」は「最後の差異」としてのエイドスであり、「実有」である、という周知の議論がなされている¹³⁸。すなわちこの箇所では第I節に掲げた<<解釈X>>の「差異」としてのエイドスが肯定的に主張されていることになる。これに対して**H**巻の以下の<T11>の箇所では、異なる観点からの論述がなされている。この<T11>の箇所にいたるまでの議論でも**H**巻第2章などでは「差異」は「類比的」*ἀνάλογον*に「実有」と見なすことができるに過ぎない、という趣旨の議論が展開されるのであるが(*Met.H2.1042b25-43a12*)、それを受けて以下のような記述がある。

<T11>「しかし実は「人」も、「動物と二本足」ではなくて、もしそれら〔「動物と二本足」〕が素材であるとすれば、それらの他に「なにか」があらねばならない。〔この「なにか」は〕、要素 *στοιχείον* でもなく要素からなるものでもなくて、むしろ「実有」だ。これを抜かす人々は、素材を言う。だからもしそれ〔＝「なにか」〕が「あること」の原因 *αἴτιον τοῦ εἶναι* で、そしてそれ〔＝「なにか」〕が「実有」なら、彼

つ。この点を考慮すると、例えば先の**Z**巻7章～9章と『自然学』との関わり以上に、この**Z**巻12章と『分析論後書』第2巻6章との応答関係は特質すべき特色である、ということが指摘できる。なお**Z**巻での「エイドス」が**H**巻では用語法的に「かたち」に収束しているように読めること（本稿第2章帰結部分（2－結）pp.46-49,参照）や、本稿で挿入箇所とされた**Z**巻7章から9章にかけての記述を除くと、**Z**巻の最初のまとまりの中では使用されていない実働態 *ἐνέργεια* や可能性 *δύναμις* といった道具立てが、**H**巻では既成のこととして随所に縦横に使用されていることなどは、**Z**巻と**H**巻の執筆時期の間に一定の時間的経過があったことを示唆していると思われる。そしてその際、本稿では主題的には取り扱わなかった**Θ**巻において、まさにこの可能性の導入と実働態の意味づけがなされていると読めるので、内容的には**Z**巻**H**巻**Θ**巻がひとまとまりをなしているわけであるが、執筆順序としては**Z**巻、**Θ**巻、**H**巻の順に書かれた可能性もまた示唆されると思われる。注352も参照。

¹³⁸ 「類」と「差異」による定義がアリストテレス以前から行われていたことに注意する必要がある。そもそもプラトーンらが用いたとされる「二分法」がこの「類」と「差異」による「定義」の試みの一つだったことを思い起こす必要があるだろう。生物などを説明する際には、それぞれの段階で「差異」を一つずつ使って分割するのではなく、これらの「差異」を一度に一挙に使うと分割しなければならない、というのが「二分法」に対する批判のポイントとなっていた。

らは「実有」そのものを言わないだろう¹³⁹⁾¹⁴⁰⁾ (*Met.H3.1043b10-14*)

この箇所では「二本足」も動物も素材を言うものであり、また「実有」を言ってはいない、ともされている。すなわち**H**巻の当該箇所では人について言う際に、「なにか」をぬかして「動物と二本足」とするだけでは十分ではないということである。この**H**巻の議論では**Z**巻12章での「差異」としての「二本足」はむしろ素材であって、実働態ではないのである。多くの解釈者たちは周知の「類」と「差異」による「定義」の典型例であると思われる「二本足の動物」については**Z**巻12章のような扱いが正しいと考えているので、この**H**巻3章のような扱いに対して否定的に反応している¹⁴¹⁾が、その反応は妥当なものではないように思える。そもそも**Z**巻12章では「種」と理解できるエイドスが集中的に使用されている。すなわち、<<解釈 I>>の「種」,「種」的形相の意味でのエイドスがまず主張されていることになる。しかもこの「種」の意味でのエイドスの「定義」の問題では、「差異」と「類」による「定義」を問題にして、今度は「最後の差異」としての「差異」が、素材としての「類」に対してエイドスとされることになっている。すなわち、<<解釈 X>>の「差異」の意味のエイドスが主張されていることになる。本稿でここまで明らかにしてきたように、<<解釈 I>>と<<解釈 X>>を評価してエイドスを把握するということは、**Z**巻**H**巻の最初のまとまりから考えられるエイドスの諸解釈の流れとは相容れない、別の観点を示す解釈ということになる。**Z**巻を受け継いだ**H**巻の叙述では実働態が重要な役割を果たすから（「特徴 J」（**H3**）」、実働態だけで「定義」ができるのかどうかというのが一つのテーマになるほどで、とにかく「定義」の中に実働態を欠くことはできない、という展開になるのがむしろ自然で、その意味では「二本足の動物」というだけでは単に「ソーマ〔身体〕」の特徴を述べているだけで（つまり素材を言っているだけで）、実働態、例えば「たましい」についてもヌース *νοῦς* についても何も語っていないではないか、という批判の方がむしろ妥当であると考えられる。その意味では**Z**巻12章の「定義」に関する叙述は『分析論』などの叙述をはじめとして周知のものではあるが、**Z**巻**H**巻の「実有」の探求の全体的な構造から考えると不十分な叙述である、ということになるだろう。

2-結. 「第一の実有」としてのエイドスの意義

¹³⁹⁾ この *Met.H3.1043b10-14* の箇所のテキストの読みは Ross[1924] の読みを採用した。Ross のように 1043b14 で *οὐ* を読まないといこの箇所の意味が通じ難くなる。

¹⁴⁰⁾ οὐδὲ δὴ ὁ ἀνθρώπος ἐστὶ τὸ ζῶον καὶ δίπουν, ἀλλὰ τι δεῖ εἶναι ὃ παρὰ ταῦτα ἐστίν, εἰ ταῦθ' ὕλη, οὔτε δὲ στοιχεῖον οὔτ' ἐκ στοιχείου, ἀλλ' ἢ οὐσία· ὃ ἐξαιρουῦντες τὴν ὕλην λέγουσιν. εἰ οὖν τοῦτ' αἴτιον τοῦ εἶναι, καὶ οὐσία τοῦτο, αὐτὴν ἂν τὴν οὐσίαν οὐ λέγοιεν. (*Met.H3.1043b10-14*) …この箇所のテキスト

は Ross[1924] による。

¹⁴¹⁾ Burnyeat, M. et al., [1984] pp.14-15, Bostock[1994] p.263, などを参照。

以上までの本稿における考察をまとめると、『形而上学』で「感覚されうる実有」¹⁴²に関連してアリストテレースが自説として主張するエイダスには、ここまで中心的に検討してきた「第一の実有」としてのエイダスを含めて、以下のような典型的表現に代表される、文脈によって異なる七つほどの意味合いを読み取ることができる。

- ①「内にあるエイダス」 τὸ εἶδος τὸ ἐνόν (Met. Z11.1037a29)¹⁴³
：『形而上学』Z巻10～11章における「第一の実有」としてのエイダス
- ②「かたち」すなわちエイダス
ἡ μορφή καὶ τὸ εἶδος (Met. B4.999b16, Δ8.1017b25-26)¹⁴⁴
：『形而上学』Z巻3章, H巻3章などにおける「かたち」と言い換えられるエイダス
- ③「類」の諸エイダス γένους εἶδη (Met. Z4.1030a12)¹⁴⁵
：『形而上学』Z巻4章で「類」のもろもろの「あり方」と解釈できるエイダス
- ④「全般的に諸エイダス」 ὅλως τὰ εἶδη (Met. H5.1044b22)¹⁴⁶
：『形而上学』H巻5章でパトス〔様態〕と解釈できるエイダス
- ⑤「このようなエイダス」 τὸ τοιόνδε εἶδος (Met. Z8.1034a6)¹⁴⁷
：『形而上学』Z巻7～9章における「種」, 「種」的形相と解釈できるエイダス
- ⑥「最後の〔差異〕がエイダス」 ἡ τελευταία τὸ εἶδος (Met. Z12.1038a26)¹⁴⁸
：『形而上学』Z巻12章における「最後の差異」と解釈できるエイダス
- ⑦「特有なエイダス」 τὸ ἴδιον εἶδος (Met. A5.1071a14)¹⁴⁹
：『形而上学』A巻5章における「個別的形相」と解釈できるエイダス

本稿で検討してきたZ巻における「第一の実有」としてのエイダスは以上のまとめのうち、①に該当することとなる。

これらのうち⑤, ⑥のエイダスはZ巻H巻の最初のまとまりとは別の挿入部分で、また⑦のエイダスはA巻などの他巻で、それぞれ独自の視点と文脈において使用されている用例ということになる。そして⑤では第1節(2-1)の<<解釈I>>に掲げた「種」や「種」的形相という解釈が、また⑥では<<解釈X>>の「差異」という解釈が「最後の差異」という具体的な姿を取って、さらに⑦では<<解釈III>>の「個別的形相」という解釈が、それぞれ

¹⁴² 「感覚されうる実有」に対する「動かされえない実有」については、さらにまた別の議論が主にA巻において展開されている。本稿第1章(1-序～1-結) pp.3-18, 参照。

¹⁴³ 「内にあるエイダス」については、本稿第2章第4節(2-4) pp.35-40, 参照。

¹⁴⁴ 「かたち」すなわちエイダスについては、本稿第2章第2節(2-2) pp.24-26, pp.31-32, 第3節(2-3) p.34, 参照。

¹⁴⁵ 「類」の諸エイダスについては、本稿第2章第2節(2-2) pp.26-28, 参照。

¹⁴⁶ 「全般的に諸エイダス」については、本稿第2章第2節(2-2) p.31, 参照。

¹⁴⁷ 「このようなエイダス」については、本稿第2章第2節(2-5) pp.43-44, 参照。

¹⁴⁸ 「最後の〔差異〕がエイダス」については、本稿第2章第2節(2-5) pp.44-46, 参照。

¹⁴⁹ 「特有なエイダス」については、本稿第2章第2節(2-5) pp.44-45, 参照。

妥当すると考えられるが、それらのどれか一つを他の局面にまで適用し、拡大して解釈をしたりすることには注意が必要だろう。少なくとも**Z**巻11章の「第一の実有」としてのエイドスをこれら⑤から⑦のどれか一つの意味合いをもとにして理解しようとするには慎重になるべきだろう。

また④のパトス〔様態〕の例は、第1節（2－1）で掲げた<<解釈IX>>が、文脈によってはアリストテレス自らが主張するエイドスの射程内で十分に機能することもまた示しているし、素材と組になって使用するエイドスの用例の一つとなつてはいるが、白など「実有」以外のカテゴリーアーのものもエイドスとされているので、「実有」のエイドスのみを示しているのではない点で、「実有」の核心を示す「第一の実有」としてのエイドスの候補からは外さざるをえないだろう。

そして、③の諸「エイドス」は①にいたる「あるとは何であったのか」 *τὸ τί ᾗν εἶναι* の探求の過程で**Z**巻4章において検討されたもので、①で言及される「第一の実有」が満たすべき最低限の条件を提示していると考えられるもので、しかも本稿第2章第2節（2－2）で明らかにしたように「種」や形相のどちらかに限定されるものというよりは、もっと包括的に第I節で掲げた<<解釈VIII>>の「あり方」を示しているエイドスであると解釈できるが、この③も議論の構造上の観点からは**Z**巻11章で「第一の実有」とされているエイドスへの橋渡しの意味合いを帯びていると思われる。

残る②の「かたち」と言い換えられるエイドスであるが、これは『形而上学』**Z**巻**H**巻以外の**B**巻や**A**巻その他の箇所や、『自然学』などの他の著作でもしばしば見出せる用例で、或る意味で「感覚されうる実有」にかかわるエイドスを出現頻度的には代表している用例とも言える。しかし、この用例が直接、用語法上、「第一の実有」と語られることはなく、その重心はむしろ自然学的にエイドスを語る、という点にあると思われる。実際、**Z**巻**H**巻の最初のまとまりの中では、『自然学』などで使用されている「かたち」と互換的なエイドスが、**Z**巻の「基に置かれたもの」 *ὑποκείμενον* についての議論から、**H**巻での「感覚されうる実有」についての議論への進行の中で、**H**巻では「かたち」 *μορφή* に収束して使用されなくなる。この**H**巻ではこの②の意味でのエイドスという表現が姿を消し、「かたち」と素材という組み合わせに収束してしまうような用例が読み取れたので、アリストテレス自らが、プラトーンらから受け継いだ「同名」のエイドスという用語を脱して、「かたち」という「異名」の用語を採用することとなった、とも解釈できる余地もあるほどではないかと思われる。すなわち②の局面には、いわば用語法上の「脱エイドス化」とでもいうべき事態をすら読み取ることができ、「素材-エイドス論（いわゆる「質料-形相論」）」から「素材-「かたち」論」への移行すら問題にできるとと思われる¹⁵⁰。

このような観点からすると①の「第一の実有」を示すエイドスは、②のような或る意味で自然学、すなわち「第二の哲学」 *δευτέρα φιλοσοφία* とも重なる面を持つ「感覚されうる実有」の探求の際に問題となるようなエイドスではなく、その②の意味でのエイドスが**H**

¹⁵⁰ この観点からは、日本語のいわゆる「質料-形相論」などという言い方よりは、英語の *hylomorphic analysis* などという言い方が、「素材-「かたち」論」という事態を正確に表現しているとも言える。

卷では「かたち」と取って代わられるのに対して、本来の第一の哲学 *πρώτη φιλοσοφία* の核心により迫る、「動かされえない実有」 *οὐσία ἀκίνητος* (*Met.E1.1026a29*)や、ヌース *νοῦς* (*Met.A7.1072b20*)への探求への方向性¹⁵¹を色濃く宿しているエイドスであって、「あるとは何であったのか」についての解明の帰結部分における、或る限定され凝縮された特別な文脈で使用されているエイドスである、とも解釈できる。その際に「第一の実有」を示す①の局面は、用語法的には「内にあるエイドス」という言い方に、通念と「同名」のまま新たな意味合いを籠める、という意図を読み取ることもできるだろう。

Z巻**H**巻についての一連の考察の結果、アリストテレスが「感覚されうる実有」に関して『形而上学』で自らの主張するエイドスには、以上の七つほどの異なった局面を指摘でき、そのうちの「第一の実有」としてのエイドスの解釈に焦点を絞った場合、把握すべきなのは、「内にあるエイドス」としての「たましい」であった¹⁵²、というのが、エイドスとしての「第一の実有」を探求した本第2章の帰結ということになる。

¹⁵¹ 探求の途上性の表明については、**Z**巻**11**章(*Met.Z11.1037a10-17*)の一節を参照。なお山本[1980]p.100が以下のように指摘している点は、本稿で述べた第一の哲学やヌースとの関連で重要な論点になりうると思われる。

「心は身体の第一の現実態であり、心あってこそ<この身体>は<この人>である。しかし今この形質論をはみ出して、心こそ当のその人であり、心が知覚し思考する主体の位置に立つと見うる可能性の地平を前にしている。アリストテレスは動揺しているのだろうか。あるいは、わたしは心身統一たる一人の人間でありつつ、心でもあるのか。この距離は一体何を告げているのであろうか。「わたし」といい「心」といい、それは何であるか。」

すなわち本稿の観点からすると、引用文の中の「形質論」というのは「素材-「エイドス」論」から「素材-「かたち」論」へと移行することを通して、自然学的な「第二の哲学」の課題と重なる探求、ということになるし、また「形質論をはみ出して」というのは、「たましい」の問題から、「第一の哲学」の核心やヌースの問題への探求の途上性を示している、と解釈できる。本稿で明らかにしてきたように、アリストテレスが**Z**巻**11**章で「第一の実有」としてのエイドス、すなわち「たましい」を語る視点は、しっかりとこの第一の哲学の核心への道筋を見据えている。そしてこの観点からすると、本稿第1章で論じた『形而上学』**A**巻での論点と、この本稿第2章の『形而上学』**Z**巻での論点は、テーマを補い合う、整合的な見解である、ということも理解できるだろう。すなわちまず『形而上学』**A**巻では、前半部分で「感覚的な実有」とは何かを探求し、後半部分で「動かされえない実有」とは何かを探求する、という筋立てとなっている。そしておそらく時期的に後になると考えられるこの『形而上学』**Z**巻では、**A**巻の前半部分で探求した「感覚的な実有」の原因についてのテーマに焦点を絞ったさらなる考察が、集中的に展開されており、しかも**Z**巻では直接に扱っていない、**A**巻の後半部分で考察されていた「動かされえない実有」についての配慮も、その探求の途上性の表明とともになされている、と理解できるわけである。そして直接に扱っていない、ということはそのことを直接のテーマにはしていない、ということであって、その意味では、例えば**A**巻の後半部分で考察されていた「動かされえない実有」についての部分の考察が、**Z**巻においては否定されている、といった理解は成立し難いと思われる。現存するアリストテレス著作集 *Corpus Aristotelicum* の範囲内では、**A**巻の後半部分の「第一の哲学」の核心を取り扱うテーマに関する考察は、どの著作の中でも基本的に維持されている、と考えるのが妥当であると思われる。本稿p.18における、第1章の結論部分(1-結)も参照。

¹⁵² 「たましい」が「離されうる」ことを巡る諸問題と、ヌースとのかかわり、「第一の哲学」と「第二の哲学」の区別と分類などについては、伊藤[2019]を参照。

第3章

『カテゴリーアイ』における「第一の実有」

3-序. 第3章の趣旨

本稿の第1章で明らかにしてきた『形而上学』A巻や、第2章で扱った『形而上学』Z巻における「第一の実有」についての言及は、アリストテレスの第一の哲学 *πρώτη φιλοσοφία* の探求の遂行の範囲内で解釈できるものであった。しかし主に歴史的な経緯¹⁵³から、アリストテレスにおける「第一の実有」とは、用語法上、まず、この第一の哲学とのかかわりが明瞭ではない、『カテゴリーアイ』¹⁵⁴における「個体」¹⁵⁵のことである、とされてきた。この点は現存するアリストテレス著作集 *Corpus Aristotelicum* の全体の開巻劈頭に『カテゴリーアイ』が位置し、しかも「第一の実有」について大変印象的に記述されている、ということとも大いにかかわっていると思われる。しかも内容的にも、本稿第2章で扱ったエイドスは、『カテゴリーアイ』においては「第二の実有」とされ、「種」の意味(本稿2-1における、〈〈解釈I〉〉:「エイドスは「種」,「種」的形相である」)に限定されている。そしてこの意味での「種」とともに、本稿第2章の議論では実有(「実有の実有」)ではない、とされることもあった「類」もまた「第二の実有」とされている。そこで本第3章は、本稿第1章、第2章における考察を踏まえた上で、この『カテゴリーアイ』における「第一の実有」の叙述についてどのように理解すべきなのかを検討することとする。

本第3章では、『カテゴリーアイ』における「第一の実有」の意義の探求に際して、まず第1節(3-1)で、『カテゴリーアイ』の上述したようなテキストとしての独自の性格を考察し、その上で『カテゴリーアイ』以外の諸著作における文脈で複数のカテゴリーア

¹⁵³ この歴史的伝承にかかわる人物としては、プロティノス、ポルフェリオス、ボエティウス、などを挙げることができ、また、イスラームから中世ヨーロッパへの文化的伝承なども重要であると考えられる。

¹⁵⁴ この書物の題名については、『カテゴリーアイ』の他、『トポス論』序説、『あるものどもの様々な類について』、『あるものどもの10の類について』なども与えられていた。

¹⁵⁵ この点について、「第一の実有」の個性性に疑いを表明しているものとしては、例えば加藤[1952], 参照。

一¹⁵⁶の「枚举」が行われている箇所¹⁵⁷を取り上げ、それらの箇所と『カテゴリーアイ』第4章における「枚举」に関する叙述を、特に「個体」（『カテゴリーアイ』における「第一の実有」）と「種」（『カテゴリーアイ』における「第二の実有」）の区別がなされているかどうか、に着目しつつ比較検討してみることとする。次に第2節（3-2）で、いわゆる「存在の類」とのかかわりに着目し、『カテゴリーアイ』第2章における「あるもの」の四分類を、「あるもの」の分類に関連した言及のある他著作の場合と比較し、特に「個体」が「あるもの」の分類項目として重視されているかどうかに着目しながら考察する。続く第3節（3-3）では、「実有」を「個体」と「種」・「類」に区別し分類する、という視点を、各著作における「実有」の様々な分類と比較した場合、どのように位置づけることができるのかという点について、『カテゴリーアイ』第5章におけるような「個体」と「種」・「類」の区別が、他の箇所で「実有」を分類する際にも見出せるかどうか、という点に焦点を絞って、考察を進めることとする。そして以上の第1節から第3節までの考察を踏まえて、第4節（3-4）では『カテゴリーアイ』における「第一の実有」の特徴と内実について検討し、続く第5節（3-5）では古来、様々な形で議論されてきた、「個体」としての「第一の実有」の「個性性」にかかわる諸問題について論及する、という考察をおこない、『カテゴリーアイ』における「第一の実有」の真相を明らかにしていくことが本第3章の課題である。

¹⁵⁶ 近代西欧語、例えば英語の *category* や、この語を明治時代に翻訳した「新漢語」である「範疇」や、現在のカタカナ語の「カテゴリー」などのすべてのことばの起源となっている、古代ギリシア語の *κατηγορία* は、もともと *κατηγορεῖν* (*κατά*「に対して」+ *ἀγορεῖν*「責めを負わせる(*ἀγορά*「公の場(アゴラー)」で訴える)」という意味の動詞(「告訴する」)の名詞形で、法廷用語の「告訴」といった意味合いのことばであった。しかし、プラトーンを経て、この用語を「証示」、「断言」、「断定」、といった意味合いから、文の「述語」、「述語付け」、そしてさらには分類の「部門」と言った意味での「範疇」、「カテゴリー」などの意味へと展開していったのがアリストテレス以来の用語法であった。例えば現在の英語の *categorical* が「定言的な」、「無条件の」といった意味になっていることの起源の一端も、上述した「断言」などの意味がこの現在のことばの意味合いに響いているからである。アリストテレスが各著作で使用している *κατηγορία* は、これらのすべての意味合いを含んでいるので、これらの点を考慮して、本稿ではギリシア語の *κατηγορία* は、「告訴」、「証示」、「断罪」、「断言」、「述語」、「述語付け」、「範疇」などを包括的に意味で示すことは困難と考え、一貫して「カテゴリー」とカタカナ語で訳すこととする。また、『範疇論』、『カテゴリー論』などと訳されてきた書物の題名としては、この語の複数形を基にした、『カテゴリーアイ』を用いる。さらにまた動詞 *κατηγορεῖν* の方は、原義の意味を生かして、「述べ定める」と訳すこととする。注205、注219も参照。例えばこの *κατηγορία* を、後代の文法用語を使って「述語」、*κατηγορεῖν* を「述語する」と訳した場合、『カテゴリーアイ』での用例 (*Cat.2.1a16-20*では、*ἄνθρωπος τρέχει*「人は走る/人が走っている」の文の中の *ἄνθρωπος*「人」(主語)も *τρέχει*「走る」(述語)とともに「組み合わせなしに言われるものども」の実例とされている)で、「主語」に当たるものも *κατηγορία* の実例の中には含まれる、という事態を正確には表現できないことになる。しかも *τρέχει* は古代ギリシア語では、「走る/走っている」という動詞としてばかりではなく、一語文「彼は走る/彼は走っている」とも理解できるので、「組み合わせなしに言われるものども」は一語ではあるが、内容的には主語と述語のそなわった文とも理解できる場合もあることとなる。また「彼は走る」は、現在形と現在進行形を区別しない古代ギリシア語では、「彼は走っている」とも訳せる点にも注意が必要だろう。現在形と現在進行形の問題については、注26、注220も参照。

¹⁵⁷ 「枚举」というのは、かならずしも数の多さのみがかかわるわけではないが、総合的に判断して、本稿では六つ以上のカテゴリーアイが列挙されている箇所を中心に扱うこととする。

3-1. 『カテゴリーアイ』のテキストの性格と列挙されたカテゴリーアー

古来、『カテゴリーアイ』という書物が一体何を扱った書物であるかについては、多くの見解が生じて来た。『オルガノン』の最初に位置する、という、現存のアリストテレス著作集の編集の仕方は、この書物が基本的に論理学に関連する「概念」についての議論を扱っており、続く『命題論』での「命題」についての議論や、『分析論』での「推論」についての議論の基礎をなしている、という「編集上の理解」を実質的に示している。この編集方針は、前1世紀のロードスのアンドロニコスにより順序が確立され、3世紀の新プラトーン派のポリュフュリオスによって発展されたものである、と理解できる¹⁵⁸が、この方針がアリストテレス自身に遡れるものなのか、という点については確証があるわけではない。

書物としての『カテゴリーアイ』も含めて、一般にアリストテレスのカテゴリーアーについては、古来、様々な見解が提出されてきた。ポリュフュリオスの師であるプロティノスは、カテゴリーアーが「存在の「類」」を扱っているとする見解¹⁵⁹をとっている。論理的な概念の問題を扱っているとする見解を巡っては、例えば19世紀後半のドイツにおいての一連の議論があり¹⁶⁰、そこではカテゴリーアーは論理的概念である、とする説¹⁶¹や、概念の輪郭とする説¹⁶²、概念そのものとする説¹⁶³などが展開された。また、存在の問題を扱っているとする見解のうちには、実在の現れる諸形式の問題を扱っている、とする説¹⁶⁴も含めることができる。さらに、このように論理や存在を扱っている、とする見解以外にも、繫辞

(copula)を扱っている、と考える説¹⁶⁵や、また述語付けの仕方の分類を扱っているとする説¹⁶⁶、文法上の問題、例えば品詞の分類や意味の問題を扱っているとする見解¹⁶⁷もある。また特に書物としての『カテゴリーアイ』については、日常言語の立ち表われの問題を論じ

¹⁵⁸ Porphyrii *Isagoge* [1836] 1a8-13, 参照。なお、一般的に「カテゴリーアイ入門」とも考えられている、このポリュフュリオスの『エイサゴゲー』が、内容的には『トポス論』の道具立てを用いて議論を展開している点にも注目すべきであろう。

¹⁵⁹ プロティノス『エンネアデス』, 第6巻第1章「あるものどもの類について 第1編」, 第1節～第3節 (*Enneades* VI.1.1-3), 参照。

¹⁶⁰ 村田[2014], 参照。

¹⁶¹ Bonitz[1853], 参照

¹⁶² Zeller[1921], 参照。

¹⁶³ Trendelenburg[1846], 参照。

¹⁶⁴ 安藤[1958], 参照。

¹⁶⁵ Apelt[1891], 参照。

¹⁶⁶ Brentano [1862], 参照。参照。ただしブレンターノの説は、さらに多様な側面を含んでいる。村田[2014], 参照。

¹⁶⁷ Trendelenburg[1846], Benveniste[2012(初版1966)], 特にp.66, 参照。なお、Benvenisteの主張では、カテゴリーアーが動詞、および名詞の体系と並行関係にある、という品詞の分類についての指摘とともに、古代ギリシア語における中動相についての着目が行われている。この主張に対してはDerridaの批判的論考(Derrida[1972]pp.209-246)がある。國分[2017]pp.43-47, pp.103-120, 参照。なお、古代ギリシア語においては、中動相の内容(形も意味も中動)と、「中動相型の能相欠如動詞」(middle deponent)の内容(形は中動だが、意味は能動)は、関連はするが必ずしも同じでない、という点には注意する必要がある。cf. Smyth[1920], 356c.

ている,とする見解¹⁶⁸,『トポス論』の序論と理解できるとする説¹⁶⁹,『トポス論』に関連して問いと答えの形式をめぐる弁証論的な問題を取り扱ったものとする見解¹⁷⁰,等々の見解がある¹⁷¹。また『カテゴリーアイ』の叙述の形式についても,著作集 *Corpus* の他の多くの著作のような「講義草稿」風のものというよりはむしろ,導入や準備なしに叙述を始め,叙述の前提や論拠や起源などについては触れずに,いわば結論のみを箇条書き風に羅列したような,或る種の「覚え書き」のような様相を呈している¹⁷²。この点に着目すれば,内容的には,通常は方法論的な記述も含むはずの,なにかのテーマについての「序論」というよりは,むしろ出来上がった議論について「補足説明としてまとめられた検査基準の覚え書き」のようなものである可能性も検討の余地がある。

本第3章で考察する『カテゴリーアイ』における「第一の実有」への言及は,本節(3-1)冒頭で言及したように,或る種の「論理」的な「概念」についての論究とも理解できる側面は確かにある。そして他方でまた,確かに或る種の「存在」についての見解が表明されているとも理解できる側面もある。しかしながら,本稿第1章や第2章で論じた,すべての「実有」の探求を旨とする「第一の哲学」とのかかわりについては,必ずしも明確ではないばかりではなく,むしろ『カテゴリーアイ』では「第一の哲学」とは直接のかかわりを持たない場面で,独立に「第一の実有」という表現を,使用しているようにも思える,という点をまずは強調しておく必要がある。

そして「第一の実有」の用例(*Cat.5.2a11f.*)では実例としては「その或る人」 *ὁ τις ἄνθρωπος* (*Cat.5.2a13,etc.*),「その或る馬」 *ὁ τις ἵππος* 等が「第一の実有」の実例として掲げられている。これらの実例は「類」,「種」,「個」という系列のうちの「個」,すなわち「個体」を示していると考えられ,そしてこの「第一の実有」としての「個体」と,「第二の実有」としての「種」や「類」とのかかわりをめぐる点について,古来,様々な議論が生じてきたことも周知の点である¹⁷³。

以下,本章第一節(3-1)では,『カテゴリーアイ』以外の諸著作における文脈で,このカテゴリーアイの「枚举」が行われている箇所がどのように扱われているか,特に『カテゴリーアイ』第5章における「第一の実有」を特色付ける「個体」の取り扱いに着目し,それらと問題の『カテゴリーアイ』における「枚举」に関する叙述を比較検討する。その際,カテゴリーアイの種類を,それぞれの文脈で省略せずに網羅的に枚举していると解

¹⁶⁸ 井上[1980],参照。

¹⁶⁹ Husik[1904],[1939],参照。

¹⁷⁰ Frede[1983],参照。

¹⁷¹ これらの点に関してはRoss[1924],vol.1,1ntroduction,p.Lxxxii, Taylor[1955]p.22, Düring[1966]S.59 ff,等を参照。なお,論理学と形而上学の調停的見解を示唆するものとしては例えば Owens[1960]pp.73 - 90,等を参照。

¹⁷² 「覚え書き」については,ディオゲネス・ラエルティオス *DIOGENIS LAERTII VITAE PHILOSOPHORUM* V 23(Hicks[1925]Vol. I ,p.466)における *Υπομνήματα* などの言及を参照することもできる。

¹⁷³ 古くはポルフェリオスの注釈(Porphirii *Isagoge* [1836] 1a8-13)に端を発した中世の「普遍論争」から,Ackrillの『カテゴリーアイ』注釈(Ackrill[1963])に対するOwenの反論(Owen[1965b])以来の「内属性」論争に至るまで,数多くの哲学的論争が,或る意味でこの『カテゴリーアイ』における「第一の実有」の取り扱いを巡って生じてきた事実にも注目すべきであろう。

積できる代表箇所である, 以下の<T12>～<T18>までのテキスト¹⁷⁴における言及箇所を検討し, これらを『カテゴリーアイ』の対応する箇所, すなわち<T19>の『カテゴリーアイ』第4章でこのカテゴリーアを網羅的に枚挙している箇所と比較考察してみる, という手法をとることとする。

ではまず, <T12>の『トポス論』第1巻第9章(*Top. I 9.103b20-39*)における言及から検討してみよう。

<T12>「さて, これら〔以上述べられたこと〕の後に, もろもろのカテゴリーア *κατηγορίαι* の「諸類」 *γένη*¹⁷⁵ を決め定めるべきだ *δεῖ διορίσασθαι*。それら〔諸類〕のうちに〔次に〕述べられる四つのもの¹⁷⁶ がそなわっている。それら〔諸類〕は数において十であり, 「何であるか」 *τί ἐστι* (103b22), 「どれほどか」 *ποσόν*¹⁷⁷, 「どのようなか」 *ποῖόν*, 「なにかへむかって」 *πρός τι*, 「どこ」 *ποῦ*¹⁷⁸, 「いつか」 *ποτέ*, 「置かれること」 *κεῖσθαι*¹⁷⁹, 「持つこと」 *ἔχειν*, 「なすこと」 *ποιεῖν*, 「受けること」 *πάσχειν* である。なぜなら「付帯性」 *συμβεβηκός* と「類」 *γένος* と「特有性」 *ἴδιον* と「定義」 *ὁρισμός* は, それらのもろもろのカテゴリーアの一つのうちに常にあるだろうから。なぜなら, これら〔諸類〕のゆえの諸命題はすべて「何であるか」 (103b26) か, 「どれほどか」 か, 「どのようなか」 か, その他のもろもろのカテゴリーアの「なにか」を示すからである。これら〔のこと〕から明白なのは, 「何であるか」 (103b27)を示すものは, ときに「実有」 *οὐσία*¹⁸⁰ を, ときに「どれほどか」

¹⁷⁴ <T12>～<T18>までのテキストの順番はベッカー版のアリストテレス著作集のページ順に取り上げた。

¹⁷⁵ カテゴリーアという表現そのままではなく, 「カテゴリーアの諸類」という表現が, 全体としていわゆる「最高類概念」としての「範疇」または「カテゴリー」に相当する点に注目すべきである。すなわち現代日本語の「カテゴリー」または「範疇」という表現は, むしろ「カテゴリーアの諸類」や「カテゴリーアのもろもろの「型」といった表現全体でアリストテレスが示していたものを意味するものとなっている。そして, カテゴリーアのみ部分の意味は, ほぼ「述べ定め」ということとなると思われる。

¹⁷⁶ この箇所の直前までで語られていた付帯性 *συμβεβηκός* と「類」 *γένος* と特有性 *ἴδιον* と定義 *ὅρος* の四つのもの。

¹⁷⁷ *ποσόν* は通常, 「量」と訳されているが, 本稿では, 疑問詞からの派生形であることに鑑み, 「どのようなか」と訳す。

¹⁷⁸ *ποῦ* という疑問詞の形になっており, 他の多くの箇所のような不定の形にはなっていない。不定の形 *πού* を「どこか」と訳したのに対し, この疑問の形を本稿では「どこ」と訳した。注215も参照

¹⁷⁹ *κεῖσθαι* は通常は「位置する」などと訳されているが, 「置く」 *τίθημι* の受動の意味もこめてこのように「置かれること」と訳した。

¹⁸⁰ ここでは, 「実有」 *οὐσία* が「何であるか」 *τί ἐστι* と区別され, 「何であるか」のリストのうちの一つになっている。

を、ときに「どのような」を、ときにその他のもろもろのカテゴリーの「なにか」を示すということである。もし人が話題とされており、[その]「話題とされているもの」*ἐκκεῖμενον*¹⁸¹ を人である、動物〔である〕と述べるとき、「何であるか」(103b30)を彼は言い、そして「実有」を示す。また「白色」*χρῶμα λευκόν* が話題とされており、[その]「話題とされているもの」を、白 *λευκόν* である、色 *χρῶμα*〔である〕と述べるとき、「何であるか」(103b32)を彼は言い、そして「どのような」を示す。同様にまた、「ペーキュスの大きさ」*πηχυαῖον μέγεθος*¹⁸² が話題とされており、[その]「話題とされているもの」を「ペーキュスの大きさ」であると述べるとき、「何であるか」(103b34)を彼は言い、そして「どれほどか」を示す。他のものについても同様〔である〕。なぜなら、このようなもののそれぞれのものは、それが「それ自ら」¹⁸³ について言われるならば〔の場合〕も、それについて「類」が言われるならば〔の場合〕も、「何であるか」(103b37)を示す。しかし、「異なるもの」¹⁸⁴ について言われるときは「何であるか」(103b38)ではなくて、「どれほどか」か「どのような」か、その他のカテゴリーの「なにか」を示すからである。¹⁸⁵ (*Top. I*

¹⁸¹ この箇所の *ἐκκεῖμενον* を「話題とされているもの」と訳した。この *ἐκκεῖμενον* の原義は「さらされたもの」といった意味であるが、「置かれたもの」、「提出されたもの」、さらには「現前するもの」などとも訳しうるだろう。最後に挙げた「現前するもの」と理解した場合、これは実質的には人や白の「個体」をも示すことになると思われる。*ἐκκεῖμενον* を「話題とされたもの」と理解する場合には、「種」を示すことばを使って本来の「種」を示すとともに、「個体」を示すことも排除しない、という立場をも表明できることとなると思われる。そこで訳では「話題とされたもの」の方を採用した。

¹⁸² ここでは長さの単位である「ペーキュス」ではなく、「ペーキュスの大きさ」という表現で、「大きさ」が表現上も *μέγεθος* という形で文字として登場してもいることに着目すべきである。

¹⁸³ この「それ自ら」を「種」（「不可分の種」）と考える場合がある（村治[1970]p. 17, p275（第9章注(3)参照）が、「現前するもの」と解釈した場合は「種」のみを示すというよりは、むしろ実質的に「個体」をも示していると思われる。ここでも「種」を示すことばを使って「個体」を示すことも排除しない、という事態が示されている、と理解すべきだと思われる。

¹⁸⁴ この「異なったもの」は実質的に「実有」を示していると思われる。すなわち、「実有」以外のものが「実有」を自らとは「異なったもの」として、その「実有」に関して「述べ定められる」、という事態を示していると思われる。

¹⁸⁵ *μετὰ τοίνυν ταῦτα δεῖ διορίσασθαι τὰ γένη τῶν κατηγορίων, ἐν οἷς ὑπάρχουσιν αἱ ῥηθεῖσαι τέτταρες. ἔστι δὲ ταῦτα τὸν ἀριθμὸν δέκα, τί ἐστι, ποσόν, ποιόν, πρὸς τι, ποῦ, ποτέ, κείμεναι, ἔχειν, ποιεῖν, πάσχειν. ἀεὶ γὰρ τὸ συμβεβηκός καὶ τὸ γένος καὶ τὸ ἴδιον καὶ ὁ ὁρισμός ἐν μιᾷ τούτων τῶν κατηγορίων ἔσται πᾶσαι γὰρ αἱ διὰ τούτων πρτάσεις ἢ τί ἐστιν ἢ ποιόν ἢ ποσόν ἢ τῶν ἄλλων τινὰ κατηγορίων σημαίνουσιν, δ' ἐξ αὐτῶν ὅτι ὁ τὸ τί ἐστι σημαίνων ὅτε μὲν οὐσίαν σημαίνει, ὅτε δὲ ποιόν, ὅτε δὲ τῶν ἄλλων τινὰ κατηγορίων. ὅταν μὲν γὰρ ἐκκεῖμενον ἀνθρώπου φῇ τὸ ἐκκεῖμενον ἄνθρωπον εἶναι ἢ ζῶον, τί ἐστι λέγει καὶ οὐσίαν σημαίνει. ὅταν δὲ χρώματος λευκοῦ ἐκκεῖμενον φῇ τὸ ἐκκεῖμενον λευκὸν εἶναι ἢ χρώμα, τί ἐστι λέγει καὶ ποιόν σημαίνει. ὁμοίως δὲ καὶ ἐὰν πηχυαίου μεγέθους ἐκκεῖμενον φῇ τὸ ἐκκεῖμενον πηχυαῖον εἶναι μέγεθος,*

この<T12>の『トポス論』第1巻第9章における十個のカテゴリーの「諸類」についての叙述(*Top. I* 9.103b20-39)は、<T19>で後述する『カテゴリーアイ』第4章で十個枚挙した叙述(*Cat.* 4.1b25-2a4)と、いわば「完全枚挙」を共有している唯一の箇所である。しかもこの箇所では「十」という数を明記もしている。この箇所の特色としては、「実有」のカテゴリーはその他のカテゴリーと並位的に語られており、「実有」のカテゴリーの他のカテゴリーに対する優位が語られてはいないこと、「個体」の取り扱いについては、「それ自ら」と「類」が分けて記述されている、という点で「類」を区別する視点はあるが、「話題とされているもの」は「個体」であるとも「種」であるとも考えられ、「それ自ら」の内実も「個体」なのか「種」なのかそれともその「両者」なのか明確でないこと¹⁸⁶、さらには「基に置かれたもの」 *ὑποκείμενον* という表現がないこと、また「あるもの」 *ὄν* という表現もなく、この表現との直接のかかわりを見出すことはできないこと、などを挙げることができる。

そして『トポス論』のこの箇所では、特に「何であるか」の用法が独特であることを指摘できる。すなわち、ここには2種類の「何であるか」を読み取ることができるのである。一つは「実有」を示す「何であるか」(103b22,26)、一つはすべてのカテゴリーに当てはまる「何であるか」(103b27,30,34,37,38)である¹⁸⁷。そして「何であるか」がすべてのカテゴリーに当てはまる意味で使用される場合、「実有」のカテゴリーは「何であるか」 *τί ἐστι* ではなく「実有」 *οὐσία* という表現で示されている。

次に<T13>と<T14>の『分析論後書』第1巻第22章(*An.Po. I* 22.83a18-23, 83b10-17)を検討してみよう。

<T13>「そこで、「述べ定められるところのまさにそのもの」 *οὗ κατηγορεῖται* ¹⁸⁸

に、端的に、しかし付帯性に沿って *κατὰ συμβεβηκός* ではなく、「述べ定められるもの」

τὸ κατηγορούμενον ¹⁸⁹ は常に述べ定められる *κατηγορεῖσθαι ἀεί*、とわれわれは基に

置こう〔前提しよう〕 *ὑποκείσθω*。なぜなら諸論証はそのように論証するから。した

τί ἐστι λέγει καὶ ποσὸν σημαίνει. ὁμοίως δὲ καὶ ἐπὶ τῶν ἄλλων· ἕκαστον γὰρ τῶν τοιούτων, εἴαν τε αὐτὸ περὶ αὐτοῦ λέγεται, εἴαν τε τὸ γένος περὶ τούτου, τί ἐστι σημαίνει· ὅταν δὲ περὶ ἑτέρου, οὐ τί ἐστι σημαίνει, ἀλλὰ ποσὸν ἢ ποιὸν ἢ τινα τῶν ἄλλων κατηγοριῶν. (*Top. I* 9.103b20-39)

¹⁸⁶ ここであえて「個体」か「種」かその両者かと問うなら、個別的であることも排除はしない、と理解するのが妥当ではないかと思われる。本稿第2章の2-4の最終部分(本稿pp.41-42)参照。

¹⁸⁷ 牛田[1991]pp.27-34, 山口[2014]pp.349-352(補注B), 参照。

¹⁸⁸ 「述べ定められるところのまさにそのもの」とは、補って表現すれば「(それについて) 述べ定められるところのまさにその(その当の)もの」、ということで、文法的に言えば「主語」に当たるものを示すことばである。

¹⁸⁹ 文法的に言えば「述語」に当たるものを示すことばである。

がって、一つのものに関して一つのものが述べ定められる場合には、「何であるか」 τί ἐστιν のうちにか、あるいは「どのようなか」 ποῖόν ということか、あるいは「どれほどか」 ποσόν か、あるいは「なにかへむかって」 πρὸς τι か、あるいは「なにかをなすもの」 ποιοῦν τι¹⁹⁰か、あるいは「受けるもの」 πάσχον¹⁹¹か、あるいは「どこか」 ποῦ か、あるいは「いつか」 ποτέ か、だ。」¹⁹² (*An.Po. I 22.83a18-23*)。

<T14> 「だがまた、付帯性に沿って κατὰ συμβεβηκός 述べ定められるのでなければ、「どのような」あるいはその他のものどもには〔相互に述べ定められることは〕一つもない、なぜならば、それらのすべてのものどもは付帯しており、そして諸「実有」に関して述べ定められるからである。ところで〔それらは〕上の中へ〔上方へ〕無限なものどもではないということがある。なぜならば、「それぞれのもの」に〔かかわって〕述べ定められるとき、それが、「なにかどのようなか」 ποῖόν τι か、あるいは「なにかどれほどか」 ποσόν τι¹⁹³ か、あるいはそのようなものどもの「なにか」か、あるいは「実有」のうちのものどもか、を示すからだ。だがそれらは限られており、そしてもろもろのカテゴリーの「諸類」も限られている。なぜならば「どのような」か、あるいは「どれほどか」か、あるいは「なにかへむかって」か、あるいは「なすもの」 ποιοῦν¹⁹⁴ か、あるいは「受けるもの」か、あるいは「どこか」か、あるいは「いつか」か、だから。」¹⁹⁵ (*An.Po. I 22.83b10-17*)

¹⁹⁰ いわゆる「能動」のカテゴリーを表示する表現が「なにかをなすもの」 ποιοῦν τι と分詞形を使った形になっており、他の箇所では列挙される場合に通常使用される「なすこと」 ποιεῖν という不定詞形の表現とは異なっている。

¹⁹¹ いわゆる「受動」のカテゴリーを表示する表現が、通常使用される「受けること」 πάσχειν という不定詞形ではなく、「受けるもの」 πάσχον という分詞形になっている。

¹⁹² ὑποκείσθω δὴ τὸ κατηγορούμενον κατηγορεῖσθαι ἀεὶ οὗ κατηγορεῖται, ἀπλῶς, ἀλλὰ μὴ κατὰ συμβεβηκός· οὕτω γὰρ αἱ ἀποδείξεις ἀποδεικνύουσιν. ὥστε ἐν τῷ τί ἐστιν ἢ ὅτι ποῖόν ἢ ποσόν ἢ πρὸς τι ἢ ποιοῦν τι ἢ πάσχον ἢ ποῦ ἢ ποτέ, ὅταν ἐν καθ' ἑνός κατηγορηθῇ. (*An.Po. I 22.83a18-23*)

¹⁹³ ここでは ποσόν(「どれほどか」)が τι(「なにか」)を伴って ποσόν τι(「なにかどれほどか」)という表現になっている。

¹⁹⁴ 「能動」のカテゴリーを表示する表現が「なすもの」 ποιοῦν と分詞形を使った形になっており、また先の注190の「なにかをなすもの」 ποιοῦν τι (*An.Po. I 22.83a22*) の場合とも異なって、 ποιοῦν 「なすもの」となっており、 τι(「なにか」)の付かない形となっている。

¹⁹⁵ οὐδὲ μὴν τοῦ ποιοῦ ἢ τῶν ἄλλων οὐδέν, ἐν μὴ κατὰ συμβεβηκός κατηγορηθῇ· πάντα γὰρ ταῦτα συμβέβηκε καὶ κατὰ τῶν οὐσιῶν κατηγορεῖται. ἀλλὰ δὴ ὅτι οὐδ' εἰς τὸ ἄνω ἄπειρα ἔσται· ἐκάστων γὰρ

まず、カテゴリーアークの数については、<T13>では八個、<T14>では「実有」が抜けて七個となっている。また<T13>ではすべてのカテゴリーアークが並列されており、「実有」のカテゴリーアークを示す用語は「何であるか」となっているが、<T14>では「実有」とその他のカテゴリーアークが区別されており、「実有」を示す用語は *οὐσία* となっており、枚挙からは外されている、という特徴がある。すなわち<T13>と<T14>の両者を含む『分析論後書』第1巻第22章全体では、カテゴリーアークを枚挙するリストの中に「実有」を含める視点と含めない視点の両者が語られていることになる。また<T13>では、文法的に言って主語（「述べ定められるところのまさにそのもの」）と述語（「述べ定められるもの」）が区別されている、と読み取れる表現もなされている。そして「個体」と「種」の明確な区別はここでもなされていない。また<T13>と<T14>では、「付帯性」に沿って「述べ定められるもの」という言い方が登場し、特に<T13>では「端的に」「述べ定められるもの」との区別が明言されている点が特徴である。

次に掲げる<T15>と<T16>は、『自然学』第1巻と第5巻における用例である。

<T15>「だが「なること」 *γίγνεσθαι* は様々に言われる。そして一方で或るものは「なること」ではなく、むしろ「「なにかこれ」になること」〔と言われ〕、そして端的に「なること」はただ諸「実有」のみだ。他方で他のものどもに沿っては、「なるもの」がなにか基に置かれるのが必然ということが明らかだ（なぜならば、「実有」のみは他の「基に置かれたもの」に関して一つも言われない、だが他のすべてのものどもは「実有」に関して〔言われること〕のゆえに、「どれほどか」、そして「どのようなか」、そして「異なるものへむかって」 *πρὸς ἕτερον*¹⁹⁶、〔そして「いつか」、〕そして「どこか」、が「なにか基に置かれたもの」に〔かかわって〕なるから）¹⁹⁷

(*Phys. I* 7.190a31-b1)

κατηγορεῖται δ' ἂν σημαίνει ἢ ποιόν τι ἢ ποσόν τι ἢ τι τῶν τοιούτων ἢ τὰ ἐν τῇ οὐσίᾳ· ταῦτα δὲ πεπεράνται, καὶ τὰ γένη τῶν κατηγοριῶν πεπεράνται· ἢ γὰρ ποιόν ἢ ποσόν ἢ πρὸς τι ἢ ποιούν ἢ πάσχον ἢ ποῦ ἢ ποτέ.

(*An.Po. I* 22.83b10-17)

¹⁹⁶ いわゆる「関係」のカテゴリーアークを表示する表現が、ここでは「異なるものへむかって」 *πρὸς ἕτερον* となっており、他の箇所では枚挙される場合に通常使用される「なにかへむかって」 *πρὸς τι* という表現とは異なっている。

¹⁹⁷ πολλὰ καὶ ὅμως δὲ λεγόμενου τοῦ γίγνεσθαι, καὶ τῶν μὲν οὐ γίγνεσθαι ἀλλὰ τόδε τι γίγνεσθαι ἀπλῶς δὲ γίγνεσθαι τῶν οὐσιῶν μόνον, κατὰ μὲν τὰλλα φανερόν ὅτι ἀνάγκη ὑποκεῖσθαι τι τὸ γιγνόμενον (καὶ γὰρ ποσόν καὶ ποιόν καὶ πρὸς ἕτερον [καὶ ποτέ] καὶ ποῦ γίγνεται ὑποκειμένου τινὸς διὰ τὸ μόνην τὴν οὐσίαν μηθενός κατ' ἄλλου λέγεσθαι ὑποκειμένου, τὰ δ' ἄλλα πάντα κατὰ τῆς οὐσίας).

(*Phys. I* 7.190a31-b1)

<T16> 「ところでもし諸カテゴリーアーが「実有」, 「どのような-性」 ποιότης¹⁹⁸, 「どこか」, [「いつか」,] 「なにかへむかって」, 「どれほどか」 ποσόν, 「なすこと」または「受けること」, に分けられるなら, 三つの「動き」, [すなわち] 「どのような」の「動き」と, そして「どれほどか」の「動き」と, そして「所」τόπος¹⁹⁹に沿っての「動き」とがあるのが必然だ。」²⁰⁰ (*Phys.V* 1.225b5-9)

カテゴリーアーの数については, <T15>は, 異読のある「いつか」を入れれば六個, 入れなければ五個である<T16>は異読のある「いつか」を入れれば八個, 入れなければ七個である。また<T16>では, 「実有」とそれ以外という区別ではなく, 『自然学』の課題にかかわる「動き」にかかわるカテゴリーアーと, そうでないカテゴリーアーが明確に区別されている。「動き」にかかわるカテゴリーアーは三つあり, それぞれ「性質変化」と「増大減少」と「場所的移動」, という三つの「動き」が生ずる。そして「実有」のカテゴリーアーは「動き」にかかわるカテゴリーアーのリストの中には入っていない。なぜならば, 「実有」の「生成消滅」は「変化」μεταβολήではあるが, 「動き」κίνησιςではないから, という観点がこの箇所での記述では効いてくるからである。さらに<T15>では, 「基に置かれたもの」とのかかわりに言及されている点が特徴である。そしてこの場合の「基に置かれたもの」は変化の「基に置かれたもの」と理解できる。そして<T15>においては, カテゴリーアーが「あること」εἶναιの多様性ではなく「なること」γίγνεσθαιの多様性にかかわっている点にも注目すべきであろう²⁰¹。

次に<T17>の『形而上学』Δ巻第7章 (*Met.Δ*7.1017a22-30) からのテキストを取り上げてみよう。

<T17> 「だが自らに沿って²⁰² 「あること」 εἶναι²⁰³ はカテゴリーアーのもろもろの型

¹⁹⁸ いわゆる「性質」のカテゴリーアーを表示する表現が, ここではποιότης「どのような-性」となっており, 他の箇所では列挙される場合に通常使用されるποιόν「どのような」という表現とは異なっている。

¹⁹⁹ いわゆる「場所」のカテゴリーアーを表示する表現が, ここでは「所」τόποςとなっており, 他の箇所では列挙される場合に通常使用される「どこか」πούという表現とは異なっている。

²⁰⁰ εἰ οὖν αἱ κατηγορίαι διήρηνται οὐσία καὶ ποιότητι καὶ τῷ πού[καὶ τῷ ποτέ] καὶ τῷ πρὸς τι καὶ τῷ ποσῷ καὶ τῷ ποιεῖν ἢ πάσχειν, ἀνάγκη τρεῖς εἶναι κινήσεις, τὴν τε τοῦ ποιοῦ καὶ τὴν τοῦ ποσοῦ καὶ τὴν κατὰ τόπον. (*Phys.V* 1.225b5-9)

²⁰¹ この箇所でも, カテゴリーアーが「あること」と直結しているわけではない点に, 注意すべきであろう。

²⁰² καθ' αὐτά については, 「自らに沿って」と訳した。

²⁰³ ここでは, 「あるもの」ὄν(分詞)ではなく, 「あること」εἶναι(不定法)が使用されている点にも着目すべきである。いわゆる「存在」といわゆる「繫辞」が区別されずに, 包括的に使用されていることを示唆する箇所でもある。今井[1998]p.44 における, 「包括的な用法」としての「ある」参照。

σχήματα²⁰⁴ が示すだけ言われる。なぜなら言われる〔のと同じ数〕だけ、それだけ「あること」は示すからである。つまり「述べ定められるものども」κατηγορούμενα²⁰⁵のうち一方で或るものどもは「何であるか」τί ἐστι²⁰⁶を示し、他方或るものどもは「どのようなか」を、他方或るものどもは「どれほどか」を、他方或るものどもは「なにかへむかって」を、他方或るものどもは「なすこと」または「受けること」を、他方或るものどもは「どこか」を、他方或るものどもは「いつか」を〔示す〕から、「あること」はそれらのものども〔「述べ定められるもの」ども〕のそれぞれにとつてと同じ〔数だけの〕ことを示す。なぜなら「人は「健やかになる者」である τὸ ἄνθρωπος ὑγιαίνων ἐστίν と「人は健やかになる」 τὸ ἄνθρωπος ὑγιαίνει とは一つも違いはなく「人は「歩く者」である」 τὸ ἄνθρωπος βαδίζων ἐστίν または「〔人は〕「切る者」 τέμνων [である]」と「人は「歩く」」 βαδίζει または「人は「切る」」 τέμνει も〔一つも違いはなく〕、また他のことどもについても同じようだから²⁰⁷。」²⁰⁸ (Met.Δ7.1017a22-30)

この『形而上学』Δ巻第7章におけるカテゴリーアを列挙する箇所では、カテゴリーアの数は一八個であり、また「実有」のカテゴリーアと「実有」以外のカテゴリーアが大きく二分されて区別されてはおらず、すべてが併記され列挙されている (τὰ μὲν..., τὰ δὲ..., τὰ δὲ..., τὰ δὲ...). また「実有」の「個体」と「実有」の「種」の間の区別についての言及はない。さらに「実有」のカテゴリーアを示す用語は、「何であるか」τί ἐστιν とされており、「実有」 οὐσία という用語自体は登場していない。

なお「自らに沿って「あること」」がカテゴリーアのもろもろの「型」に対応する、と

²⁰⁴ ここでの σχήματα は、(複数形なので)「もろもろの型」と訳した。いわゆる後代のカテゴリーは、この箇所を参照すると、「カテゴリーア」そのままの表現ではなく、この「型」までを含めた「カテゴリーアのもろもろの型」の方に対応していることが分かる。

²⁰⁵ κατηγορία を一貫して「カテゴリーア」と訳したことに對して、κατηγορούμενον という受動分詞形の表現は、動詞の κατηγορεῖν を「述べ定めること」と訳すこととした原義を生かして、「述べ定められるもの」と訳した。注156, 参照。

²⁰⁶ この箇所の τί ἐστι の場合のように、τί ἐστιν の語尾の付加語の ν は付ける場合と付けない場合がある。

²⁰⁷ ここでは、ἄνθρωπον βαδίζοντα εἶναι 「人が歩く者であること」(名詞+分詞+不定法) と言うこと(εἰπεῖν) も、ἄνθρωπον βαδίζειν 「人が歩くこと」(名詞+不定法) と言うことも一つも異ならない(οὐδὲν διαφέρει), という、「あること」εἶναι が付加されてもされなくても同じことが言える、とする興味深い記述がなされている。

cf. De. Int. 12.21b9-10.

²⁰⁸ καθ' αὐτὰ δὲ εἶναι λέγεται ὅσα περ σημαίνει τὰ σχήματα τῆς κατηγορίας· ὅσα χῶς γὰρ λέγεται, τοσαυταχῶς τὸ εἶναι σημαίνει. ἐπεὶ οὖν τῶν κατηγορουμένων τὰ μὲν τί ἐστι σημαίνει, τὰ δὲ ποῖον, τὰ δὲ ποσόν, τὰ δὲ πρὸς τι, τὰ δὲ ποιεῖν ἢ πάσχειν, τὰ δὲ πού, τὰ δὲ ποτέ, ἐκάστω τούτων τὸ εἶναι ταῦτο σημαίνει· οὐθὲν διαφέρει τὸ ἄνθρωπος ὑγιαίνων ἐστίν ἢ τὸ ἄνθρωπος ὑγιαίνει, οὐδὲ τὸ ἄνθρωπος βαδίζων ἐστίν ἢ τέμνων τοῦ ἄνθρωπος βαδίζει ἢ τέμνει, ὁμοίως δὲ καὶ ἐπὶ τῶν ἄλλων.

(Met.Δ7.1017a22-30)

いうことは、「あること」の多様性は、カテゴリーアーのもろもろの「型」に基づいている、ということでもあり、「あること」そのものの内部における区別、分類ではない、と読み取れる点は重要である²⁰⁹。

次に『ニコマコス倫理学』でカテゴリーアーが枚挙されている<T18>の箇所を検討してみよう。

<T18>さらにまた、「善いもの」*τὰγαθόν* は「あるもの」*ὄν* と同じ〔だけ多くの〕仕方と言われるので（すなわち、「何？」*τί*²¹⁰のうちでは、例えば「神」や「ヌース」が、そして「どのような」のうちではもろもろの「卓越性〔諸徳〕」が、そして「どれほどか」のうちでは「適度」が、そして「なにかへむかって」のうちでは「有用」が、そして「時」²¹¹ *χρόνῳ*のうちでは「好機」が、そして「所」²¹² *τόπῳ*のうちでは「適住地」が、そして〔それらとは〕異なるそのようなものどもが、〔「善いもの」だと〕言われる）、〔「善いもの」は〕一つの「全体に関しての」〔普遍的な〕なにか共通なものでないことは明らかだ。なぜならば、〔共通なものならば〕すべてのカテゴリーアーのうちには言われずに、ただ一つの〔カテゴリーアー〕のうちに〔言われる〕だろうから。²¹³ (*EN. I 6.1096a23-29*)

ここでは六個の数のカテゴリーアーが並列して列挙されている。ここでの神やヌースは定冠詞付きの単数形で示されており、その意味で、古代ギリシア語としては、文法的には述語ではなく、「善いもの」の主語となっていると理解できるが、この主語としての神やヌースが、「種」を示しているのか、それとも「個体」を示しているか、それとも「両者」なのかは必ずしも明らかではない。また<T17>では「あること」の多様性はカテゴリーアーのもろもろの「型」にもとづいている、とされていたが、この<T18>の箇所では、さらに

²⁰⁹ これは、「カテゴリーアー」の方が「存在」の基になっている、という「カテゴリーアーに基づく存在」ということを意味しており、この点、「存在のカテゴリー」というような言い方が、テキストに基づかない可能性を示唆する。

²¹⁰ この箇所では通常の「何であるか」*τί ἐστιν*ではなく、疑問代名詞「何〔?〕」*τί*一語だけで「実有」のカテゴリーアーを表示している。

²¹¹ ここで列挙されている表現は「時」*χρόνος*であって他の参照箇所のように「いつか」*ποτε*ではない。

²¹² ここで列挙されている表現は「所」*τόπος*であって他の参照箇所のように「どこか」*πού*ではない。

²¹³ *ἔτι δ' ἐπεὶ τὰγαθὸν ἰσαχῶς λέγεται τῷ ὄντι καὶ γὰρ ἐν τῷ τί λέγεται, οἷον ὁ θεὸς καὶ ὁ νοῦς, καὶ ἐν τῷ ποιῶ αἱ ἀρεταί, καὶ ἐν τῷ ποσῷ τὸ μέτριον, καὶ ἐν τῷ πρὸς τι τὸ χρήσιμον, καὶ ἐν χρόνῳ καιρὸς, καὶ ἐν τόπῳ δίαίτα καὶ ἕτερα τοιαῦτα, δῆλον ὡς οὐκ ἂν εἴη κοινόν τι καθόλου καὶ ἔν' οὐ γὰρ ἂν ἐλέγετ' ἐν πάσαις ταῖς κατηγορίαις, ἀλλ' ἐν μιᾷ μόνῃ.* (*EN. I 6.1096a23-29*)

「善いもの」 *τὰγαθόν* が「あるもの」 *ὄν* と同じだけ〔の多様性で〕言われる、とされている。

ここには「善いもの」の分類の基礎が「あるもの」の分類にあり、さらに「あるもの」の分類の基礎が「カテゴリーアーのもろもろの「型」」の分類にある、という関係も読みとれるだろう。

<T19>における『カテゴリーアイ』での叙述との比較に入る前に、以上の<T12>～<T18>までの全体をまとめておこう。

まず、省略されずに枚挙されていると考えられるカテゴリーアーの数が、<T12>では十個、<T13>では八個、<T14>では七個、<T15>と<T16>では七個、あるいはまた異読を読んだ場合には八個、<T17>では八個、<T18>は六個と、それぞれのテキストによって異なっている。これはカテゴリーアーの数が文脈によって必要なだけ列挙されていることを示していると思われる。

またカテゴリーアー *κατηγορία* という用語自体が、カテゴリーアーの枚挙の叙述の中で明記されているのは<T12>、<T14>、<T17>のテキストにおいてである。

そして、<T12>から<T18>までの諸テキストは、すべてのカテゴリーアーが並列して列挙されている場合(<T12>、<T13>、<T17>、<T18>)と、「実有」が他の諸カテゴリーアーと区別され、「実有」の優位が語られている場合(<T14>、<T15>、)，「動き」にかかわるかかわらないかによる区別がある場合(<T16>)、に分類することができる。

特に<T14>では「実有」はカテゴリーアーの中には含まれない、というように解釈できる書き方がなされている点に注意すべきであろう。

また、「付帯性」がかかわる点では<T12>の『トポス論』と<T13>、<T14>の『分析論後書』が用語法を共有している点も指摘できる。

さらに、「基に置かれたもの」 *ὑποκείμενον* への言及については、これらのカテゴリーアーを枚挙する箇所の中では、<T15>の『自然学』の中での叙述でのみ、ただし、「述べ定める」系列の「基に置かれたもの」ではなく、自然学的な「変化」の「基に置かれたもの」として明確に述べられている、という特徴を指摘することができる。

さらに、<T17>の『形而上学』Δ巻では「あること」 *εἶναι* についての言及が、また<T18>の『ニコマコス倫理学』では「あるもの」 *ὄν* への言及がなされているが、<T17>では、「あること」は「カテゴリーアーのもろもろの「型」」に対応していることが語られており、分類の基礎になっているのはむしろカテゴリーアーのもろもろの「型」の方であると理解できる。また<T18>のテキストの中の「善いもの」は「あるもの」に対応しているわけだが、テキスト中のカテゴリーアーという表現は、「あるもの」と等しいものなのか、あるいは「あるもの」の分類の基礎になっているものなのかは明確ではないので、両方のテキストとも「カテゴリーアーのもろもろの「型」」やカテゴリーアーが、直接にはいわゆる「存在の「類」」²¹⁴を示すことを確認できる箇所とはなっていない。

²¹⁴ 「存在の類」については注221に掲げたFrede,1981 の議論などを参照。

それから「実有」のカテゴリーの呼び名については、テキストによって「何であるか」(<T12>, <T13>, <T17>), 「何?」(<T18>), 「実有」(<T12>, <T14>, <T15>, <T16>) とそれぞれ異なっている。

さらにこれらの「カテゴリーの枚挙」のテキストのすべてに共通する特色として、表現上では「個体」と「種」が明確には区別されてはいない、という点を挙げることができる。

すなわち、「カテゴリーの枚挙」にかかわる諸著作における代表的議論を、『カテゴリーアイ』以外の著作で検討した場合、『カテゴリーアイ』第5章における「第一の実有」と「第二の実有」の区別に相当する観点が見出せない、ということである

また、<T12>～<T18>までのそれぞれの文脈で、カテゴリー *κατηγορία* が極めて重要な、議論の前提となる基礎的な役割を果たしている点を強調しておくべきであろう。<T12>の『トポス論』における基本概念である、付帯性・「類」・特有性・定義の四つとのかかわり、<T13>, <T14>の『分析論後書』における論証の項系列の有限性とのかかわり、<T15>, <T16>の『自然学』における「動き」とのかかわり、<T17>における「あること」とのかかわり、<T18>の『ニコマコス倫理学』における「善いもの」とのかかわり、などすべてそれぞれの考察において重視されている中心課題の探求の、基礎的な道具立てとなっている。これは見方を変えれば、仮に『カテゴリーアイ』での叙述を考慮から外すとしても、カテゴリーの枚挙とそれを基礎にした考察が、それぞれの探求分野の考察の前提としての基礎的な道具立てとして背景にあることは間違いない、ということになるだろう。

さて、以上まとめてきたもろもろの箇所と比較して、『カテゴリーアイ』第4章でのカテゴリーの枚挙の箇所は以下のような記述となっている。

<T19> 「いかなる組み合わせにも沿わずに言われるものどものそれぞれ *τῶν κατὰ μὴδεμίαν συμπλοκὴν λεγομένων ἕκαστον* が示すのは、「実有」 *οὐσία* か、「どれほどか」

ποσόν か、「どのような」 *ποιόν* か、「なにかへむかって」 *πρός τι* か、「どこか」 *πού*²¹⁵か、「いつか」 *ποτέ* か、「置かれること」 *κεῖσθαι* か、「持つこと」 *ἔχειν* か、「なすこと」 *ποιεῖν* か、「受けること」 *πάσχειν* かである。しかし、「実有」というのは、大雑把に言って *ὡς τύπων εἰπεῖν* , 例えば「人」,「馬」。また「どれほどか」は例えば「二ペーキュス」,「三ペーキュス」。また「どのような」は例えば「白」,「文字の読み書きがわかる」 *γραμματικόν*²¹⁶。また「なにかへむかって」は例えば「二倍」,「半

²¹⁵ 注178の『トポス論』における *πού*「どこ」という表現の例も参照。

²¹⁶ *γραμματική* は通常は「文法的知識」とか「文法」と訳される。しかし古代ギリシア語の場合、いわゆる言語学

分」,「より大」。また「どこか」は例えば「リュケイオンで」,「アゴラーで」。また「いつか」は例えば「昨日」,「昨年」。また「置かれること」は例えば「横たわる」,「坐る」。また「持つこと」は例えば「靴を履き終わる」,「武装し終わる」。また「なすこと」は例えば「切ること」,「焼くこと」。また「受けること」は例えば「切られること」,「焼かれること」²¹⁷。²¹⁸ (*Cat.*4. 1b25-2a4)

まず,枚挙の数は十個,これは<T12>の『トポス論』の箇所と共通であり,いわゆる「完全枚挙」の箇所となっている。枚挙されている表現も<T12>の『トポス論』の箇所の「何であるか」*τί ἐστι* が<T19>の『カテゴリーアイ』第4章では「実有」*οὐσία* となっている点と<T12>の『トポス論』の疑問形の「どこ」*ποῦ* が, <T19>の『カテゴリーアイ』の不定形の「どこか」*πού* になっている点を除くと,それぞれのカテゴリーアの表現の仕方が『トポス論』と『カテゴリーアイ』との間で正確に対応している。

また,カテゴリーア *κατηγορία* という用語自体は,『カテゴリーアイ』第4章における枚挙の叙述の中では明記されていない。これは<T13>, <T15>, <T16>, <T18>のテクストと共通の特色である。<T12>の『トポス論』第1巻第9章の「カテゴリーアの諸類」*τὰ γένη τῶν κατηγοριῶν* (*Top.* I 9.103b20-21)や, <T17>の『形而上学』Δ巻第7章の「カテゴリーアのもろもろの「型」」*τὰ σχήματα τῆς κατηγορίας* (*Met.*Δ7.1017a23)に相当する表現は, <T19>の『カテゴリーアイ』第4章においては,「いかなる組み合わせにもしたがわずに「言われるもの」ども」*τῶν κατὰ μὴδεμίαν συμπλοκὴν λεγομένων* (*Cat.* 4.1b25)

的な意味での形態論や品詞分類などの「文法」が意識され始めるのは,後代に古代ギリシア語文法として尊重された,ディオニュシオス・トラクス(前170頃-前90頃)の『文法学』以来のことであると考えられ,アリストテレス以後のことである点に鑑みて,このことばの日常語の原義を響かせると,「文字の読み書き」ということになると思われる。そこで,本稿では,通常「文法が分かること」と訳されることの多い *γραμματικόν* を,そもそも日常語で(音声言語のみでなく)文字を使用できることを示すこと,という意味で「文字の読み書きが分かること」と訳すこととした。ちなみにこの考え方で *γραμματικός* を訳すと,「文法学者」ではなく,「文字の読み書きが分かる人」ということになる。

²¹⁷ この箇所の「切る」「焼く」は,アリストテレスの父親も関わっていたと言われる「医療」関連の動詞である,とも考えられる。

²¹⁸ *τῶν κατὰ μὴδεμίαν συμπλοκὴν λεγομένων ἕκαστον ἥτοι οὐσίαν σημαίνει ἢ ποσὸν ἢ ποιὸν ἢ πρὸς τι ἢ πού ἢ ποτὲ ἢ κείσθαι ἢ ἔχειν ἢ ποιεῖν ἢ πάσχειν. ἐστι δὲ οὐσία μὲν ὡς τύπῳ εἰπεῖν οἶον ἄνθρωπος, ἵππος· ποσὸν δὲ οἶον δέπηχυν, τρίπηχυν· ποιὸν δὲ οἶον λευκόν, γραμματικόν· πρὸς τι δὲ οἶον διπλάσιον, ἥμισυ, μείζον· πού δὲ οἶον ἐν Λυκείῳ, ἐν ἀγορᾷ· ποτὲ δὲ οἶον χθές, πέρυσιν· κείσθαι δὲ οἶον ἀνάκειται, κάθεται· ἔχειν δὲ οἶον ὑποδέδεται, ὥπλισται· ποιεῖν δὲ οἶον τέμνειν, καίειν, πάσχειν δὲ οἶον τέμνεσθαι, καίεσθαι.* (*Cat.*4.1b25-2a4)

である²¹⁹。第2章には「組み合わせに沿って言われるもの」どもの例に挙げられていたのは「人は走る」²²⁰とか「人は勝つ」とかの文であり、「組み合わせなしに」言われるものどもの例に挙げられていたのは「人」、「牛」、「走る」、「勝つ」とかの語であった点で、「人」というのは文法的には述語ではなく主語であった点にも注意が必要であろう(*Cat.2.1a16-19*)。また、この箇所の「走る」「勝つ」と訳した語の原文は、不定法ではなく三人称単数形の動詞で表現されているので、古代ギリシア語の場合には文法的に動詞一語で主語も含めた表現ができるという点では、「彼は走る」「彼は勝つ」のように一語文として理解することもできる。いかなる組み合わせにもしたがわずに「言われるもの」どもは単純に述語を示すのみではなく、文中の要素となるもののうちで独立して取り出せるものを一般的に示しているわけであるから、そこには現代の文法用語における主語も含まれるし、場合によっては一語文と解釈される語も含まれる(この場合の一語文(「彼は走る」)も、単純な述語(「走る」)を示すとは言えなくなる)、と言う点が『カテゴリーアイ』における叙述で示されている点が重要である。また例えば、「存在の「類」と「述語付けの種類」の区別を考えて、『トポス論』第1巻第9章では「述語付けの種類」を扱っているが、『カテゴリーアイ』では「存在の類」を扱っている、とする Frede のような議論²²¹もあるが、少なくともカテゴリーアイを枚挙する箇所となっている『カテゴリーアイ』第4章では、いわゆる「存在の類」との直接のかかわりを示す叙述はない。そもそも『カテゴリーアイ』第2章では、「あるもの」ども *ὄντα* と「言われるもの」ども *λεγόμενα* が区別されていたわけであるから、第4章の「いかなる組み合わせにもよらずに「言われるもの」ども」は、第2章の「言われるもの」どもの方の分類に対応しており、「あるもの」どもの方には分類されないこと、すなわちその意味での「存在」に直接にはかかわるものではないこと、も確認しておく必要がある²²²。これは上述した<T12>の「諸カテゴリーアイの諸類」や、<T17>の『形而上

²¹⁹ 動詞の形の「述べ定められる」*κατηγορεῖται* という言い方は、『カテゴリーアイ』第3章と第5章に登場する(*Cat.3.1b13,22, Cat.5.2a22,28-29,31-32,37*)

²²⁰ 古代ギリシア語では、表現上、現在形と現在進行形は区別しないので、この文は、「主語」が「個体」で現在進行の意味を示す単称命題を表す文として、「[一人の] 人が走っている」とも訳せる。なお、プラトンの『ソピステース』*Soph.262C*で、最初の文の例として言及される「人は学ぶ *ἄνθρωπος μαθάνει*」の実例も、この箇所の場合と同様に、古代ギリシア語では「[一人の] 人が学んでいる」とも理解できると思われるし、文脈的にはその理解の可能性も検討する余地があるだろう。

²²¹ Frede.1981,pp.19-20 参照。

²²² 「言われるもの」が示す[ところの]当のものが問題となっている、として「存在」、またはむしろ「存在するもの」と「当のもの」とのかかわりを読み込もうとする議論もある。しかし、<T12>で取り上げた『トポス論』の議論(本稿pp.52-55)でも、「示されているもの」=「示す[ところの]当のもの」は、「あるもの」=「存在するもの」ではなく、「カテゴリーアイの諸類」である。そして「言われるもの」と「あるもの」という表現の対比が示されていることから、『カテゴリー論』においては、第2章の冒頭部分(「言われるものども」との表明)でも、第4章(「言われるものども」が示すものの分類)でも、『トポス論』における「カテゴリーアイの諸類」に相当するものが語られている、と考えられ、「あるもの」=「存在するもの」が語られているのではない、と理解できる。

学』4巻第7章の「カテゴリーのいろいろの「型」という表現からも、「諸類」やいろいろの「型」ではあっても、いわゆる「存在の類」という内容を直接には示してはいなかったことと共通する特色である。その際のカテゴリーとはむしろ「述べ定め」と理解した方がよいものであると考えられ、この点でアリストテレスの用語法としては、カテゴリーが直接に最高類概念であり、範疇である、というように短絡的に理解すべきではない、といった点も示唆される。

また、この『カテゴリーアイ』第4章では、すべてのカテゴリーが並列されて列挙されており、第5章での叙述と異なり、「実有」と「実有」以外のカテゴリーが区別されてはおらず、「実有」の優位も示されていない。これは、本章(3-1)で問題にしたカテゴリー枚挙の箇所の中では、<T12>,<T13>,<T17>,<T19>のテキストと共通する特徴である。先に指摘した<T14>のように「実有」はカテゴリーの中には含まれない、というように解釈できる書き方は、『カテゴリーアイ』第4章ではなされていない。また、この第4章は「付帯性」とのかかわりにも言及していない。これは<T15>,<T16>,<T18>と共通の特徴である。『カテゴリーアイ』では、第4章ばかりでなく、「付帯性」という言い方を採用しても文脈的にはおかしくない第2章や第5章でも「付帯性」という用語は使用されておらず、「のうちにある」²²³という表現が一貫してなされている。これは用語法の側面からの特色ともなっている事態である。

また、『カテゴリーアイ』第2章や第5章の叙述で重要な役割を果たす、「基に置かれたもの」への言及が第4章ではなされていない。この特色は、『自然学』第1巻の<T15>を除く、<T13>,<T14>,<T16>,<T17>,<T18>の、本稿で取り上げた他のすべての枚挙のテキストと共通である。

また、『カテゴリーアイ』第4章で語られているのは「言われるもの」についてであって、「あるもの」とのかかわりについては触れられてはいない。このことが示す特徴は<T17>,<T18>を除く、<T12>,<T13>,<T14>,<T15>,<T16>のテキストと共通するものである。これは『カテゴリーアイ』の中では、「あるもの」の四分類が語られている第2章や、「第一の実有」があらぬのなら、なにものもあらぬ、とされている第5章で、「あるもの」とのかかわりが濃密に語られていることとは異なる扱い方である。これは「カテゴリーの枚挙」という事態が、必ずしも「あるもの」²²⁴と直接にはかかわらない、という点を示唆している、と思われる。

さらに、『カテゴリーアイ』第4章では、「実有」のカテゴリーの呼び名は、*οὐσία*であり、これはテキストの<T12>,<T14>,<T15>,<T16>と共通である。そして『カテゴリーアイ』第4章では「何であるか」という表現が「実有」のカテゴリーを示す際には使用されていない。この「何であるか」は、『カテゴリーアイ』の中では第1章で、

²²³ 「のうちにある」という事態はしばしば「内属性」と表現されてきた。この「内属性」という表現は意味の上からはそのように理解してもよいと思われるが、*ἐνί*「ある」が使用されている点を重視して本稿では(「属する」という系統のことばを使わず)、文字通り「うちにある」と表現することとする。

²²⁴ ここでも「存在のカテゴリー」「存在の類」という言い方が、問題を孕むことを示唆している。本稿第3章巻第4節(3-4)p. 67, および注209, 注214参照。

「動物であること」が「何であるか」そのロゴス〔説明規定〕を示そうとする場合に使用されており (*Cat.*1.1a1-6), また第5章では, 「第一の実有」が「何であるか」を示そうとするなら, 「類」よりもエイドス〔「種」〕を示すなら, いっそうよく知られるものとして, あるいは「特有なもの」として示すことになるだろう, とされている箇所 (*Cat.*5.2b7-14) に登場している²²⁵ が, 第3章でも第5章でも「何であるか」は「実有」のカテゴリーアーを示すための用語としては用いられてはいない。

さらに<T19>のテキストを引用した, 『カテゴリーアイ』第4章のカテゴリーアー枚挙の範囲内では, 「実有というのは, 大雑把に言って, 例えば人, 馬」 (*Cat.*4.1b27-28) という記述を見ても分かるように, 「実有」の「個体」と「種」の表現上の区別がなされているわけではない。これは『カテゴリーアイ』第5章において極めて明確に「実有」の「個体」と「種」の区別がなされて語られているのとは異なる点である。これは上述した<T12>～<T18>の箇所の検討で言及した, 『カテゴリーアイ』以外でのカテゴリーアーの枚挙のすべての箇所と共通する特色である。すなわち『カテゴリーアイ』第5章で表明されている, 「第一の実有」と「第二の実有」の区別は, 第4章のカテゴリーアーを枚挙する箇所では明示されてはいない, ということになる。

以上指摘した, 『カテゴリーアイ』第4章でカテゴリーアーが枚挙されている箇所 (<T19>) の記述上の特色は, 全体として『カテゴリーアイ』以外の箇所でカテゴリーアーが枚挙されている箇所 (<T12>～<T18>) と共通する内容を数多く含んでおり, 他の箇所での考察の枠組みの内に十分に入る叙述となっている, ということが確認できる²²⁶。このことは, 仮に『カテゴリーアイ』第4章がなかったとしても, 『トポス論』をはじめとする他の諸著作から, カテゴリーアーの枚挙についての十分な情報が得られうることを示していると思われる。他方で, 以上の考察から, 「存在の「類」」にかかわる議論は『カテゴリーアイ』第2章 (「あるもの」の四分類) で, 「個体」と「種」・「類」の峻別は『カテゴリーアイ』第5章 (「個体」が「第一の実有」, 「種」・「類」が「第二の実有」) で, それぞれ極めて限定的に扱われており, 他の諸著作にはない, 『カテゴリーアイ』に独自の見解を示している, という点も明らかになる²²⁷。

²²⁵ ここでは, 「第一の実有」, すなわち「個体」について「何であるか」が言える, しかも, 「類」よりも「種」を示す方がより言える, とする, 他の著作には明示されていない考え方が提出されている。『トポス論』第1巻第9章 (*Top.* I 9.103b20-39) では, 「人」(ただしこの場合の人は「種」と「個体」の両者を示していると思われる) について「類」である「動物」を言えば, 「何であるか」が示せる, という記述となっている。本稿第3章第1節pp. 55-57の<T12>についての考察, 参照。その際, 『トポス論』での「それ自ら」という表現は『カテゴリーアイ』第5章を背景にしなければ, 「個体」と区別され峻別された意味での「種」と受け取る必要はない。

²²⁶ なお, <T12>～<T18>までのそれぞれの文脈で, カテゴリーアー *κατηγορία* が極めて重要な, 議論の前提となる基礎的な役割を果たしていたのに対し, 『カテゴリーアイ』第4章では, いわばこれらの箇所の前提そのものが語られていると理解できるにもかかわらず, その背景説明にかかわるような叙述はなく, 各カテゴリーアーが淡々と枚挙されている点が特色であると言える。一種の「覚え書」のような様相を呈している, という特徴がここにも現れている。

²²⁷ この極めて限定的な叙述が, 後代の哲学的議論に大きな影響力を持った, ということになる。

3-2. 「存在の類」と「あるもの」についての分類

前節3-1でも言及したいいわゆる「存在の類」とのかかわりに注目するなら、『カテゴリーアイ』の中でこの「存在の類」に相応しいものに言及している箇所は、「言われるもの」の十個のカテゴリーアイについての議論の箇所よりも、むしろ第2章における「あるもの」の四分類に相当する。そこで、次に『カテゴリーアイ』第2章における「あるもの」の四分類を、「あるもの」を分類することに関連した言及のある他著作の場合と比較し、考察することへと歩みを進めてみることにしよう。

アリストテレスは様々な箇所で「あるもの」 *ὄν* の多様性の表明とその分類について記述している。多様性の表明として最も著名なのは、『形而上学』における「「あるもの」は様々な言われる」 *τὸ ὄν λέγεται πολλαχῶς* という成句²²⁸である。『形而上学』以外にも、それぞれの文脈で「あるもの」に言及し、「あるもの」の分類を行っている。本節3-2では、『カテゴリーアイ』第2章での「あるもの」の分類をどのように把握すべきなのかを考察するためにも、諸著作における「あるもの」の分類の代表的箇所を検討し、これを『カテゴリーアイ』の場合と比較する、という手法をとることとする。

アリストテレスの著作集から「あるもの」 *ὄν* を「数えられる形」で分類している代表的な箇所を抜き出して掲げれば、(a)『分析論前書』1巻第27章における三分類

²²⁸ *τὸ ὄν λέγεται πολλαχῶς* にかかわる箇所としては、『形而上学』Γ巻第2章 (*Met. Γ2.1003a33-b19*)、『形而上学』Δ巻第7章 (*Met. Δ7.1017a7-b9*)、『形而上学』E巻第2章 (*Met. E2.1026a33-b4*)、『形而上学』Z巻第1章 (*Met. Z1.1028a10-31*)、『形而上学』K巻第3章 (*Met. K3.1060b31-1061b17*)、等が挙げられる(なお、『形而上学』Z巻第1章の議論については、本稿第3章第1節pp.55-57における、<T12>についての考察も参照)。

そして上述の諸箇所には、少なくとも以下の3種類のパターンが見てとれる。

1. 全体の分類 (E巻第2章と関連)
2. カテゴリーアイに応じた分類 (Z巻第1章と関連)
3. プロス・ヘンの構造を示す分類 (Γ巻第2章、K巻第3章と関連)

このうち「プロス・ヘンの構造を示す分類」は、必ずしも分類の数を、いくつと「数えられる形の分類」になっていないので、以下の(a)～(g)までの考察からはあえて除外したが、以下のような興味深い内容を示している。まず、『形而上学』Γ巻第2章 (*Met. Γ2.1003b5-10*)では、*τὸ ὄν λέγεται πολλαχῶς* の内容的リストとして、「実有」*οὐσίαι*、「実有」の諸パトス〔諸属性〕*πάθη*、「実有」への道*ὁδός*、「実有」の諸消滅*φθοραί*、「実有」の諸欠如*στερήσεις*、「実有」の諸「性質」*ποιότητες*、「実有」を作るものども*ποιητικά*、または生むものども*γενητικά*、「実有」との関係において言われるものどものこれら〔生成・消滅・欠如・性質・等々〕*τῶν πρὸς τὴν οὐσίαν λεγομένων*、これらのうちの或るものの諸否定*ἀποφάσεις*、または「実有」の諸否定、などが列挙されている。そして『形而上学』K巻第3章 (*Met. K3.1060b31-1061b17*)では、「あるもの」としての「あるもの」のパトス〔属性〕*πάθος*、「あるもの」としての「あるもの」の所有*εἶς*、「あるもの」としての「あるもの」の状況*διάθεσις*、「あるもの」としての「あるもの」の「動き」*κίνησις*、などが列挙されている。これらの箇所での「プロス・ヘンの構造を示す分類」にかかわる言及は、「数えられる形の分類」になっていない、ということも含めて、まるで、十個、八個、または六個のカテゴリーアイを基にした「あるもの」の分類以前の、原初的なありさまを呈しているがごとくである。

(*An.pr.* I 7.43a25-43), (b)『自然学』第2巻第1章における二分類 (*Phys.* II 1.192b8-20), (c)『動物の発生について』第2巻第1章における分類 (*GA* II 1.731b24-25), (d)『形而上学』*A*巻第7章における四分類 (*Met.* *A*7.1017a7-b9), (e)『形而上学』*Z*巻第1章における二分類 (*Met.* *Z*1.1028a30-31), (f)『形而上学』*A*巻第2章における二分類, (g)『形而上学』*M*巻第3章における二分類 (*Met.* *M*3.1078a30-31),などを挙げることができる。

これらの箇所を (h)『カテゴリーアイ』第2章において「あるもの」を四分類している箇所 (*Cat.* 2.1a20-b6)と比較検討して考察してみよう。

- a.『分析論前書』第1巻第27章(*An.pr.* I 27.43a25-43)における「あるもの」の三分類
- a1.「他のいかなるものについても真には全体的に述べ定められる...ことはなく,それらについて他のものが「述べ定められる」もの」²²⁹: 具体的事例はカリアース(*An.pr.* I 27.43a25-29)
- a2.「自らは他のものについて述べ定められるが,それらについて他のものどもがより先に述べ定められることはないもの」²³⁰: 具体的事例は明記されてはいない²³¹(*An.pr.* I 27.43a29-30)
- a3.「自らが他のものどもに言い示されもするし, また別のものどもがそれらに言い示されもするもの」²³²: 具体的事例は「人」(*An.pr.* I 27.43a30-32)

この箇所では「あるもの」として,究極の主語としての「個体」(a1)と,主語にも述語にもなるものとしての「種」・「類」(a3)と,究極の述語としての「他のものについて述

²²⁹ κατὰ μηδενὸς ἄλλου κατηγορεῖσθαι ἀληθῶς καθόλου ... κατὰ δὲ τούτων ἄλλα

(*An.pr.* I 27.43a25-29)

²³⁰ αὐτὰ μὲν κατ' ἄλλων κατηγορεῖται, κατὰ δὲ τούτων ἄλλα πότερον οὐ κατηγορεῖται· (*An.pr.* I 27.43a29-30)

²³¹ この(α2)での具体例としてまず想定されるのは「最上の類」(いわゆる「最高類」)であるが,この解釈でよいかどうかについては注意を要すると思われる。すなわちもしも「不可分の種」(いわゆる「最下種」)がここでの分類では「類種系列の最も下のもの」として(α3)に入るのだとすれば,「最上の類」もそれに対応して「類種系列の最も上のもの」として(α3)に入る,ということにはならないだろうか。そして「不可分の種」の下に究極の主語としての「個体」(α1)があるように,「最上の類」の上に究極の述語(α2)がある,ということにはならないのであろうか。その場合は(α2)での具体例として述語でしかなく,しかも「類」ではない「あるもの」*ὅν*や「一つのもの」*ἓν*を考えてみる余地はないだろうか。

²³² αὐτὰ ἄλλων καὶ αὐτῶν ἕτερα (*An.pr.* I 27.43a30-31)

べ定められるのみのもの」(a2)が区別されている。そしてここでは、(a1)の「個体」や (a2)の究極の術語に相当するものを除いた、(a3)の「種」・「類」の間で「論証」が成立する、とされており、この(a3)こそが『分析論前書』の探求課題の範囲となることをも示している。「個体」と「他のものについて述べ定められるだけのもの」が、一般の「種」や「類」から区別されて明記されていることは特筆すべきことであるが、この箇所では「個体」が「あるもの」の一つとして区別はされているが、『カテゴリーアイ』第5章のように「個体」の優位が示されているわけではなく、むしろこの究極の主語(a1)としての「個体」は、究極の述語(a2)とともに、「論証」の考察対象からは外されている。当面の考察の対象は(a3)の「種」・「類」の相互間に成立する「論証」を扱うことなのである。しかし「あるもの」*ὄν*と「一つのもの」*ἐν*はこの「最高類」を含めても「類」*γένος*ではない、とするのが、「あるもの」*ὄν*を五つの「最大の類」*μέγιστα γένη*のうちの一つとする、先行するプラトーンや後代のプロティノスらの見解とは異なる、アリストテレス独特の見解でもある。

b. 『自然学』第2巻第1章(*Phys. II* 1.192b8-20)における「あるものども」*τὰ ὄντα*の二分類

b1. 「自然によって *φύσει* あるものども」：具体例は、動物、植物、四元素

b2. 「他の諸原因のゆえに *δι' ἄλλας αἰτίας* あるものども」：具体例は、寝台、衣

ここでは「あるものども」を実質的に自然物と人工品に大きく二分していることが特色である。そして(b1)の「自然によってあるものども」の実例は、本稿3-3で取り扱う「実有」を列挙する際の実例(B1など)とも重なっており、「実有」が人工品ではなく、自然と極めて密接なかかわりを持つことを示唆している²³³。そしてこのような場合の列挙の実例の内実を考えると、ここでの動物という表現は、文字通り動物という「類」を示しているというよりは、むしろ実質的には動物の「個体」を中心にして示す表現となっているのではないか、と思われる。というのは動物や植物は消滅するのであり、その場合には「個体」は消滅するが、「種」や「類」は永遠的である、という叙述には当てはまらないので、この場合の動物は実質的にはむしろ「個体」を示すと考えた方がよい、とも思われるからである。

²³³ この点については、斎藤[1978]（特に「あえて言えば、人工品は疑似実体なのである。」の箇所(p.16)）、参照。

c. 『動物の発生について』第2巻第1章 (*GA*II 1.731b24-25) における「あるものども」

τὰ ὄντα 二分類

c1. 「永遠でそして神的な ἀίδια καὶ θεῖα あるものども」

c2. 「あることもあらぬことも許されるものども ἐνδεχόμενα καὶ εἶναι καὶ μὴ εἶναι」

これは「あるもの」を「永遠的なもの」と「消滅的なもの」とに分類する観点の表明である。「実有」を区別する際にも同様の視点が『形而上学』Λ巻第1章 (*Met.*Λ1.1069a30-b1)などにもある。

d. 『形而上学』Δ巻第7章 (*Met.*Δ7.1017a7-b9)における「あるもの/あること」 ὄν / εἶναι の四分類²³⁴

d1. 「付帯性に沿って κατὰ συμβεβηκός あるもの」

d2. 「それ自らに沿って καθ' αὐτό あるもの」, カテゴリーーのもろもろの「型」が示すだけある²³⁵

d3. 「真 ἀλητές であるもの, 偽 ψεῦδος であるもの」

d4. 「可能性において δυνάμει あるもの, 完成態において ἐντελεχείᾳ あるもの」

この『形而上学』Δ巻第7章と同様の分類は、『形而上学』E巻 (*Met.*E2.1026a33-b2)でもおこなわれており,そしてΔ巻第7章では,(d2)がさらに説明され,細分化されて,<T17>に挙げたカテゴリーーのもろもろの「型」に対応して八個に分類されることが説かれる。

e. 『形而上学』Z巻第1章 (*Met.*Z1.1028a30-31)における「あるもの」 ὄν の二分類

e1. 「端的に「あるもの」」 ὄν ἀπλῶς

²³⁴ 『形而上学』Δ巻第7章 (*Met.*Δ7.1017a7-b9)では,導入部分には分詞の ὄν (「あるもの」)が使用されているが,議論のほとんどは不定法の εἶναι (「あること」)についてなされている。ὄν と εἶναι のかわりについて反省させられる箇所である。「存在」と「繫辞」の二つの側面が包括的に使用されている点についての,注203も参照。

²³⁵ 「それ自らに沿って καθ' αὐτό あるもの」, カテゴリーーのもろもろの「型」が示すだけある」,については,本稿3-1の用例<T17>pp.61-62での検討の箇所,および注203-207,注209も参照。

e2. 「或る「あるもの」」 τὸ ὄν

この箇所は文脈的に「実有」のカテゴリーとそれ以外のカテゴリーを区別し、「実有」は「端的に「あるもの」」だが、それ以外のものは「或る「あるもの」」である、としている箇所である。この e. の分類については、以下に検討する〈T20〉(pp.80-83)のテキストも参照。

f. 『形而上学』A巻第2章 (Met.A2.1069b15-16) における 「あるもの」 ὄν の二分類

f1. 「可能性において δυνάμει 「あるもの」

f2. 「実働態において ἐνεργείᾳ 「あるもの」

g. 『形而上学』M巻第3章 (Met.M3.1078a30-31) における 「あるもの」 ὄν の二分類,

g1. 「完成態において ἐντελεχείᾳ 「あるもの」

g2. 「素材的な ὑλικῶς 「あるもの」」²³⁶

「完成態において ἐντελεχείᾳ あるもの」については、d2 の分類箇所では、「可能性において δυνάμει あるもの」と対比されていたが、この g の分類箇所では、「素材的な ὑλικῶς 「あるもの」」と対比されており、文脈に応じて異なっている点にも注目すべきである。そしてこの「可能性において」δυνάμει と「素材的な」ὑλικῶς の、内容的な親近性の可能性を示唆している。

これらの(a)から(g)の分類の仕方を総合的にまとめてみると、それぞれの文脈で独自の別の切り口から独立に「あるもの」を分類していることが分かる。それぞれの分類が上位分類や下位分類を形成しているわけではない点にも注意すべきであろう。また「「あるもの」は様々に言われる」τὸ ὄν λέγεται πολλαχῶς とは明記されていない分類箇所もかなりある。他方で、「実有」[「実有の実有」]であるかどうかはしばしば問題となる場合もある「類」と「種」が、「あるもの」ὄν の分類の中には問題なく含まれることも確認できる。

²³⁶ この「素材的な ὑλικῶς 「あるもの」」とは、いわゆる「覚知的な」νοητή 素材 (Met.Z10.1036a9-12)を示すものと考えられる。

さて、以上の考察を踏まえてここで『カテゴリーアイ』第2章での叙述を検討してみることとしよう。

h. 『カテゴリーアイ』第2章 (*Cat.2.1a20-b6*)の四分類

h1. 「或る「基に置かれたもの」 *ὑποκείμενον* に関して言われるが、いかなる「基に置かれたもの」のうちにもあらぬもの」 (*Cat.2.1a20-21*)²³⁷ : 具体的实例は「人」

h2. 「「基に置かれたもの」のうちにはあるが、いかなる「基に置かれたもの」に関しても言われないもの」 (*Cat.2.1a23-24*)²³⁸ : 具体的实例は「その或る「文字の読み書き」」, 「その或る白」

h3. 「「基に置かれたもの」に関して言われもするし, 「基に置かれたもの」のうちにもあるもの」 (*Cat.2.1a29-b1*)²³⁹ : 具体的实例は「知識」

h4. 「「基に置かれたもの」のうちにもあらず, 「基に置かれたもの」に関して言われもしないもの」 (*Cat.2.1b3-4*)²⁴⁰ : 具体的实例は「その或る人」

この(h)の『カテゴリーアイ』での分類の仕方も, 「基に置かれたもの」を中心に, 「に関して言われる」ということと「のうちにある」ということを基準にして, 上述した(a)から(g)のそれぞれの分類の仕方とは観点を異にする, もう一つの独自の独立した切り口から「あるもの」を分類している, ということが分かる(ただし, (a)の分類と観点を一部共有する点もある)。しかしここでも「個体」は, 区別はされているが, この第2章の範囲内では, 第5章とは異なり, 「個体」の優位が語られているわけではなく, 四つに区別された「あるもの」はそれぞれ並位的に列挙されている。『カテゴリーアイ』の範囲内では, この第2章での分類についての言及以外に (h2) についての細かい話が具体的になされているわけではない。むしろ(h2)は, <T12>で取り上げた『トポス論』において, 「白色」が目の前に現れている場合の「話題とされているもの」に類似している。ただし『トポス論』でのカテゴリーアの枚挙にかかわる叙述は, 「あるもの」 *ὄν* という表現に直接にはかかわってはいなかった点にも注目すべきであろう。

²³⁷ τὰ μὲν καθ' ὑποκειμένου τινος λέγεται, ἐν ὑποκειμένῳ δὲ οὐδενὶ ἐστίν, (*Cat.2.1a20-21*)

²³⁸ τὰ δὲ ἐν ὑποκειμένῳ μὲν ἐστίν, καθ' ὑποκειμένου δὲ οὐδενός λέγεται, (*Cat.2.1a23-24*)

²³⁹ τὰ δὲ καθ' ὑποκειμένου τε λέγεται καὶ ἐν ὑποκειμένῳ μὲν ἐστίν, (*Cat.2.1a29-b1*)

²⁴⁰ τὰ δὲ οὔτε ἐν ὑποκειμένῳ ἐστίν οὔτε καθ' ὑποκειμένου λέγεται, (*Cat.2.1b3-4*)

以上の考察から、『カテゴリーアイ』の独自性という問題の核心は、『カテゴリーアイ』第4章での記述も含めた、カテゴリーアの列挙をする諸箇所には見出せなかった、「実有」を「個体」と「種・類」の2種類に区別する、という『カテゴリーアイ』第5章における「実有」 οὐσία の分類の仕方が、他の諸著作における「実有」の分類とのかかわりの中でどのように位置づけられるのか、ということに絞られてくることとなる。

3-3. 「第一の実有」, 「第二の実有」の区別と「実有」の分類

本稿3-1での考察から、〈T12〉～〈T19〉の、「カテゴリーアの列挙」にかかわる諸テキストからは、「個体」を「種・類」と区別し峻別して明示しようとする視点がない、という点を指摘することができた。そして、この点は『カテゴリーアイ』第5章においてなされている、「第一の実有」が示す「個体」と、「第二の実有」が示す「種・類」との区別が、他の著作中でカテゴリーアについての叙述のある箇所と、『カテゴリーアイ』第4章では共になされてはいない、という一つの重要な事実を示している。そしてこれは『カテゴリーアイ』第4章でカテゴリーアが列挙されている箇所で、「実有」が「大雑把に言って人や馬」といる箇所では、「種」を示す語である「人」を介して、「その或る人」と「人」が大雑把にひとまとめに把握されているように読めるし、また「種」を示す語によって「個体」をも示しているようにも読めるので、「個体」と「種」の表現上の区別がなされていないと思われることとほぼ対応した扱いが、他の著作中でもなされている、ということである。すなわち『カテゴリーアイ』第5章では、第4章と比較して、「個体」と「種・類」の区別がなされ、また「第二の実有」である「種・類」に対する「第一の実有」である「個体」の優位が語られ、さらに「第二の実有」とされている「種」と「類」を比較した際には、「種」の「類」に対する優位が語られる、という仕方では、「実有」の内実について、『カテゴリーアイ』第4章や、他の著作でカテゴリーアが枚挙されている箇所よりも、内容的にさらに詳細に踏み込んだ議論を展開している、ということになる。この「踏み込んだ議論」こそが『カテゴリーアイ』第5章の大きな特徴であるし、関連した他の箇所にはない独特な記述ということになる。

では「実有」を「個体」と「種・類」に区別し分類する、という視点は、各著作における「実有」の各種の分類と比較した場合、どのように位置づけることができるのであろうか。本第3節では『カテゴリーアイ』第5章におけるような「個体」と「種・類」の区別が、他の箇所で「実有」を分類する際にも見出せるかどうか、という一点に絞って、「実有」の分類という観点から、『カテゴリーアイ』における「個体」としての「第一の実有」についての考察をさらに進めてみることにする。

以下、アリストテレスにおける「実有」の代表的な分類の実例を掲げて、比較のための材料を確保することとする。

まず、『「たましい」について』の分類は、以下のようになっている。

A.『「たましい」について』（DA.Ⅱ 1.412a6-b17）における「実有」

※「あるもの」どものなにか一つの「類」が「実有」

A1.素材,「かたち」すなわちエイドス,「それら〔素材と「かたち」/エイドス〕からのもの」

A1-1.「素材としての実有」/「それ自らでは「なにかこれ」ではない」/素材は可能能力

A1-2.「かたち」そしてエイドス/「これに関してすでに「なにかこれ」と言われる」/エイドスは完成態/「それ」〔中性形なのでエイドスを指す〕は二様,知識としてと「観究めること」²⁴¹として

A1-3.「それら〔素材と「かたち」/エイドス〕からのもの」

A2.「ソーマ〔物体〕」,「たましい」

A2-1. 諸ソーマ〔物体〕/「基に置かれたもの」にかかわるもののうちの一つではなく,むしろ「基に置かれたもの」や素材としてのもの/最も「実有」であると人々が思っているもの

A2-1-1. 諸自然〔的物体〕/「他のもの」ども〔人工品など〕の諸始源/特に最も「実有」であると人々が思っているもの

A2-1-1-1.「生命を持つ自然的ソーマ〔物体〕/生命に与かる自然的実有」/「実有/合成体としての実有」/「このようなソーマ〔物体〕」

A2-1-1-2.「生命を持たない自然的ソーマ〔物体〕」

A2-1-2.「他のもの」ども〔人工品など〕

A2-2.「たましい」/「可能性において生命を持つ自然的ソーマ〔物体〕のエイドスとしての実有」/完成態/「そのような「ソーマ〔物体〕」の完成態」/「知識として」の意味での完成態/「可能性において「いのち」を持つ自然的なソーマ〔物体〕の第一の〔最初の/第一次の/第一段階の〕完成態 *έντελέχεια ή πρώτη*」/「道具〔器官〕をそなえた自然的なソーマ〔物体〕の *σώματος φυσικοῦ ὀργανικοῦ* 第一の完成態」/「ロゴスにかかわる実有」/「「このようなソーマ〔物体〕」における「あるとは何であったのか」/「それ自身のうちに運動と静止の原理を持つこのような自然的〔ソーマ〔物体〕〕の「あるとは何であったのか」およびロゴス

このA.の箇所では,「個体」か「全体に関してのもの」〔普遍〕か,といったことは問題になっていない。また,ソーマ〔物体〕は「基に置かれたもの」*ὑποκείμενον* になっているが,「たましい」は「基に置かれたもの」にはなっていない,という特徴がある。

²⁴¹ 「観究めること」については,注2,注15,注19,参照。

B.『動物部分論』(PA I 5.644b22-24) における「実有」の分類

B1. 「自然によって存立する実有」

B1-1. 「永遠に不生不滅なもの」/崇高で神聖な「あるもの」(天体) <β 1>

B1-2. 「生成消滅に与かるもの」/消滅すべき植物や動物

そして, 主要な用語を集中的に扱った『形而上学』Δ巻第8章では, 以下のようになっている。

C.『形而上学』Δ巻第8章 (Met.Δ8.1017b10-26) における「実有」の分類

C1. 他のものに関して決して言われない「究極の「基に置かれたもの」

(Met.Δ8.1017b23-24)

C1-1. 端的な諸ソーマ〔諸物体〕/「土」, 「火」, 「水」, 「そのようなものの限りのもの」ども (Met.Δ8.1017b10-11)

C1-2. 全般的に諸ソーマ〔諸物体〕 (Met.Δ8.1017b11)

C1-3. 全般的に諸ソーマ〔諸物体〕から合成された, 諸動物, 神的なものども (Met.Δ8.1017b11-12)

C1-4. 「それらのもの」(諸動物, 神的なものども)の諸「部分」 (Met.Δ8.1017b12-13)

C2. 「「なにかこれ」であり, そして「離されうる」ところのもの」, それぞれのものの「かたち」すなわちエイドス (Met.Δ8.1017b24-26)

C2-1. 「「基に置かれたもの」に関して言われない限りのそのようなもののうちにそなわる ἐνυπάρχον 「「あること」の原因」 αἴτιον τοῦ εἶναι, 〔動物における〕「たましい」 (Met.Δ8.1017b14-16)²⁴²

C2-2. 「部分な限りでうちにそなわって, そのように限定されるものどものうちにあり, そして「なにかこれ」を指し示すもの」「なくなれば全体がなくなるところのもの」, 面 (ソーマ〔物体〕における), 線, 数 (すべてにおける) (Met.Δ8.1017b17-21)

C2-3. 「あるとは何であったのか」, 「そのロゴス〔説明規定〕が定義であるところのもの」 (Met.Δ8.1017b21-23)

この箇所では以下のいくつかの際立った特徴が読み取れる。まず分類の項目の中に素材 ὕλη という表現が登場していない。「全体に関してのもの」〔普遍〕 καθόλου や「類」 γένος

²⁴² この具体例として「たましい」が掲げられている, C2-1.の分類項目は, 『形而上学』Z巻における「第一の実有」の内実の解釈と密接に関係していると考えられる。本稿第2章の結論部分(2-結)pp.47-49, 参照。また「「あること」の原因」 αἴτιον τοῦ εἶναι という表現の仕方も, 事柄の重要性を示していると思われる。

についての言及もない。実働態 *ἐνέργεια* という表現もない。そしてこのΔ巻8章では、「実有」の「個体」との「種・類」の区別を見出すことも出来ない、ということが確認できる。

D.『形而上学』Z巻第2章, 第3章 (*Met.Z2-3.1028b8-36*) における「実有」の分類

D1. 感覚されうる「実有」(1028b31): 動物, 植物, それらの部分, 火, 水, 土, 天空, 星, 月, 太陽

※D1. にリストアップされているものの実質内容は, すべて自然的な「実有」の「個体」と理解できる。

D2. 諸エイドス(1028b20),

D3. 数学的なものども(1028b20): 「ソーマ〔物体〕の限界」, 面, 線, 点, 単位

D4. 四つの「実有」

D4-1. 「あるとは何であったのか」 *τὸ τί ἦν εἶναι* (1028b34)

D4-2. 「全体に関してのもの」 *τὸ καθόλου* (1028b34)

D4-3. 「類」 *γένος* (1028b35)

D4-4. 「基に置かれたもの」 *ὑποκείμενον* (1028b36)

D4-4-1. 素材(1029a2)

D4-4-2. 「かたち」(1029a3), エイドス(1029a29), / 「なにかこれ」(1029a28)そして「離されうるもの」(1029a27-28)

D4-4-3. 「それら〔両者〕からのもの」 *τὸ ἐκ τούτων* (1029a3), / 「なにかこれ」(1029a28)そして「離されうるもの」(1029a27-28)

※「なにかこれ」そして「離されうるもの」という特徴は, D4-4-2. と D4-4-3. の両者に当てはまる。

D5. 「或る離されうる実有」 *τις χωριστὴ οὐσία* (1028b30)

この『形而上学』Z巻第2章, 第3章における「実有」の分類では, D4-3. で「類」が独立の分類項目となっている点で, 「実有」の「個体」と解釈できるものと「類」との間の区別を見出すことはできる。また, 素材 *ὑλη* がリストアップされている点が, 前項のC. の諸分類とは異なる。またD5. において「或る離されうる実有」もリストアップされている点が特徴的である。

E.『形而上学』H巻第1章, 第2章 (*Met.H1-2. 1042a3-1043a28*) における「実有」の分類

E1. すべての人々によって等しく認められている「実有」(1042a6) 自然的〔諸実有〕(1042a8) / 〔感覚されうる「実有」〕火, 土, 水, 空気, その他の単純「実有」, 植物, 植物の諸部分, 動物, 動物の諸部分, 天, 天の諸部分

※E1. にリストアップされているものの実質内容は, すべて自然的な「実有」の「個体」も含む, と理解できる。

E2. 或る人々が独自の見地からその説を唱えている或る「実有」(1042a7)

E2-1. 諸「エイドス」(1042a11-12)

E2-2. 数学的諸対象(1042a12)

E2-3. 「あるとは何であったのか」(1042a13)

E2-4. 「基に置かれたもの」(1042a13)

E2-4-1. 素材(可能性としての「実有」/実働態においては「なにかこれ」ではないが可能性においては「なにかこれ」)

E2-4-2. ロゴス λόγος, 「かたち」 μορφή, 実働態(実働態としての「実有」/「なにかこれ」であるところのものでロゴスにおいて「離されうる」)

E2-4-3. 「それら〔素材とロゴス〕からのもの」(生成と消滅がある(C2-4.のうちではC2-4-3.のみ)/端的に離されうる(〔C2-4.のうちではC2-4-3.のみ))

E2-5. 「類」(1042a14) × /「類」よりも, 諸エイドス〔諸「種」〕/B巻における問い(最上の「類」(最高類)なのか不可分のエイドス〔「種」〕(最下「種」)なのか, という問い)に対する答えの一つ/『カテゴリーアイ』に対応させると「第二の実有」の内部での優劣, すなわち「種」の「類」に対する優越について語っている, とも受け取れる。

E2-6. 「全体に関してのもの」(1042a14) × /「全体に関してのもの」よりも, もろもろの「それぞれに沿ってのもの」/『カテゴリーアイ』に対応させると「第一の実有」の「第二の実有」に対する優位について語っている, とも受け取れる。ただし, この箇所では「全体に関してのもの」は「実有」ではない, としている点が「第二の」ではあるが「実有」としている『カテゴリーアイ』の理解とは異なっている。

※ × の印の付いたものは, 候補としてリストアップはされているが, 「実有」ではない, とされているものである。

これらのE.の箇所では, D5.でリストアップされていた, 「或る離されうる実有」〔「動かされえない実有」〕について, 直接には言及されていない点にも着目すべきであろう。この点は, 『形而上学』Z巻と『形而上学』H巻の間の, 探求課題の相違の問題としても, 捉えられるかもしれない。

F. 『形而上学』A巻における3種類の「実有」の分類(F1. 『形而上学』A巻第1章

(Met.A1.1069a26-30) / F2. 『形而上学』A巻第1章(Met.A1.1069a30-b2) / F3. 『形而上学』A巻第6章(Met.A6.1071b3-6)

F1. 古い人々と今日の人々が主張する「実有」(Met.A1.1069a26-30)

F1-1. 「全体に関してのもの」, 例えば「類」/今日の人々が主張する「実有」

F1-2. 「それぞれに沿ってのもの」ども/「火」, 「土」/これらに共通の「〔物〕体」はないとされる/古い人々が主張する「実有」

F2. 「三つ」の「実有」(Met.A1.1069a30-b2)……

F2-1. 感覚的 ※自然学の対象/「自然的」(二つ)

F2-1-1. 永遠的 ※天体も移動のための素材は持つ

F2-1-2. 消滅的 植物, 動物

F2-2. 「動かされえない」 (一つ)

F3. 「三つ」の「実有」(*Met.A6.1071b3-6*)・

F3-1. 素材/火, 肉, 頭, 最終の素材

F3-2. 自然/「なにかこれ」

F3-3. 「それぞれに沿ってのもの」/ソークラテース, カリアース [「個体」]

以上の諸分類の中には、アリストテレース自らが自説として主張する「実有」のみではなく、一般に言われている「実有」や、論敵の掲げる「実有」も含まれている。またその中には「実有」と類比的に言われる一種の「擬似的実有」と解釈できるものあり、さらにはアリストテレースが自説としては認めない「実有」や、文脈によっては認めない場合もある「実有」もある²⁴³。

以上をまとめると、これらの分類のうち、中心的な位置を占めるのが、「人」、「動物」、「植物」、四元素等の「実有」、ただし「類」、「種」、「個体」の表現上の区別は明白ではなく、実質内容の上ではまず「個体」を示していると思われる場合(『分析論』、『自然学』、『形而上学』)と、「その或る人」²⁴⁴等の、表現上も「実有」の「個体」に限定した場合(『カテゴリーアイ』)との二つの表現があることが分かる。これらの相互関係について

²⁴³ なお、本稿3-2で検討した「あるもの」の分類項目の中には、「実有」の分類中にはあるエイドスや素材の例はない。また天体は「個体」も永続する。さらに「種」や「類」(『カテゴリーアイ』における「第二の実有」)が「第一の実有」とされている例は『形而上学』にもない。『形而上学』では場合によっては「全体に関してのもの〔普遍〕」*καθόλου*としての「種」や「類」は「実有」でないとすらされている(Z巻13章など)。この場合の「実有」は、「実有の実有」を意味している。アリストテレースは「実有の根拠」についても「実有」という表現を使用している。そこでこの意味での「実有」を本稿では「実有の実有」と呼ぶこととする(本稿p. 29参照)。岩田(圭)[2015]では、この意味での「実有の実有」を、「実体」と区別して、<実体>と表記している。本稿では採用しないが、ひとつの見識である。それから『形而上学』では、『カテゴリーアイ』における「個体」としての「第一の実有」に相当する結合体が「第一の実有」と表現されている例はない。さらにまた人工品は、一般に「実有」の分類実例のうちには見出しにくい、が、「あるもの」の分類実例のうちにはある。この点は人工品は「あるもの」ではあるが、その「あるもの」の核心である「実有」にはなりにくい、いわば「擬似的実有」とでも言うべきものである、という点を示していると思われる。人工品については、注233も参照。

²⁴⁴ 特に「実有」という規定はされていないが、「その或る人」*ὁ τις ἄνθρωπος*という表現は、『トポス論』にもある。また「人」の「個体」を示す表現としては、アリストテレース独自の表現ではなく、例えば『政治学』第3巻第12章における「この人」*ὁδε* (*Pol. III.12.1283a6,7*)などの、古代ギリシア語の日常語にもある表現の例もある。

は、もし『カテゴリーアイ』での叙述がないならば、残りの著作の中での整合性は保たれることとなるが、『カテゴリーアイ』の記述によって、「類」・「種」・「個体」との間の相互関係についてよく検討してみる必要が出てくる、ということになる。ではこの二つの分類の相違は、何を示しているのでしょうか。

まず本稿第2章で詳細に明らかにしたように、『カテゴリーアイ』における「種」や「類」と『形而上学』におけるエイドスを単純には同一視はできない²⁴⁵。Graham²⁴⁶によればそこには基本的な思考の転換があるということになるが、確かに実際のテキストとしての『カテゴリーアイ』では素材という用語が使用されておらず、それゆえにこの素材と対になるエイドスという概念が使用されていないことも事実である。しかし解釈としては、思考の転換と考えるよりも、むしろここには高度な方法性をともなった研究対象の違い、テーマの違いを読み取るべきであると思われる。

「感覚的な「実有」そのもの」(『カテゴリーアイ』)と「感覚的な「実有」の原因、始源」すなわち、いわば「実有の実有」(『形而上学』**F**巻, **E**巻, **Z**巻, **A**巻)の区別は重要である。『形而上学』の文脈では、「感覚的な「実有」そのもの」が、『カテゴリーアイ』での記述のように「第一の実有」とされている例は、皆無である。

本稿3-2で検討した「あるもの」の分類についての各箇所との比較から、『カテゴリーアイ』第2章では「あるもの」についての独特な存在論的見解が語られていた点が明らかになった。特に「のうちにある」という切り口は、他の著作には見いだせない、独自の観点を示している。そして以下の<T20>に掲げた、『形而上学』**Z**巻第1章を解釈する際に、しばしばおこなわれてきたように、この独特な存在論的見解を前提して読み込んだりすることには慎重になるべきである。また『カテゴリーアイ』第5章で示されているような「個体」と「種」の区別、および「個体」の優位ということが、『形而上学』**Z**巻第1章では明記されていない点にも注目する必要がある。

以下、この**Z**巻第1章(*Met.Z*1.1028a10-20)における記述を、<T20>として掲げて、検討してみよう。

<T20> 「あるもの」 τὸ ὄν は様々に言われる。先にどれほどのことかについて区

²⁴⁵ 『カテゴリーアイ』における「種」や「類」と『形而上学』におけるエイドスを単純には同一視はできない、ということについては、本稿第2章第1節(2-1) pp.16-17, 参照。

²⁴⁶ Graham[1987]

別したように²⁴⁷。つまり一方では「何であるか」 *τί ἐστιν* すなわち「なにかこれ」 *τόδε τι* , を示し²⁴⁸ , 他方では「どのようなか」 *ποῖόν τι* を , あるいは「どれほどか」 *ποσόν* を , あるいは「他のそのように「述べ定められるもの」 ども *κατηγορούμενα* のそれぞれのもの」を示す。だがこれほどのことについて「あるもの」と言われるが、それら〔様々な言われ方〕のうちで「第一の「あるもの」」...はまさに「実有」を示すもの、「何であるか」だということは明らかである（なぜなら一方で「これ」 *τόδε* が「どのようななにかか? *ποῖόν τι*」²⁴⁹とわれわれが言うときには、われわれは「善いもの」とか「悪いもの」とかを語る²⁵⁰が、「3ペーキュスのもの」とか「人」とかを〔語ら〕ない。他方で「何であるか? *τί ἐστιν*」〔と言われた場合〕には、「白いもの」とか「熱いもの」とか「3ペーキュスのもの」とかではなく、むしろ「人」とか「神」とかを〔われわれは語る〕²⁵¹。だが他のものどもが「ある

²⁴⁷ 『形而上学』Δ巻第7章, すなわち本稿<T17>で掲げた箇所を参照していると多くの解釈者は考えるが、以下の本文でも述べるように、<T17>とこのZ巻第1章の<T20>の間では、「実有」と他のカテゴリーの区別などについての内容上の相違がかなり見受けられるので、(現存するテキストにはないものも含めて) 別の箇所を参照している可能性も考慮に入れる必要があると思われる。

²⁴⁸ この箇所の *καὶ* は「すなわち」と読み、全体を「「何であるか」すなわち「なにかこれ」と訳した。この箇所については、「何であるか」がすべてのカテゴリーについてあてはまる用法もあるので、「実有」のみを示す「何であるか」の用法であることを明確にするために、「なにかこれ」と言い換え、限定した、と解釈する。本稿のテキスト<T21>についての考察(p.85), を参照。

²⁴⁹ *ποῖόν τι* を「どのようななにかか?」と訳したのは、*ποῖον* が不定形ではなく疑問形であることと、*τι* が「あるもの」 *τὸ ὄν* のうちの「なにか」を実質的に示している、と理解したためである。

²⁵⁰ *ποῖόν τι* 「どのようななにかか?」と解釈した問いに対する答えの方も、この「なにか」に対応するもの、すなわち直接には「善い」や「悪い」のような形容詞ではなく、「善いもの」や「悪いもの」という、形容詞が名詞化されたもの(或る意味で「あるもの」 *τὸ ὄν* のうちの「なにか」 *τι* に対応する本来のカテゴリー(述べ定め)を示すもの)が要求されている、と解釈することもできることとなる。ただし「これ」 *τόδε* が中性形であり、「善いもの」や「悪いもの」も中性形であることから、主語と述語の性数格が一致していることもあり、古代ギリシア語では「これは善い」「これは悪い」というニュアンスも共に示せることとなる。両方のニュアンスを「共に示せる」点にも、このような表現の独自性を読み取れるかもしれない。なお、例えば「善い人」は「付帶的複合体」とも理解できるが、「善いもの」は「付帶的なもの」とは理解できるが「複合体」ではない。

²⁵¹ 以上のテキストの括弧内の箇所(*Met. Z1.1028a15-18*)から推定される文は、以下のようなものになると思われる。「これは善いもの」「これは悪いもの」「これは3ペーキュスのもの」「これは白いもの」「これは人」「これは神」。これらの推定される文について、いくつかのコメントを付け加えておこう。まず英語のbe動詞すなわち *ἐμὶ* にかかわる表現が、これらの文のなかには繫辞 *copula*として登場していない点を指摘できる。これは『形而上学』Δ巻第7章の<T17>の箇所が繫辞 *copula*としての *ἐμὶ* の使用法と密接に連動した議論を展開していることとの違いを示している。またこの箇所は「あるもの」 *τὸ ὄν* について語っている箇所なので、*ἀγαθόν* (1028a15-16)や *κακόν* (1028a16)や *λευκόν* (1028a16)は、直接には「善い」や「悪い」や「白い」ではなく、「善いもの」や「悪

もの」どもと言われるのは、そのように「あるもの」の、一方ではもろもろの「どれほどか-性」²⁵² ποσότητες [諸量]、他方でもろもろの「どのようか-性」²⁵³ ποιότητες [諸性質]、そして他方でもろもろのパトス [諸様態]、さらに他方で「なにか他のもろもろのそのようなこと」であることにおいてなのだ。ゆえにまた、誰かが「歩くこと」や「健やかになること」や「座ること」などそれらのそれぞれのものが「あるもの」なのか「あらぬもの」なのかどうかと難問を發することだろう。そして同じようにまた他のそのようなものの上にも〔難問を發することだろう〕。なぜならそれら〔「歩くこと」や「健やかになること」や「座ること」〕は決して〔生来〕それ自らに沿ってではなく、「実有」から離されうるのでもないのであり、むしろ、もし「歩くもの」や「座るもの」や「健やかになるもの」なら、いっそう「あるもの」どもにはいるものなのだ。だがそれら〔「歩くもの」「座るもの」「健やかになるもの」〕はいっそう「あるもの」どもだと見える。それら〔「歩くもの」「座るもの」「健やかなもの」〕には「或る規定された「基に置かれたもの」」があり(そしてそれ〔「或る規定された「基に置かれたもの」」〕が「実有」そして「それぞれに沿ってのもの」 τὸ καθ' ἕκαστον [「個体」] である)、そのようなカテゴリーー κατηγορία のうちに見られているものなわけだから。なぜなら「善いもの」²⁵⁴あるいは「座るもの」はそれ〔或る規定された「基に置かれたもの」〕なしに言われはしないから。だから、それ〔「実有」(女性形)〕のゆえにまたかのもの

いもの」や「白いもの」と理解すべきであると思われる。さらには「人」や「神」が必ずしも『カテゴリーアイ』の「第二の実有」の意味での「種」を限定的に示しているものでないことに注意することも必要であろう。このZ巻第1章の<T20>の箇所では、「実有」はその他のカテゴリーーとは明確に区別されており、特に「述べ定められるもの」ども κατηγορούμενα (1028a13) の中から「実有」は除外されているように読める。するとこの箇所を基準にした κατηγορούμενα の解釈としては、『カテゴリーアイ』における「第二の実有」が除外されないと考えられることから、この箇所の「人」や「神」もまた、「種」を示す表現を使用してはいるが、「個体」を示すことも排除しないような用法を示していることとなるだろう。これはすなわちこの箇所では「個体」の「実有」を重視している点は明確に示されているが、『カテゴリーアイ』におけるように、「第一の実有」(「その或る人」)を、「第二の実有」(「人」)と表現上も区別する視点は、明示されていないことを示している。そしてその際の「個体」を示す表現は、「第一の実有」ではなく、単に「実有」である。

²⁵² 古代ギリシア語の -τητες を形容詞の抽象名詞化の意味を込めて「-性」(複数形なので「もろもろの「-性」」)と訳した。

²⁵³ 前注252の -τητες を「-性」と訳した項目を参照。

²⁵⁴ 「善いもの」との解釈については、注251参照。

ども「述べ定められる」ものども」のそれぞれがあることは明白なのだ。それゆえに「第一に「あるもの」」 τὸ πρῶτως ὄν すなわち「或る「あるもの」」 τὸ ὄν ではなく「端的に「あるもの」」 ὄν ἀπλῶς なのは、「実有」であるにちがいない。」

²⁵⁵ (Met.Z1.1028a10-31)

この『形而上学』Z巻第1章の<T20>の箇所では、「あるもの」の中の「実有」のカテゴリーと「実有」以外のカテゴリーがはっきりと区別されている(τὸ μὲν..., τὸ δὲ..., ἢ..., ἢ...). これは、先に検討した『形而上学』Δ巻第7章におけるカテゴリーを列挙する<T17>の箇所では「実有」のカテゴリーと「実有」以外のカテゴリーが大きく二分されて区別されてはおらず、すべてが併記され列挙されていた(τὰ μὲν..., τὰ δὲ..., τὰ δὲ..., τὰ δὲ...)のとは異なっている。そして基本的に「実有」の「個体」と「実有」の「種」の間の言語表現上の区別は必ずしも明確ではない。そしてこの箇所の「人」や「神」は、先に挙げた<T19>の『カテゴリーアイ』第4章の中でカテゴリーを列挙する際に、『カテゴリーアイ』の中でも「第一の実有」「第二の実有」を区別していない箇所の記述(「実有」というのは、大雑把に言って、例えば「人」、「馬」)(Cat.4.1b27-28))と観点を共有するものと思われる。すなわちここでの「人」や「神」は、『カテゴリーアイ』第5章における「第二の実有」、つまり「種」と理解するよりは、むしろ<T17>で検討した『ニコマコス倫理学』における「神」やヌース、また『カテゴリーアイ』第4章におけるカテゴリーの列挙の箇所における「人」や「馬」のように、「種」とも「個体」とも限定されないものである、と考えた方がよい。さらに言うなら、「種」を示す語を用いた上で、少なくとも「個体」も排除はしない、という内容を語っているとも思われる²⁵⁶。

先の<T12>から<T18>で挙げたカテゴリーの枚挙の箇所から、すべての文脈でカテ

²⁵⁵ τὸ ὄν λέγεται πολλαχῶς, καθάπερ διειλόμεθα πρότερον ἐν τοῖς περὶ τοῦ ποσαχῶς· σημαίνει γὰρ τὸ μὲν τί ἐστι καὶ τόδε τι, τὸ δὲ ποιὸν ἢ ποσὸν ἢ τῶν ἄλλων ἕκαστον τῶν οὕτω κατηγορουμένων. τοσαυταχῶς δὲ λεγομένου τοῦ ὄντος φανερόν ἐστι τούτων πρῶτον ὄν τὸ τί ἐστιν, ὅπερ σημαίνει τὴν οὐσίαν (ὅταν μὲν γὰρ εἴπωμεν ποιὸν τι τόδε, ἢ ἀγαθὸν λέγομεν ἢ κακόν, ἀλλ' οὐ τρίπηχυν ἢ ἀνθρώπων· ὅταν δὲ τί ἐστιν, οὐ λευκόν οὐδὲ θερμόν οὐδὲ τρίπηκυν, ἀλλὰ ἐνθρώπων ἢ θεόν), τὰ δ' ἄλλα, λέγεται ὄντα τῷ τοῦ οὗτος τὰ μὲν ποσότητες εἶναι, τὰ δὲ ποιότητες, τὰ δὲ πάθη, τὰ δὲ ἄλλο τι τοιοῦτον. διὸ καὶ ἀπορήσειεν <ἄν> τις πότερον τὸ βαδίζειν καὶ τὸ ὑγιαίνειν καὶ τὸ καθῆσθαι ἕκαστον αὐτῶν ὄν ἢ μὴ ὄν, ὁμοίως δὲ καὶ ἐπὶ τῶν ἄλλων ὁπουοῦν τῶν τοιούτων· οὐδὲν γὰρ αὐτῶν ἐστὶν οὔτε καθ' αὐτὸ [πεφυκός] οὔτε χωρίζεσθαι δυνατόν τῆς οὐσίας, ἀλλὰ μᾶλλον, εἴπερ, τὸ βαδίζον τῶν ὄντων καὶ τὸ καθήμενον καὶ τὸ ὑγιαῖνον. ταῦτα δὲ μᾶλλον φαίνεται ὄντα, διότι ἐστι τι τὸ ὑποκείμενον αὐτοῖς ὠρισμένον (τοῦτο δ' ἐστὶν ἡ οὐσία καὶ τὸ καθ' ἕκαστον), ὅπερ ἐμφαίνεται ἐν τῇ κατηγορίᾳ τῇ τοιαύτῃ· τὸ ἀγαθὸν γὰρ ἢ τὸ καθήμενον οὐκ ἄνευ τούτου λέγεται. δῆλον οὖν ὅτι διὰ ταύτην κακείμενον ἕκαστον ἐστὶν, ὥστε τὸ πρῶτως ὄν καὶ οὐ τὸ ὄν ἀλλ' ὄν ἀπλῶς ἡ οὐσία ἂν εἴη.

(Met.Z1.1028a10-31)

²⁵⁶ 「種」を示す語を用いた上で、少なくとも「個体」も排除はしない、という内容を語っている」という点については、本稿第2章第4節(2-4)の最終部分(本稿p.41)、参照。

ーゴリアーが前提され、重視されていたのと同様の考え方がこのZ巻第1章のカテゴリーの枚挙の箇所でも前提されていることは間違いないが、それは本稿3-1での考察で明らかにしたように、『カテゴリーアイ』での対応箇所では、第4章で表明されているような、他の諸著作と共有した観点が前提されている、ということである。すなわちカテゴリーを論ずる際に、「個体」と「種」を峻別しない観点は前提としているが、『カテゴリーアイ』第5章で表明されている「個体」と「種」を峻別する観点を前提としているということを示してはいない、ということにもなる²⁵⁷。またこのT21に続く箇所の1028a27では、「それぞれに沿ってのもの」 τὸ καθ' ἕκαστον [「個体」] こそが「実有」である、と解釈できる記述が見いだされるが、これは他の「或る「あるもの」」に対して、漠然と「実有」ということではなく、「個体」の「実有」が重視されている、ということを示していると思われる。しかし、この箇所では「個体」こそが「第一の実有」である、という表現上の表明はなされていない、という点をも同時に指摘できる。

またこの<T20>の『形而上学』Z巻第1章の箇所の「何であるか」と「なにかこれ」の用語法については、以下の<T21>の『たましいについて』(DA I 1.402a23-25)における「何であるか」と「なにかこれ」の用語法についての箇所とのかかわりを指摘することができる。

<T21>「だが、第一におそらく「諸類」のなかの「何」のうちに²⁵⁸ [あり] ,そして「何であるか」 τί ἐστι を分ける [区別する] ことが必然的 [必要] だ,そして私が言うのははたして「なにかこれ」 τόδε τι すなわち「実有」 οὐσία か,あるいは「どのような」 か,あるいは「どれほどか」 か,あるいはまた分けられた [区別された] 諸カテゴリーの他の「なにか」 か, [ということ] だ。」²⁵⁹(DA I 1.402a23-25)

この<T21>は「たましい」の内実を明らかにするための方法が指摘されている箇所であるが、ここでの「諸類」は実質的に「最高類」としてのカテゴリーを示していると考えられる。そしてこの箇所での「何」および「何であるか」が諸カテゴリーのすべてに当てはまる表現なのに対し、「なにかこれ」は直後ですぐに言い換えられているように、基本的に「実有」のカテゴリーを示す表現となっている。この箇所を参考にすると『形而上学』Z巻第1章の「何であるか」すなわち「なにかこれ」というのは、「何であるか」がすべてのカテゴリーに当てはまるので、この場合はさらに限定して「実

²⁵⁷ この<T20>の箇所では、『カテゴリーアイ』第5章における、或る方向に「踏み込んだ議論」(本稿p.75,p.86,参照)を前提とはしていないと受け取れることに加えて、「あるもの」の四分類を扱った『カテゴリーアイ』第2章での、「実有」以外の「個体」(本稿付論 i pp.111-124, 参照)について言及した独自の観点もまた前提とはしていないように受け取れる。

²⁵⁸ ἐν τίνι τῶν γενῶν (DA I 1.402a23)

²⁵⁹ πρῶτον δ' ἴσως ἀναγκαῖον διελεῖν ἐν τίνι τῶν γενῶν καὶ τί ἐστι, λέγω δὲ πότερον τόδε τι καὶ οὐσία ἢ ποῖον ἢ ποσὸν ἢ καὶ τις ἄλλη τῶν διαιρεθείσων κατηγοριῶν, (DA I 1.402a23-25)

有」を示す「なにかこれ」のことである,とした表現であることが示唆されることとなる。

以上本第3章第3節(3-3)での検討の結果を受け,ここで「あるもの」*ὄν*,「実有」*οὐσία*,「第一の実有」*πρώτη οὐσία*の諸実例の間の相互関係についても考察しておこう。

まず,「あるもの」の実例に挙げられていて,「実有」の実例には挙げられていないものを指摘すれば,「類」,最高類,人工品,「実有」以外の「類」と「種」,「実有」以外の「個体」,付帶的にあるもの,真であるもの,可能性においてあるもの,等となる。「実有」が「あるもの」の核心である,という観点から考えれば,これらは「あるもの」のうちでも中心を占めるものではない,と言っても過言ではないと思われる²⁶⁰。また逆に「実有」の実例に挙げられていて,「あるもの」のリストに挙げられていないものは,「神々」,「動かされえずに動かすもの」,「第一の動かされえずに動かすもの」,エイドス,「たましい」,面,線,「あるとは何であったのか」,等である。そしてこれらの「実有」のみの実例のうちに挙げられていて,「あるもの」の実例のうちには挙げられていないものの中でも,特に「第一の哲学」の探求対象としての「第一の実有」として限定的に考えられているのが,「第一の動かされえずに動かすもの」,エイドス,「たましい」である点には注目すべきであろう。この限定的な「第一の実有」のリストの中には,「動物」などの「実有」の「個体」(『カテゴリーアー』における「第一の実有」)は入っていない。「動物」などの「実有」の「個体」は,むしろ「あるもの」と「実有」の両者のリストにともに入るものとなっているのである。この点も,『カテゴリーアイ』における「第一の実有」の立ち位置が,『形而上学』A巻やZ巻での「第一の実有」の立ち位置とは異なることを示唆する一例となっていると思われる。

3-4. 『カテゴリーアイ』における「第一の実有」の特徴

前節までの考察(3-1~3-3)で,「第一の実有」としての「個体」と,「第二の実有」としての「種」を明確に区別し,他の諸著作における扱いと比較してより踏み込んだ分類によって分節化された観点を提出していたのが,『カテゴリーアイ』第5章における叙述であることが明確になった。そこで本節(3-4)では,『カテゴリーアイ』第5章における「第一の実有」の言及箇所を検討し,その特徴について考察することとする。

²⁶⁰ 人工品については,注233,参照。

『カテゴリーアイ』における「第一の実有」の特徴と考えられる点を挙げると以下のよう
にまとめられる。

- 特徴 1. なにか「基に置かれたもの」に関して言われず, なにか「基に置かれたもの」のうち
にもあらぬ²⁶¹ (*Cat.5.2a12-13*)²⁶²
- 特徴 2. 他のすべてのものが「基に置かれたもの」としての「第一の実有」に関して言われ,
あるいは「基に置かれたもの」としてのそれ〔「第一の実有」〕のうちにある。そのゆえ
に最も多く「実有」と言われる (*Cat.5.2a34-b5, b15-17*)
- 特徴 3. 「第一の実有」があらねば他の何もあらぬ (*Cat.5.2b5-b6c*)
- 特徴 4. 「第一の実有」が「何であるか」を示そうとする場合, 「類」よりもエイドス〔種〕
を示すならよりよく知られるものとして, あるいは特有なものとして示すこととなる
(*Cat.5.2b7-b14*)
- 特徴 5. 「第一の実有」のうちでは, 一つのものが他のものよりもより多く「実有」であるとい
うことはない (*Cat.5.2b26-28*)
- 特徴 6. 「第一の実有」からはいかなるカテゴリーアー *κατηγορία* も一つもあらぬ。なぜな
ら, いかなる「基に置かれたもの」に関して一つも言われないから
(*Cat.5.3a36-37*)
- 特徴 7. 「第一の実有」はエイドス〔種〕のロゴスも「類」のロゴスとともに受け入れる
(*Cat.5.3b2-3*)
- 特徴 8. 「なにかこれ」を示す (*Cat.5.3b10-23*)
- 特徴 9. 不可分で数において一つ (*Cat.5.3b12-13*) … 特徴 8 と関連

²⁶¹ 後世の哲学的テーマの中で, いわゆる「主語となって述語とならない」ものが「実有」〔実体〕である, とされた議論は, この本稿における分類の特徴 1 の前半部分の論点(「なにか「基に置かれたもの」に関して言われず」)から始まっている(このテーマにかかわる議論では, 通常, 特徴 1 の後半部分「なにか「基に置かれたもの」のうちにもあらぬ」は通常話題にならない)。そしてこの論点については, アリストテレス自身が『形而上学』Z 巻第 3 章 (*Met. Z3.1029a7-30*)において, この規定だけだと, 素材が「実有」〔「実有の実有」/「実有」の根拠としての「実有」〕になってしまい, 不十分である, という批判的議論を展開している(アリストテレス自身も, 『形而上学』Z 巻第 3 章の当該箇所では特徴 1 の後半部分の「のうちにある」の論点を話題にしていない)。そしてこの議論は本稿の考察からすると, *οὐσία* を日本語で「実体」と訳してきた歴史と大きく関連していると思われる。すなわち『カテゴリーアイ』での議論は, 「個体」としての *πρώτη οὐσία* が *ὑποκείμενον* として把握できる, という構成になっており, この *ὑποκείμενον* が後にラテン語に訳された時に, *substratum* (基体) と *subjectum* (主語) に訳し分けられ, そして *οὐσία* はこれらの訳と連動して *substantia* (実体) と訳されたこととなる。そしてこれらのラテン語が例えば英語に伝わった際に, それぞれ, *substrate*, *subject*, *substance* となって現代にいたる, ということになっているわけである。*οὐσία* についてはもう一方で *essentia* (本質) → *essence* とする訳語もあるが, これはむしろ現代までにいたって, *τὸ τί ἦν εἶναι* (本稿採用の訳では「あるとは何であったのか」)の訳語として用いられることが多くなり, 上述の『カテゴリーアイ』における用例が, 歴史的に最も優勢になってきた結果, *substance* が *οὐσία* の訳語として主として用いられる, という展開になってきた, と考えられるからである。注 1, 注 70 も参照。本注 261 の論点と「第一の素材」の議論とのかかわりについては, 本稿付論 ii, pp.132-134, 参照。

²⁶² *μήτε καθ' ὑποκειμένου τινὸς λέγεται μήτε ἐν ὑποκειμένου τινὶ ἐστίν*, (*Cat.5.2a12-13*)

特徴10. 「第一の実有」には何も反対のものが無い(*Cat.5.3b24-32*)

特徴11. 自らが変化しながら反対のものどもを受け入れることができる。(*Cat.5.4a10-b19*)

特徴12. 同じで数において一つ(*Cat.5.4a11-13,4b17-18*)…特徴11と関連

これに対し「第二の実有」の特徴は以下ようになる。

特徴① 第一に「実有」と言われるものども *αἱ πρώτως οὐσίαι λεγόμεναι* がそのうちにそなわる (*Cat.5.2a14-19*)

特徴② 「類」よりもエイドス〔「種」〕がより多く「実有」である。「第一の実有」が「何であるか」*τί ἐστι* を示そうとする場合、「類」よりもエイドス〔「種」〕を示すならよりよく知られるものとして、あるいは特有なものとして示すこととなるから。また「第一の実有」が他のものに対してあるように、そのようにエイドス〔「種」〕は「類」に対してある。エイドス〔「種」〕は「類」の「基に置かれる」*ὑπόκειται* から (*Cat.5.2b7-14, b17-22*)

特徴③ 「類」でないかぎりの「エイドス」〔「種」〕のうちでは、一つのものが他のものよりもより多く「実有」であるということはない(*Cat.5. 2b22-28*)

特徴④ その他のすべてのものにとっての「基に置かれたもの」である、との「第一の実有」の特徴(特徴2)を示す関係は、「第一の実有」のエイドス〔「種」〕や「類」がその残りのすべてのものに対する関係でもある(*Cat.5.2b36-3a6*)

特徴⑤ 「基に置かれたもの」のうちにはあらぬ(*Cat.5.3a7-21*)

特徴⑥ 「同名同義的に言われる」(*Cat.5.3a33-b9*)

特徴⑦ 「なにかどのようなか」*ποιόν τι* を示す(*Cat.5.3b13-23*)

さらに以上から「第一の実有」と「第二の実有」に共通する「実有」の特徴を挙げると以下ようになる。

特徴Ⅰ 「実有」には何も反対のものが無い。(*Cat.5.3b24-32*)

特徴Ⅱ 「実有」はより多いとかより少ないということを受け入れない。(*Cat.5.3b33-4a10*)

素材という用語が全く使用されていないので、エイドスを素材とからめて考察したりすることではなく、またその両者からなる結合体として「個体」を捉える、という視点もない²⁶³。素材という用語が全く使用されていない、という特徴は『カテゴリーアイ』のみならず、『オルガノン』全体に共通する特色である。この点に関する限り、『カテゴリーアイ』は確かに他の『オルガノン』諸著作と観点を共有している。

これらの特徴のうち特徴9, 特徴12 は「実有」以外の「個体」にも妥当するものである

²⁶⁴。「第一の実有」のみに妥当する特徴はそれゆえ1～8, 10～12 ということになる。

²⁶³ 議論に素材が一切かわらないという点は、素材とエイドスがかかわらないということでもあり、『カテゴリーアイ』での議論が、いわゆる「質料形相論」との直接のかかわりを持たない、ということでもある。注150も参照。

²⁶⁴ 「実体以外の個体」についての考察は、本稿付論 i (pp.111-124) 参照。

このうちでも特に3の特徴は「第一の実有」の第一次存在性とでも言うべき特色を示している。この点が後にポリュフェュリオスの疑問²⁶⁵を生じ、それがもとになって西欧中世の「普遍論争」が発生する原因ともなったのである。この点で『カテゴリーアイ』第5章における記述がすべての問題の発端である、とも言える。そしてこの第一次存在性に、「実有」の「種」や「類」、それから「性質」や「量」などの「実有」以外のもろもろのカテゴリーアがすべてその存在を依存しているのである。

さて、ここで「個体」の表現方法の問題について、考察を進めることとしよう。『カテゴリーアイ』では「その或る人」(*Cat.5.2a13, etc.*), 「その或る馬」*ὁ τις ἵππος* (*Cat. 5.2a13-14, etc.*), 「その或る牛」*ὁ τις βοῦς* (*Cat.5.2b28*), 「その或る木」*τὸ τι δένδρον* (*Cat.5.2b13*) 等が「個体」としての「第一の実有」の実例として掲げられている²⁶⁶。そして、「その或る人」等という表現は『カテゴリーアイ』第5章以外では、『カテゴリーアイ』第2章, および『命題論』と『トポス論』登場する表現である。そこでその『命題論』や『トポス論』では、この表現がどのような文脈で使用されているかを検討しておこう。

まず、『命題論』(*De Int.11.21a18-24*)における「その或る人」の使用例は以下の通りである。

<T22> 「だが、「その或るもの」*ὁ τις* (*De Int.11.21a19*)に関して[言うこと]」は端的にも真である。例えば、「その或る人」*ὁ τις ἄνθρωπος* (*De Int.11.21a20-21*)を「人」、あるいは「その或る白い人」*ὁ τις λευκὸς ἄνθρωπος* (*De Int.11.21a20*)を「白

²⁶⁵ Porphyrii *Isagoge* [1836] 1a8-13, 参照。問題の「疑問」の箇所は以下のとおりである。

「まず始めに「類」とエイドス[「種」]について、一方で<存在するの>か、それとも単に<虚しい観念として>のみ横たわっているのか、また<存在するとしても>、ソーマ[物体]であるのか、非ソーマ[非物体]であるのか、そして「離される」のか、あるいは感覚的なもののうちに、そしてこれらの傍らに<依存しつつ存在する>のか、私は言うことを<避ける>だろう。このような<仕事>は<きわめて深遠>であり、そして他のより大きな<探求>を<必要とする>からだ。」

αὐτίκα περὶ γενῶν τε καὶ εἰδῶν τὸ μὲν εἴτε ὑφέστηκεν εἴτε καὶ ἐν μόναις ψιλαῖς ἐπινοίαις κεῖται, εἴτε καὶ ὑφέστηκότα σώματά ἐστιν ἢ ἀσώματα, καὶ πότερον χωριστὰ ἢ ἐν τοῖς αἰσθητοῖς καὶ περὶ ταῦτα ὑφεστώτα, παραιτήσομαι λέγειν, βαθυτάτης οὐσης τῆς τοιαύτης πραγματείας, καὶ ἄλλης μείζονος δεομένης ἐξετάσεως. (*Isagoge* 1a8-13)

²⁶⁶ 『カテゴリーアイ』における「第一の実有」としての「個体」の表現は、「その或る人」等の独自のものである。個体表示が、例えば固有名詞(例えばソークラテース)ではなされていない。『カテゴリーアイ』でソークラテースについての言及があるのは、第九章までの本文的部分と著しく内容が相違し、挿入箇所とも考えられる *Postpraedicamenta* の部分の, *Cat.10.13b14-35* のみである。ただし、『カテゴリーアイ』を『トポス論』の序論と理解できるとする説(Husik[1904],[1939], 参照)によれば、*Postpraedicamenta*の部分も、単なる挿入ではないことになる。

い」 λευκός [とすることは端的にも真である]。²⁶⁷ (*De Int.*11.21a18-24)

『命題論』で一般に「個体」を表す表現は「それぞれに沿ってのもの」 καθ' ἕκαστον (*De Int.*7.17a39)であり、「個体」の代表例は、固有名詞で表現されるカリアース Καλλίας (*De Int.*7.17b1)等である。そしてこの「個体」には、「全体に関してのもの」〔普遍〕 καθόλου としての「人」と明確に区別されており (*De Int.*7.17a38-b3), またその際に「個体」の優位が語られているわけではない、という特徴がある。その点では、この箇所の「その或る人」は、表現例としては『カテゴリーアイ』との共通性があるが、直接に「個体」とかかわる議論だとは表明されてはおらず、また、「不可分なもの」との表明もなされてはいない点にも着目すべきである。

次に『トポス論』(*Top.*IV1.121a35-39)における「その或る人」の使用例は、以下の通りである。

<T23> 「それゆえに快樂は「動き」のエイドス〔「種」〕でも、また、その「動き」のエイドス〔「種」〕の基に入る「不可分なものども」〔「個」〕のうちのものでもないであろう。なぜなら、「不可分なもの」〔「個」〕も、「類」と「種」に与る μετέχει からである。例えば、「その或る人」 ὁ τις ἄνθρωπος (121a38) は「人」にも「動物」にも与るのである。」²⁶⁸ (*Top.*IV1.121a35-39)

<T24> 「また「いつか」とは、例えば、「体育場の中で歩きまわること」が、「その或る人」(128b20) 〔特有性〕である〔ことである〕」²⁶⁹ (*Top.*V1.128b20-21)

<T25> 「例えば、「今歩きまわること」を「その或る人」の特有性として置いた人は、それ〔限定〕を明言した上で述べたので、特有性は美しく置かれているだろう。」

²⁷⁰ (*Top.*V3.131b16-18)

²⁶⁷ ἀληθές δ' ἐστὶν κατὰ τοῦ τινός καὶ ἀπλῶς, οἷον τὸν τινὰ ἄνθρωπον ἄνθρωπον ἢ τὸν τινὰ λευκὸν ἄνθρωπον λευκόν. (*De Int.*11.21a18-24)

²⁶⁸ ὥστ' οὐκ ἂν εἶη εἶδος ἢ ἡδονὴ κινήσεως, οὐδὲ τῶν ἀτόμων τῶν ὑπὸ τὸ εἶδος τὸ τῆς κινήσεως ὄντων. καὶ γὰρ τὰ ἄτομα μετέχει τοῦ γένους καὶ τοῦ εἶδους, οἷον ὁ τις ἄνθρωπος καὶ ἀνθρώπου μετέχει καὶ ζώου. (*Top.*IV1.121a35-39)

²⁶⁹ ποτὲ δὲ οἷον τοῦ τινός ἀνθρώπου τὸ περιπατεῖν ἐν τῷ γυμνασίῳ. (*Top.*V1.128b16-21)

²⁷⁰ οἷον ἐπεὶ ὁ εἶπας τοῦ τινός ἀνθρώπου ἴδιον τὸ περιπατεῖν νῦν διαστευσάμενος ἔθηκε τοῦτο, καλῶς ἂν εἶη κείμενον τὸ ἴδιον. (*Top.*V3.131b16-18)

この『トポス論』の文脈からは、以下のような『カテゴリーアイ』との類似点が浮かび上がる。

(あ)「その或る人」が「不可分なもの〔「個」〕」とされていること

(い)「その或る人」が「人」をも「動物」をも「与る」 μετέχει とされていること。

ただし、(い)の点については、『カテゴリーアイ』の場合は、同様な表現をする際に、プラトーン的な用語の「与る」ではなく、アリストテレースに特有の用語である、「述べ定められる」 κατηγορεῖται が用いられている。このことは、『トポス論』の執筆時期の問題と、プラトーン的な用語法の影響関係についての考察を促すことともなるだろう。

それでは、「第一の実有」という表現がなされてはおらず、またカテゴリーアイの枚举といった観点を離れた場合ならば、『カテゴリーアイ』第5章以外で「個体」と「種」を区別し、「個体」の優位を語る視点が明確に表明されている箇所²⁷¹を、アリストテレースの著作中に見出すことはできるだろうか。

この疑問に対する答えの一つは、次に掲げる『動物の発生について』の叙述の中にある。『動物の発生について』の叙述等を追ってみると、そこには内容的に「個体」と理解し得るものに対する見解を散見することができ (cf. *GA* II 1.731b34, II 4.740b33, 741a1, III 11.762a5, IV 3.768b13, 15, etc.) そして特に, *GA* IV 3.767b23-768a2.の箇所で語られる次のような見解は、本第3章の『カテゴリーアイ』における「個体」としての「第一の実有」の解釈という課題にとっても重要であると思われる。

そこでは、「父親は雄性であるのみではなく、また例えばコリスコスあるいはソークラテース、そのような〔特定の〕雄性であり、そしてコリスコスであるのみならずまた「人」でもある」²⁷² (*GA* IV 3.767b24-26), 生成〔生殖発生〕 γένεσις に向かっては常に「特有なもの」 τὸ ἴδιον, 「それぞれに沿ってのもの」 τὸ καθ' ἕκαστον 〔「個体」〕の方が強いのである。なぜならコリスコスは、「人」でも「動物」でもあるが、「人」であることの方が「動物」であることよりも、「特有なもの」により近いからである」²⁷³ (*GA* IV 3.767b29-32) 等と語られ、その後注目すべき意見が表明される。すなわち、

²⁷¹ 『カテゴリーアイ』における「個体」と「種」の区別を、「個体」を「第一の実有」と表現して、他の著作に読み込む、ということがしばしば行われているが、<T20>に掲げた『形而上学』をはじめとする多くのテキストでは、例えば「人」という語は、「個」をも「種」をも示しており、その意味では「人」の場合の「個」と「種」の区別が必ずしも明確に表明されてはいないことに注意すべきである (pp.40-41の本稿第2章第4節(2-4)結論部分も参照)。また、「個」を重視する箇所でも、『カテゴリーアイ』第5章以外の箇所では、単に「実有」と表現されており「第一の実有」とは表現されていない点にも着目すべきである。

²⁷² τὸ γεννῶν ἐστὶν οὐ μόνον ἄρρεν ἀλλὰ καὶ τοῖον ἄρρεν οἷον Κορίσκος ἢ Σωκράτης, καὶ οὐ μόνον Κορίσκος ἐστὶν ἀλλὰ καὶ ἄνθρωπος. (*GA* IV 3.767b24-26)

²⁷³ αἰεὶ δ' ἰσχύει πρὸς τὴν γένεσιν μᾶλλον τὸ ἴδιον καὶ τὸ καθ' ἕκαστον. ὁ γὰρ Κορίσκος καὶ ἄνθρωπος ἐστὶ καὶ ζῶον, ἀλλ' ἐγγύτερον τοῦ ἰδίου τὸ ἄνθρωπος ἢ τὸ ζῶον. (*GA* IV 3.767b29-32)

<T26> 「「それぞれに沿ってのもの」 τὸ καθ' ἕκαστον 「個体」 も「類」 γένος も生むが、どちらかという「それぞれに沿ってのもの」の方が主である。なぜならそれ τοῦτο 「「それぞれに沿ってのもの」」が「実有」 οὐσία であるから。また作られた子も「なにかどのような」 ποίον τι として生まれて来るのであるが、また「なにかこれ」 τόδε τι としても生まれて来るのであって、そしてそれ「「なにかこれ」」が「実有」である。それゆえ、「たね」[精液] σπέρμα の内にある「動き」はすべてのこのようなものの可能性からのものであって、可能性においては先祖からも来るが、むしろなにか「それぞれに沿ってのもの」により近いものから常により多く来ている。だが私が言う「それぞれに沿ってのもの」とはコリスコスやソークラテース[のこと]だ。」²⁷⁴ (GAIV3.767b32-768a2)

これらの『動物の発生について』の叙述からは、以下のような、『カテゴリーアイ』と見方を共有する考え方を見出すことができるだろう。

- i. 「それぞれに沿ってのもの」 τὸ καθ' ἕκαστον 「個体」こそが「実有」である、とされていること (cf. Cat.5.2a11-19,34-b6,b15-22,3a33-b9,etc.)
- ii. τόδε τι と ποίον τι という道具立てが使用されていること (cf. Cat.5.3b10-23)
- iii. 「人」であることの方が「動物」であることよりも τὸ ἴδιον により近い、という言明がなされていること (cf. Cat.5.2b7-14,b29-34)

では、これらの「動物の個体」に相当するものについての叙述は、『カテゴリーアイ』と共有する視点があるかどうか、という我々の課題に関してどのように評価することができるであろうか。先に掲げた i ~ iii のうち、特に i の「「それぞれに沿ってのもの」こそが「実有」である、との言明は、そこで語られている「それぞれに沿ってのもの」の具体例がソークラテースなどの「動物の個体」である点 (cf. GA II 1.731b34-35) が、そして ii と iii についても、ii は用語法の点で、iii は「個」、「種」、「類」の相互連関の点で『カテゴリーアイ』と内容を共有しているように見える。

しかしながら先の『動物の発生について』の叙述の中には『カテゴリーアイ』とは相違する視点もまた同時に存する。それはすなわち、『動物の発生について』の前述した箇所 (GA.IV3.767b23-768a2) は文字通り、動物の生成〔生殖発生〕を主題としており、先の i ~ iii もその文脈の中で初めて意味を持つ事柄である、という点である。

つまり、『カテゴリーアイ』では「変化」を語る際に、「性質変化」には触れても、「実

²⁷⁴ γεννᾷ δὲ καὶ τὸ καθ' ἕκαστον καὶ τὸ γένος, ἀλλὰ μᾶλλον τὸ καθ' ἕκαστον· τοῦτο γὰρ ἡ οὐσία. καὶ γὰρ τὸ γιγνόμενον γίγνεται μὲν καὶ ποίον τι, ἀλλὰ καὶ τόδε τι καὶ τοῦθ' ἡ οὐσία. διόπερ ἀπὸ τῶν δυνάμεων ὑπάρχουσιν αἱ κινήσεις ἐν τοῖς σπέρμασι πάντων τῶν τοιούτων, δυνάμει δὲ καὶ τῶν προγόνων, μᾶλλον δὲ τοῦ ἐγγύτερον αἰὲ τῶν καθ' ἕκαστόν τινος· λέγω δὲ καθ' ἕκαστόν τὸν Κορίσκον καὶ τὸν Σωκράτην. (GAIV3.767b32-768a2)

有」の「生成消滅」には触れていない（cf. *Cat.5.4a10-b19*）点からも推測されるように、一般的に言って「生成消滅」の問題はその考察の射程外にあると思われるのに対し、『動物の発生について』当該箇所では、生成〔生殖発生〕という側面でまさしく「生成消滅」の次元でその議論が行なわれているのである。そしてもし『カテゴリーアイ』における「個体」の意義が、日常的に出会う具体的なものの記述、という点にもしもあるとするならば、『動物の発生について』における「個体」の意義はむしろ、生成〔生殖発生〕の根拠・動因としての特定の「個体」の「類」に対する優越性の強調、という点にあるように思われる。

ここで『カテゴリーアイ』と動物学的諸著作を比較検討する際の着眼点を二点、掲げておこう。

第一点は、「類」－「種」－「不可分なもの」の系列における「個体」としての「不可分なもの」が、動物学的著作中でどれだけ重視されているか、という点。もし十分に重視されていれば、『カテゴリーアイ』における「第一の実有」は、動物学の側面から支持を受けることとなり、内容的に孤立した用例とは言えなくなる可能性がある。

第二点は、「生きて」いる間のいつか」というスケールの時間的持続性に対する配慮が、動物学的著作中にどれ程見出せるか、という点。『カテゴリーアイ』での叙述は、生成消滅を度外視した、通常の日常的事実の記述を示すように思われるのだが、動物学的にはそのような状況がどの程度扱われているのかを探ることはまた、『カテゴリーアイ』の性格を際立たせることにもなろう。

「不可分なもの」としての「個」が、取り分けて「実有」 οὐσία である、とされているか否か、そしてまた「生きて」いる間、という意味での時間的持続性が視界に入っているか否か、という側面から動物学的著作を眺めると、そこにはどのような光景が展開することになるのだろうか。

結論から先に言えば、以上の問いに対してはしかし、予想に反して殆ど「否」という答えしか返ってこない。

すなわち、まず「不可分なもの」との表現が示しているのは、動物学的な諸著作の場合、例えば「動物の種」が「不可分なもの」であって、その「差異」も「不可分なもの」で互いに共通でないとするならば、「差異」〔の数〕は不可分な「動物種」〔の数〕と等しくなるはずである」（*PA I 3.643a7-9*）のように「不可分な「種」」（*PA I 3.643a16,19-20, PA I 4.644a29,30-31*）あるいは「不可分な「差異」」（cf. *PA I 3.643a9,22*）であって、類種系列における「個」としての「不可分なもの」ではない。

またアリストテレスにおいて「個体」を示す表現として重要な、「それぞれに沿ってのもの」 τὸ καθ' ἕκαστον に着目してみても、「胎生で四足の動物」という「類」には多くの「種」があるが、〔共通の〕名はなくて、例えば「人」と呼ぶときのように、「ライオン」、「鹿」、「馬」、「犬」等々と、いわばそれぞれに沿って καθ' ἕκαστον 呼んでいる」（*HA I 6.490b32-34*）。そして「一つ一つのそれぞれの「実有」〔一つ一つの「種」 cf. *PA I 1.639a23-29*〕を取って、それ自体について別々に定義していくべきなのか……」（*PA I 1.639a15-16*）、等々、「それぞれの〔動物〕「種」」（cf. *HA I 6.491a13, PA I 2.642b5, PA*

I 3. 642b35-36, 643b26, 644a10-11) を示す例がほとんどなのである。

また、自己同一性や反対者受容性の考察から導き出された「「生きて」いる間」の時間的存続という側面についても、生物学者としてのアリストテレスは、個々の生物体の、「個体」としての「一生」よりは、むしろ生成消滅をも射程に入れた「種」の永続性、言い換えれば生命の全体としての持続性とでも言うべきものに関心を持っていたように思われる

(cf. *GA II* 1.731b31-732a7)。動物というのは「数」としては〔「個体」としては〕永遠であることは不可能であるが、「種」としては可能なのであり、それゆえに「人」は、〔「個体」としてでなければ〕常に存在しているのである。そしてこの点について想起すべきなのは、「人」は「人」を生む (cf. *Met. Z7*.1032a25, *Met. Z8*.1033b32, *Met. A3*.1070a8, *Met. A3*.1070a27-28, etc.) との一句である。

ここでもまたアリストテレスの主要な関心は「動物の種」にあり、『カテゴリーアイ』における中心主題が、典型的には「動物の個体」であるという見解とは、時間存続の面からも異なっていることが確認できる。

それでは明らかに「個体」についての見解を表明していると考えられる『動物の発生について』の叙述, *GA IV* 3.767b32-768a2, は何を示しているのであろうか。

確かに言えることは、少なくともこの文脈に関する限り、「個体」こそが「実有」であり、その場合の「個体」とは具体的には「動物の個体」である、との言明を見出し得ることである。そしてこの点を強調すれば「個体」を「第一の実有」と見なす『カテゴリーアイ』の見解は、アリストテレスの著作集の中でも決して孤立した視点を示すものではなくなる。また「個体」としての「実有」が人工品の「個体」などではなく、基本的には「動物の個体」を示すものである、という点も『カテゴリーアイ』における「第一の実有」の実例が「動物の個体」であることと類似の思考を示している。

さらには *τόδε τι* と *ποιόν τι* の区別、及び取り分け *τόδε τι* を「実有」としている点、また *τὸ ἴδιον*, *τὸ καθ' ἑκάστων* としてのコリスコスには「動物」よりも「人」の方がより近い、としている点等も『カテゴリーアイ』の叙述が必ずしも例外的な観点を示すものではないことの傍証となるだろう。

これを要するに生成〔生殖発生〕 *γένεσις* に関する叙述において、「第一の実有」の典型的な実例が「動物の個体」である、とする立場と見解を共有する重要な表現が見出されることとなる。

だがこの *γένεσις* に関する議論こそは『カテゴリーアイ』の文脈では登場していなかった側面でもあることもまた忘れてはならない。

『動物の発生について』の叙述 (*GA IV* 3.767b32-768a2/<T26>) では、確かに道具立てとしては「なにかこれ」 *τόδε τι* と「なにかどのようなか」 *ποιόν τι* という用語法が使用されてはいるものの、『カテゴリーアイ』では「第一の実有」が「なにかこれ」を、「第二の実有」が「なにかどのようなか」を示す (*Cat.* 5.3b10-23), と明白に区別された言明がなされているのに対し、『動物の発生について』当該箇所では、「個体」である「作られた子」は、「なにかどのようなか」のみならず「なにかこれ」としても生まれて来る、とされており (*GA IV* 3.767b34-35), 『カテゴリーアイ』での取り扱いと比較して「なにかこれ」と

「なにかどのような」の適用範囲が峻別されてはならず、むしろ重なる状況が示されている。「第一の実有」が「なにかどのような」を示すとは書かれていないのに対し、「作られた子」は、まず「なにかどのような」として生まれて来るとされている点、『カテゴリーアイ』と『動物の発生について』の叙述は、無視することのできない相違を見せている。

だがそれ以上に更に重要なことは、『動物の部分について』における次のような言明である。

「ところで、「生成」 *γένεσις* における順序と「実有」 *οὐσία* における順序は反対なのである。というのは、「生成」においてより後のものは「自然〔本性〕」 *φύσις* の上ではより先のものであり、「生成」において最後のものが、〔自然〔本性〕においては〕最初のものである」(PAⅡ 1.646a24-27)、「そこで「時」 *χρόνος* においては素材 *ὑλη* と生成が先であり、ロゴスにおいては「実有」、つまり「それぞれのもののかたち」 *ἡ ἐκάστου μορφή* が先であらねばならないこととなる」(PAⅡ 1.646a35-b2)

すなわち、動物学関連著作間の相互連関を考慮に入れるならば、生成はむしろ素材と並記して扱われているのであり、「それぞれのもののかたち」や自然、更には「実有」とは対比的に叙述されているのである。

この点を強調すれば、先の『動物の発生について』の問題の箇所<T26>は、あくまでも *γένεσις* (「生成」〔(生殖) 発生]) という側面に的を絞り、限定された議論であって、そのような限定において「実有」を論ずれば、「類」よりも「個体」の方がより重要な役割を果たすことになる、という内容を示していたとも考えられるわけである。

そしてもしそのような限定を外して、動物学的著作全体の大きな枠組みの中で考えることが許されるならば、先の箇所は、「かたち」や自然等の「実有」の文脈ではなく、むしろ素材の議論に近接した文脈を示すものであるとも言い得るであろう。

それではここまで検討してきた事態は、我々の課題にとって、一体何を示すことになるのであろうか。

少なくとも確実に言えることは、「不可分なもの」の論点や、「「生きて」いる間」の時間存続の論点等、『カテゴリーアイ』における「個体」を導出する際に重要な役割を果たした道具立てを、動物学的著作に適用した場合、アリストテレスの主要関心事が「種」に集中していたことである。そこでは、不可分基本単位は「種」にあり、また、生命の全体としての持続性たる「種」の永続性こそが時間存続の側面における要となっていたわけである。

そしてまた、一見「個体」の重視を示すように見受けられた『動物の発生について』第4巻の<T26>の箇所も、そこでの議論が「生成〔発生〕」 *γένεσις* を巡って行なわれているという点に着目する限り、動物学的著作の文脈においては「かたち」や自然等ではなくむしろ素材にかかわる論点がそこで表明されていた、と解することも可能なわけで、ここでも基本的な枠組みとしての「動物の種」の重視が確認されることとなるのである。この点は、「個体」であるところの「作られた子」が(『カテゴリーアイ』の「第一の実有」とは異なり) *ποιόν τι* としても生まれてくる、とされている点とも一貫した視点を示している。

以上の考察から、『カテゴリーアイ』第5章の叙述と『動物の発生について』第4章の叙述との間には、「個体」と「種」を区別し、「個体」の優位を語る視点を共有する、という興味深い類似性は見いだせるものの、この二箇所を、直接に関連させて解釈することには慎重になるべきである、ということが帰結する。

3-5. 「個体性」をめぐる諸問題

以上の考察を通して、『カテゴリーアイ』では「第一の実有」の「個体」としての側面が、他の諸著作と比較しても際立って強調されていることが明らかとなったが、ではこの「個体」としての役割の内実はどのように理解したらよいのであろうか。

本節(3-5)では、この『カテゴリーアイ』における「個体性」をめぐる問題について考察してみることとする。

『カテゴリーアイ』における「個体性」の規定としては、まず「不可分」で「数において一」 *ἄτομον καὶ ἐν ἀριθμῷ* (Cat.2.1b6-7,5.3b12), 「同じ」で「数において一」 *ταὐτὸν καὶ ἐν ἀριθμῷ* (Cat.5.4a10-11,14,15,17-18,b17) という特色が挙げられる。

次に「不可分で数において一つ」, 「同じで数において一つ」という規定を「個体性」判定基準の最初のものとする、次に「基に置かれたもの」 *ὑποκείμενον* について言われない (Cat.2.1a23-24,26-27,28-29,b3-4,6,7,5.2a12,3a8-9,37) という特色を挙げることができる。

さらに、「反対なものどもを受け入れることができる」 (Cat.5.4a11,12-13,18,30,34,b3-4,5,7,10,12,13,14,16,17-18) という特色をも見出し得る。

そして「なにかこれ」 *τόδε τι* を示す (Cat.5.3b11-12) という特徴をも取り出すことができる。

以下本節(3-5)ではこれらの特色をもととして、以下の(71)～(76)の「個体性」にかかわる問題を提示して検討してみることとする。

(7) 「個体性」の規定についての問題点

- (71) どのような意味で「数において一」なのか？
- (72) どのような意味で「不可分」なのか？
- (73) どのような意味で「同じ」なのか？
- (74) どのような意味で「基に置かれたもの」に関して言われないのか？
- (75) どのような意味で「反対なものどもを受け入れることができる」のか？
- (76) どのような意味で「なにかこれ」を示すのか？²⁷⁵

²⁷⁵ 『カテゴリーアイ』の叙述に即する限り、第一次存在性、交換可能性、再生可能性などの問題は直接には提示され

ではまず、(71)の「どのような意味で「数において一」なのか？」という点の解明からはじめよう。

「数において一」ということが『カテゴリーアイ』において最も重要な「個性性」の判定基準となっていることは、「不可分なもので数において一」、「同じもので数において一」という規定の両者にこの基準が含まれていることから明らかであろう。

Cat.5.4a13 では、「数において一のところのもの」 $\delta \epsilon \nu \alpha \rho \iota \theta \mu \omega \dot{\nu}$ と表現されており、「同じもの」という基準が省略されている。なお *Cat.5.4a19* では「一人でそして同じものであるもの」 $\epsilon \iota \varsigma \kappa \alpha \iota \delta \alpha \upsilon \tau \omicron \varsigma \omega \nu$ という表現がなされ、「数において」の部分が省略されているように読める。

「数において一」という表現は、様々な用語の意味を考究する『形而上学』**Δ**巻において典型的に示されているように (*Met.Δ6.1016b31*)、「エイドスにおいて一」、「類」において一、「類比的に一」などとの対比において語られている。

Top.103a24, *Phys. I 7.190a15-16*, *Met.B4.999b26,33*, *B6.1002b24*, *Z8.1033b31*, *K2.1060b29-30*, cf. *Δ9.1018a13*, 等において同様の使用法, 特に「エイドスにおいて一」との対比が見いだされる。

なお「エイドスにおいて」と同内容と考えられる「ロゴスにおいて一」, との対比例は, *Met.Z14.1039a28*, *I3.1054a34*, *N1.1087b12*, などで見出される。「数において〔一〕というのはそれらの素材 $\psi \lambda \eta$ が一であるもののことである」(*Met.Δ6.1016b32-33*)とされ, 更には「数において一」が「それぞれに沿ってのもの」 $\tau \acute{o} \kappa \alpha \theta' \epsilon \kappa \alpha \sigma \tau \omicron \nu$ (*Met.B4.999b33-34*)とされ, 「数において一」な諸始源 $\alpha \rho \chi \alpha \iota$ が「要素」 $\sigma \tau \omicron \iota \chi \epsilon \iota \alpha$ (*Met.B4.999b31-33*)とされている。

ここで留意すべきは、『カテゴリーアイ』では, 素材 $\psi \lambda \eta$ という用語が一切使用されていないこと, また, 「それぞれに沿ってのもの」 $\tau \acute{o} \kappa \alpha \theta' \epsilon \kappa \alpha \sigma \tau \omicron \nu$ が必ずしも直接に「数において一」という規定と結びつくか否かは疑問の余地がある (cf. *Cat.8.11a20-38*). この箇所では第二章 *Cat.2.1a20-b9* の叙述からは「種」と思われるものが「それぞれに沿ってのもの」とされている) ことである。特に素材に関しては『形而上学』**Ζ**巻第三章で語られるいわゆる「究極の素材」との関連 (*Met.Z3.1028b33-1029b12*) も念頭に置かれねばならない。この問題は, (74) の, 「どのような意味で「基に置かれたもの」に関して言われない」のか?」に関する説明で論ずることにするが, 少なくとも用語上からは, 『カテゴリーアイ』においては素材という表現が皆無なので, 素材が「個性性」に (のみならずどのような側面にも) かかわる場面はない。

以上がアリストテレスの他の著作が示唆する「数において一」の意味であるが, ここで少し観点を変えて, 「唯一性」との関連を考えてみよう。「数において一」という場合の「一個性」は, 「唯一性」を示すであろうか。

アリストテレスにも「唯一性」の意味での「一個性」を示すと思われる例がある。そ

てはいない, という点は注目に値する。本稿付論 i 「「実有」以外の個体について」(pp.109-124) 参照。

れは『天について』において「天界」が一つしかあり得ない、という議論がなされる場合（第1巻第8章, 第9章 *De Caelo* I 8- I 9.276a18-279b3）の「一個性」であり, また『形而上学』において「第一の動かされえずに動かすもの」が「ロゴスにおいても数においても」一つであり, 「天〔天界〕」が一つで一つのみ *μόνος* であるとされる際（*Met.* A8.1074a31-38）の「一個性」である。

だが, 「一つのみ」 *μόνος* という限定のなされていない『カテゴリーアイ』における「個性性」規定としての「一個性」は「唯一性」という限定的性格は必ずしも示さないと思われる。それゆえむしろ並列する多数のものが一つ一つ数え得る（例えば発行直後のコインや雑誌のように）という意味で一つであるという極めて緩い意味から, 「この世に一つしかない」（もし「この世」を現実世界と解し得るならば, 現代の様相論理学風には「全可能世界（現実世界も含む）を通じて唯一つしかない」と言い換えてもよい）という極めて厳格な意味まで, 限定なしに含むと考えることにしたい。

すると問題は, 右に掲げた極端に緩い意味から極端に厳格な意味までの間に想定される, 「一個性」の種々の段階のうち, 「第一の実有」や「実有」以外の「個体」が一体どの辺に位置付けられるか, ということになる。

次に, (ア2) の「どのような意味で「不可分」なのか?」, という点に関しては『カテゴリーアイ』の叙述自体に次のような手掛かりを見出すことができる。

Cat. 5.3a35, 38, 39, b2, 7 における *ἄτομον* の用法がそれである。

この *Cat.* 5.3a33-b9 の箇所で述べられていることは, 〔第二の〕「実有」や「差異」 *διαφορά* から作られたカテゴリーアイはそのすべてが「不可分なもの」 *ἄτομον* についてか, 「種」についてか述べ定められるので, 同名同義的に *συνωνύμως* 言われるということである (cf. *Cat.* 1.1a6-12)。そして, その際, 「種」は「不可分なもの」について, 「類」は「種」と「不可分なもの」についてそれぞれ言い示され, また「差異」のロゴスを「種」も「不可分なもの」も受け入れる, として, カテゴリーアイの系列において, 「不可分なもの」が「第一の実有」と言い換えられている。注意すべきは, カテゴリーアイの系列における「不可分なもの」の例として「実有」以外の「個体」が掲げられることはないということ (Cf. *Cat.* 2.1a30-b3) であり, その意味ではこの箇所の *ἄτομον* は *Cat.* 2.1b6, *Cat.* 5.3b12 における「個性性」規定の際の「不可分」の意味内容の一側面のみを示していると言えるかもしれない。

だが, カテゴリーアイの系列における「種」や「類」との関連で「不可分なもの」が登場することは, *Top.* VI 6.144b2, 3, *Met.* B.995b29, B3.998b16, 999a12 などのアリストテレスの他著作にもあり, またカテゴリーアイの系列が, 表立って表明されているわけではないが, *Top.* IV 1.7.121a36, 37, IV 2.122b21, 22 のように「種」や「類」とのかかわりを示す例もある (なお *Top.* IV 1.121a38 には, 「第一の実有」とは言われないが, 「その或る人」との表現が見出される) ので, *Cat.* 5.3a33-b9 の用法は不可分性の基準に関して重要な示唆を示しているかもしれない。なお「不可分なもの」が範例 *παράδειγμα* [例証法] に関して「個体」を表示すると思われる例もある (*An.pr.* II 24.69a17)。

ここで「不可分」が「個性」表示以外に使用される場合について一言しておこう。

そもそも *ἄτομον* とは形容詞 *ἄτομος* 「分割不可能な」が語源となっており、この意味は後にラテン語の *individuum* や英語の *individual* にまで保持され、西欧諸語における「個性」表示語の源泉となるものである。

だが「分割不可能な」という原義にまで遡るならば、そしてその原義が「分割してしまつては或る有機的なまとまりを持ったなにかが存立できなくなってしまう」と解し得るものであるとするならば、その条件に該当しさえすれば何が「不可分」なものとなつてもよいのである。現にアリストテレスの場合にも、『形而上学』だけを見ても、最下の「種」を示す例 (*Met.B3.998b29*)、デモクリトスの原子を示す例 (*Met.Z13.1039a10*) 等、多様な用例が見出される。

ただし『カテゴリーアイ』の叙述に関する限り、「数において一」という規定と共に語られている点、カテゴリーアイの系列において「種」や「類」と対比されている点から、この箇所では「個性」表示の意味でこそ、この「不可分」が使用されていることは間違いない。その点は当該箇所 *Cat.2.1b6*, *Cat.5.3b12* における「不可分」が、*ἄτομα ἔιδη* の意味では使用されていないとする Allen の指摘²⁷⁶は的を射たものと言わねばならない。そしてその論点をさらには、「その或る人」や「その或る白」が「不可分なもの」とされ、より微小な不可分単位を持ち出さないのはなぜか、と問うこともできるだろう。

次に (73) の「どのような意味で「同じ」なのか？」という問題へと歩を進めることにするが、『カテゴリーアイ』の範囲内の箇所に手掛かりを求めるのは困難である（「同じような」*ὅμοιος* については *Cat.6.6a33,34,6b20,22,23*, *Cat.8.9b15,19,10a13,11a15-19*

(*passim*) で言及があるが、これはまた話が別である)。そこで、「同じ」が「数において一」と共に語られる他著作の叙述を手引きとしよう。

まず挙げられるべきは『トポス論』第一巻第七章 *Top. I 7.103a6-39* における「同じ」と「数において一」についての言及である。そこでは、「同じ」というのは「数において」、「種」において、「類」においての三つの意味で通常用いられており、「数において」というのは「名」*ὄνομα* は多数だが、「事物」*πρᾶγμα* が一つであるものどものことを言うのである、とされる。例えば、「外套」と「外衣」の場合がそれである (*Top. I 7.103a9-10*)。

そして「数において一」のものが「同じ」と言われる場合にも三つの意味が区別される。まず最も勝義に第一には「名」あるいは「定義」*ὅρος* の点で「同じ」と言われる場合で、例としては先の「外衣」と「外套」、また「二足の陸上動物」と「人」が挙げられている。第二の意味は「特有性」*ἴδιον* の点から言われる場合で、「知識を受け入れ得るもの」と「人」が例示され、第三の意味は「付帯性」*συμβεβηκός* の点から言われる場合で、「坐っているもの」ないしは「音楽的なもの」とソークラテースが「同じ」と言われている。また「数において一」のものが（「種」において、「類」において対して）最も勝義に「同じ」という言明も第七巻第一章で述べられる (*Top. VII 1.151b29-30*)

²⁷⁶ Allen[1969]p37.

これらの例を『カテゴリーアイ』の文脈と比較すると、『カテゴリーアイ』では『トポス論』における「事物」に相当するもののみが挙げられ（「色」 *Cat.5.4a14*, 「行為」 *Cat.5.4a15*, 「その或る人」 *Cat.5.4a18-19*）, 「名」（あるいは「特有性」, 「付帯性」）に相当するものは掲げられていない, という点に気付かされる。

この点を, 『形而上学』 Δ 卷第九章 *Met.Δ9.1018a5-9* (cf. *Met.Ι3.1054a29-b2*) における「同じ」と「数において一」への言及から考えてみよう。

その箇所では, 或るものどもは, 「それ自体において」 *καθ' αὐτά* 「同じ」と言われ, その種々な言われ方は「一つのもの」 *τὸ ἓν* と同様であるとされる。そして素材が「一つのもの」である場合と「実有」 *οὐσία*（この場合はエイドスを意味すると考えられる）が「一つのもの」である場合の区別がなされ, さらに素材については「「種」において一」の場合と「数において一」の場合が区別され, すべて「同じ」と言われるとされている。

そしてそこから次のような結論が導き出されるのである。すなわち, 「同じであること」は「或る〔「種」の〕一であること」であって, ものどもが一つより多い場合は無論のこと, 一つだけの場合でも, 例えば「自らが自らに」「同じ」である場合のように, 一つより多くのものどもとして扱われる限りそのことは同様である, ということである。つまり「同じ」とはものが二つ以上あるか, 二つ以上として取り扱われる場合に, それら二つ以上のものが何らかの意味で一つと考えられる場合に初めて意味を持つ用語なのである。

では『カテゴリーアイ』では何と何が「同じ」なのであろうか。

二つ以上の「名」がないという点では, 『トポス論』の分類を『カテゴリーアイ』に適用することはできない。だが『形而上学』の文脈からするならば, 一つのものを二つとして扱う場合の「自らが自らに」「同じ」とする例が適用できるであろう。

そして更に『カテゴリーアイ』の場合, このいわば「自己同一性」とでも言うべき特徴は, *Cat.5.4a10-b18* の叙述から考えて, 時間的な持続性を含意するように思われる（と言っても必ずしも長時間の持続性を含意する訳ではなく, むしろ「同時」ではない, と把握すべきであらう (cf. *Cat.6.5b39-6a4*)）。

(74) の「どのような意味で「基に置かれたもの」に関して言われない」のか?」における「基に置かれたもの」 *ὑποκείμενον* は, 『カテゴリーアイ』の叙述の上で極めて重要な役割を果たしている。それは何よりも第二章 (*Cat.2.1a20-b9*) の箇所です。「基に置かれたもの」に関して言われる「*καθ' ὑποκειμένου λέγεται*」と, 「基に置かれたもの」のうちにある「*ἐν ὑποκειμένῳ ἐστίν*」という指標によって「あるもの」ども *τὰ ὄντα* を四つに分類し, それが『カテゴリーアイ』第五章 (*Cat.5.2a11-4b9*) の「実有」についての記述において決定的に作用するからである。²⁷⁷

²⁷⁷ この四分類は, 近年のE.J.Lowe(2006)の「4 カテゴリー存在論」などにも大きな影響を与えている。そしてむしろアリストテレスにかかわる問題設定の場合, 最大限十個のカテゴリーアイの分類法(本稿第3章第1節(3-1)pp.53-68,におけるカテゴリーアイの列挙の検討の箇所を参照)よりも, この四分類の分類法の方が, 現代的な存在論の課題との親和性が高い。ただしアリストテレスにおいては, この四分類はカテゴリーアイの分類ではないので, 「4 カテゴリー存在論」という表現自体は, 誤解を招く表現ではあるが。

注意すべき第一点はなにかが「基に置かれたもの」に関して言われないこと」と、その同じなにかが「基に置かれたもの」そのものであることとは別だ、という点である。前者は「個性」の特色となり得るが(*Cat.2.1b6-9*), 後者はそうではない。想起すべきなのは「実有」以外の「個体」が「基に置かれたもの」の事例とされている箇所は一個所もないことである(cf. *Cat.2.1a29-b3*)。第二点は「基に置かれたもの」のうちにある」という存在分類の指標は、「個体」であるなしにかかわらず妥当するので、「個性」の特色とは無関係である、という点である。

これらの点は(71)の「どのような意味で「数において一」なのか?」という問題の解明に際しても言及した「究極の素材」と関連するので、ここで『形而上学』Z巻第三章 *Met.Z3.1028b33-1029b12* の箇所を参照してみよう。

アリストテレスはこの箇所で、それぞれの事物の「基に置かれたもの」がその「実有」であると考えられる場合があり、その際、素材、「かたち」、「これらの両者からなるもの」の三者が「基に置かれたもの」と見なされる、と述べる。

そして「基に置かれたもの」が「それに関して他のものが言われはするが、それ自らは決して他の何ものについても言われない」(*Met.Z3.1028b33-1029b12*) ものであることが述べられる。そしてこれがそのまま「実有」に移行して、「実有」とは「他のいかなる「基に置かれたもの」に関してでも〔言われ〕なく、それに関して他のものが〔言われる〕のである」(*Met.Z3.1029a8-9*) とされるが、そこであの「究極の素材」が登場する。すなわちそのように「実有」を解すると、正に素材こそが「実有」となってしまうからである。つまり他のすべてが取り除かれた後には素材以外の何ものもないからである。²⁷⁸

ここで素材とは「それ自らに沿って「なにか」とも、「どれほどか」とも言われずに、他のあるものがそれによって規定されるものどものいずれによっても言われない」

(*Met.Z3.1029a20-21*) ものであり、この「究極者」τὸ ἔσχατον は「それ自身何ものでもなく、どれほどの量でもなく、その他のいかなるものでもない」し「いかなる否定規定もない」とされる(*Met.Z3.1029a24-25*) のである。

だがアリストテレスは、この箇所の最後で最も主として「実有」に属することが「離されうること」τὸ χωριστόν と「なにかこれであること」τὸ τόδε τι を挙げて、ただの素材ではなく、エイドス及び、「〔素材と「かたち」の〕両者からなるもの」の方がより多く「実有」であると思われる、と述べ、締め括りをつけることになる。

さて以上の叙述からすると、(74)「どのような意味で「基に置かれたもの」に関して言われない」のか?」という『カテゴリーアイ』での論点は、『形而上学』当該箇所における「基に置かれたもの」及び(不十分に言われた場合の)「実有」とは、「それに関して他のものが言われる」という部分が否定されるという点で、異なる。よってまた当該箇所における素材にも直結はしない。しかしまた「基に置かれたもの」のうちにある」という指標が全くかかわらないという点では、この箇所との関連を示す、ということになる。

²⁷⁸ 当該箇所の「究極の素材」をめぐる考察については、「第一の素材」についての、本稿付論 ii-3, pp.131-134, および注351, 注352, での考察を参照。

最後に「「基に置かれたもの」」そのものについて一言しておく、『カテゴリーアイ』における「「基に置かれたもの」」は『形而上学』当該箇所と比較して、より融通無碍な性格を示している点の特筆に値する（「たましい」 *Cat.2.1a26-b2* 「ソーマ [物体]」 *Cat.2.1a28* 「文字の読み書き」 *Cat.2.1b3* 等が「基に置かれたもの」とされている。また動詞形では「「種」は「類」の「基に置かれる」 *ὑπόκειται Cat.5.2b19-20* という例もある）。

(75) 「どのような意味で「反対なものどもを受け入れることができる」のか？」という論点については、ロゴス [命題] やドクサ *δόξα* [判断] との比較検討から、それが可能な場合には「自ら変化しながら *αὐτα μεταβάλλοντα* 反対のものどもを受け入れることができる」、とさらに詳細な規定がなされている点に注意しなければならない (*Cat.5.4a21-b16*)。

そして『自然学』の文脈から考えると（第三卷第一章 *Phys.Ⅲ1.200b12-201b15*, 第五卷第一章 *Phys.V1.224a21-225b9*）この箇所の「変化」は、「生成消滅」, 「性質変化」, 「増大減少」, 「移動」という「変化」の四義のうち、少なくとも「生成消滅」ではないとは言えるだろう。というのは「反対なものどもを受け入れることができる」のは「生成」して後「消滅」するまでの間、意味のあることであると考えられるからである。

また『カテゴリーアイ』においては、「量」に関する議論で、「同時に反対のものを受け入れることはいかなる場合にも決してない」と述べ、「実有」の場合にもそれが言えると結論付けている (*Cat.6.5b39-6a4*) が、この点は前の点とともに、(73) 「どのような意味で「同じ」なのか？」の議論で指摘した時間的持続性を裏付けるものとなろう。

(76) 「どのような意味で「なにかこれ」を示す」のか？」における「なにかこれ」 *τόδε τι* は、「なにかどのようなか」 *ποιόν τι* (*Cat.5.3b15-16*) と対になり、「不可分で数において一つ」が「実有」に作用した際の、「第一の実有」と「第二の実有」の区別の指標となるものである。これは、前述した (75) 「どのような意味で「反対なものどもを受け入れることができる」のか？」という論点が、「個性」の特色の側面から「第一の実有」と「実有」以外の「個性」を区別するものであった点と比較されるべきである。

『カテゴリーアイ』においても「なにかこれ」が関係 *πρός τι* を示す例があるように (*Cat.7.8a38,b4,8*) , テキスト上の事実としては、「なにかこれ」が必ずしも「実有」のみにかかわる訳ではなく (cf. *Met.Δ13.1020a8*, *Met.Μ10.1087a18*) , また「個性」のみにかかわる訳でもない (cf. *Met.Θ7.1049a35*) 。さらには「なにかこれ」は先の「究極の素材」と密接に関連すると思われる「第一の素材」でもない (*Met.Θ7.1049a24-27*) ²⁷⁹。

ただし *Cat.5.3b11* の意味での「実有」で、しかも「個性」を示す例もまたあり、しかもそれは有名な「第三の人」 *τρίτος ἄνθρωπος* (*SEI 22.178b36-37,179a3*) にかかわる用例 (*SEI 22.178b38,179a2,4,6,8*) や、イデアーにかかわる難問探求の文脈における用例 (*Met.Μ10.1086b26*, なおこの箇所では「数において一つ」と共に語られている) 等、極めて重要な用例である。

²⁷⁹ この箇所については、「第一の素材」に関する本稿付論 ii-1, ii-2 (pp.128-131), 参照。

さて以上究明してきた (71) から (76) までの「個性性」の特色からすると、『カテゴリーアイ』における「第一の実有」とはいかなる「個体」であったのだろうか。

まず、「数において一」に関しては、必ずしも「唯一性」を示すものではない、と思われる。というのは「数において一」についての当該箇所では挙げた「第一の動かされえずに動かすもの」との関連で考えると、『形而上学』Λ巻第8章 (*Met.*18.1074a31-38) の議論でソクラテース (第一節でも触れた、「その或る人」との表言形上の違い、及びこの箇所ではその違いがむしろ唯一性否定の証左ともなることは後述する) が、素材を持っているので数において多である人のうちの一人であるのに対し、「第一の動かされえずに動かすもの」は素材を持たない完成態 *ἐντελέχεια* であるが故に唯一つである、と語られているからである。

しかし逆に一箇性の条件を極端に緩く取って、多量生産発行直後のコインのような意味での一個性を持つ訳でもないだろう。というのはそのようなものは身に纏いつけた諸性格によっては区別できず、ただ数えうる、という点だけで区別できると考えられるのだが、「その或る人」の場合は、人という規定が作用して、ただ数え得るだけではなく、「人として」、「一人、二人……」と数え得るからである。

ここで「その或る人」とソクラテースの表現形式上の区別を見ていこう。

「その或る人」は、一人の誰か (「或る」の部分)、しかも特定の人 (「その」の部分) という人工的に構成された表現形上の意味合いを持つのに対し、ソクラテースの方は様々な性格特徴をそなえた個人を示す、日常表現的な固有名を示している、と考えられる。

その意味では先の「第一の動かされえずに動かすもの」の引用箇所は、固有名で表現される個人であるソクラテースでさえ「第一の動かされえずに動かすもの」と比較すれば唯一性を持たないのだから、特定の誰か或る一人の人という意味での「その或る人」は、なおさら唯一性から遠ざかる、と言えるだろう。

「不可分」について言うならば、「第一の実有」は、典型的に、カテゴリーアーの系列における「類」－「種」－「個」の系列の「個」としての「不可分なもの」である。ではなぜ「その或る人」や「その或る馬」を「不可分なもの」と見なし、「不可分」な「種」を考えたり、あるいは「個」よりもさらなる微小単位への分割を行なわなかったのであろうか。

この疑問は一つの重要な点を示唆する。すなわち、『カテゴリーアイ』における「第一の実有」を「個体」と呼ぶなら、その不可分基本単位としての「個体」は、例えば生物学で言う「個体発生」や「個体変異」という際の「個体」の概念に極めて近似した相貌を呈するのである。それは不可分単位を細胞や分子や原子のレベルで設定するのではなく、生物学的な「類」－「種」系列における不可分単位としての「個」であり、「個体」であることを、実例からも示している (「その或る人」 *Cat.*2.1a22,b4, *Cat.*3.1b14,15, *Cat.*5.2a13,22,23,24-25,38,2b11,12-13,27-28,3a11,12,14,15,19, *Cat.*7.8a16-17. 「その或る馬」 *Cat.*2.1b4-5, *Cat.*5.2a13-14. 「その或る牛」 *Cat.* 5.2b18, *Cat.*7.8a18. 「その或る

木」*Cat. 5.2b13*)。これらの実例は生物の中でも特に「動物の個体」²⁸⁰が代表的な事例となっていることを示している。

これらの点を考慮すると、「第一の実有」が「述べ定め」と「のうちにある」の両者の「基に置かれたもの」となることの強調をする際に、「のうちにある」の「基に置かれたもの」としての *τὸ σῶμα* (*Cat. 5.2b2*)もまた、*ὁ τις ἄνθρωπος* との関連で、*τὸ σῶμα* とされる点を鑑みると、この *τὸ σῶμα* は、「或るソーマ〔身体〕」とも訳し得るであろう。

すると *τὸ σῶμα* が「第一の実有」と考えられうるとしても、それは必ずしも、物の「個体」の、生物の「個体」に対する優位を示すものとは言えないのではないか。現に「その或る「文字の読み書き」のうちにある「基に置かれたもの」が「たましい」*ψυχή* であり、生物の「いのちのみなもと」でもあったことも、この際想起すべきであろう。

「同じ」についての考察は、同時ではないという意味の時間的持続性を含意した「自己同一性」を示していた。そこに貫時間的同一指定とでも言うべき問題も生ずると思われるが、この点については、「反対なものどもを受け入れることができる」という観点と共に考えてみる必要がある。

「実有」以外の「個体」の場合には「同じで数において一つ」でありながら「反対なものどもを受け入れることができる」ということはなかった (*Cat. 5.4a11-17*)。だが「第一の実有」は「自分自身変化しながら」反対者を受容する。

この際、ポイントと思われることは、ここで言う時間的持続性には、『カテゴリーアイ』以外の文脈におけるエイドスないしは「種」による「存在維持の「種」性」を読み取することは避けたほうがよいのではないか、ということである。すなわち、『カテゴリーアイ』の叙述は生成消滅について語っていない。そして「自分自身変化しながら」という場合の「変化」とは、おそらく「性質変化」を意味するであろう。すると、「その或る人」を例に取れば、時間存続とは最大限、生成してから消滅するまでの間、すなわち「生きて」いる間を示している、と言える。

「なにかこれ」*τόδε τι* であることについては、『カテゴリーアイ』の場合、「実有」以外の「個体」には該当しないように思われる点では、「実有」と「「実有」以外のもの」を区別する指標とも言えるが、他方「なにかどのようなか」*ποιόν τι*という「「類」「種」「実有」」表示とも対になっており、「第一の実有」と「第二の実有」を区別する指標でもあったことを思い起こす必要がある²⁸¹。

3ー結. 「個体」としての「第一の実有」の意義

²⁸⁰ この「動物」の重視という点は、以下のような箇所にも示されている。「すべてのもののうちに自然的でそして美しいなにかがあるので、ためらうことなくあらゆる動物の探求へと向かわねばならない。」*πρὸς τὴν ζήτησιν περὶ ἐκάστου τῶν ζώων προσίεσθαι δεῖ μὴ δυνωπούμενον, ὥς ἐν ἅπασιν ὄντος τινὸς φυσικοῦ καὶ καλοῦ*. (*PA I* 5. 645a21-23)。

²⁸¹ 「なにかこれ」*τόδε τι* と「なにかどのようなか」*ποιόν τι* については、本稿3・5(76)についての考察, p.106, 参照。

アリストテレースにおける「個体実有」の重視は、様々な箇所から確認できる。そして本第3章で様々な角度から検討したように、この「個体」の問題が孕む哲学的含意の大きさは、特筆に値するものがある。このような『カテゴリーアイ』での議論の展開は、「第一の哲学」の直接の課題とはならないところでの「第一の実有」の役割をも示唆しており、そのような場面では、「個体」の重視の側面を独特な仕方でも強調する、という姿勢も読み取れることとなる。そしてこの「個体」の重視という側面は、アリストテレースの哲学の解釈を超えた範囲までを含めた、様々な哲学的議論を引き起こす原点ともなりうるものであった。

しかし、この「個体実有」を明確に「第一の実有」と表記しているのは、『カテゴリーアイ』第5章における記述だけである。またその際に「第一の実有」を「第二の実有」と対比して論ずる視点も、『カテゴリーアイ』第5章に特有の論点である。これらの点は特に強調してもよい点であると思われる。

アリストテレースにおける用語法としての「第一の実有」に関する限り、本稿第1章や第2章で考察した、「第一の哲学」の探求をおこなう『形而上学』Λ巻やΖ巻での問題点こそが主要な問題点である。その意味では、「第一の実有」の代表例として『カテゴリーアイ』第5章の箇所を無反省に取り扱ったり、また特に、しばしばおこなわれるように、この箇所の叙述を基にしないと、他の箇所の解釈ができない、としたりする姿勢には、十分な注意が必要とされるだろう。

結論 アリストテレースにおける「第一の実有」の意義

以上の本稿における諸考察から、全領域的に「実有」を問題とした際の「第一の実有」、すなわち「第一の哲学」の対象としての「第一の実有」については、単なる「実有」ではなく、「実有の実有」とは何か、ということが問題となっている、という視点について考慮することがまずは肝要である。

この視点からは、「動かされえない実有」については、ヌースとしての実働態である「動かされえない始源」（『形而上学』A巻）が「第一の実有」とされ、そして「感覚的な実有」については、「内にあるエイドス」としての「たましい」（『形而上学』Z巻）が「第一の実有」とされている、という点を明確に指摘できる。アリストテレースの「第一の実有」についての議論の本筋は、この『形而上学』A巻、Z巻における「第一の哲学」にかかわる議論のうちにある。

他方で歴史的に最も有名になってきた『カテゴリーアイ』第5章における「個体」としての「第一の実有」は、この意味での「実有の実有」ではなく、その点で「第一の哲学」の対象としての側面を直接的に見て取ることは困難である。

『動物の発生について』の議論では、「生成」の際の「個体」の「類」に対する優位性が指摘されていた。他方、『カテゴリーアイ』では、いわば「生成消滅する感覚的な実有」としての「個体」が、生成してから消滅するまでの間に起こりうることがらに限定した議論がなされていた。両者とも「生成消滅しない動かされえない実有」についての議論ではない、という共通性を有している。「個体」を重視する視点とは、このような「実有」の領域性に基づいた視点であるとも言えよう。

それゆえ「実有」を「全領域的に」考察した際に最も重要なのが「第一の実有」であり、これこそが「第一の哲学」の課題である、とするならば、少なくとも『カテゴリーアイ』での「第一の実有」との表現は、この「第一の哲学」の課題とは何か別のテーマを扱ったものと言わざるをえないだろう。

この『カテゴリーアイ』での探求は、アリストテレースの学問分類の中での位置づけとしては、「第一の哲学」ではない、というだけではなく、「第二の哲学」とされている自然学のレベルの探求でもなく、「第一の哲学」や「第二の哲学」を含む、広い意味でのいわゆる「理論学」の中での探求でもない。さらにまたこの「理論学」に続く「実践学」の中にも入らず、さらにはまた「実践学」に続く「制作術」の中での探求でもない。そもそも『カテゴリーアイ』を含む、一般に論理学関係のテーマを扱っているとされている、いわゆる『オルガノン』とされている著作群が、アリストテレースの学問体系の中でどのように位置づけられるのか、という問題がここには控えている²⁸²。そして、その『オルガノン』の

²⁸² 『形而上学』Γ巻第3章における分析論についての言及(*Met.Γ3.1005b2-5*)を参考にすると、アリストテレースにとって、広い意味での論理的な探求は、すべての学的な営みの基礎的な素養、と受け取れる側面がある。あえて言えば、基礎的な教養として、読み書き計算に加えて論理の素養も必要、と主張しているようにも思われる。この点

中でも、『カテゴリーアイ』という書物はとりわけ特異な位置を占めている。この著作が、「第一の哲学」の直接の課題を扱っているものではないとしても、アリストテレスの学問体系の中で、どのような位置づけをされるのか²⁸³、そして一体何を問題にした書物なのか、ということそのものが、大きな課題であったのである。そして本稿の考察によれば、『カテゴリーアイ』での論点は、探求全般の主題の区別についての基礎的な素養を確保し、要点をまとめる、という点にあったとも考えられるだろう²⁸⁴。そして他方で、この「個体」としての「第一の実有」についての言及が、テーマとしては、いわばアリストテレスの解釈の範囲を超えて、きわめて豊かな哲学的な議論を、古来、現代にいたるまで喚起し続けて来ている²⁸⁵、という点もまた忘れてはならない。本稿ではこの『カテゴリーアイ』を巡る種々の論点についても、「第一の実有」の解釈に関連する範囲で、総合的に検討した。

以上の本稿第1章から第3章における考察により、『カテゴリーアイ』という書物が、ア

は現代の教育論における論理の役割の重要性についても示唆を与えることとなるだろう。『オルガノン』が通常の学問的な分類にカウントされない理由も、この側面と極めて深い関係にあると思われる。

²⁸³ その最も際立った議論の一つは『カテゴリーアイ』をアリストテレスの著作ではなく、偽書とする見解である。牛田[1991]pp. 203-220, 参照。なお、Husik[1904],[1939],De Rijk[1951]等の文献が『カテゴリーアイ』の真偽の問題について詳しい。牛田[1991]の、『カテゴリーアイ』が少なくとも最初期の作品とは言えないのではないかと、との論点には部分的に賛同できるところもある。しかし、本稿ではいわゆる偽書説については、Kenny[1983]による文体論的考察なども含めて総合的に判断して、特殊なテーマについての覚え書き、という意味で、他の著作とはかなり異なった性格と成立事情を持つが、真作の可能性が高い、という立場を採る。

²⁸⁴ 『カテゴリーアイ』が、いわゆる『オルガノン』の開巻劈頭の冒頭に来るような、「概念」-「命題」-「推論」といった順で展開する、一連の論理的な議論のうちの、「概念」を扱った書物である、といったポリュフュリオス以来の理解でいいのか、といったことも問題となるだろう。しかしもしも『カテゴリーアイ』が、いずれにせよ広い意味での論理学的な探求の一端を担う著作であるとした場合、そこでの「第一の実有」の取り扱い、^{全領域的に考えた上での「第一の哲学」の対象としての「実有」を問題としているわけではなく、先の注282で指摘したように、「すべての学的な営みの基礎的な素養」として踏まえておくべき「実有」について言及した記述である、ということにもなるだろう。この点で、アリストテレスの「第一の哲学」に臨む姿勢は、『国家』第4巻(Resp.IV.486a8-9)で、プラトーンが、「知恵を愛する者〔哲学者〕」の「たましい」は「全時間」と「全「実有」〔全存在〕」の観究めをする、としていた姿勢を正当に受け継ぐものである、とも言えるであろう(この点については注22も参照)。そして『カテゴリーアイ』での論点は、そのような探求全般の主題の区別についての基礎的な素養を確保し、要点をまとめる、という点にあったとも考えられるわけである。}

²⁸⁵ 現代における哲学的議論についての関連文献としては、Tahko[2012]、加地[2018]を参照。特に個体化を巡る論点については、堀江[2016]も参照。本稿の立場からは、Tahkoらの議論は、「4カテゴリー存在論」の問題も、「種論理」の問題も、本稿第3章の『カテゴリーアイ』にかかわる論点を主に扱っており、本稿第1章や第2章で扱ったような『形而上学』の議論、すなわちアリストテレス本来の「第一の哲学」としての「形而上学」の議論がほとんどなされてはいないように見受けられる。

リストテレースの解釈という枠組みを超えた地点でも考察せざるをえないような、大変に豊かな哲学的含意に満ちており、熟考に値する、ということを十分に認めるとしても、アリストテレースの本来の、プロテー・ウシアー *πρώτη οὐσία* 「第一の実有」の解釈としては、「第一の哲学」の探求対象として正当に扱っている、『形而上学』**A**巻(本稿第1章参照)や『形而上学』**Z**巻(本稿第2章参照)での議論を、「第一の実有」についての主要な見解とすべきである。そして『カテゴリーアイ』での「第一の実有」についての取り扱い(本稿第3章参照)については、アリストテレス哲学全体を射程に入れた全領域的な「第一の実有」についての議論に関する限り、無反省にその表現の代表的見解として扱うことは避けた方が良い。

第3章の考察では、まず「あるもの」と「実有」の区別の論点、それから「個体」を「第一の実有」と呼び、「種」や「類」を「第二の実有」と呼び区別する、といった論点について、テキスト上の文献学的な調査を丹念に行い、特に『カテゴリーアイ』における意味での「第一の実有」と「第二の実有」の区別とその説明は、アリストテレス著作集の中でも、『カテゴリーアイ』第5章のみに限定された独特な議論であることも明らかにした。むしろ『カテゴリーアイ』第5章(のみ)で印象的に記され表現されている「第一の実有」は、著作集の他の多くの箇所ですら「実有」と記されているものにほぼ相当し、その点では特異な文脈を示している。

そして本来の「第一の実有」とは、単に「実有」と記されているものの「根拠」、いわば「実有の実有」を示すための、特徴的な表現であった。そしてこの意味での「第一の実有」は、『形而上学』**A**巻における「全領域的なすべての「実有」の根拠」についての探求とその帰結としての「ヌース」の提示や、『形而上学』**Z**巻における「感覚的な「実有」の根拠」についての探求にかかわる議論と、その帰結としての「たましい」の提示によって、論じられていた、ということ、そして、『カテゴリーアイ』は、書物の性格上、様々な哲学的な議論をする際の前提となる、基礎教養に関わる著作であり、その文脈において、通常は「実有」とのみ呼ばれる「個体」が、とりわけ「第一の実有」と表現されていた、というのが本稿の帰結となる。

付論 i

「実有」以外の「個体」について

i ー序

本稿第3章第5節(3ー5)で検討したように、『カテゴリーアイ』における「個体」の問題を取り上げた場合,その中心的課題が,「第一の実有」としての「実有」の「個体」の叙述にあったことは言うまでもない。だが『カテゴリーアイ』第2章における「不可分度数において一つ」(*Cat.2.1b6-7*)という規定を「個体性」の規定と考えるなら,その規定は「実有」の「その或る人」*ὁ τις ἄνθρωπος* (*Cat.5.2a13,etc.*)ばかりではなく,「実有」以外の,「その或る白」*τὸ τι λευκόν* (*Cat.2.1a27*)などにも適用されており,色の「個体」など,「実有」以外のカテゴリーアイにおける「個体」と呼べるものが考慮されていた²⁸⁶。また第5章では,いわば知識の「個体」,行為の「個体」などと呼べるものについての言及もある。さらに,前述の規定を手掛かりにして『カテゴリーアイ』以外の著作から関連する箇所を探るなら,『トポス論』には「動き」の或る「種」のもとに入る不可分なもの」(*Top.IV.1.121a36-37*),『自然学』には「この白」(*Phys.VII.1.242b39*),「この黒」(*Phys.VII.1.242b39*),「今の健康」(*Phys.V.4.228a10*),「数において一の動き」(*Phys.VII.1.242a67*),「一つの時」(*Phys.V.4.228b2*),「数において同じ時」(*Phys.VII.1.242a68*),「同じ時」(*Phys.VII.1.242b38-39*)「この時」(*Phys.VII.1.242b40*)「この所」(*Phys.VII.1.242b39-40*)等の表現があり,いわば「動き」の「個体」,健康の「個体」,時間の「個体」,場所の「個体」,と呼べるもの等々への言及もある。これらの『カテゴリーアイ』第2章における「あるもの」の四分類の一つに関連した一連のものを,「個体」と理解できるなら,これらの「実有」以外の「個体」²⁸⁷は,一体いかなるものな

²⁸⁶ この問題点についての近年における代表的論争は,いわゆる「内属性論争」であり,その主要文献としては, Ackrill[1963]pp.72-76,82-91,109, Owen[1965b], Allen[1969], Moravcsik [1967], 井上[1980]pp.146-165(初出1975),pp.220-243(初出1977), 今井[1976],等を挙げることができる。

²⁸⁷ 「「実有」以外のもの」の場合には,「個体」という呼び方がふさわしいかどうかが問題となる事例もあると思われるが,本付論 i では「「実有」以外のもの」で,「不可分なもの数において一」,「同じもの数において一」

のであろうか。また「個体」としての「第一の実有」といかに関わるのであろうか。

i - 1 .

まず初めにこの「実有」以外の「個体」の言及箇所を検討しておこう。『カテゴリーアイ』第2章における「不可分なもので数において一」という規定を基準にした場合、「実有」以外の「個体」の実例と考えられる箇所には以下のものがある。

<t1>「だが或るものは「基に置かれたもの」 *ὑποκείμενον*²⁸⁸ のうちにあるが、しかしいかなる「基に置かれたもの」に関しても言われない、「「基に置かれたもの」のうちに」 *ἐν ὑποκείμενῳ* と私が言うのは、「なにか」のうちに、[そのの] 部分としてではなく、あり、[それが] そのうちにある[ところの当の] ものから離れてあることが不可能なもののことである、例えば「その或る「文字の読み書き」²⁸⁹ *ἡ τις γραμματική* は「基に置かれたもの」としての「たましい」 *ἡ ψυχή* のうちにあるが、しかしいかなる「基に置かれたもの」に関しても言われない。また、「その或る白」 *τὸ τὶ λευκόν* は「基に置かれたもの」としての「[物] 体」 *τὸ σῶμα* のうちにある、なぜならすべての色は「[物] 体」のうちにあるから、がしかしいかなる「基に置かれたもの」に関しても言われない」²⁹⁰
(*Cat.2.1a23-29*)

に妥当するものをすべて「「個体」」と呼ぶこととする。これは、例えば論理学の分野などで、人や動物や「物」ばかりでなく、行為や「事件」、「数」や「時刻」のような抽象的なものなども含めた、あらゆる特定できるものを「個体」と呼ぶ言い方に近い観点を採用することでもある。「実有」の個体についてどのように考えていたか、という点を探ることが本論第3章の主要な課題の一つであったが、アリストテレースがこのような広い意味での「「実有」」以外の「個体」についてどのようなことを考えていたのかも探ってみる、というのが、本付論 i の課題となる。

²⁸⁸ *ὑποκείμενον* を「基に置かれたもの」と訳す点については、注45、参照。

²⁸⁹ *γραμματική* を、「文字の読み書き」と訳す点については、*γραμματικόν* を「文字の読み書きが分かること」と訳すこととしたことについての、注216を参照。

²⁹⁰ *τὰ δὲ ἐν ὑποκειμένῳ μὲν ἔστι, καθ' ὑποκειμένου δὲ οὐδενὸς λέγεται, ἐν ὑποκείμενῳ δὲ λέγω ὃ ἐν τινὶ μὴ ὡς μέρος ὑπάρχον ἀδύνατον χωρὶς εἶναι τοῦ ἐν ᾧ ἔστιν - οἷον ἡ τις γραμματικὴ ἐν ὑποκειμένῳ μὲν ἔστι τῇ ψυχῇ, καθ' ὑποκειμένου δὲ οὐδενὸς λέγεται, καὶ τὸ τὶ λευκὸν ἐν ὑποκειμένῳ μὲν ἔστι τῷ σώματι, ἅπαν γὰρ χρῶμα ἐν σώματι, - καθ' ὑποκειμένου δὲ οὐδενὸς λέγεται.* (*Cat.2.1a23-29*)

<t2>「しかし端的に言って、「不可分なもの」どもで「数において一のもの」 τὰ

ἄτομα καὶ ἐν ἀριθμῷ はいかなる「基に置かれたもの」に関しても言われないが、しかし

「基に置かれたもの」のうちにあることを妨げないものは、いくつかある。なぜなら、

「その或る「文字の読み書き」は「基に置かれたもの」のうちにあるものどもの一つであるから」²⁹¹(Cat.2.1b6-9)

これら『カテゴリーアイ』第2章の箇所には、「「基に置かれたもの」のうちに」という規定とその規定に従った「個体」の実例としての「その或る「文字の読み書き」」「その或る白」が登場し(<t1>),「不可分で数において一つ」という「個体」の規定とその「不可分で数において一つ」が、「基に置かれたもの」のうちにはあるが、「基に置かれたもの」に関して言われはしないないこと(<t2>)が語られている。

<t3>「例えば[「実有」でない]他のなにものにおいても、「数において一」でありながら、反対のものどもを受け入れることのできるものを持ち出してくることはできないだろう、例えば「数において一のもの」で「同じ」である色は、白くあるとともに黒くあることはできないだろう。また「同じ」で「数において一」な行為は悪くあるとともに善くあることはできないだろう、しかし「実有」でない限りの他のものどもにおいても、同様である」²⁹²(Cat.5.4a11-17)。

この<t3>の箇所では「実有」との対比から、「数において一」でありながら反対のものどもを受け入れることのできない例として「数において一」で「同じ」である色と、「同じ」で「数において一」な行為が掲げられている。ここでは特に「行為の個体」と理解できるものが実例に挙げられていることに注目すべきである。

<t4>「したがって快樂は「動き」のエイドス〔一種〕でもなく、またその「動き」の或る

²⁹¹ - ἀπλῶς δὲ τὰ ἄτομα καὶ ἐν ἀριθμῷ κατ' οὐδενὸς ὑποκειμένου λέγεται, ἐν ὑποκείμενῳ δὲ ἔνια οὐδὲν κωλύει εἶναι· ἡ γὰρ τις γραμματικὴ τῶν ἐν ὑποκειμένῳ ἐστίν. (Cat.2.1b6-9)

²⁹² οἷον ἐπὶ μὲν τῶν ἄλλων οὐδενὸς ἂν ἔχοι τις προενεγκεῖν ὅσα μὴ ἐστὶν οὐσία, ὃ ἐν ἀριθμῷ δὲ τῶν ἐναντίων δεκτικόν ἐστίν· οἷον τὸ χρῶμα, ὃ ἐστὶν ἐν καὶ ταῦτ' ἀριθμῷ, οὐκ ἔσται λευκόν καὶ μέλαν, οὐδὲ ἡ αὐτὴ πρᾶξις καὶ μία τῷ ἀριθμῷ οὐκ ἔσται φαύλη καὶ σπουδαία, ὡσαύτως δὲ καὶ ἐπὶ τῶν ἄλλων, ὅσα μὴ ἐστὶν οὐσία. (Cat.5.4a11-17)

エイロス〔「種」〕の基に入る「不可分なものどもの〔個/個体/個別的なもの〕」のどれ一つでもないであろう」²⁹³ (*Top.* IV 1.121a35-37)

この『トポス論』の箇所では「動き」の「個体」が示唆されている, と解釈できる。またこの箇所に続く叙述 (*Top.* IV 1.121a37-39) は, 「その或る人」 *ὁ τις ἄνθρωπος* という表現が『トポス論』においても見いだされる実例を示す箇所となっている²⁹⁴。

<t5> 「もし夜明けの〔健康〕 *ἡ ἔωθεν ὑγίεια* と今の健康 *ἡ νῦν ὑγίεια* とが同じで一つであるとすれば, 健康を失って間隔を生じた後に再びそれを取り戻したときにも, その〔健康〕と先の〔健康〕とがなぜ数において一のものであっていけないのか。……もし〔健康〕が一つで同じであるとすれば, 一つで同じが, 幾度も消えたりあったりすることが許される〔という不合理な〕ことになるはずであろう」²⁹⁵ (*Phys.* V 4.228a9-12, a17-19)

この『自然学』の箇所では「一つのもの」で「同じ」「健康」が, 一度消えたら再びありはしないという点が示唆されている。すなわち「健康」の「個体」の再生不可能性が示唆されている, と理解できる。

<t6> 「端的な意味で連続的で一つの「動き」」は, エイロスにおいて同じであり, 一つのものの〔動くものが一つ〕であり, 一つの「時」において行われるのでなければならない。」²⁹⁶ (*Phys.* V 4.228b1-3)

<t7> 「数において一の「動き」と私が言うのは, 数において同じから数において同じへと

²⁹³ ὥστ' οὐκ ἂν εἶη εἶδος ἡ ἡδονὴ τῆς κινήσεως, οὐδὲ τῶν ἀτόμων οὐδὲν τῶν ὑπὸ τι εἶδος τῆς κινήσεως ὄντων· (*Top.* IV 1.121a35-37)

²⁹⁴ 「なぜなら不可分なものどもは「類」も「種」も分有するのだから, 例えば「その或る人」は「人」も分有するし「動物」もまた〔分有する〕。」 *καὶ γὰρ τὰ ἄτομα μετέχει τοῦ γένους καὶ τοῦ εἶδους, οἷον ὁ τις ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπον μετέχει καὶ ζῴον.* (*Top.* IV 1.121a37-39)

²⁹⁵ εἰ δὴ ἡ αὐτὴ καὶ μία ἡ ἔωθεν καὶ νῦν ὑγίεια, διὰ τί οὐκ ἂν καὶ ὅταν διαλιπὼν λάβῃ πάλιν τὴν ὑγίειαν, καὶ αὕτη κάκεινη μία τῷ ἀριθμῷ ἂν εἴη; …… εἰ δ' οὖν μία καὶ ἡ αὐτή, ἐνδέχοιτ' ἂν τὸ αὐτὸ καὶ ἓν καὶ φθείρεσθαι καὶ εἶναι πολλάκις. (*Phys.* V 4.228a9-12, a17-19)

²⁹⁶ ἀνάγκη τὴν αὐτὴν εἶναι τῷ εἶδει καὶ ἑνὸς καὶ ἐν ἐνὶ χρόνῳ τὴν ἀπλῶς συνεχῇ κίνησιν καὶ μίαν, (*Phys.* V 4.228b1-3)

数において同じ時において生じるもののことである」²⁹⁷ (*Phys.*Ⅶ1.242a66-68)

<t8>「数において一のものから数において一のものへの同じ時における〔「動き」〕、例えば、「この白」 τόδε τὸ λευκόν から「この黒」 τόδε τὸ μέλαν への、あるいは「この所」 ὅδε ὁ τόπος から「この所」への、「この時」 ὅδε ὁ χρόνος における〔「動き」〕は、数において同じである。」²⁹⁸ (*Phys.*Ⅶ1.242b37-40)

以上の<t6>、<t7>、<t8>の『自然学』の箇所では、色の「個体」とともに、「動き」の「個体」、「所」の「個体」、「時」の「個体」と考えられるものが語られている。なお<t8>において色の「個体」と考えられるものを指す表現「この白」 τόδε τὸ λευκόν (指示代名詞＋定冠詞＋普通名詞)は、『カテゴリーアイ』の場合の「その或る白」 τὸ τὶ λευκόν (定冠詞＋不定代名詞＋普通名詞)という独特な表現とは異なった、いわば古代ギリシア語の日常表現そのままの直接の指示表現となっている。

i-2.

<t1>から<t8>までの言及箇所²⁹⁹から理解されるように「実有」以外の「個体」のタイプはほぼ『カテゴリーアイ』におけるもろもろのカテゴリーアーに対応している。まず「その或る」「文字の読み書き」「その或る白」、「数において一で同じである色」、「この白」「この黒」、「夜明けの〔健康〕」「今の健康」「一で同じ〔健康〕」等の知識の「個体」、色の「個体」、「健康」の「個体」はすべて「どのような」〔性質〕の「個体」である。『自然学』における「一つの「時」「数において同じ「時」「同じ「時」「この「時」」「この「所」等の「時」の「個体」、「所」の「個体」は『カテゴリーアイ』におけるカテゴリーアーとしては「どれほ

²⁹⁷ λέγω δὴ ἀριθμῶ μίαν κίνησιν τὴν ἐκ τοῦ αὐτοῦ εἰς τὸ αὐτὸ τῷ ἀριθμῷ ἐν τῷ αὐτῷ χρόνῳ τῷ ἀριθμῷ γιγνομένην. (*Phys.*Ⅶ1.242a66-68)

²⁹⁸ ἀριθμῷ δὲ ἡ ἐξ ἑνὸς τῷ ἀριθμῷ <εἰς ἓν τῷ ἀριθμῷ> ἐν τῷ αὐτῷ χρόνῳ, οἷον ἐκ τοῦδε τοῦ λευκοῦ εἰς τόδε τὸ μέλαν, ἢ ἐκ τοῦδε τοῦ τόπου εἰς τόνδε, ἐν τῷδε τῷ χρόνῳ. (*Phys.*Ⅶ1.242b37-40)

²⁹⁹ 『形而上学』には「実有」以外の「個体」の例はほとんど見出せないが、「この円」(*Met.*Z10.1036a2) (『カテゴリーアイ』(*Cat.*8.10a11-16)では「かたち」 μορφή は性質のカテゴリーアーに入れられている)等の例がないわけではない。しかし、現存の『形而上学』の中で「実有」以外の「個体」の例がほとんど見いだせない、ということは、『形而上学』という書物が何をテーマとしているのか、といった点も含めて、そのこと自体が一つの大きな問題でもあるだろう。

どか」〔量〕の「個体」として把握できる（「所」は *τόπος*, 「時」は *χρόνος* であり, これらは通常, 「所」を示す「どこか」 *πού* (*Cat.1b26,2a1*), 「時」を示す「いつか」 *ποτε*

(*Cat.1b26,2a2*) とは表現が異なっており, ことがらを扱う文脈の違いを示唆している)。また, 「動き」の或る「種」のもとに入る不可分なものども, 「数において一の「動き」, 等の「動き」の「個体」については, 「動き」が「なすこと」〔能動〕と「受けること」〔受動〕のカテゴリーーと関連することへの言及 (*Top.IV1.120b26*, *Met.Z4.1029b22*) から考えて, 「なすこと」〔能動〕と「受けること」〔受動〕のカテゴリーーにおける「個体」と把握できる。さらに付帯的な意味では「どれほどか」〔量〕と言われるものの (*Cat.6.5a38-39*), むしろ「どれほどか」〔量〕の「その「うちにある」それ」とも把握でき, カテゴリーーの上での位置付けが必ずしも明瞭でない「同じで数において一つの行為」についても, 「動き」の「個体」に関連させて考えることができるであろう。

次にこれらの言及箇所の問題点を大別すると, (ア)「数において一」「不可分なもの」「同じ」等の「個体性」の規定の問題, (イ)「基に置かれたもの」のうちに」という「のうちにある」の規定の問題, 及び (ウ) 当該箇所解釈者達によるその他の論争点, に分けられる。このうち「個体性」の規定については『カテゴリーアイ』における「第一の実有」との関連を考慮しないわけにはいかない³⁰⁰。そこでその点をも射程に入れて「実有」以外の「個体」の場合の「問題点」を摘出してみよう。

(ア)「個体性」の規定についての問題点

(ア1) どのような意味で「数において一」なのか?

(ア2) どのような意味で「不可分」なのか?

(ア3) どのような意味で「同じ」なのか?

(ア4) どのような意味で「基に置かれたもの」に関して言われない」のか?

(ア5') どのような意味で「反対なものどもを受け入れることができない」のか?

(ア6') 「「なにかこれ」を示す」のか?

(イ)「のうちにある」という規定についての問題点

(イ1) 「何」「のうちにある」のか?

(イ2) 「その「うちにある」もの」から離されうるか?

(ウ) その他の問題点

³⁰⁰ 本稿第3章第5節(3-5), pp.96-104, 参照。

(ウ1)「述べ定め」の系列の「基に置かれたもの」となるのか？

(ウ2)「再生」できるのか？

(ウ3)「一般者」か？

以下、この(ア)から(ウ)までの個々の問題点について考察してみよう。

まず、(ア1)の「どのような意味で「数において一」なのか？」という点についてだが、「その或る白」等の「その或る～」という限定句を伴った実例については、「或る」という不定代名詞によって表現上、一種の(「個体」)変項として把握され、極めて厳格な一箇性である唯一無二性は示さず、並列する多数のものが一つ一つ数えうるという緩い意味の並列一箇性を示す、という可能性が強い。この点は「第一の実有」「その或る人」の際と同様である⁽³⁰¹⁾。また「数において一のもの」という規定が枚挙の際の基本となっている、という考え方もあるが³⁰²、この「枚挙」の点についても、「第一の実有」の場合と同様であると思われる。だが「その或る～」という限定句のない「この白」「このとき」「この所」等の指示代名詞付きの表現や「数において一の「動き」」等は、むしろ一種の「個体」定項として把握できる。その点では、「第一の動かされえずに動かすもの」の示す唯一無二性は示さないとしても、一箇性の程度は「その或る～」という限定句付きの表現よりは、表現上強いものとなるだろう。

なお、「その或る～」 *ὁ τις, ἡ τις, τὸ τι* という表現は、『カテゴリーアイ』や『命題論』、『トポス論』において、しばしば「数において一」な「個体」を表示している。例えば、「その或る人」 *ὁ τις ἄνθρωπος* がその代表である(*Cat.5.2a13, etc., De Int.11.21a19-20, Top.IV 1.121a38, V 1.128b20, 129a4*)。「不可分で数において一つ」「同じで数において一つ」等の表現と関連して使用されている「その或る「文字の読み書き」」等の「実有」以外の「個体」もまた「個体」を表示していることは間違いない。だが「その或る～」という表現は常に「個体」のみを表示するわけではない。例えば『トポス論』における「その或る病氣」 *ἡ τις νόσος* (*Top.IV 3.123b35*)、は明らかに「熱病」「眼病」等の病気の「種」を示している(*Top.IV 3.123b35-37*)。その他「その或る思想」 *ἡ τις υπόληψις* (*Top.VI 9.147a25*)「その或る思想対象」 *τὸ τι ὑποληπτόν* (*Top.VI 9.147a25*)「その或る数倍」 *τὸ τι πολλαπλάσιον* (*Top.VI 9.147a26-27*)「その或る分数」 *τὸ τι πολλοστημόριον* (*Top.VI 9.147a27*)等も「個体」ではなく「種」を表示していると思われる。それゆえにこれらの例は「非実有」の「個体」の言及箇所から

³⁰¹ 本稿第3章第5節(3-5), pp.96-104, 参照。

³⁰² Jones, B. [1972] pp.110-116. cf. Annas [1974], pp.146-151.

は除外して考えた。ここで注意すべきなのは「その或る～」の「～」の部分に「類」を示す表現が入る点である³⁰³。「病氣」（「どのような」 *ποιόν* [性質] のカテゴリーー）、「思想」,「思想対象」,「数倍」,「分数」（以上「なにかへむかって」 *πρός τι* [「関係」] のカテゴリーー）はいずれも「類」である。

次に、(72)の「どのような意味で「不可分なもの」なのか？」については、Allen が Owen の説を批判し、「不可分なもの」 *ἄτομα* が *ἄτομα εἶδη* の意味ならば Owen の説が成立するが、ここの「不可分なもの」はそのような意味では用いられていない、としている³⁰⁴。だが「実有」以外のものの場合、「不可分なもの」としての「種」以下への分割は行われにくいと思われる。言及箇所<t1>、<t2>の *Cat.2.1a25-27,b8* 以外の箇所では「その或る白」や「その或る「文字の読み書き」」が使用されることはなく、*Cat.8.11a20-36* では「実有」以外のものの「種」である「「文字の読み書き」」が「それぞれに沿ってのものどものうちのもの」 *τῶν καθ' ἕκαστα* であると述べられている。「実有」以外の「個体」はすでに実質的に「不可分なもの」なものをさらに分割するという「分割違反」を犯しているかもしれず、この点は「第一の実有」と異なる³⁰⁵。

(73)の「どのような意味で「同じ」なのか？」という点については『カテゴリーアイ』の場合、時間的な持続性を含意した「自己同一性」が考えられる³⁰⁶。だが、先の言及箇所・に関連して、『カテゴリーアイ』には「例えば、もし或るその行為 *τις ἡ πράξις* がどれだけのものであるかを誰かが示そうとするなら、「時」 *χρόνος* によって「一年間の」、あるいはなにかそのような仕方で示しながら限るだろう」（*Cat.6.5b4-6*），という叙述がある。この場合の「或るその行為」（*Cat.6.5b5*）は前述の「その或る～」という表現とは若干異なった言い方をしているが、これを先の「同じで数において一つの行為」（*Cat.5.4a15*）と実質的には同じ内容を指すと考えてよいならば(*Cat.6.5a38-b10*)，その行為の長さは「一年間」である。だが「一年間」の行為とは一体何を示しているのでしょうか。この点については『詩学』第23章 (*Poet.23.1459a17-b2*)において言及されている「トロイア戦争」の例が参考になる。そこで

³⁰³ 今井[1976]p.215, 参照。なお、この点に関連して『政治学』における「その或る大きさ」 *τὸ τὶ μέγεθος* (*Pol. III.1283a4*)での「大きさ」は「類」を示すのか「種」を示すのか微妙である。だが仮に「種」を示すとしても「不可分で数的に一つのもの」という規定と直接にはかかわっていない、という点を指摘はできる。

³⁰⁴ Allen.[1969]p.37.

³⁰⁵ 「不可分」の論点については、第3章第5節(3-5)pp.98-99, 参照。

³⁰⁶ 「同じ」の論点については、第3章第5節(3-5)pp.99-100, 参照。

はホメーロスが、「トロイア戦争」の一部だけを取り出して主題とし、他の多くの事柄は場面として利用して『オデュッセイア』や『イーリアス』を組み立てたのに対し、『小イーリアス』等の「他の人々〔作者〕は、一人の人や一の時〔時期〕について、あるいは多くの部分からなる一の行為について〔詩を〕作っている」³⁰⁷ (*Poet.23.1459a37-b1*)とされている。これらの箇所からすると個別的な行為とは、例えば個別的な戦争行為等の例を考えればよいと思われる。そしてこの例が示しているのは行為の「個体」が歴史的「できごと」である、という点である³⁰⁸。なお、『カテゴリーアー』第6章で、音声言語としてのロゴス〔ことば〕 *λόγος* が、言われてしまうと、もう捕らえられないことへの言及 (*Cat.6.5a33-35*)から考えれば、「その或る「文字の読み書き」」も Owen が主張して言うような「‘voir’の三人称複数現在が‘voient’と綴られるという知識」³⁰⁹等ではなく、繰り返すことのできない「できごと」として把握することもできるのではないか。繰り返しの可能なものは、「不可分性」の箇所でも検討したように「それぞれの」知識であり、「種」である「文字の読み書き」なのである。この点をa1の「数において一のこと」の論点と関連させて言えば、「実有」以外の「個体」の場合は言及箇所<t5>等から読み取れる、「できごと」の一回性が問題となる、と考えられるわけである。

なお「個体」は一般に「同一指示」*identification* の対象であるが³¹⁰、「その或る白」のような「実有」以外の「個体」の実質的内容が個々の「できごと」であるとする、特に指示そのものが成立する場面でのいわば一回限りの「直接指示」を問題にしなければならないことになるだろう。

また Owen は『感覚と感覚されるものについて』の箇所 (*Sens.6.445b20-446a20*)を援用し、視覚によって区別できる数は有限である、という観点から色の「個体」の色合は有限個であるとし³¹¹、また「その或る人」が多数ないし無数であることにおいてなんら制限を受けないように「その或る白」も無限個であるとする見解もある³¹²が、本稿の考察によれば、「実有」以外の「個体」の実質的内容が、もしも個々の「できごと」にあるならば、個数は「でき

³⁰⁷ οἱ δ' ἄλλοι περὶ ἓνα πιοῦσι καὶ περὶ ἓνα χρόνον καὶ μίαν πρᾶξιν πολυμερῆ, (*Poet.23.1459a37-b1*)

³⁰⁸ cf. Heinaman, R. [1981] p.300.

³⁰⁹ Owen [1965b], p.99.

³¹⁰ cf. Strawson [1959] Ch. I .pp.15-58. Kripke [1972]. Quin [1956], [1961]. Russell [1948].

³¹¹ Owen [1965b] p.98.

³¹² 井上 [1980] p.230.

ごと」の数だけあることとなり、「できごと」が数えうる限り、いわば可算無限の個数がある、と言ってもよいと思われる。

i - 3.

(41) の「何」「のうちにある」のか? という問題に関しては、言及箇所<t1>における「基に置かれたもの」のうちに〔ある〕」(*Cat.2.1a24-25*) という「のうちにある」の規定が伝統的にも³¹³, Owen によっても³¹⁴, 大きく分けて、次の (a) (b) 二部分に分けて考えられることが認められている³¹⁵。

「基に置かれたもの」のうちに、と私が言うのは、(a) なにかのうちに、〔その〕部分としてではなく、あり、(b) 〔それが〕そのうちにある〔ところの当の〕ものから離れてあることが不可能なもののことである、」

Ackrill はこの規定の (a) の部分の「なにか」 $\tau\acute{\iota}$ と (b) の部分の「〔それが〕そのうちにある〔ところの当の〕もの」 $\tau\acute{o}\epsilon\nu\acute{\alpha}\nu$ とを共に「個体的実有」すなわち『カテゴリーアイ』における「第一の実有」であると考え³¹⁶。Owen は、この立場を「一般的属性は個体のうちにはなく、個別的属性は一つより多くの個体のうちにはない」と把握する³¹⁷。またこの考え方は「二つの個体が同一でなければ、両者が共有する性質は一つもない」という意味であり、「二つの個体が同一でなければ、両者が共有せずに、どちらか一方だけが持つ性質が少なくとも一つある」というライブニッツの「不可識別者同一の原理」よりも遙かに厳しく強い規定である、とする見解もある。³¹⁸

Owen は先の規定のうち (a) の「なにか」は「第一の実有」を示すとしても、(b) の「〔それが〕そのうちにある〔ところの当の〕もの」は一般に「うちにあるもの」がそれから離存できないものを示しているとして、(a) と (b) が同一のものを指示する必然性はな

³¹³ Ackrill[1963]p.74.

³¹⁴ Owen[1965b]p.99,p.104.

³¹⁵ *Cat. 5.3a29-32*では、(a) の部分についてのみの言及が見受けられ、このことからアリストテレス自身も (a) (b) 両部分に分けて考えていたことが推測される。

³¹⁶ Ackrill[1963]pp.74-75.

³¹⁷ Owen[1965b]p.100.

³¹⁸ 今井[1976]pp.205-206.参照。

いと考える³¹⁹。この点について (a) (b) の部分を共に「ところ」($\psi\upsilon\chi\eta$) か「ソーマ〔物体/身体〕」($\sigma\omega\mu\alpha$) かであるとする読み方もある³²⁰。

Ackrill は *Cat.5.2b1-3* の箇所についても、「実有」以外の「個体」が「第一の実有」「のうちにある」と考えるので、「類」や「種」として「うちにあるもの」が、「或る〔物〕体」「のうちにある」と言っているのは「舌足らずで不注意」な言い方であり、「のうちにある」の規定 (*Cat.2.1a24-25*) を緩めてしまっている、と批判する。その上、*Cat.5.3a4-5* の箇所では「類」や「種」として「うちにあるもの」が「類種実有」のうちにあることを結論して、「のうちに」の意味をさらに緩めてしまっていると畳みかける³²¹。

Owen はこの箇所について先の *Cat.2.1a24-25* に関する論述で、「実有」以外の「個体」が、「類種実有」のうちにあることを基盤に、Ackrill 説が誤っているという点を指摘した³²²のに続き「類」や「種」として「うちにあるもの」が「第一の実有」のうちにあることを述べたものであるという見解を取り、「うちにあるもの」と「その「うちにある」それ」の関係における「類・種」レベルと「個体」レベルの間の交差が認められていることをこの箇所が確証するとしている³²³。

しかし、両者の見解とも問題がある。*Cat.2.1a24-25* 及び *Cat.5.2b1-3* における「その「うちにある」それ」の問題に関しては、「実有」以外の「個体」としての「「実有」以外の「個体」の「基に置かれたもの」としての「その「うちにある」それ」は、『カテゴリーアイ』第2章における「のうちにある」の叙述に関する限り、「たましい」、「ソーマ〔物体〕」と明記されている。だが第5章の *Cat.5.2a34-2b6*^c においては「第一の実有」の存在主体性が強調され、「第一の実有」が他のすべての「基に置かれたもの」とあると言明されており、その際の「その「うちにある」それ」として「或るソーマ〔物体〕」(*Cat.5.2b2*) という表現が登場する。ここでは通常は「第一の実有」の典型例とされる「その或る人」が「その「うちにある」それ」として掲げられていない点に注意すべきである。その点では「第一の実有」は直接的には「その「うちにある」それ」とはされておらず、「或る〔物〕体」

³¹⁹ Owen[1965b]p.104-105.

³²⁰ 井上[1980]pp.234-241.

³²¹ Ackrill[1963]p.84.Ackrillは、ここで名と名からの派生形を区別しておらず、また「述べ定め」〔述語付け〕と「のうちにある」〔内属〕の区別を明確にしていないように思われる。

³²² Owen[1965b]p.100.

³²³ Owen[1965b]pp.100-101.

を通して間接的に「その「うちにある」それ」となっているとも解釈できる。さらに「或るソーマ〔物体〕」に関しては、これを「普通名詞の不定称的用法」³²⁴といった観点から別の可能性を追求することもできる。それは「すべての」「或る」「この」等によって限量されていない普通名詞は、全称、特称、単称のいずれも指しうるとする考え方である。その際、例えば述語付けの意味内容としては、「定義」も「名」も述語付けされるか、「名」のみ述語付けされるか(*Cat.5.2a19-34*)という側面のみならず、「人は動物である」(*Cat.3.1b13*)を、全称命題として「すべての人は動物である」と把握し、「人は「文字の読み書きがわかる」

(*Cat.5.3a5*)「動物は「文字の読み書きがわかる」」(*Cat.5.3a5*)「ソーマ〔物体〕は白」(*Cat.5.2a32*)を特称命題として、例えば「或る人は「文字の読み書きがわかる」」,「或る動物は「文字の読み書きがわかる」」,「或るソーマ〔物体〕は白」と把握することも可能であると思われる。すると、*Cat.5.2b1-3*の箇所における「或る〔物〕体」は単称の意味での「その或るソーマ〔物体〕」ではなく、文字通り特称の意味での「或るソーマ〔物体〕」である、という可能性も追求してみる余地があるのではなかろうか。

上述の点を総合して考えれば「実有」以外の「個体」の「その「うちにある」それ」は直接的かつ第一義的には「たましい」「〔物〕体」であり、直接的かつ第二義的に「或るソーマ〔物体〕物」であり、また存在主体である「第一の実有」「その或る人」は間接的に「その「うちにある」それ」になり得る、としておくのが妥当であろう。

なお「その「うちにある」それ」としての「たましい」と「ソーマ〔身体〕」という「基に置かれたもの」を共に備えているのが、「生物体」である点は、アリストテレスが「第一の実有」として具体的に何を考えていたのかについて重要な示唆を与える³²⁵。また「たましい」と「ソーマ〔物体〕」は『トポス論』の文脈等ではより精密に、「ソーマ〔物体〕」の表面と「たましい」の論理的部分に限定される点にも注意すべきである。(cf. *Top. IV 5.126a3-13, V 3.131b30-36, VI 6.145a28-32, VI 9.147b26-148a2*)。さらに『形而上学』Z巻において、「ソーマ〔身体〕」や「たましい」の「個体」と考えられるものが、「実有」の「個体」であるソークラテースの構成要素として、「このソーマ〔身体〕」<τὸ σῶμα τόδε (*Met. Z11.1037a9*)や「この「たましい」」ἡ ψυχὴ ἡδε (*Met. Z11.1037a9*)という表現として登場していることも示唆的である。

(12) の「「その「うちにある」それ」から離されうるか?」については、Owenによれ

³²⁴ 岡部[1982]pp.45-46, 参照。

³²⁵ 本稿第3章第4節(3-4)pp.86-95, 第3章第5節(3-5)pp.96-104, における各種議論を参照。

ば、例えばスミスの顔に現われたその同じ色合いがジョーンズに現われていけないとする理由はなく、「色個体」「ヴィンク（＝「その或るピンク」、Owenの新造語）」はただ一つの「個体」「実有」にしか現われないものではない³²⁶。「ヴィンク」は、時間的にも空間的にも「実有」の「個体」から離されうることが可能であり、またそれが内属するとされる「実有」の「個体」である「第一の実有」を経由せずに指示できる（これを「実有」以外の「個体」の「純粹指示」と呼ぶこともできるだろう³²⁷）。この点「ヴィンク」はピンクに所属する色名帖の色見本、例えば「サーモンピンク」や、「シェルピンク」などの「慣用色名」で表現される「固有色名」のようなものを実質的に示していると思われる。

Ackrill 説のように「うちにあるもの」の「個体」が「実有」の「個体」にのうちにのみあり、「実有」の「個体」から「離されえない」とすることは必然ではない。だが、Owenのように「うちにあるもの」の「個体」が一般に「離されうる」とすることもできない。b1での議論で明らかにしたように「実有」以外の「個体」は、直接的かつ第一義的には、「実有」の「個体」ではなく「ソーマ〔物体〕」ないし「たましい」を「その「うちにある」それ」としており、この「ソーマ〔物体〕」や「たましい」から「離されえない」ものなのである。

なお以上（イ）の「のうちにある」の問題は、実例を見ても基本的には「性質」のカテゴリーを念頭に置いていると考えられる。その意味では『カテゴリーアイ』第2章の「実有」以外の「個体」の問題を性質以外のカテゴリーにまで無造作に拡張して解釈することには注意しなければならない。「言われるものども」の十分類と「あるものども」の四分類を直接に結び付けて考えてもよいかどうかは、相当程度まで検討の余地がある。

i - 4

（ウ1）に掲げた「述べ定め」の系列の「基に置かれたもの」となるのか？との論点について Owen は、「実有」の場合に、「動物」―「人」―ソークラテースという系列があるのと同様に、「実有」以外の場合にも、色―ピンク―「ヴィンク」という系列があり、その際「ヴィンク」は述語付けの「基に置かれたもの」として、「ヴィンクはピンクである」と言い得るものとする³²⁸。だが『カテゴリーアイ』当該箇所の実例では「実有」以外の「個体」を「基

³²⁶ Owen[1965b]pp.99-100.

³²⁷ 今井[1976]pp.205,p.207.参照。

³²⁸ Owen [1965b]pp.98-99. なお人工的に考案された単語の「ヴィンク」は vink と綴る。Owen はギリシア語の λευκόν は英語の white ではなく light colour に当たるとし、訳語に相当するものとして pink を使用している。ゆえにこの pink の個体の例が vink というわけである。

に置かれたもの」として「類」や「種」の「非実有」がそれに関して述語付けされる「その或る白は白である」という実例はない。講義草稿の集積という著作の特殊性もあり、アリストテレースの叙述には原則よりもむしろ実例を重視した方がよい場合がある³²⁹。その点から言えば「実有」以外の「個体」の場合の述語付けの実例とは知識の「個体」の場合に明らかのように、「文字の読み書き」（「種」）は知識（「類」）である」という言明だったのである（*Cat.*2.1b1-3）。この点は（72）（73）の議論で「種」である「文字の読み書き」が「それぞれに沿ってのもの」*τὸ καθ' ἑκάστων* とされていた点をも想起すべきである。

（72）の「再生」できるか？」について言えば、（12）の検討からも示されるようにOwenの「ヴィンク」は再生できる。だが言及箇所<t5>の『自然学』*Phys.*V 4.228a6-19 の議論では「数において一」な「実有」以外の「個体」が再生できないことを示唆する。例えば「夜明けの〔健康〕」（*Phys.*V 4.228a10）や「今の健康」（*Phys.*V 4.228a10）等について、この「一で同じ」（*Phys.*V 4.228a17-18）健康は、一度消えたならば、再び現われることがないことが示唆されているからである。また、「数において一の動き」を示す<t7>、<t8>の箇所（*Phys.*VII 1.242a66-b42）で、「数において一」のものとして「この白」（*Phys.*VII 1.242b39）や「この黒」（*Phys.*VII 1.242b39）が掲げられていることを顧慮するならば、「再生」できるか？」という問題が、「実有」以外の「個体」の「一個性」や「一回性」（71）の側面と密接にかかわる点もまた示唆されるだろう。これらの『自然学』における扱いを重視すれば、「実有」以外の「個体」は再生できないこととなる。

（73）の「一般者」の問題は、一つ以上の「個体」に同じとして「うちにある」ものは、実質的には或る「一般的なもの」を指すと考えられる点から生じてきている。Moravcsicは、Owenの「ヴィンク」を「原子一般者」*atomic universal* と呼んで批判している³³⁰。またAllenは、Owenの「ヴィンク」は「不可分なもので数において一」という条件に当てはまらないと主張する³³¹。だがまた特殊というのは個々の事例であるという意味ではなく、種類が確定しているという意味での特殊である、としてOwen説を評価する見方もある³³²。しかしこの点についてはアリストテレース自身にも「数において一のものが同時に多くのところにあることはできないはずである」（*Met.*Z16.1040b25）とする叙述がある。もし「ヴィン

³²⁹ この点「例はあくまで例にすぎない」とする立場には反対する。岡部[1982]p.51参照。

³³⁰ Moravcsic[1967]p.87.

³³¹ Allen[1969]p.37.

³³² 木曾[1970]pp.40-42,参照。

ク」が「固有色名」である「サーモンピンク」等を実質的に示すとすれば、「ヴィンク」は「最下「種」」であり、この意味では明らかに一般者である。

しかし、例えば「ヴィンク」が数量化された「サーモンピンク」の色の表示記号の一例、例えば10R8.0/3.5の色見本を示している³³³と仮定するならば、この意味での「ヴィンク」を「個体」として把握することは十分に可能である。またその際 C2 の論点であった再生可能な「個体」を矛盾概念としない考え方も十分成立すると思われる³³⁴。この点は『カテゴリーアイ』第4章で「量」の実例とされている「2 ペーキウス」(*Cat.4.1b28*)の例とかかわりがある。「2 ペーキウス」は「2 ペーキウス」の「長さ」を「種」とする「長さ」の「事例」のではなく、「2 ペーキウスの長さそのもの」を意味していると思われる³³⁵。その意味でこれを再生可能な「量」の「個体」と考えることもできる。先の表示記号10R8.0/3.5もこれに準じる。だがこのカテゴリーアイの列挙の際に登場する「2 ペーキウス」は、『カテゴリーアイ』の文脈においては、「数において一」とも「不可分なもの」とも「同じ」とも語られておらず、その意味で前述してきた「個体性」の規定が満たされていない。本「付論 i」においてこの「量」の実例を「実有」以外の個体の言及箇所を含めなかったのもそのためでもある³³⁶。アリストテレス自身はこの「2 ペーキウス」等を「個体」の例とは考えていなかったと思われる。その意味では仮に「ヴィンク」が数量化された表示記号を示しているとしても、それは「その或る白」の解釈としては妥当ではないであろう。

i ー 結

アリストテレスにおける「実有」以外の「個体」は、「その或る「文字の読み書き」」「そ

³³³ 『新配色カード199a』, 日本色研事業株式会社, 1998, 参照。

³³⁴ 坂井[1978]pp203-209, 参照

³³⁵ cf.Owen[1965b]p.102, 木曾[1970]p.43, 坂井[1978]pp.208-209, 参照。

³³⁶ 同様にカテゴリーアイを列挙する際の実例であり、「数において一」とも「不可分なもの」とも「同じ」とも語られていない、という理由で、「リュケイオン」等の固有名詞を含んだ「所」のカテゴリーアイの実例、「昨日」等の時間的副詞を示す「時」のカテゴリーアイの実例を、アリストテレスにおける「「実有」以外の個体」の直接の実例として扱ってよいかどうかは、それ自体が一つの問題でもある。そもそもこの「リュケイオンの中で」*ἐν Λυκείῳ* (*Cat.4.2a1*)という実例は、「前置詞＋名詞(与格)」の二単語の例であって、一単語ですらないものがカテゴリーアイとして掲げられている点にも注目すべきであろう。それはすなわち、一語ではなく、二語に相当するものでもカテゴリーアイの中に含まれるのか、という論点に加えて、「リュケイオン」という地名/学園名/建物名を「個体」として認めたとしても、「リュケイオンの中で」という表現の全体を「個体」として認める、ということが何を意味しているのか、といった論点にもつながるだろう。また現代も含めた「個体論」全体の課題としては、興味深い視点を提供すると思われる、「3」などの自然数についての論点も、この箇所で見出すことはできない。

の或る白」「数において一で同じである色」「この白」「この黒」等の知識の「個体」、色の「個体」については、基本的に一度きりの個々の「できごと」を示していると思われる³³⁷。この点は「夜明けの健康」「今の健康」等の「健康」の「個体」を含めて性質の「個体」すべてに当てはまる特色であると考えられる。基本的に個々の「できごと」であることは、また「同じで数において一つの行為」等の、歴史的できごとであると考えられる行為の「個体」の例にも妥当するであろう。さらにまた「動き」の或る「種」のもとに入る不可分なものども「数において一の「動き」」等の「動き」の「個体」についても妥当すると思われる。「一つの「とき」」「数において同じ「時」」「同じ「時」」「この「時」」「この「所」」等の「時」の「個体」、 「所」の「個体」等の場合にも、個々のできごとの枠組みを提供するという点ではそれらのできごとと密接な関係を持つであろう³³⁸。

³³⁷ この点『命題論』第9章における「未来に関する個別的なできごと」についての議論 (cf. *De Int.*9.18a33)との関連を読み取ることもできるだろう。またストア派の命題論理が「昼間だ」等のできごとを示す単称命題のみであるとする見解との関連を考えてみることも興味深い(山下正男[1983]pp.162-172, 参照)。またここで指摘した「できごと」は、いわゆる「現代存在論」を問題にする際に、個別的性質を示す表現として話題になる、「トロープ」と同一視することが可能である、とする議論があること(倉田[2017]pp.154-165, 特にp.162, 参照)にも着目すべきであろう。本稿の帰結は、アリストテレスが言及している「実有」以外の個体は、Ackrillに代表されるような、伝統的見解、すなわち「実有」の個体からどこまでも独立できないものでもなく、またOwenの「ヴィンク」のように、ほとんど性質の「最下種」のようなものでもなく、むしろこの個別的性質を示す「トロープ」に近似したものである、ということにもかかわるだろう。もちろん、「現代存在論」との比較の観点からは、アリストテレスの場合、すべてを「トロープ」に還元できるとする、「トロープ一元論」のような「トロープ唯名論」の立場を表明しているわけではない。また「トロープ」と「普遍的性質」の双方の存在を認めるが、実在論は採用しない、というやや柔軟な唯名論的な存在論でもない。それは「実有」の個体の存在とともに、「実有」以外の個体として「トロープ」に近似したものの存在も認め、さらには「実有」の「種」・「類」の存在も、「普遍的性質」の存在も認める、という意味合いの上での、或る種の「4 カテゴリー存在論」であるということになるだろう。ただし、「性質の個体」ではない、様々な「実有」以外の個体も含めて、この「トロープ」の議論との類似性が言えるのかどうかについては、さらなる考察が必要となるだろう。

³³⁸ 以上の注に掲げた以外に、本付論 i 作成に当たって参照した関連文献は以下の通り。Ross[1923]p.24.n.1. Jones,J.R.[1949], Anscombe & Geach[1963]pp.7-10. Mathews and Cohen[1968], Duerlinger[1970], Allen[1973], Jones,B.[1975], 山本[1976], Hartman[1976], 松永[1977], 尼ヶ崎[1979], Frede[1978], Lloyd[1981], 藤沢(郁)[1989]。

付論 ii

「第一の素材」について

ii 一序.

古来、アリストテレスの素材論の中には、「第一素材」 *prima materia*³³⁹ と呼ばれる、四元素間の相互変化を含むすべての変化を通じて存続する、全く無規定な素材についての言及がある、とされてきた。

しかし、この見解に対しては、近年、むしろ「四元素」こそが基礎的な素材なのであり、伝統的な「第一素材」についての議論はアリストテレス自身のものではない、とする King らの反論³⁴⁰ が登場した。これらの反論に対しては、さらに伝統的な見解を擁護する立場からの論駁がなされてきている³⁴¹。

だが、どちらの立場もアリストテレス自身が「第一の素材」 *πρώτη ὕλη*³⁴² という用語で示した意図を十分には汲んでいないと思われる。問題の一つは上述の伝統的な「第一素材」 *prima materia* と、その用語上の発端となったアリストテレス自身の「第一の素材」 *πρώτη ὕλη* の使用例との差異にある。そこで本付論 ii では第 1 節（ii－1）で、まずアリストテレス自身の「第一の素材」の実際の使用例に関する考察を行ない、次に第 2 節（ii－2）で、この「第一の素材」が伝統的な「第一素材」（以下「伝統的第一素材」と呼ぶ）といかなる関わりを持っているのかを検討する。さらに第 3 節（ii－3）で、アリ

³³⁹ ここで「第一素材」と訳したラテン語の *prima materia* という用語は、中世のスコラ哲学における用法から、全く無規定な、純粋な素材という意味を表す用語として純粋な「エイドス」〔形相〕と対比されてきた。しかしその歴史は古く、ギリシア語圏の古註からすでにこの純粋な素材の用例を見出せる。cf. Philoponus *in Cat* 83,13-19; *in Pys* 578,32-579,18.

³⁴⁰ cf. King[1956], pp.370-389. Charlton[1970], pp.129-145 (Appendix : Did Aristotle believe in Prime Matter?), Charlton[1983].

³⁴¹ cf. Solmsen[1974], Robinson[1974], Williams [1982].

³⁴² 本付論 ii では、アリストテレス自身の用法と後世の用法を区別するために、特にアリストテレスの *πρώτη ὕλη* を「第一の素材」と訳し、*prima materia* の方を「伝統的第一素材」と表記することとする。

ストテレースの著作中に、「伝統的第一素材」を示していると考えられる例が実際にあるのかどうかを考察し、最後にこの「第一の素材」にかかわる議論が、アリストテレースの素材論の中でいかなる位置を占めることとなるのかについて検討してみることとした。

ii – 1.

アリストテレースが「第一の素材」 *πρώτη ὕλη* という表現を実際に使用している箇所は、『自然学』第2巻、『生成と消滅について』第2巻、『動物の発生について』第1巻、『形而上学』Δ巻、H巻、Θ巻、等に見出すことができる。以下、これらの箇所を検討してみよう。

まず、『自然学』(*Phys. II 1.193a28-31*)の用例であるが、「第一の基に置かれた素材」 *ἡ πρώτη ὑποκειμένη ὕλη* の示す具体例として「青銅像」に対する「青銅」が考えられている。しかし直前の193a10-28.の文脈からは「青銅」等の自然が「水」であり、「木材」等の自然が「土」である場合が読み取れ、いわゆる「四元素」も具体例に含まれると考えられる。

次に『生成と消滅について』(*GCM 1.329a13-24*)の箇所だが、この箇所の寸前の329a5-13. ではアナクシマンドロスの「ト・アペイロン」が「[物] 体的でありながら、離されうる」「一つの素材」として批判され、この当該箇所では、『ティーマイオス』におけるプラトーンは諸「要素」が「立体」であるとし、それを「平面」にまで分析しているが、しかし平面が「乳母」であり「第一の素材」であるのは不可能であるとされている。

『動物の発生について』(*GA I 20.729a28-33*)では、雄が「動かすもの」〔始動因〕で能動的なものであり雌が受動的なものであるなら雄の「精液」 *γόνι* に対し雌は素材を寄与することになるだろう、なぜならば雌の「月経血」 *καταμήνια* の自然 *φύσις* は、「第一の素材」に関するものだからである、という叙述がなされている。この箇所に関連する叙述が、『形而上学』(*Met. H4.1044a34-b3*)にある。そこでは四原因説が人の場合に適用され、その際人の素材としての「原因」は、「月経血」 *τὰ καταμήνια*, 「動かすもの」としての「原因」は「精液」 *τὸ σπέρμα*, エイドスとしての「原因」は「あるとは何であつたのか」 *τὸ τί ἦν εἶναι*, 「〈そのためのそれ〉」 *οὗ ἕνεκα* としての「原因」は「終わり」

〔「目的」〕 *τὸ τέλος* とされている。しかも、素材としての「原因」の場合には「火」や「土」ではなく最も近い「原因」すなわち「特有のもの」 *ἴδιον* を挙げるべきであると

しているのでこの『動物の発生について』の箇所では「人」をも含めた「動物」の発生の原因としての素材が語られしかも最も近い素材が「第一の素材」であることが示唆されることとなる。

『形而上学』**Δ**巻第4章(*Met.Δ4.1014b26-35*)は「青銅」が「青銅像」の、「木材」が「木製品」の自然であるとされ、その理由は、「第一の素材」が保存されながら、それら(青銅や木材)からそれぞれ(青銅像や木製品)が生ずるのだから、とされている。そして、この箇所の後半では、「自然における諸存在の要素」としての自然の具体例として、「火」や「土」や「空気」や「水」の「四元素」が挙げられている。この箇所は先の『自然学』(*Phys.Ⅱ 1.193a28-31*)の箇所と深い関わりのある箇所と言える。

Met.Δ5.1015a7-11 では、「第一の素材」の二つの意味が区別されている。一つは「それに対して第一の」 *πρὸς αὐτὸ πρώτη* である。ここでの *αὐτό* とは直前の文脈から考えると、エイドスと素材の「両者から成るもの」のことで、それに対して「第一の」という意味で、例えば「青銅製品」に対して「青銅」が「第一の素材」と呼ばれる場合のことである。これは前述の「最も近い素材」に相当する。もう一つの意味は「全体的に第一の」 *ὅλως πρώτη*と言われる場合で、「青銅製品」に対する「水」が「第一の素材」と呼ばれる場合が例として挙げられている。*Phys.Ⅱ 1.193a28-31* や *Met.Δ4.1014b26-35* の主張と、この箇所は密接に関係する文脈であると考えられる。

Met.Δ6.1017a3-6 では、「第一の」 *πρώτη* であろうと「最後の」 *τελευταία* であろうと、素材がエイドス〔「種」〕において可分割であるがゆえに「多」であるものがある、とされている。ここでの「第一の」と「最後の」の区別は先の *Met.Δ5.1015a7-11* の「それに対して第一の」と「全体的に第一の」の区別に対応すると思われる。すなわちこの箇所で「第一の」 *πρώτη* と呼ばれている素材は、「それに対して第一の」、すなわち「最も近い素材」の意味であると考えられる。

Met.H4.1044a15-25 は異読のある箇所だが、1044a の18行目に *ἐστι πρώτη ὕλη* を入れて読むとすれば、「粘液」には「甘いもの」等が、また「胆汁」には「苦いもの」等が「なにか固有なもの」 *τὴς οἰκείας* としての「第一の素材」である、と読みうる。この場合は「それに対して第一の」最も近い直接の素材という意味となる。他方この箇所の半ば以降では、「同じもの」が多く素材を持つとして「脂肪気の多いもの」が「甘いもの」から生じるとすれば、「粘液」は「脂肪気の多いもの」からも「甘いもの」からも生じるという議論で、素材の素材の例が示され、さらに、この「粘液」は「胆汁」が

「第一の素材」にまで分解されるかぎりにおいては「胆汁」からも生じるとされている。この場合、分解された末の「第一の素材」とは「水」を指すと思われる。この場合の素材は *Met.* 45.1015 a7-11 の「全体的に第一の」素材、*Met.* 46.1017a3-6 の「最後の」素材に相当するだろう。なお、この箇所の最後で語られる「第一の素材」と直接結び付くかどうかは疑問であるが、16行目の、「第一のものどもとしての同じものども（複数形）」は「水」を始めとする「四元素」ではないかと考えられる。すると同じ行の「第一の同じもの（単数形）」は「四元素」のさらに基礎にあるものを示す可能性が生じる。

Met. 7.1049a24-27 では、もし他のものに対して、「あれ製の（あれからできている）」 *ἐκείνινον* と言われない第一のなにかがあるなら、それが「第一の素材」である、という一種の語り方の問題が提出されている。例としては、もし、「土」が「空気製」、すなわち空気からできていて、「空気」が「火製」、すなわち火からできているならば、「火」が「第一の素材」であることが挙げられている。この点は『生成と消滅について』などでしばしば語られている「四元素」間の相互変化について述べているとも取れるが、「四元素」の中でも「火」が基礎にある、とも受け取れる³⁴³。

ii - 2.

さてここで以上検討してきたアリストテレス自らによる「第一の素材」の使用例と、いわゆる「伝統的第一素材」との関係へと考察を進めよう。その際にまず「伝統的第一素材」の特色を、解釈者達の意見の中からまとめて明確にしておこう。

（あ）：すべての変化を通じて基にとどまること。

（い）：全く無規定なこと。

（う）：可能力以外のなにものでもないこと。

（あ）の特色には「すべてを受容すること」、「それ自らは生成消滅しないこと」、「それから要素と呼ばれるものが生ずること」などが入り、また（い）の特色には、「実有」、量、性質、などのいかなるカテゴリーにも入らないこと、「それ自身知覚できないこ

³⁴³ この叙述は『形而上学』A巻第4章 *Met.* A4.985a29-b3 でエンペドクレースが「四元素」について「火」と「土、空気、水」を別のものと考えているという叙述と関連するかもしれない。

と」などが入り、さらに（う）の特色には「いかなる意味でも実働態ではないこと」が含まれると考えられる。

第一節（ii－1）で取り上げた実例は「それに対して第一の」素材、すなわちそれぞれの事物に対して最も近い直接の素材という場合と、「全体的に第一の」素材すなわち最も遠い最後の素材という場合の二つに大きく分けられる。*Phys.Ⅱ* 1.193a28-31, *GA*

I.20.729a28-33, *Met.Δ*4.1014b26-35, *Met.Δ*5.1015a7-11, *Met.Δ*6.1017a3-6.等の場合は最も近いという意味での使用例であると思われる。*Met.H*4.1044a15-25.の場合も1044a の18行目に *ἐστὶ πρώτη ὕλη* を読んだ場合にはこの意味での使用例となる。そしてこの場合の実例、例えば青銅像の場合には青銅が、木製品の場合には木材が直接の最も近い素材であると言われるとき、その青銅や木材は明らかに、先の特色（あ）～（う）には当てはまらない。では、*Phys.Ⅱ* 1.193a28-31, *Met.Δ*4.1014b26-35, *Met.Δ*5.1015a7-11, *Met.H*4.1044a15-25, *Met.Θ*7.1049a24-27.等の最も遠い最後の素材という場合はどうか。この場合には水や火など、「四元素」が実例となり、やはり特色（あ）～（う）に当てはまるような素材とは考えられない。

問題となるのは、『生成と消滅について』*GCⅡ* 1.329a13-24 の実例の場合である。というのはここでは、平面が乳母、すなわち「第一の素材」であるなどということはない、として『ティーマイオス』におけるプラトーンの考えが批判されているが、それに続く329a24-35 の箇所では、「われわれの見解」としてアリストテレースの見解が積極的に述べられているからである。その際まず329a24-35 の26行目の解釈が問題となる。すなわち26行目の *ἐξ ἧς* の *ἧς* は通常は24行目の *ὕλην* とそれを受けた25行目の *ταύτην* を指していると考えられるが、King は寸前の *ἐναντιώσεως* を指していると指摘した³⁴⁴。この読みに従うならば、「反対対立から要素と呼ばれるものが生じる」という見解が生じる。しかし、その場合には反対対立をいわば「実質化」して把握せねばならないことになる。だが、Robinson も指摘するように³⁴⁵、この「反対対立」の「実質化」には問題がある。というのは、*GCⅠ* 3.319b21-31 の文脈では「生成したものと消滅したもののうちに、反対対立のうちの一つの或るパトス〔様態〕 *πάθος* が同じものとして基に存続している場合」、その変化 *μεταβολή* は、性質変化 *ἀλλοίωσις* になるだろう³⁴⁶、と書かれてい

³⁴⁴ King[1956],pp.381-383.

³⁴⁵ Robinson,[1974],pp.179-183.

³⁴⁶ アリストテレースには、生成消滅、性質変化、増大減少、移動、の四つを、まとめて、*μεταβολή* と呼ぶ用語

るからである。その際「空気」から「水」が生じた場合にこの両者とも「冷たい」等がその例として挙げられているので、ここでのパトス〔様態〕は、「冷たい」等であると考えられる。すると先の「反対対立」（「温かさ」、「冷たさ」、「乾き」、「湿り」）はこの319b21-31.においてパトス〔様態〕とされていた「冷たい」等と関わり、この「冷たい」等を同一なものとして基に存続するものと考えてはその変化は単なる性質変化になってしまい、その意味では26行目の $\eta\varsigma$ はやはり一行前の $\tau\alpha\upsilon\tau\eta\nu$, すなわち二行前の $\psi\lambda\eta\nu$ を指していると考えるのが妥当であろう。

ところでこの 329a24-35. の33行目以下の次のような主張は重要である。

<t9>「第一には「可能性において感覚されうるソーマ〔物体〕」 $\tau\acute{o}\delta\upsilon\nu\acute{\alpha}\mu\epsilon\iota\sigma\acute{\omega}\mu\alpha$ $\alpha\iota\sigma\theta\eta\tau\acute{o}\nu$ が始源 $\acute{\alpha}\rho\chi\acute{\eta}$ であり、第二に反対対立、例えば温かさや冷たさのことを私は言うのだが、が始源であり、そしてようやく第三に火や水やそのようなものが始源である」³⁴⁷(*GCP* 1.329a33-35)

すなわち「第一の素材」としてしばしば主張されていた四元素は始源としては三番目で、二番目には「冷たさ」などの反対対立が、そして一番目には「可能性において感覚されうるソーマ」が挙げられているのである。

もしこの<t9>を含む 329a24-35 の箇所が、329a13-24 でプラトーンの『ティーマイオス』における主張が「第一の素材」ではない、とした箇所と直結していると読み、しかもここではアリストテレス自身の「第一の素材」についての考え方が積極的に述べられており、具体的には「可能性において感覚されうるソーマ」がそれである、と読み得るならば、ここは「第一の素材」と「伝統的第一素材」との接点をなす箇所であるとも言える。けれども、その場合先に掲げた特色の（あ）～（う）を基準にしてこの箇所をよく検討してみる必要がある。するとまず「可能性において感覚されうる〔物〕体」との表現から（う）の「可能性以外のなにものでもないこと」という点は妥当と思われる。次に、（あ）の「すべての変化を通じて存続すること」といった点についても、先の26行目

法がある。本稿では「転化」と訳されることもある $\mu\epsilon\tau\alpha\beta\omicron\lambda\eta$ を一般的な意味での「変化」と訳し、また「変質」と訳されることもある $\acute{\alpha}\lambda\lambda\omicron\iota\omega\sigma\iota\varsigma$ の方を、「変化」のうちでも特に「性質」の変化」を示すという意味で「性質変化」と訳すことにする。

³⁴⁷ $\pi\rho\acute{\omega}\tau\omicron\nu\ \mu\acute{\epsilon}\nu\ \tau\acute{o}\delta\upsilon\nu\acute{\alpha}\mu\epsilon\iota\sigma\acute{\omega}\mu\alpha\ \alpha\iota\sigma\theta\eta\tau\acute{o}\nu\ \acute{\alpha}\rho\chi\acute{\eta}$, $\delta\epsilon\upsilon\tau\epsilon\rho\omicron\nu\ \delta'\ \alpha\iota\ \acute{\epsilon}\nu\alpha\nu\tau\iota\acute{\omega}\sigma\epsilon\iota\varsigma$, $\lambda\acute{\epsilon}\gamma\omega\ \delta'\ \omicron\iota\omicron\nu\ \theta\epsilon\rho\mu\acute{o}\tau\eta\varsigma$ $\kappa\alpha\iota\ \psi\upsilon\chi\rho\acute{o}\tau\eta\varsigma$, $\tau\rho\acute{\iota}\tau\omicron\nu\ \delta'\ \eta\delta\eta\ \pi\acute{\upsilon}\rho\ \kappa\alpha\iota\ \psi\delta\omega\rho\ \kappa\alpha\iota\ \tau\grave{\alpha}\ \tau\omicron\iota\alpha\upsilon\tau\alpha$. (*GCP* 1.329a33-35)

の解釈の際に明らかにしたように、ἐξ ἧς の ἧς を素材と取ることが正当だとするならば、この箇所は「素材から要素と呼ばれているものが生ずる」と理解できるので、先の（あ）の特色に関連して掲げた「それから要素と呼ばれるものが生ずること」ということが妥当することとなる。このことは29行目の「第一のソーマ〔物体〕」 τὰ σώματα τὰ πρώτα が、いわゆる「四元素」と受け取れることから、この前後の文脈をこの「第一のソーマ」すなわち「四元素」が素材から生じている、と理解できることから裏付けられる。

しかし、（い）の「全く無規定なこと」については問題がある。それはもし33行目の、「可能性において感覚されうるソーマ」が、24-25 行目の「知覚されうる或る素材」 τινα ὕλην τῶν σωμάτων τῶν αἰσθητῶν と同じものを指すと考えられるならば、それは「離されうるのではなくて常に反対対立をとまっている」（GCII 1.329a25-26）ものとなるからである。これは先の 329a13-24. の箇所で、「ト・アペイロン」が「ソーマ〔物体〕」的でありながら離されうる」として批判されていたことと対応している。これらの点を考えるならば、この 329a24-35. における素材は特色（い）の「全く無規定なこと」は満たしていないと言える。

ii - 3.

それでは「第一の素材」 πρώτη ὕλη という用語に直接明示されている箇所以外で、特色（あ）～（う）を満たす「伝統的第一素材」を示す事例はあるのであろうか。

特色（あ）の「すべての変化を通じてとどまること」をめぐる議論はアリストテレースの著作の中に皆無ではない。まず *Phys. I* 9.192a3-14 の箇所では、13行目以降で「基にとどまるもの」 ὑπομένουσα は「生成するものども」の「かたち」 μορφή における共同原因でありいわば「母」である、と主張されている。先の特色（あ）の「すべての変化を通じてとどまること」がここでの「基にとどまるもの」に当たることが考えられる。

この特色（あ）は、他にも *GCI* 3.320a2-5 の「生成」と「消滅」を受け入れる「基に置かれたもの」 ὑποκείμενον³⁴⁸ が最も多くまた優れて素材である」という叙述や *Met.H* 1.1042 a32-b3 の「対立的なすべての変化においてその変化におけるなにか或る「基に置かれたもの」がある」という叙述等にも現れている。特に *GCI* 3.320a2-5 では特色A2の「すべてを受容すること」にかかわる視点が含まれている。

³⁴⁸ ὑποκείμενον については、注45参照。

また *Met.H1.1042a32-b3* では、「なにか或る「基に置かれたもの」が、「実有」における変化」すなわち生成消滅の場合に、「今は生成のうちにあり、他のときには消滅のうちにあるもの、すなわち今は、「なにかこれ」 *τόδε τι* としての「基に置かれたもの」であり、他のときには欠如に関するものとしての「基に置かれたもの」であるもの」とされている。さらに *Phy. I 9.192a25-34* には、特色（あ）に関連して掲げた「それ自身は生成消滅しないこと」が語られている。すなわち、素材はそのうちに欠如を含んでいるものとしては消滅するが、「可能性に関するものとしてはそれ自らにおいて消滅するものではなく、かえって不消滅で不生成であることが必然である」とされている。「第一の同じもの」に関する、前述した *Met.H4.1044a15-25* における叙述も、この（あ）の特色に関わりがあるだろう。

さらに（い）の特色については『形而上学』Z巻3章(*Met.Z3.1029a7-30*)の叙述が問題となる。この箇所直前の部分、*Met. Z3.1029a1-5* では「第一の「基に置かれたもの」 *τὸ ὑποκείμενον πρῶτον* が最も「実有」であると思われるから、これについて規定しておかねばならないとして、その「基に置かれたもの」として素材と「かたち」 *μορφή* とその両者からなるものが挙げられている。そして、*1029a7-30* ではまず、「実有」が「基に置かれたもの」に関して言われるのではなく、それに関して他のものが言われる」とされる。だが、それでは「十分ではないし、それ自身不明確である上に、素材が「実有」ということになってしまう」、として素材が「実有」であることについての批判が展開されることになる。その際特に注目すべきなのは、20行目から21行目にかけての一節「だが私が素材と言うのはそれ自ら「なにか」とも、「どれほどか」とも、「あるもの」が、他のそれによって規定されるものとも一つも言われないもののことである」と、24行目から26行目にかけての一節「この「究極のもの」 *τὸ ἔσχατον* はそれ自身「なにか」であるとも「どれほどか」であるとも他のいかなるものでもない、のみならずその否定でもない、というのはそれらの否定もまた付帶的に属するからである」の箇所である。これらの言い方はまさに（い）の「全く無規定なこと」にふさわしい表現であるように思える。

その点は16行目から18行目にかけての「長さ」や「広さ」や「深さ」の抽き去られた場合の叙述からも裏付けられる。むろん、この抽き去りの場合にはその後に素材が残るか否かという点で議論があり、例えば、12行目の *οὐδὲν ὑπομένειν* の後に「伝統的第一素材」を認める論者は「第一素材以外には」を補おうとし、認めない論者はそのように読み

込むことを批判している³⁴⁹。しかしその論争の相違点はむしろ特色（あ）の「存続すること」を巡ってなされてきており、その意味では先の文脈に「全く無規定なこと」という（い）の特色を見てとることはいずれの場合にしても可能であるように思われる。そして「「実有」、量、性質、などのいかなるカテゴリーアーにも入らないこと」という（い）に関連して掲げた特色がまさにこの箇所にと当することは言うまでもない。しかしながらこの「いかなるカテゴリーアーにも入らないこと」という特色を強調すれば、別の解釈が成立する余地もある。すなわちこの箇所では素材が「全く無規定である」ということが述べられているのではなく、ただ素材が「それ自らとして」カテゴリーアーのいずれとも定義的關係には立っていないことを示しているにすぎない、という見解である³⁵⁰。けれどもそのように理解するには「否定すらも付帯的に属するにすぎない」とか「長さや広さや深さまで抽き去ってしまう」というこの箇所の記述はかなり強く述べられているように思われる³⁵¹。その意味ではこの 1029a7-30 ではやはり特色（い）が語られていると言えるだろう。ところで、（う）の可能性についてはこの箇所で語られているのであろうか。この点に関しては（う）の観点はこの文脈では問題にされていない、と言える³⁵²。とすると仮に（い）の無規定性の特色がここでのべられているにしても、（あ）の存続性については疑問の余地があり、また（う）の可能性の問題については、その視点が問題とされていない、ということになる。するとこの 1029a7-30 の箇所でも（あ）、（い）、（う）、すべての特色を満たすべき「伝統的第一素材」が、十全な意味で語られているとは言えないのではないか。先の（あ）～（う）の特色は幾つかの箇所にそれぞれ別々には見出すこともできるが、そのすべての特色をまとめた文脈で見出そうとするとそれは困難である。例えば *GCII* 1.329a24-35. は特に（あ）について、また *Met.Z3*.1029a7-30. は（い）について妥当するように思われるが、この二つの箇所を比較してみると、前者は生成の局面

³⁴⁹ cf. King [1956] pp. 387-389, Robinson [1974] pp. 183-187., Schofield, M. [1972] pp. 97-101, Stahl [1981] pp. 177-179, Sorabji [1985/86] pp. 1-22. なお古註にも *Simplicius in Phys* 229, 6; 230, 19-20; 26-27; 31; 232, 24; 537, 13; 623, 18-19. 等に関連する議論がある。

³⁵⁰ 高橋久一郎 [1987], pp. 125-126, 参照。

³⁵¹ cf. Sorabji, op. cit., pp. 3-8. この記述の強さのため, Sorabji は長さ、広さ、深さは、特定の長さ、広さ、深さ幅であり、残されたのは「延長」であるとして解決を計っている。

³⁵² 可能性が問題とされていない、という側面は『形而上学』Z巻第3章の当該箇所のみならず、『形而上学』Z巻の全体に当てはまる特色である。この点は可能性と実働態を縦横に駆使して議論を展開している『形而上学』H巻の立場とは大きく異なっている。この点は、『形而上学』Z巻と『形而上学』H巻の成立年代の相違も含めて、さらなる考察を要する問題でもある。注137も参照。

における「基に置かれたもの」 *ὑποκείμενον* を扱った文脈であり、後者はむしろ「述べ定め」〔述語付け〕における「基に置かれたもの」を扱った文脈となっている。そしてこの違いを過度に反映したのが「基体」と「主語」という訳し分けの翻訳の伝統でもあった。それゆえアリストテレスに関して言えば確かに特色（あ）～（う）に関わる議論を個々の文脈には見出せるにしても、むしろそれぞれの箇所細かい脈絡についての反省を省略して、いわばひとまとめにしたものが「伝統的第一素材」であるとさえも言えるのではない。そして伝統的意味での「第一素材」にはむしろアリストテレスが批判したプラトンの『ティマイオス』の表現の方がふさわしい、とも思える。

*Tim.51a4-b2.*と *Tim.52a8-b2.* には「母」 *μήτηρ* であり「受容者」 *ὑποδοχή* であり、また「場」 *χώρα* とも呼ばれているものが「四元素」とは呼ばれず、「目に見えないもの」、「形のないもの」、「すべてを受け入れるもの」、「消滅を受け入れないもの」と語られている。これらの表現は少なくとも（あ）、（い）、をともに満たしているように思われる。この点に関しては新プラトーン派やキリスト教の初期教父たちがプラトーンとアリストテレスの考えを消化していく伝統の中でこの二人の考えが混同されて伝わっていったという意見³⁵³もあながち否定できないということになる。

ii 一結.

アリストテレス自身の「第一の素材」 *πρώτη ὕλη* の使用例は、ほとんどの場合に「最も近い素材」としての青銅や木材などが、あるいは「最も遠い最後の素材」としての「四元素」が意味されている。その意味では King や Charlton の反論も一理ある。しかしながら『生成と消滅について』 *GCII 1.329a24-35.* の文脈では「離されうるのではなく常に反対対立をとまなっている」とはいえ、「四元素」のさらに基に置かれているものについての言及が確かにあり、またそれについて *πρώτη ὕλη* という用語を使用していると受け取れる側面もある。その点では上述の反論のように「四元素」こそが *πρώτη ὕλη* である、と単純に言い切ることはできない。

他方、「第一の素材」 *πρώτη ὕλη* の使用例にこだわらなければ、上述の *GCII 1.329a24-35.* を含めて、『形而上学』 *Met.Z3.1029a7-30.* や、『自然学』 *Phy. I 9.192a3-14.* 等に

³⁵³ cf. King[1956] pp.388-389., Charlton, W.[1970] pp.143-145.

「伝統的第一素材」の特色の一部を持ったものに対する記述を見出すことはできる。その意味では「伝統的第一素材」の主張も無根拠とは言えない。しかし、それらの箇所はあくまでも部分的に特色を示しているのみであり、何よりも「第一の哲学」、「第一の実有」、「第一の動かされえずに動かすもの」などの表現で親しい、「第一の」をともなった「第一の素材」 *πρώτη ὕλη* という言い方では語られてはいない。その意味ではアリストテレスの素材に関する主張の力点が、特にこのいわゆる「伝統的第一素材」に置かれているとは言えない。

アリストテレスの主張は、体系的な枠組みの上からは最も近い直接の素材や「四元素」の相互変化の説明が中心であると言えるが、テキスト上の事実としては「四元素」の基礎となるものや、「伝統的第一素材」の特色に部分的に合致するものについても語っている。この点は現存のアリストテレス著作集が講義録の集積であるという成立事情も関係すると思われる³⁵⁴が、安易に体系を完結させず、不断の探究の姿勢を示しつつ開かれた体系を志向する、という彼の姿勢が如実に示されている一例であるとも言えるのではなかろうか。

³⁵⁴ 講義草稿の集積、という点については注67も参照。

< アリストテレス 参照著作略号 >

『カテゴリーアイ』 (<i>Categoriae</i>)	<i>Cat.</i>
『命題論』 (<i>De Interpretatione</i>)	<i>De Int.</i>
『分析論前書』 (<i>Analytica Priora</i>)	<i>An.pr.</i>
『分析論後書』 (<i>Analytica Posteriora</i>)	<i>An.po.</i>
『トポス論』 (<i>Topica</i>)	<i>Top.</i>
『ソピステース的論駁について』 (<i>De Sophisticis Elenchis</i>)	<i>SE</i>
『自然学』 (<i>Physica</i>)	<i>Phys.</i>
『天について』 (<i>De Caelo</i>)	<i>De Caelo</i>
『生成と消滅について』 (<i>De Generatione et Corruptione</i>)	<i>GC</i>
『気象学』 (<i>Meteorologica</i>)	<i>Meteor.</i>
『「たましい」について』 (<i>De Anima</i>)	<i>DA</i>
『感覚と感覚されるものについて』 (<i>De Sensu et Sensibilibus</i>)	<i>Sens.</i>
『動物の調査記録について』 (<i>De Historia Animalium</i>)	<i>HA</i>
『動物の部分について』 (<i>De Partibus Animalium</i>)	<i>PA</i>
『動物の発生について』 (<i>De Generatione Animalium</i>)	<i>GA</i>
『形而上学』 (<i>Metaphysica</i>)	<i>Met.</i>
『ニコマコス倫理学』 (<i>Ethica Nicomachea</i>)	<i>EN</i>
『政治学』 (<i>Politica</i>)	<i>Pol.</i>
『詩学』 (<i>Poetica</i>)	<i>Poet.</i>
『断片集』 (<i>Fragmenta</i>)	<i>Fr.</i>

< 参考文献 >

< 欧語文献 >

Ackrill, J.L. 1963, *Aristotle's Categories and De Interpretatione*, Oxford.

Albritton, R.G. 1957, 'Forms of particular substances in Aristotle's *Metaphysics*', *Journal of Philosophy*, 54, pp.699-708.

Alexander Aphrodisiensis. 1891, *In Aristotelis Metaphysica Commentaria*. ed. Hayduck, M., Berlin.

- Allen,R.E. 1969, 'Individual Properties in Aristotle's *Categories* ', *Phronesis* XIV.
- . 1973, 'Substance and Predication in Aristotle's *Categories* ', *Exegesis and Argument Presented to G.Vlastos*, pp.362-373.
- Annas,J.1974, 'Individuals in Aristotle's *Categories*: Tow Queries', *Phronesis* XIX.
- Anscome,G.M.E. & Geach,P.T. 1963, *Three Philosophers*
- Apelt,1891, *Beiträge zriechischen ur Geschichite der g riechischen Philosophie*
- Aristotelis opera ex recensione Immanuelis Bekkeri ; edidit Academia Regia Borussica. - Editio altera quam curavit Olof Gigon. - Berolini : Apud W. de Gruyter 1960-1961. (オリジナル1831年版の復刻版)
- Balme,D.M. 1987, 'Aristotle's biology was not essentialist ', *Philosophical issues in Aristotle's biology*, pp.291-312, Cambridge.
- Benveniste,E.2012 (初版1966) , 'Catégories de pensée et Catégories de langue', *Problèmes de linguistique générale*, Gallimard. (邦訳：エミール・バンヴェニスト「思考の範疇と言語の範疇」,『一般言語学の諸問題』岸本通夫監訳,1983,みすず書房)
- Bodéus,R. 1990, 'La prétendue intuition de Dieu dans le De Caero d' Aristote', *Phronesis* XXXV.
- Bonitz, Hermann. 1853, "Über die Kategorien des Aristoteles". (in: *Sitzungsberichte der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften*. Phil.-Histor. Classe, Bd. X,
- Bostock,D. 1994, *ARISTOTLE Metaphysics BOOKS Z AND H*, Oxford.
- Brentano, F. 1862, *Von der mannigfachen Bedeutung des Seienden nach Aristoteles*. Freiburg i. Br., Herber'sche Verlagshandlung, (邦訳：『フランツ・ブレンタノ アリストテレスの存在論 アリストテレスに於ける存在者の諸意味』,岩崎勉訳,1933,理想社出版部)
- Brinkmann,K. 1979, *Aristotle's allgemeine und spezielle Metaphysik*, Berlin,New York.
- Burnyeat,M. 2001, *A Map of Metaphysics Zeta*, Pittsburgh.
- Burnyeat,M.et al.1979, *Notes on Book ZETA of Aristotles' Metaphysics*, Oxford.
- Burnyeat,M.et al.1984, *Notes on Book ETA AND THETA of Aristotles' Metaphysics*, Oxford.
- Bywater,I.1894, *Ethica Nicomachea*, Scriptorum classicorum bibliotheca Oxoniensis.Oxfored:Clarendon Press. (『ニコマコス倫理学』からの原文引用, 翻訳の底本)
- Charlton,W.1970, *Aristotle's Physics* I , II , Oxford.
- .1983, 'Prime Matter:a Rejoinder', *Phronesis*, XXVIII.pp.197-211.

- Derrida, J. 1972, 'Le supplément de copule', *Marges, de la philosophie*, Minuit. (邦訳: ジャック・デリダ「繫辞の代補」, 『哲学の余白(下)』藤本一勇他訳, 1983, 法政大学出版局)
- De Rijk, L.M. 1951, 'The Authenticity of Aristotle's Categories', *Mnemosyne*, 4a ser. IV, pp. 129-159.
- Duerlinger, J. 1970, 'Predication and Inherence in Aristotele's *Categories*', *Phronesis*, X V, pp. 179-203.
- Dumoulin, B. 1983, 'L'ousia dans les Catégories et dans la Métaphysique', *Zweifelhaftes im Corpus Aristotelicum*, Berlin/New York, pp. 57-72.
- Driscoll, J. 1981, 'EIAH in Aristotle's earlier and later theories of substance', *Studies in Aristotle*, pp. 129-159, Washington.
- Drossaart Lulofs. 1965, *De generatione animalium*, Scriptorum classicorum bibliotheca Oxoniensis. Oxford: Clarendon Press. (『動物の発生について』からの原文引用, 翻訳の底本)
- Düring. 1966, *Aristototeles* (2. Auflage).
- Elders, L. 1972, *Aristotle's Theology, a commentary on Book A of the Metaphysics*, Assen, The Netherlands.
- Frede, M. 1978, 'Individuen bei Aristoteles', *Antike und Abentland*, pp. 16-31.
- 1981, 'Categories in Aristotle', *Studies in Aristotle*, pp. 1-24, Washington.
- 1983, 'Titel, Einheit und Echtheit der aristotelischen Kategorienschrift', *Zweifelhaftes im Corpus Aristotelicum*, Berlin/New York, pp. 1-29.
- 1985, 'Substance in Aristotle's *Metaphysics*', *Aristotle on Nature and Living Things*, pp. 17-26, Pittsburgh.
- Frede, M. and Patzig, G., 1988, *Aristoteles, Metaphysik Z*, 2 vols., München.
- Frede, M. and Charles, D., 2000, *Aristotle's Metaphysics Lambda Symposium Aristotelicum*, Oxford.
- Guthrie, W.K.C. 1933, 'The Development of Aristotle's Theology, i', *Classical Quarterly* X X VII, pp. 162-171
- Goodwin. 1929, *Syntax of The Moods and Tenses of Greek Verb*, Macmillan.
- Goodwin, William. *Syntax of the moods and tenses of the Greek verb*. Boston, Ginn & Company. Kindle 版.
- Graham, D.W. 1987, *Aristotle's Two Systems*, Oxford.
- Hamlin, D.W. 1987, 'Aristotle on Form', *Aristotle on Nature and Living Things*, pp. 55-65,

Pittsburgh.

Heinaman,R. 1981, 'Non-substantial Individuals in the *Categories*', *Phronesis*, X X VI, pp.295-307

Hicks,R.D.1907,*Aristotle De Anima*. Cambridge: Cambridge University Press. (『「た
ましい」について』からの原文引用, 翻訳の底本)

———.1925,*Diogenes Laertius,Lives of Eminent Philosophers*,2 Vols.,The Loeb
Classical Library.

Husik,I.1904,'On the Categories of Aristotle', *The Philosophical Review*,13, pp.514 - 528.

———.1939,'The Authenticity of Aristotle's Categories', *The Journal of Philosophy*,36,
pp.427-431,

Irwin,T.H. 1988, *Aristotle's First Principles*, Oxford.

Jaeger,W. 1923, *Aristoteles*, Berlin.

———.1957, *Metaphysica*, Scriptorum classicorum bibliotheca

Oxoniensis.Oxford:Clarendon Press. (『形而上学』からの原文引用, 翻訳の底本。異なる
テキストを採用した場合は, その都度指摘)

Jones,B. 1972, 'Individuals in Aristotle's *Categories*' *Phronesis*, X VII,pp.110-116.

———.1975, 'An introduction to the First Five Chapters of Aristotle's *Categories*'
Phronesis,20. pp.146-172.

Jones J.R. 1949, 'Are the qualities of particular things universal or particular? ', *The
Philosophical Review*,58,pp.152-170.

King,H.R. 1956, 'Aristotle without Prima Materia', *Journal of the History of Ideas*,17,
pp.370-389. Kirwan,C.,1971, *Aristotle's Metaphysics Books Γ, Δ*, E.Oxford.

Kenny,A.1983, 'A Stylometric Comparison between five disputed works and the remainder of
Aristoterian corpus',*Zweifelhaftes im Corpus Aristotelicum*,Berlin/New York,pp.345-366.

Kripke,S.A. 1972, 'Naming and Necessity', *Semantics of Natural Language*
(eds.D.Davidson,G.Harman), pp.253-355.

Lewis,F.A.1991, *Substance and Predication in Aristotle*,Cambridge

Lloyd,G.E.R. 2000, 'MetaphysicsΛ8',*Aristotle's Metaphysics Lambda Symposium Aristotelicum*,
pp.245-273.edited by Michael Frede and David Charles, Oxford.

Loux,M.J.1991,*Primary Ousia:An Essay on Aristotle's MetaphysicsZ and H*,Ithaca

- Lowe, E.J. 2006, *The Four-Category Ontology*, Oxford University Press.
- Mathews, G.B. and Cohen, S.M. 1968, 'The One and the Many', *Review of Metaphysics*, X X I, pp.630-655.
- Modrak, D.K. 1979, 'Form, Types, Tokens in Aristotle's *Metaphysics*', *Journal of the History of Philosophy* 17, pp.371-381.
- Moravcsic, G.M.E. 1967, 'Aristotle on Predication' *The Philosophical Review*, 72-2, pp.80-96.
- Owen, G.E.L. 1965a, 'The Platonism of Aristotle', *Logic, Science and Dialectic, collected papers in Greek philosophy*, Ithaca 1986], pp.200-220.
- . 1965b, 'Inherence', *Phronesis*, 10, pp.97-105.
- Owens, J. 1957 (1978 (3rd edn.)), *The Doctrine of Being in the Aristotelian Metaphysics*, Tronto
- . 1960, 'Aristotle on Categories', *The Review of Metaphysics*, 14, pp.73 - 90
- (1981, *Aristotle: the Collected Papers of Joseph Owens*, pp.14-22.)
- Porphyrus *Isagoge*. 1836, *Πορφύριον Εἰσαγωγή*, Ed. Brandis, *Aristotelis Opera*, edidit Academia Regia Borussica, Berlin, Vol. IV. Scholia in Aristotetem
- Quine, W.v.O. 1956, *Method of Logic*, revised edition.
- . 1961, *From a Logical Point of view*, 2nd. revised. ed.
- Robinson, H.M. 1974, 'Prime matter in Aristotle' *Phronesis*, X IX, pp.168-188.
- Ross, W.D. 1923, *Aristotle*
- . 1924, *Aristotle's Metaphysics, a revised Text with Introduction and Commentary*, vols. I, II, Oxford.
- . 1936, *Aristotle's Physics, a revised Text with Introduction and Commentary*, Oxford. (『自然学』からの原文引用, 翻訳の底本)
- . 1955, *Aristotelis Fragmenta Selecta (Oxford Classical Texts)*, Oxford. (『断片集』からの原文引用, 翻訳の底本)
- . 1958, *Topica Et Sophistici Elenchi (Oxford Classical Texts)*, (『トポス論』『ソピステース的論駁について』からの原文引用, 翻訳の底本)
- . 1964, *Aristotelis Analytica Priora Et Posteriora (Oxford Classical Texts)*, Oxford. (『分析論前書』, 『分析論後書』からの原文引用, 翻訳の底本)
- Russell, B. *Human Knowledge*, 1948.
- Schofield, M. 1972, 'Metaphysics Z.3: some suggestions', *Phronesis*, 17, pp.97-101.

- Sellars, W.S. 1957, 'Substance and form in Aristotle', *Journal of Philosophy*, 54, pp.688-699.
- Smith, J.A. 1921, 'TOΔE TI in Aristotle', *The Classical Review*, 35, p.19.
- Smyth, H.W. 1920, *GREEK GRAMMAR*, Harvard University Press.
- Solmsen, F. 1958, 'Aristotle and Prime Matter: A Reply to Hugh R. King', *Journal of the History of Ideas*, vol. 19, No. 2, pp. 243-252.
- Sorabji, R. 'Analyses of Matter, ancient and modern', *Proceedings of Aristoterian society*, 86(1985/86), pp. 1-22.
- Stahl, D.E. 'Stripped away: some contemporary obscurities surrounding *Metaphysics* Z3(1029a10-26)', *Phronesis*, 26, 1981, pp. 177-179.
- Strawson, P.F. 1959, *Individuals* (邦訳:『個体と主語』中村秀吉訳, 1978, みすず書房) .
- Sykes, R.D. 1975, 'Form in Aristotle: universal or particular', *Philosophy*, Vol. 50, pp. 311-331.
- Tahko, T. 2012, *Contemporary Aristotelian Metaphysics*, Cambridge University Press (邦訳:『アリストテレス的現代形而上学』加地大介・他訳, 2015, 春秋社)
- Taylor, A.E. 1955, *Aristotle*.
- Trendelenburg, Adolf. 1846, *Geschichte der Kategorienlehre*. Berlin, Verlag von G. Bethge (邦訳:『カテゴリー論史』日下部吉信訳, 1985, 松籟社) .
- Wedin, M.V. 2000, *Aristotle's Theory of Substance : The Categories and Metaphysics Zeta*, Oxford
- Williams, C.J.F. 1982, *Aristotle's De Generatione et Corruptione* Appendix: Prime Matter in *De Generatione et Corruptione*, Oxford (Clarendon Aristotle Series).
- Woods, M. 1967, 'Problems in Metaphysics Z, Chapter 13', *A Collection of Critical essays*, pp. 215-238.
- Zeller, Eduard: *Die Philosophie der Griechen in ihrer geschichtlichen Entwicklung. II. Teil, II. Abteilung: Aristoteles und die alten Peripatiker*. Leipzig: Reischland 1921

<邦語文献>

- 尼ヶ崎徳一. 1979, 「『カテゴリーアイ』における個別的属性の規定について」, 『西洋古典学研究』 XXVII, pp. 29-38.
- 天野正幸. 1994, 「アリストテレスのウーシア論(Ⅱ)」, 『論集』 12, pp. 1-23, 東京大学文学部哲学研究室

- 安藤孝行.1958,『アリストテレスの存在論』,弘文堂.
- 池田康男.2000,『アリストテレスの第一哲学』,創文社.
- 出隆／訳註.1959-1961,『形而上学(上),(下)』(岩波文庫),岩波書店.
- ／訳註.1968,『形而上学』(『アリストテレス全集12』),岩波書店.
- 伊藤克巳.2000,「アリストテレス『自然学』2巻8章198b16-32における目的因の問題」,『哲学雑誌』第24号,pp.1-18.
- .2019,「「たましい」が「離されうる」ことについて——アリストテレスにおける第一の哲学と第二の哲学——」,『ギリシア哲学セミナー論集』Vol.XVI,pp.49-61.
- 井上忠／訳註.1971,「分析論前書」,『カテゴリー論 命題論 分析論前書 分析論後書』アリストテレス全集第1巻,pp.167-pp.588(解説 pp.589-598),岩波書店.
- .1974,『根拠よりの挑戦』東大出版会.
- .1980,『哲学の現場—アリストテレスよ語れ』,勁草書房.
- 今井知正.1976,「内属者の個体性と離存不可能性」,『哲学雑誌』91巻763号,pp.203-221.
- .1998,「『形而上学』Δ巻第7章の一考察」,『翻訳の哲学』,pp.41-46,東京大学大学院総合文化研究科・研究成果報告書.
- 今井知正・河谷敦／訳註.2014,「分析論前書」,『分析論前書 分析論後書』新版アリストテレス全集第2巻,pp.1-326(解説 pp.529-574),岩波書店.
- 今道友信.2004,『アリストテレス』,講談社(講談社学術文庫).
- 岩崎勉／訳註.1994(1942初版),『形而上学』,講談社(講談社学術文庫).
- 岩田圭一.2003,「アリストテレスの本質論における「それぞれのもの」」,『哲学』No.54,pp.154-166.
- .2015,『アリストテレスの存在論』,早稲田大学出版部.
- 岩田靖夫.1985,『アリストテレスの倫理思想』,岩波書店.
- 牛田徳子.1991,『アリストテレス哲学の研究—その基礎概念をめぐって』,創文者.
- 岡部満.1982,「『カテゴリー論』解釈の一視点」,『西洋古典学研究』XXX,pp.45-46.
- 角田幸彦.1994,『アリストテレスにおける神と理性』,東信堂.
- .1998,『アリストテレス実体論研究』,北樹出版.
- 加地大介.2018,『もの—現代的実体主義の存在論』,春秋社.
- 加藤信朗.1952,「アリストテレスの第一実体」,『哲学雑誌』第67巻第417号,pp.44-59.

- ／訳註. 1971, 「分析論後書」, 『カテゴリー論 命題論 分析論前書 分析論後書』アリストテレス全集第1巻, pp.599-pp.836(解説 pp.837-845), 岩波書店.
- 木曾好能. 1970, 「アリストテレス『カテゴリー』におけるいわゆる個別的属性について」, 『古代哲学研究』3号, pp.39-44.
- 倉田剛. 2017, 『現代存在論講義 I ファンダメンタルズ』新曜社
- 桑子敏夫. 1993, 『エネルゲイア』, 東京大学出版会.
- 國分功一郎. 2017, 『中動態の世界 意思と責任の考古学』, 医学書院.
- 斎藤忍随. 1978, 「「がある」と「生きている」—アリストテレスの場合—」, 『哲学雑誌』93巻765号, pp.1-17.
- 坂井秀壽. 1978, 『哲学探究』, 東大出版会
- 高橋久一郎. 1987, 「アリストテレスの「第一質料」論」, 『哲学』37号, pp.118-128.
- . 1991, 「個体と形相」, 『人文研究』20, pp.1-25, 千葉大学文学部
- ／訳註. 2014, 「分析論後書」, 『分析論前書 分析論後書』新版アリストテレス全集第2巻, pp.327-528(解説 pp.575-608), 岩波書店.
- 千葉恵. 2002, 『アリストテレスと形而上学の可能性』, 勁草書房.
- 中畑正志. 2001, 「アリストテレス 魂について」, 京都大学学術出版会
- . 2013, 「カテゴリー論」『カテゴリー論・命題論』新版アリストテレス全集第1巻, pp.1-102.(解説, pp.269-295.), 岩波書店.
- . 2014, 「魂について」『魂について・自然学小論集』新版アリストテレス全集第7巻, pp.1-189.(解説, pp.475-504.), 岩波書店.
- 藤沢郁夫. 1989, 「内属者の個性について」, 『上越教育大学研究紀要』第8巻第2分冊, pp.127-140.上越教育大学.
- 藤沢令夫. 1980, 『イデアと世界』, 岩波書店.
- 堀江郁智. 2016, 「ジルバール・シモン・ドンの個体化論における伝統的個体観への批判」, 『比較文学・文化論集』(33), 2016年3月, pp.40-54.
- 松永雄二. 1977, 「付帯性の問題」, 『西洋古典学研究』XXV, pp.65-77.
- 松本正夫. 1954, 「アリストテレスに於ける *εἶναι ἀπλῶς* と *εἶναι τι* について」『西洋古典学研究』II, pp.69-71.
- 水地宗明. 2004, 『アリストテレスの神論』, 晃洋書房
- 村田憲郎. 2014, 「「実在概念」としての範疇——ブレンターノ『存在の多義性』に見る存在論——」, 『フッサール研究』第11号, pp.38-55
- 村治能就. 1970, 「トピカ」『トピカ・詭弁論駁論』アリストテレス全集第2巻, pp.1-338.(解説, pp.339-350.), 岩波書店.

山口義久.2014,「トポス論」『トポス論・ソフィスト的論駁について』新版アリストテレス全集第3巻, pp.1-356.(解説, pp.479-502.), 岩波書店.
山下正男. 1983,『論理学史』, 岩波書店(岩波全書335)
山本巍. 1976,「Completeness-Incompleteness-アリストテレス実体論によせて」,『西洋古典学研究』24号, pp.55-66.
———.1980,「形相とくあるこれ」-Ⅱ-,『理想』570, pp.86-103.
山本光雄. 1971,「カテゴリー論」(『アリストテレス全集1』所収, pp.1-72.), 岩波書店.
渡辺邦夫. 1989,「現実態(2)『形而上学』Z巻13章とその文脈」,『人文学科論集』22, pp. 137-171, 茨城大学人文学部紀要.

『広辞苑』第7版, 2018. 岩波書店. 電子辞書版(CASIO, XD-SR20000), 2019.
『小学館 ランダムハウス英和辞典』第2版, 1987. 小学館. 電子辞書版(CASIO, XD-SR20000), 2019.
『大辞林』第四版, 2019. 三省堂.
『デジタル大辞泉』, 2019年4月現在. 小学館.

<初出一覧>

※ 本稿各章各節作成の基礎となった諸論考の初出, および本稿のための書下ろしは以下の通りである。参照諸論考は, いずれも本稿作成にあたり全編にわたり, さらなる考察と改稿を行った。特に第3章の第4節と第5節については, 基礎となった論考から大幅に書き改めることとなった。

第1章 『形而上学』Λ巻における「第一の実有」

伊藤克巳. 1994,「アリストテレスにおける「不動の原理」と「第一の実体」」,『西洋古典学研究』XLⅡ, p.57-66.

第2章 『形而上学』Z巻における「第一の実有」

伊藤克巳. 2006,「『形而上学』Z巻における「第一の実有」としてのエイドスの解釈について」,『西洋古典研究会論集』第15号, pp.33-77.

第3章第1節 『カテゴリーアイ』のテキストの性格と列挙されたカテゴリー 本稿のための書下ろし

第3章第2節 「存在の類」と「あるもの」についての分類

本稿のための書下ろし

第3章第3節 「第一の実有」, 「第二の実有」の区別と「実有」の分類

本稿のための書下ろし

第3章第4節 『カテゴリーアイ』における「第一の実有」の特徴

伊藤克巳. 1983, 「生物体と不可分者—『範疇論』における実体理解の一視点」『哲学会誌』第8号, pp.19-36.

第3章第5節 「個性性」をめぐる諸問題

伊藤克巳. 1982, 「『範疇論』における第一の実体の個性性について」, 『学習院大学文学部研究年報』第28輯, pp.1-20.

付論 i 「実有」以外の「個体」について

伊藤克巳. 1991, 「アリストテレスにおける「非実体個体」の問題」『哲学会誌』第15号, pp.1-18.

付論 ii 「第一の素材」について

伊藤克巳. 1990, 「アリストテレスと「第一の質料」」, 『西洋古典研究会論集』第1号, pp.3-14.

<主要用語・原語-日本語翻訳語 対照表>

*本稿では基本的に「同じ原語」には「同じ日本語訳」をつけ, 必要に応じて〔 〕で意味を補った。

<原語>	<日本語訳>	<日本語訳・参照本稿注釈箇所>
ἀρχή	始源	注8
γραμματική	文字の読み書き	注209
δύναμις	可能性	注26
εἶδος	エイドス	注10
ἐνέργεια	実働態	注25
εἶναι	「あること」	注197, 228
ἐντελέχεια	完成態	注48
κατά + 属格	「に関して」	注21
κατά + 対格	「に沿って」	注21
καθόλου	「全体に関してのもの」	注21
κίνησις	「動き」	注27
μορφή	「かたち」	注47
νοῦς	ヌース	注45
ὄν	「あるもの」	注197, 228
τόδε τι	「なにかこれ」	注79
τὸ καθ' ἕκαστον	「それぞれに沿ってのもの」	注21
ὕλη	「素材」	注31
ὑποκείμενον	「基に置かれたもの」	注44
χωριστόν	「離されうる」	注9
ψυχή	「たましい」	注42

<テキスト引用箇所一覧表>

<Cat.>

<i>Cat.1.1a1-6</i>	p.67(3-1)
<i>Cat.1.1a6-12</i>	p.98(3-5)
<i>Cat.2.1a16-20</i>	p.52(3-序/注156)
<i>Cat.2.1a20-b9.</i>	p.97,p.100(3-5)
<i>Cat.2.1a20-b6</i>	p.70,p.74(3-2)
<i>Cat.2.1a20-21</i>	p.74(3-2)
<i>Cat.2.1a22</i>	p.103(3-5)
<i>Cat.2.1a23-29</i>	p.112(i-1)
<i>Cat.2.1a23-24</i>	p.74(3-2), p.96(3-5)
<i>Cat.2.1a24-25</i>	p.120,p.121(i-3)
<i>Cat.2.1a25-27</i>	p.118(i-2)
<i>Cat.2.1a26-b2</i>	p.102(3-5)
<i>Cat.2.1a26-27</i>	p.96(3-5)
<i>Cat.2.1a26</i>	p.16(1-3)
<i>Cat.2.1a27</i>	p.111(i-序)
<i>Cat.2.1a28-29</i>	p.96(3-5)
<i>Cat.2.1a28</i>	p.102(3-5)
<i>Cat.2.1a29-b3</i>	p.101(3-5)
<i>Cat.2.1a29-b1</i>	p.74(3-2)
<i>Cat.2.1a30-b3</i>	p.98(3-5)
<i>Cat.2.1b2</i>	p.16(1-3)
<i>Cat.2.1b3-4</i>	p.74(3-2), p.96(3-5)
<i>Cat.2.1b3</i>	p.102(3-5)
<i>Cat.2.1b4-5</i>	p.103(3-5)
<i>Cat.2.1b4</i>	p.103(3-5)
<i>Cat.2.1b6-9</i>	p.101(3-5), p.113(i-1/<t2>)
<i>Cat.2.1b6-7</i>	p.96(3-5), p.111(i-序)
<i>Cat.2.1b6</i>	p.98(3-5), p.99(3-5)
<i>Cat.2.1b7</i>	p.96(3-5)
<i>Cat.2.1b8</i>	p.118(i-2)
<i>Cat.3.1b13</i>	p.65(3-1/注219), p.122,p.124(i-3)
<i>Cat.3.1b14</i>	p.103(3-5)

<i>Cat.3.1b15</i>	p.103(3 - 5)
<i>Cat.4.1b25-2a4</i>	p.57,p.65(3 - 1 / <T19>)
<i>Cat.4.1b25</i>	p.65(3 - 1)
<i>Cat.4.1b26</i>	p.116(i - 2)
<i>Cat.4.1b27-28</i>	p.68(3 - 1), p.84(3 - 3)
<i>Cat.4.1b28</i>	p.125(i - 3)
<i>Cat.4.2a1</i>	p.116(i - 2),p.125(i - 3 / 注336)
<i>Cat.4.2a2</i>	p.116(i - 2)
<i>Cat.5.2a11f.</i>	p.2(序章), p.16(1 - 3), p.20(2 - 1), p.54(3 - 1)
<i>Cat.5.2a11-4b9</i>	p.100(3 - 5)
<i>Cat.5.2a11-19</i>	p.92(3 - 4)
<i>Cat.5.2a12-13</i>	p.87(3 - 4)
<i>Cat.5.2a12</i>	p.96(3 - 5)
<i>Cat.5.2a13-14</i>	p.89(3 - 4), p.103(3 - 5)
<i>Cat.5.2a13</i>	p.54(3 - 1), p.89(3 - 4), p.103(3 - 5), p.111(i - 序), p.117(i - 2)
<i>Cat.5.2a14f.</i>	p.20(2 - 1)
<i>Cat.5.2a14-19</i>	p.88(2 - 1)
<i>Cat.5.2a19-34</i>	p.122(3 - 4)
<i>Cat.5.2a22</i>	p.103(3 - 5)
<i>Cat.5.2a23</i>	p.103(3 - 5)
<i>Cat.5.2a24-25</i>	p.103(3 - 5)
<i>Cat.5.2a32</i>	p.122(i - 3)
<i>Cat.5.2a34-b6</i>	p.92(3 - 4)
<i>Cat.5.2a34-2b6^c</i>	p.121(i - 3)
<i>Cat.5.2a34-b5</i>	p.87(3 - 4)
<i>Cat.5.2a38</i>	p.103(3 - 5)
<i>Cat.5.2b1-3</i>	p.121(i - 3), p.122(i - 3)
<i>Cat.5.2b2</i>	p.101(3 - 5), p.121(i - 3)
<i>Cat.5.2b4-</i>	p.16(1 - 3)
<i>Cat.5.2b5-b6c</i>	p.87(3 - 4)
<i>Cat.5.2b7-14</i>	p.68(3 - 1), p.87,p.88,p.92(3 - 4)
<i>Cat.5.2b11</i>	p.103(3 - 5)

<i>Cat.5.2b12-13</i>	p.103(3 – 5)
<i>Cat.5.2b13</i>	p.104(3 – 5)
<i>Cat.5.2b15-22</i>	p.92(3 – 4)
<i>Cat.5.2b15-17</i>	p.87(3 – 4)
<i>Cat.5.2b15-</i>	p.16(1 – 3)
<i>Cat.5.2b17-22</i>	p.88(3 – 4)
<i>Cat.5.2b18</i>	p.103(3 – 5)
<i>Cat.5.2b19-20</i>	p.102(3 – 5)
<i>Cat.5.2b26-28</i>	p.87(3 – 4)
<i>Cat.5.2b27-28</i>	p.103(3 – 5)
<i>Cat.5.2b29-34</i>	p.92(3 – 4)
<i>Cat.5.2b37-</i>	p.16(1 – 3)
<i>Cat.5.3a4-5</i>	p.121(i – 3)
<i>Cat.5.3a5</i>	p.122(i – 3)
<i>Cat.5.3a8-9</i>	p.96(3 – 5)
<i>Cat.5.3a11</i>	p.103(3 – 5)
<i>Cat.5.3a12</i>	p.103(3 – 5)
<i>Cat.5.3a14</i>	p.103(3 – 5)
<i>Cat.5.3a15</i>	p.103(3 – 5)
<i>Cat.5.3a19</i>	p.103(3 – 5)
<i>Cat.5.3a33-b9</i>	p.88,p.92(3 – 4), p.98(3 – 5)
<i>Cat.5.3a35</i>	p.98(3 – 5)
<i>Cat.5.3a36-37</i>	p.87(3 – 4)
<i>Cat.5.3a36</i>	p.16(1 – 3)
<i>Cat.5.3a37</i>	p.96(3 – 5)
<i>Cat.5.3a38</i>	p.98(3 – 5)
<i>Cat.5.3a39</i>	p.98(3 – 5)
<i>Cat.5.3b2</i>	p.98(3 – 5)
<i>Cat.5.3b2-3</i>	p.87(3 – 4)
<i>Cat.5.3b7</i>	p.98(3 – 5)
<i>Cat.5.3b10-23</i>	p.87, p.92, p.94(3 – 4)
<i>Cat.5.3b11-12</i>	p.96(3 – 5)
<i>Cat.5.3b11</i>	p.102(3 – 5)
<i>Cat.5.3b12-13</i>	p.87(3 – 4)

<i>Cat.5.3b12</i>	p.96,p.98,p.99(3 – 5)
<i>Cat.5.3b15-16</i>	p.102(3 – 5)
<i>Cat.5.3b24-32</i>	p.87,p.88(3 – 4)
<i>Cat.5.4a10-b19</i>	p.88,p.93(3 – 4)
<i>Cat.5.4a10-b18</i>	p.100(3 – 5)
<i>Cat.5.4a10-11</i>	p.96(3 – 5)
<i>Cat.5.4a11-13</i>	p.88(3 – 4)
<i>Cat.5.4a11-17</i>	p.104(3 – 5), p.113(i – 1 / < t3 >)
<i>Cat.5.4a11</i>	p.96(3 – 5)
<i>Cat.5.4a12-13</i>	p.96(3 – 5)
<i>Cat.5.4a13</i>	p.97(3 – 5)
<i>Cat.5.4a14</i>	p.96,p.100(3 – 5)
<i>Cat.5.4a15</i>	p.96,p.100(3 – 5), p.118(i – 2)
<i>Cat.5.4a18-19</i>	p.100(3 – 5)
<i>Cat.5.4a18</i>	p.96(3 – 5)
<i>Cat.5.4a19</i>	p.97(3 – 5)
<i>Cat.5.4a21-b16</i>	p.102(3 – 5)
<i>Cat.5.4a30</i>	p.96(3 – 5)
<i>Cat.5.4a34</i>	p.96(3 – 5)
<i>Cat.5.4b3-4</i>	p.96(3 – 5)
<i>Cat.5.4b 5</i>	p.96(3 – 5)
<i>Cat.5.4b 7</i>	p.96(3 – 5)
<i>Cat.5.4b 10</i>	p.96(3 – 5)
<i>Cat.5.4b 12</i>	p.96(3 – 5)
<i>Cat.5.4b 13</i>	p.96(3 – 5)
<i>Cat.5.4b 14</i>	p.96(3 – 5)
<i>Cat.5.4b 16</i>	p.96(3 – 5)
<i>Cat.5.4b17-18</i>	p.88(3 – 4), p.96(3 – 5)
<i>Cat.6.5a33-35</i>	p.119(i – 2)
<i>Cat.6.5a38-b10</i>	p.118(i – 2)
<i>Cat.6.5a38-39</i>	p.116(i – 2)
<i>Cat.6.5b4-6</i>	p.118(i – 2)
<i>Cat.6.5b5</i>	p.118(i – 2)
<i>Cat.6.5b39-6a4</i>	p.100, p.102 (3 – 5)
<i>Cat.6.6a33</i>	p.99(3 – 5)
<i>Cat.6.6a34</i>	p.99(3 – 5)
<i>Cat.6.6b20</i>	p.99(3 – 5)

<i>Cat.6.6b22</i>	p.99(3 – 5)
<i>Cat.6.6b23</i>	p.99(3 – 5)
<i>Cat.7.8a16-17</i>	p.103(3 – 5)
<i>Cat.7.8a18</i>	p.103(3 – 5)
<i>Cat.7.8a38</i>	p.102(3 – 5)
<i>Cat.7.8b4</i>	p.102(3 – 5)
<i>Cat.7.8b8</i>	p.102(3 – 5)
<i>Cat.8.9b15</i>	p.99(3 – 5)
<i>Cat.8.9b19</i>	p.99(3 – 5)
<i>Cat.8.10a13</i>	p.99(3 – 5)
<i>Cat.8.11a15-19</i>	p.99(3 – 5)
<i>Cat.8.11a20-36</i>	p.114(i – 2)
<i>Cat.8.11a20-38</i>	p.96(3 – 5)

< *De Int.* >

<i>De Int.7.17a38-b3</i>	p.88(3 – 4)
<i>De Int.7.17a39</i>	p.88(3 – 4)
<i>De Int.7.17b1</i>	p.88(3 – 4)
<i>De Int.9.18a33</i>	p.122(i – 3 /注337)
<i>De Int.11.21a18-24</i>	p.88(3 – 4 /<T22>)
<i>De Int.11.21a19-20</i>	p.113(i – 2)
<i>De Int.11.21a19</i>	p.88(3 – 4)
<i>De Int.11.21a20-21</i>	p.88(3 – 4)
<i>De Int.11.21a20</i>	p.88(3 – 4)
<i>De Int.13.23a23</i>	p.11,p.12(1 – 2)
<i>De Int.13.23a24</i>	p.15(1 – 3)

< *An. pr.* >

<i>An.pr. I 7.43a25-43</i>	p.69(3 – 2),pp.69-70(3 – 2)
<i>An.pr. I 7.43a25-29</i>	p.70(3 – 2)
<i>An.pr. II 24.69a17</i>	p.97(3 – 5)

< *An.po.* >

<i>An.po. I 2.72a20-24</i>	p.16(1 – 3 /注45)
<i>An.Po. I 22.83a18-23</i>	p.57,p.58(3 – 1 /<T13>)
<i>An.Po. I 22.83b10-17</i>	p.57,p.58,p.59(3 – 1 /<T14>)
<i>An.po. II 6.92a29-30</i>	p.44(2 – 5)

< *Top.* >

<i>Top. I</i> 7.103a6-39	p.99(3-5)
<i>Top. I</i> 7.103a9-10	p.99(3-5)
<i>Top. I</i> 7.103a24	p.97(3-5)
<i>Top. I</i> 9.103b20-39	pp.55-57(3-1 / <T12>), p. 68(3-1 / 注225)
<i>Top. I</i> 9.103b20-21	p.65(3-1)
<i>Top. I</i> 9.103b22	p.55,p.57(3-1)
<i>Top. I</i> 9.103b26	p.55(3-1)
<i>Top. I</i> 9.103b27	p.55,p.57(3-1)
<i>Top. I</i> 9.103b30	p.56(3-1)
<i>Top. I</i> 9.103b34	p.56(3-1)
<i>Top. I</i> 9.103b37	p.56(3-1)
<i>Top. I</i> 9.103b38	p.56(3-1)
<i>Top.IV</i> 1.120b26	p.116(i-2)
<i>Top.IV</i> 1.121a35-39	p.90(3-4 / <T23>)
<i>Top.IV</i> 1.121a35-37	p.114(i-1 / <t4>)
<i>Top.IV</i> 1.121a36-37	p.111(i-序)
<i>Top.IV</i> 1.121a36	p.98(3-5)
<i>Top.IV</i> 1.121a37-39	p.114(i-1)
<i>Top.IV</i> 1.121a37	p.98(3-5)
<i>Top.IV</i> 1.121a38	p.90(3-4), p.98(3-5), p.117(i-2)
<i>Top.IV</i> 2.122b21	p.98(3-5)
<i>Top.IV</i> 2.122b 22	p.98(3-5)
<i>Top.IV</i> 3.123b35-37	p.117(i-2)
<i>Top.IV</i> 3.123b35	p.117(i-2)
<i>Top.IV</i> 5.126a3-13	p.122(i-3)
<i>Top. V</i> 1.128b20-21	p.90(3-4 / <T24>)
<i>Top. V</i> 1.128b20	p.90(3-4), p.117(i-2)
<i>Top. V</i> 1.129a4	p.117(i-2)
<i>Top. V</i> 3.131b16-18	p.90(3-4 / <T25>)
<i>Top. V</i> 3.131b30-36	p.122(i-3)
<i>Top.VI</i> 6.144b2	p.98(3-5)
<i>Top.VI</i> 6.144b3	p.98(3-5)
<i>Top.VI</i> 6.145a28-32	p.122(i-3)
<i>Top.VI</i> 9.147a25	p.117(i-2)

*Top.VI*9.147a26-27 p.117(i - 2)

*Top.VI*9.147a27 p.117(i - 2)

*Top.VI*9.147b26-148a2 p.122(i - 3)

*Top.VII*1.151b29-30 p.99(3 - 5)

<SE>

SE I 22.178b36-9a10 p.38(2 - 4 /注123)

SE I 22.178b36-37 p.102(3 - 5)

SE I 22.178b38 p.102(3 - 5)

SE I 22.179a2 p.102(3 - 5)

SE I 22.179a3 p.102(3 - 5)

SE I 22.179a4 p.102(3 - 5)

SE I 22.179a6 p.102(3 - 5)

SE I 22.179a8 p.102(3 - 5)

<Phys.>

Phys. I 7.190a15-16 p.97(3 - 5)

Phys. I 7.190a31-b3 p.59(3 - 1 /<T15>)

Phys. I 7.190b23-1a3 p.22(2 - 1)

Phys. I 9.191a34-b2 p.42(2 - 5 /注128)

Phys. I 9.192a3-14 p.133(ii - 3), p.136(ii - 結)

Phys. I 9.192a25-34 p.134(iii - 3)

Phys. II 1.193a9-b18 p.30(2 - 2 /注99)

Phys. II 1.192b8-20 p.69(3 - 2), p.70(3 - 2)

Phys. II 1.193a28-31 p.128,p.129(ii - 1), p.131(ii - 2)

Phys. II 7.198a29-31 p.15(1 - 3)

Phys. II 7.198a35- p.17(1 - 3)

Phys. III 1.200b12-1b15 p.102(3 - 5)

Phys. V 1.224a21-5b9 p.102(3 - 5)

Phys. V 1.225b5-9 p.60(3 - 1 /<T16>)

Phys. V 4.228a6-19 p.124(i - 3)

Phys. V 4.228a9-12 p.114(i - 1 /<t5>)

Phys. V 4.228a10 p.111(i - 序), p.124(i - 3)

Phys. V 4.228a17-19 p.114(i - 1 /<t5>)

Phys. V 4.228a17-18 p.124(i - 3)

Phys. V 4.228b1-3 p.114(i - 1 /<t6>)

Phys. V 4.228b2 p.111(i - 序)

*Phys.*Ⅶ1.242a66-b42 p.124(i - 3)
*Phys.*Ⅶ1.242a66-68 p.115(i - 1 / <t7>)
*Phys.*Ⅶ1.242a67 p111(i - 序)
*Phys.*Ⅶ1.242a68 p111(i - 序)
*Phys.*Ⅶ1.242b37-40 p.115(i - 1 / <t8>)
*Phys.*Ⅶ1.242b38-39 p111(i - 序)
*Phys.*Ⅶ1.242b39-40 p111(i - 序)
*Phys.*Ⅶ1.242b39 p111(i - 序), p.124(i - 3)
*Phys.*Ⅶ1.242b40 p111(i - 序)
*Phys.*Ⅶ6.258b10-60a19 p.12(1 - 2)
*Phys.*Ⅶ6.258b10-16 p.14(1 - 2)
*Phys.*Ⅶ6.259a7-13 p.14(1 - 2)
*Phys.*Ⅶ6.259b32-60a p.14(1 - 2)

< *De Caelo* >

De Caelo I 3.270b1-25 p.12,p13(1 - 2)
De Caelo I 3.270b6 p.13(1 - 2)
De Caelo I 3.270b8 p.13(1 - 2)
De Caelo I 3.270b11 p.5(1 - 序), p.12(1 - 2), p.15(1 - 3)
De Caelo I 3.270b22 p.12(1 - 2)
De Caelo I 8- I 9.276a18-9b3 p.98(3 - 5)
De Caelo I 9.278a30-b3 p.13(1 - 2)
De Caelo II 12.291b32 p.12(1 - 2)

< *GC* >

GC I 3.318a3-8 p.14(1 - 2)
GC I 3.319b21-31 p.131,p.132(ii - 2)
GC I 3.320a2-5 p.133(ii - 3)
GC I 8.324a26-32 p.14(1 - 2)
GC II 1.329a13-24 p.128(ii - 1), p.131,p.132,p.133(ii - 2)
GC II 1.329a24-35 p.131,p.132,p.133(ii - 2), p.135,p.136(ii - 結)
GC II 1.329a25-26 p.133(ii - 2)
GC II 1.329a33-35 p.132(ii - 2 / <t9>)
GC II .10.337a20-22 p.12(1 - 2)

< *Meteor.* >

Meteor. I 3.339b17 p.13(1 - 2 / 注39)
Meteor. I 3.340b11 p.13(1 - 2 / 注39)

<DA>

DA I 1.402a23-25	p.85(3-3 / <T21> / 注259)
DA. I 1.402a23	p.55(3-1 / 注175), p.85(3-3 / 注258)
DA. II 1.412a6-b17	p.76(3-3)
DA II 1.412a27	p.10(1-2 / 注26)
DA II 2.413b1-414a3	p.6(1-1 / 注9)
DA II .2.413b24-29	p.17(1-3 / 注47)
DA III.5.430a22-25	p.17(1-3 / 注47)
DA III 8.431b27-432a6	p.22(2-1)

<Sens.>

Sens.6.445b20-6a20	p.119(i-2)
--------------------	------------

<HA>

HA I 6.490b32-34	p.93(3-4)
HA I 6.491a13	p.93(3-4)

<PA>

PA I 1.639a 23 - 29	p.93(3-4)
PA I 1.639a15-16	p.93(3-4)
PA I 2.642b5	p.93(3-4)
PA I 3. 642b35-36	p.94(3-4)
PA I 3.643a7-9	p.93(3-4)
PA I 3.643a9	p.93(3-4)
PA I 3.643a16	p.93(3-4)
PA I 3.643a19-20	p.93(3-4)
PA I 3.643a 22	p.93(3-4)
PA I 3.643b26	p.94(3-4)
PA I 3.644a10-11	p.94(3-4)
PA I 4.644a29	p.93(3-4)
PA I 4.644a30-31	p.93(3-4)
PA I 5.644b22-24	p.76(3-3)
PA I 5.645a21-23	p.104(3-5 / 注280)
PA II 1.646a24-27	p.95(3-4)
PA II 1.646a35-b2	p.95(3-4)

<GA>

GA I 20.729a28-33	p.128(ii-1), p.131(ii-2)
GA II 1.731b24-25	p.69(3-2), p.70(3-2)
GA II 1.731b31-2a7	p.94(3-4)
GA II 1.731b34	p.91(3-4)

<i>GA</i> Ⅱ 1.731b34-35	p.92(3-4)
<i>GA</i> Ⅱ 4.740b33	p.91(3-4)
<i>GA</i> Ⅱ 4.741a1	p.91(3-4)
<i>GA</i> Ⅲ 11.762a5	p.91(3-4)
<i>GA</i> Ⅳ 3.767b29-32	p.91(3-4)
<i>GA</i> Ⅳ 3.767b32-8a2	p.17(1-3), p.92, p.94(3-4 / <T26>)
<i>GA</i> Ⅳ 3.767b34-35	p.94(3-4)
<i>GA</i> Ⅳ 3.768b13	p.91(3-4)
<i>GA</i> Ⅳ 3.768b15	p.91(3-4)
<Met.>	
<i>Met.</i> A6.987b8	p.24(2-2 / 注73)
<i>Met.</i> A6.987b14	p.24(2-2 / 注73)
<i>Met.</i> A8.989a30-b21	p.22(2-1)
<i>Met.</i> B 1.995b29	p.98(3-5)
<i>Met.</i> B 3.998b16	p.98(3-5)
<i>Met.</i> B 3.998b29	p.99(3-5)
<i>Met.</i> B 3.999a12	p.98(3-5)
<i>Met.</i> B 4.999b16	p.47(2-結)
<i>Met.</i> B 4.999b26	p.97(3-5)
<i>Met.</i> B 4.999b31-33	p.97(3-5)
<i>Met.</i> B 4.999b33-34	p.97(3-5)
<i>Met.</i> B 6.1002b24	p.97(3-5)
<i>Met.</i> Γ 1.1003a21	p.9(1-1 / 注24)
<i>Met.</i> Γ 2.1003a33-b19	p.69(3-1 / 注228)
<i>Met.</i> Γ 3.1005a33-b2	p.7(1-1), p.14(1-2)
<i>Met.</i> Γ 3.1005a35	p.5(1-序), p.15(1-3)
<i>Met.</i> Γ 3.1005b2-5	p.107(結論 / 注282)
<i>Met.</i> Γ 3.1005b5-8	p.8(1-1)
<i>Met.</i> Γ 5.1009a36-38	p.14(1-2)
<i>Met.</i> Γ 5.1010a33-35	p.14(1-2)
<i>Met.</i> Γ 8.1012b30-31	p.14(1-2)
<i>Met.</i> Δ 4.1014b26-35	p.129(ii-1), p.131(ii-2)
<i>Met.</i> Δ 5.1015a7-11	p.129, p.130(ii-1), p.131(ii-2)
<i>Met.</i> Δ 5.1015b14-15	p.14(1-2)
<i>Met.</i> Δ 6.1016b31	p.97(3-5)
<i>Met.</i> Δ 6.1016b32-33	p.97(3-5)
<i>Met.</i> Δ 6.1017a3-6	p.129, p.130(ii-1), p.131(ii-2)
<i>Met.</i> Δ 7.1017a7-b9	p.69(3-1 / 注228), p.70(3-2), p.72(3-2 / 注234)
<i>Met.</i> Δ 7.1017a22-30	pp.60-61(3-1 / <T17>)

<i>Met.</i> Δ7.1017a23	p.65(3－1)
<i>Met.</i> Δ8.1017b10-26	p.77(3－3)
<i>Met.</i> Δ8.1017b10-11	p.77(3－3)
<i>Met.</i> Δ8.1017b11	p.77(3－3)
<i>Met.</i> Δ8.1017b11-12	p.77(3－3)
<i>Met.</i> Δ8.1017b12-13	p.77(3－3)
<i>Met.</i> Δ8.1017b14-16	p.77(3－3)
<i>Met.</i> Δ8.1017b17-21	p.77(3－3)
<i>Met.</i> Δ8.1017b21-23	p.77(3－3)
<i>Met.</i> Δ8.1017b23-24	p.77(3－3)
<i>Met.</i> Δ8.1017b24-26	p.77(3－3)
<i>Met.</i> Δ8.1017b25-26	p.47(2－結)
<i>Met.</i> Δ9.1018a5-9	p.100(3－5)
<i>Met.</i> Δ9.1018a13	p.97(3－5)
<i>Met.</i> Δ12.1019a15-20a5	p.10(1－2 /注27)
<i>Met.</i> Δ13.1020a8	p.102(3－5)
<i>Met.</i> E1.1026a29	p.7(1－1), p.49(2－結)
<i>Met.</i> E2.1026a33-b4	p.69(3－1 /注228), p.72(3－2)
<i>Met.</i> Z1.1028a10-31	p.69(3－1 /注228), pp.81-84(3－3 /<T20>)
<i>Met.</i> Z1.1028a30-31	p.70(3－2), p.72(3－2)
<i>Met.</i> Z1.1028b2-7	p.2(序章)
<i>Met.</i> Z1.1028b4	p.23(2－1)
<i>Met.</i> Z2-3.1028b8-36	p.78(3－3)
<i>Met.</i> Z2.1028b20	p.24(2－2), p.78(3－3)
<i>Met.</i> Z2.1028b25	p.24(2－2)
<i>Met.</i> Z3.1028b33-29a7	p.24(2－2)
<i>Met.</i> Z3.1028b33-29b12	p.97,p.101(3－5)
<i>Met.</i> Z3.1028b34	p.23(2－2), p.78(3－3)
<i>Met.</i> Z3.1028b35	p.24(2－2), p.78(3－3)
<i>Met.</i> Z3.1029a1-5	p.134(ii－3)
<i>Met.</i> Z3.1029a2-7	p.33(2－3)
<i>Met.</i> Z3.1029a2	p.24(2－2), p.78(3－3)
<i>Met.</i> Z3.1029a3	p.24(2－2), p.78(3－3)
<i>Met.</i> Z3.1029a4	p.24(2－2)
<i>Met.</i> Z3.1029a5-6	p.25(2－2)
<i>Met.</i> Z3.1029a6	p.25(2－2)
<i>Met.</i> Z3.1029a7-30	p.87(3－4 /注256), p.134,p.135(ii－3), p.136(ii－結)
<i>Met.</i> Z3.1029a8-9	p.101(3－5)
<i>Met.</i> Z3.1029a12	p.134(ii－3)

*Met.***Z**4.1029b13-30a27 p.26(2-2/注81)
*Met.***Z**4.1029b13 p.26(2-2/注81)
*Met.***Z**4.1029a14-16 p.27(2-2)
*Met.***Z**3.1029a16-18 p.134(ü-3)
*Met.***Z**3.1029a20-21 p.101(3-5), p.134(ü-3)
*Met.***Z**3.1029a24-26 p.134(ü-3)
*Met.***Z**3.1029a24-25 p.101(3-5)
*Met.***Z**3.1029a26-33 p.37(2-4)
*Met.***Z**3.1029a27-28 p.29(2-2), p.33(2-3), p.78(3-3)
*Met.***Z**3.1029a28 p.33(2-3), p.78(3-3)
*Met.***Z**3.1029a29-32 p.33(2-3)
*Met.***Z**4.1029b22 p.116(i-2)
*Met.***Z**4.1030a11-14 p.26(2-2/<T1>)
*Met.***Z**4.1030a11-13 p.32(2-3)
*Met.***Z**4.1030a12 p.26(2-2), p.47(2-結)
*Met.***Z**4.1030a13 p.32(2-3)
*Met.***Z**4.1030a13-14 p.27(2-2), p.32(2-3)
*Met.***Z**4.1030a14 p.32(2-3)
*Met.***Z**6.1031b11-15 p.21(2-1), p.28(2-2), p.32(2-3)
*Met.***Z**6.1031b19-20 p.28(2-2), p.32(2-3)
*Met.***Z**7.1032a15 p.25(2-2/注80)
*Met.***Z**7.1032a25 p.94(3-4)
*Met.***Z**7.1032b1-2 p.42(2-5/<T8>)
*Met.***Z**7.1032b2 p.15(1-3)
*Met.***Z**8.1033b31 p.97(3-5)
*Met.***Z**8.1033b32 p.94(3-4)
*Met.***Z**8.1033b5-8 p.43(2-5)
*Met.***Z**8.1034a5-8 p.43(2-5/<T9>)
*Met.***Z**8.1034a6 p.26(2-2), p.43(2-5), p.47(2-結)
*Met.***Z**10.1035a7-9 p.33(2-3)(2-3/注109)
*Met.***Z**10.1035a25-31 p.33(2-3)
*Met.***Z**10.1035b27-31 p.38(2-4/<T5>)
*Met.***Z**10.1036a16-20 p.39(2-4/<T6>)
*Met.***Z**11.1036a28-29 p.33(2-3)
*Met.***Z**11.1036b17-20 p.33(2-3)
*Met.***Z**11.1037a5-10 p.36, p.37(2-4/<T3>)
*Met.***Z**11.1037a5,28 p.5(1-序), p.15, p.16(1-3), p.36, p.37(2-3)

Met.Z11.1037a9 p.36,p.37(2-3), p.122(i-3)
Met.Z11.1037a10-17 p.18(1-3), p.45(2-5), p.49(2-結/注151)
Met.Z11.1037a18-20 p.23(2-2)
Met.Z11.1037a21-b7 p.23(2-2)
Met.Z11.1037a27-30 p.35(2-4/<T2>)
Met.Z11.1037a28 p.35,p.36(2-4)
Met.Z11.1037a29-30 p.35(2-4)
Met.Z11.1037a29 p.15(1-3), p.35,p.36(2-4), p.47(2-結)
Met.Z11.1037a30 p.35(2-4)
Met.Z11.1037a33-b2 p.37(2-4/<T4>)
Met.Z11.1037b1-2 p.15(1-3), p.36(2-4)
Met.Z12.1038a25-28 p.22(2-1)
Met.Z12.1038a26 p.47(2-結)
Met.Z13.1038b1-9a23 p.7(1-1)
Met.Z13.1038b6 p.29(2-2/注94)
Met.Z13.1038b10 p.29(2-2)
Met.Z13.1038b23 p.29(2-2/注94)
Met.Z13.1039a10 p.99(3-5)
Met.Z13.1039a14-23 p.38(2-4/注123)
Met.Z14.1039a28 p.97(3-5)
Met.Z15.1040a20 p.29(2-2)
Met.Z16.1040b25 p.124(i-3)
Met.Z16.1040b27-30 p.29(2-2), p.33(2-3/注110,注111)
Met.Z16.1040b28 p.29(2-2)
Met.Z17.1041a7-9 p.14(1-2)
Met.Z17.1041a10 p.24(2-2)
Met.Z17.1041b6-8 p.34(2-3)
Met.Z17.1041b8 p.30(2-2)
Met.Z17.1041b28-31 p.30(2-2/注99)
Met.H1-2.1042a3-3a28 p.23(2-2), p.78(3-3)
Met.H1.1042a11-12 p.30(2-2), p.78(3-3)
Met.H1.1042a26-31 p.34(2-3)
Met.H1.1042a29 p.34(2-3)
Met.H1.1042a32-b3 p.133,p.134(ii-3)
Met.H2.1042b25-3a12 p.45(2-5/<T11>)
Met.H2.1043a19-2 p.22(2-1)
Met.H2.1043a20 p.30(2-2)
Met.H3.1043a29-36 p.33(2-3)
Met.H3.1043a32-33 p.34(2-3)

Met.H3.1043a34-36 p.40(2-4/<T7>)
Met.H3.1043b1-2 p.34(2-3)
Met.H3.1043b1-3 p.40(2-4/<T7>)
Met.H3.1043b1 p.30, p.31(2-2)
Met.H3.1043b10-14 p.46(2-5)
Met.H3.1043b14-23 p.30(2-2), p.35(2-3), p.41, p.43(2-5)
Met.H3.1043b16 p.43(2-5)
Met.H3.1043b17 p.30(2-2)
Met.H3.1043b32-4a11 p.45(2-5)
Met.H4.1044a15-25 p.129(ü-1), p.131(ü-2), p.134(ü-3)
Met.H4.1044a34-b3 p.128(ü-1)
Met.H4.1044a36 p.31(2-2), p.32(2-3/注107)
Met.H5.1044b22 p.31(2-2), p.47(2-結)
Met.H5.1044b33 p.31(2-2)
Met.H6.1045a23 p.31(2-2)
Met.H6.1045a29 p.31(2-2)
Met.H6.1045a30-31 p.14(1-2)
Met.H6.1045a35 p.31(2-2)
Met.H6.1045b1 p.31(2-2)
Met.H6.1045b21-23 p.14(1-2)
Met.Θ1.1045b27-Θ10.52a11 p.10(1-2/注27)
Met.Θ6.1048b18-35 p.10(1-2)
Met.Θ7.1049a35 p.102(3-5)
Met.Θ7.1049a24-27 p.102(3-5), p.130(ü-1), p.131(ü-2)
Met.I3.1054a29-b2 p.100(3-5)
Met.I3.1054a34 p.97(3-5)
Met.I3.1054b1 p.15(1-3)
Met.I10.1058b26-9a14 p.21(2-1)
Met.K2.1060b29-30 p.97(3-5)
Met.K3.1060b31-33 p.8(1-1), p.69(3-2/注228)
Met.K7.1064b9-14 p.7(1-1), p.14(1-2)
Met.K7.1064b10 p.15(1-3)
Met.Λ1.1069a30-b2 p.79(3-3)
Met.Λ1.1069a30-b1 p.72(3-2)
Met.Λ1.1069a30 p.15(1-3)
Met.Λ1.1069a31 p.15(1-3)
Met.Λ1.1069a33 p.15(1-3)
Met.Λ2.1069b15-16 p.73(3-2)
Met.Λ2.1069b32-34 p.22(2-2/注66)

<i>Met.A3.1070a8</i>	p.94 (3 - 4)
<i>Met.A3.1070a9-13</i>	p.30(2 - 2 /注99)
<i>Met.A3.1070a11</i>	p.30(2 - 2 /注99)
<i>Met.A3.1070a24-26</i>	p.17 (1 - 3 /注47), p.41(2 - 4 /注127)
<i>Met.A3.1070a27-28</i>	p.94 (3 - 4)
<i>Met.A5.1071a14</i>	p.44(2 - 5), p.47(2 - 結)
<i>Met.A5.1071a27-29</i>	p.44(2 - 5 /<T10>)
<i>Met.A6.1071b3-5</i>	p.14(1 - 2)
<i>Met.A6.1071b3</i>	p.15(1 - 3)
<i>Met.A6.1071b3-6</i>	p.79,p.80(3 - 3)
<i>Met.A6.1071b4-5</i>	p.9(1 - 2)
<i>Met.A6.1071b17-22</i>	p.11(1 - 2)
<i>Met.A6.1071b21</i>	p.12(1 - 2)
<i>Met.A7.1073a3-5</i>	p.14(1 - 2)
<i>Met.A7.1072a30-32</i>	p.10(1 - 2)
<i>Met.A7.1072a31-32</i>	p.15(1 - 3)
<i>Met.A7.1072b20</i>	p.17(1 - 3), p. 49(2 - 結)
<i>Met.A7.1072b23</i>	p.17(1 - 3)
<i>Met.A8. 1073a30</i>	p.11(1 - 2), p.15(1 - 3)
<i>Met.A8.1073b1-2</i>	p.15(1 - 3)
<i>Met.A8.1073b1-3</i>	p.11(1 - 2)
<i>Met.A8.1073b3-8</i>	p.12(1 - 2)
<i>Met.A8.1074a14-17</i>	p.12(1 - 2)
<i>Met.A8.1074a15</i>	p.11(1 - 2)
<i>Met.A8.1074a31-38</i>	p.98,p.103(3 - 5)
<i>Met.A8.1074a35-38</i>	p.17(1 - 3)
<i>Met.A8.1074b9</i>	p.11,p.13(1 - 2),p.15,(1 - 3)
<i>Met.A9.1074b15</i>	p.17(1 - 3)
<i>Met.A9.1074b21</i>	p.17(1 - 3)
<i>Met.A9.1075a4</i>	p.17(1 - 3)
<i>Met.M3.1078a30-31</i>	p.70,p.73(3 - 2)
<i>Met.M10.1086b26</i>	p.102(3 - 5)
<i>Met.M10.1087a18</i>	p.102(3 - 5)
<i>Met.N1.1087b12</i>	p.97(3 - 5)

<EN>

<i>ENI 6.1096a23-29</i>	p.62(3 - 1 /<T18>)
<i>ENX 3.1173a31-b4</i>	p.10(1 - 2)

ENX 4.1174a14·b14 p.10(1 – 2)

< *Pol.* >

*Pol.*Ⅲ12.1283a4 p.118(i – 2 /注303)

*Pol.*Ⅲ12.1283a6,7 p.80(3 – 3 /注244)

< *Poet.* >

*Poet.*23.1459a17·b2 p.118(i – 2)

*Poet.*23.1459a37·b1 p.119(i – 2)

< *Fr.* >

*Fr.*21 Ross p.13(1 – 2 /注39)

*Fr.*27 Ross p.13(1 – 2 /注39)